

Contemporary Religion 2024

現代宗教 2024

特集
試される
宗教リテラシー

Contemporary Religion 2024

現代宗教 2024

特集
試される
宗教リテラシー

目次

特集 試される宗教リテラシー

緒言	『現代宗教 2024』編集委員会	1
座談会 教育現場における宗教 —実際と課題—	岩田文昭／内田美和子／佐々木裕子 司会：島菌 進	3
宗教文化教育が目指す宗教リテラシー	井上順孝	49
不思議探究としての「ファンタジー」のリアリティ —子どもの物語の理解による宗教リテラシー—	大澤千恵子	71
イスラム教の知識を学ぶ授業を通して宗教リテラシーを身につける —宗教について深い理解を持った人材育成—	中嶋(川瀬)寧々	95
座談会 宗教者としての幸せとリテラシーを育む子弟教育	岡田正彦／小平美香／林田康順 司会：弓山達也	123

神学的実践と宗教リテラシーの間 <small>はざま</small> を感受する試み —輪講「諸宗教における自然と人間」を通して—	原 敬子	169
宗教 2 世から見た宗教リテラシーの問題	横道 誠	197
対談 デジタル時代のメディアで宗教をどう視せるか	渡邊直樹／西出勇志 司会：平藤喜久子	217
ホラーと宗教リテラシー —鈴木光司『リング』にみる憑依と供養—	斎藤 喬	247
クルアーンの翻訳にまつわるリテラシー —「正確さ」と「客観性」から考える—	後藤絵美	271
講演録・インタビュー 宗教学に基づく宗教教育の必要性	ティム・イエンセン 聞き手：藤原聖子	295

試される宗教リテラシー

『現代宗教 2024』編集委員会

1995年のオウム真理教事件に続いて、2022年には安倍元首相の殺害事件が起こり、日本は「カルト」被害がはなはだしい国、「カルト」がはびこりやすい国ではないか、と考える人もいる。宗教とは何か、宗教はどのように展開してきたのか、宗教が尊ばれてきたのはなぜか、他方、宗教が多大な人権侵害をもたらすような現象がなぜ起こるのか。もし、国民の間に、こうした事柄についての基礎的な知識があれば、宗教をめぐるこれほどの混乱は生じなかったのではないか、こう想定する人もいる。

こうした問いかけは国民の「宗教リテラシー」に関わるものだが、そもそも宗教リテラシーとはどのようなものか。どのようにすれば宗教リテラシーは養われるのか。また、これまでのところ、人々は宗教に関する情報にどのように接し、学んで来ているのだろうか。

学校教育が宗教リテラシーを養う大事な場であるのではないか。では、現在の日本の学校教育では宗教についてどのように学んでいるだろうか。公立学校ではどうか。私立学校ではどうか。そこにどのような問題があるか。また、世界各国ではどうか。実は世界各国で状況や課題はさまざまなのだが、そのことを踏まえて今後の学校における宗教教育をどのように考えていけばよいのだろうか。

他方、宗教的な家庭環境の下にある人は、子どもの頃から宗教的前提を当たり前のこととして受け入れるように育つこともある。日本では、

お寺に生まれた子弟やキリスト教、新宗教の信徒の子弟はその例だが、昨今、こうした環境で育った人たちは「宗教2世」という言葉でよばれることがある。このような宗教の受け入れ方は、宗教リテラシーとどう関わるのだろうか。

また、メディアが発達してきた現代社会では、人々は家庭や学校だけでなく、インターネット、SNS、コミック、映画、アニメ、ゲームなど、さまざまなルートを通して宗教についての情報にふれ、ときには慣れ親しんでいる。このようにメディアを通して得られる宗教関係の情報は、宗教リテラシーにとってどのような意味をもつのだろうか。

この特集では、以上のような問題をめぐって、これまでさまざまな場で考え、論じてこられた方々をお招きし、宗教リテラシーについてあらためて考え直していきたい。宗教について成熟した眼差しと感性をもって接することができる——このような人々が多い社会とはどのようなものか。そのビジョンを垣間見ることができることを願っている。

(文責：島菌 進)

特集 試される宗教リテラシー

座談会 教育現場における宗教

—実際と課題—

岩田文昭¹・内田美和子²・佐々木裕子³

司会 島藺進⁴

2023年8月24日実施（於 学士会館）

政教分離を謳う日本では、一般的に宗教について深い学びを得る機会が少ない。オウム真理教事件や、統一教会問題に端を発する安倍元首相への銃撃事件など、宗教にかかわる事件も少なくないなかで、広い意味での宗教教育に携わる人々は、どのように宗教についての知識や学びを提供し、また宗教を教える人材を育成していくことができるのか。今回の座談会では、それぞれ国立大学、私立高校、そして宗教系私立大学という各自の現場で宗教に関わる内容を教えている3名の方より、現在の宗教教育における実態や課題、そして今後の展望について語っていただいた。



- ¹ いわたふみあき : 大阪教育大学教授
² うちだみわこ : 日本女子大学附属高等学校教諭
³ ささきひろこ : 白百合女子大学教授
⁴ しまどのすすむ : (公財)国際宗教研究所理事長

国立大学・私立高校・宗教系私立大学

島藺 みなさん、本日はお忙しいなかお集まりいただきありがとうございます。今回の座談会では、宗教リテラシーを学校教育の現場から考えるということをテーマにしてみようと思っています。

2020年に安倍元首相の銃撃事件があり、そこから統一教会のような宗教に多くの人々が関わっているという現状が改めて分かりました。この背景として、宗教というもののあり方についての基本的な学びがなく、社会全体、あるいはそこで育ってくる子どもたちにも宗教的な学びの基盤ができていないことが影響しているのではないかとされています。私自身は20歳ぐらいまでは理系におりまして、そこから突然宗教学へ転向したのですが、今考えてみると、それまで宗教学というものをほとんど知りませんでした。幼稚園がプロテスタント系で、親の影響もあって日曜学校にも行き、また家の法事にも何度か出ましたが、母方の祖父が亡くなったときは神道のお葬式でしたので、何がなんだか分からなかったということで(笑)。もし宗教学に進まなかったら、そのように分からないまま来たのではないかと思います。こういう日本社会のあり方をどう省みるのか。また、私自身は宗教学の中でも新宗教の研究をしていましたが、オウム真理教事件の際、日本人の、しかも大学院に行くような有能な若者が、ああした異様な宗教に惹かれ、暴力に流れてしまうのは、何か教育の方に問題があるのではないかという議論が1995年当時起こったことを思い出します。今回の統一教会事件でもそういう議論はありますが、良い方策というものがなかなか浮かんでこない。

そこでこの宗教リテラシー、すなわち宗教についての基本的な学び、あるいは素養のようなものがどのようにして実際の現場で養われているのか、今後どうしたらいいのか、今回はそれぞれのお立場から宗教教育に関わってこられた3名の先生方のお話を聴きつつ、考えていきたいと思っています¹⁾。

以上が前置きで、それではまずは皆さんに簡単に自己紹介をしていただいて、それから本題に入りたいと思います。まず岩田文昭先生、お願

いたします。

岩田 よろしく願いいたします。私が勤務している大学は大阪教育大学と申します。本学は関西における初等中等学校教員養成の基幹大学で、卒業生の多くは関西の小中学校、あるいは公立高校の教員になります。私はそういった学生の教育を通じて、初等中等教育においてどのような宗教教育が可能なのかということを探索してきました。特に20年ほど前から「いのちの教育」に取り組んでおりまして、そのなかで、価値というもの、価値の教育がどのように可能かということを考えてつ、また、伝えるなかで、宗教との接点を模索してきました²⁾。今日は私が実践してきた授業内容をご紹介しますながら、国公立の学校においてどのような宗教教育が可能で、また何が困難としてあるのか、そういったことをお話しできればと思っております。

島藺 ありがとうございます。それでは内田美和子先生、お願いします。

内田 よろしく願いいたします。日本女子大学附属高等学校で、いわゆる社会科、地歴公民科の教員をしております。勤めて30年ちょっとになりますが、色々な科目があるなかで、特に「倫理」を中心に、「世界史」や「政治経済」なども担当しながらやってきました。ご承知のとおり、2022年度から高校は新カリキュラムになっておりまして³⁾、その新カリキュラムで新設された「公共」の授業も担当しています。本日はその話も少しだけさせていただこうと思っています。

今回のテーマは宗教教育ということなのですが、私自身は「宗教教育」をしているという意識はほとんどございません。私は中高がカトリックのミッションスクールだったので、そこから宗教に興味を持って宗教学を学びました。勤めてから色々と思うことがありましてカトリックの洗礼も受けましたが、例えば生徒から自分の信仰を訊かれれば答えませけれども自分からアピールするようなことはなく、倫理の授業でキリスト教を扱う際には特に意識的に客観的になるように努めておりますので、

「信者だからこういう授業をやっているんだな」とは生徒は思っていないような気がします。学校自体はミッションスクールではなくいわゆる無宗教の学校ですので、自分を無宗教だと考えている生徒も多いと思います。ただ、なかには新宗教のご家庭もごくわずかながらありますし、幼稚園や小学校から女子校がある学校はキリスト教系で多く神道系仏教系ではあまりないので、お寺のお嬢さんなどでも日本女子大学附属に入れておこうかなというご家庭は多いような気がします。

本校は私立で、4分の1弱ぐらいの生徒しか他大学受験をしない学校なので、受験用のカリキュラムを組んでおりません。大学受験を考える多くの学校では倫理の授業を選択する学生は少ないと思いますが、うちの学校は全員必修で倫理を学ぶことになっております。今までは3年生で、新カリキュラムでは2年生でやるんですけれども、370人全員が倫理を学ぶというのは本校の一つの特徴かなと思っております。もちろん学習指導要領に沿ってやってはいるのですが、かなり個々の教員の自由に任せてもらえていますので、そういう意味では私が担当している授業はちょっと宗教を手厚く扱うようなことが、おかげさまでできているという環境です。

島薺 ありがとうございます。それでは佐々木裕子先生、どうぞ。

佐々木 よろしく願いいたします。私は都内にありますカトリック系の、いわゆるミッション系大学である白百合女子大学に勤めて、27年ぐらい経っております。宗教学の科目は比較的多い大学なのですが、もともと宗教学科目と教養科目が同じ部署にあったことから、私自身は現在、教養科目に属しながら、宗教学科目を教えるような形を奉職以来、とらせていただいております。

私は、宗教学の修士で学ばせていただいたあと、ちょっとした出会いがあってホスピスの研究をすることになり、同じ大学の教育学の研究科の方に移り、まだ日本にホスピスがありませんでした頃にイギリスに留学しました。そこで勉強して日本に帰ってきたところ、井上順孝先生が

ちょうど宗教教育の調査を始められる時期で、友人からの紹介で、それ以来、井上先生の宗教教育プロジェクトに関わらせていただきました。そこで機会を得て、全国の色々な宗教系の学校を見せていただいたことが、本当に大きな経験となっています。

白百合女子大学はカトリックの学校ではありますが、姉妹校も多いのですけれど、キリスト教徒の学生が多いわけではありません。プロテスタントの場合と少し違って、カトリック、特にフランス系の修道会の場合、一般に教派教育をあまり強く出さない傾向があるといえるかと思います。そのなかでは、キリスト教プロパーのことだけを教えているというよりは、環境問題だったり差別のことだったり——昨今ローマ教皇が出したラウダート・シという回勅（2015年）がありますけれど——に関係することも取り上げようとしていると思います。

先ほど岩田先生がいのちの教育の話なされていましたが、私自身もイギリスにいた関係で、ホスピスのことや、患者が死やいのちをどういうふうに受け止めるかということを、現在、看護倫理の授業なども担当していますので、宗教教育と重なるような重ならないようなところで、どう考えたらいいのか、ちょうど思っていたところです。おそらく多くの、特にキリスト教系の学校は、宗教リテラシー教育について経験があるだろうから、どのように考えているのかと問われればそれなりに答えられそうにお思いになるかと思いますが、実際は、今までどこでも主に宗教教育を担ってきた司祭やシスターなどの修道者が減少したこと、また、その次の世代が教えるための体系的な教育について十分には整えられてこなかったこともあり、みな、ちょっと言葉に困るところがあるのではないかと思います。今の時代、宗教について何を教えるかということに関しては、まだ体系的にはほとんど進んでいないところなので、とても大きなチャレンジを世の中からいただいている、そんな感じがしています。よろしくお願ひします。

島 藪 ありがとうございます。今お三方からお話を伺って、まずは教育機関である大学や高校において、宗教教育が実際にどのように行われて

いるのか、あるいは行う可能性があるのかということをもまずは話題にしながらか進めていきたいと思ひます。それでは最初に岩田先生からこのテーマについて問題提起をしていただければと思ひます。よろしくお願ひします。

国立大学における実践① いのちの教育

岩田 分かりました。私は大阪教育大学でいくつかの授業を担当していますが、ここでは社会科専攻の1回生のほとんど必修の授業である「哲学の基礎」で行なっている、いのちの教育についてお話をしたいと思ひます。あまり強調されることはないのですが、実は日本の学校教育は小中高と一貫して特定の諸価値を教えています。例えば、自分と他人の生命を尊重すること、あるいは自然との共生、そういった価値です。私のこの「哲学の基礎」では特に「いのち」ということに焦点を絞って、学校現場で実際にどのようなようにいのちを伝えているのか、あるいはまたどう教えるべきか、そういったことを学生に考えてもらっています。その場合、将来的に教師になる人たちに、どういうことがいのちを教えるときの構造になっているのかを、できれば自覚していただきたいというのを大きな目標としています。ですから、小中の学校教育を念頭に置きながら大学生に教えているという、そういうところになるわけです。

私自身は、いのちの教育には二重の構造があると思ひています。どう



岩田文昭 (いわた・ふみあき)

大阪教育大学教授。1958年名古屋市生まれ。関連する研究論文として「国公立学校における宗教教育の現状と課題」(『宗教研究』85(2)、2011年)、「いのち教育の原理と課題序説」(『大阪教育大学紀要4教育科学』51(1)、2002年)など。近著に『浄土思想』(中公新書、2023年)。

ということかと申しますと、一つには、国語でも社会でも、教科を通じて児童生徒にきちんと教えるべき内容、そういったものがあるという構造です。教師としては、そうしたことをできるだけ正確にきちんと教えるべきだと思うわけですが、しかしながら第二に、実はそのいのちを支える根本原理、価値観の基底をなすようなもの、そういったものは先生が教えたり教えこむことができないし、また教えてはならないような性格のものであり、国公立の場合はそのように特定の価値観に依拠して教師がいのちの意義を教えるのはよくないという構造です。授業では小中学校の教材を実際に用いながら、どのようにしていのちの意味を伝えられるのか、また教師はどういうことに気を遣わなければならないのか、といったことをやっております。

そうした授業について、光村図書と東京書籍の小学校6年生国語の教科書に現在でも掲載されている、立松和平の『海のいのち』（光村図書では「海の命」表記）という教材を使った教育方法を通じてご説明したいと思います。この光村図書と東京書籍は大手の教科書出版社で、ここで出している教科書は非常に多くの小学校で採用されておりますので、日本の多くの小学生がこの教材を学んでいると思います。

『海のいのち』の主人公は潜り漁師の太一という少年で、お父さんも潜り漁師です。ところがお父さんが、クエという大きな魚を取ろうとした結果、逆に殺されてしまいます。その後、太一が成長して、海の中で一人前の潜り漁師になろうとする過程で、海の中での共生、自然と人間の共生を学ぶわけです。山場として、太一はおそ



立松和平作・伊勢英子絵『海のいのち』
(ポプラ社、1993年) 原作の書影

らく父を殺したであろうクエに出会います。そのときに、太一はそのクエを殺そうと一瞬思ったわけですが、躊躇いがある、最終的にクエを自分の父親と思って殺しませんでした。その後、太一は村に帰りますが、クエに出会ってクエを殺さなかったということ、生涯誰にも話さなかった。そして幸せな家庭を築いて、みんなハッピーに暮らすと、そういう話です。

『海のいのち』の中には自然との共生に関する色々な内容があって、丁寧に教えると、人間と魚、人間と海との関係、あるいは両親と少年との関係を思索することができるようになっていきます。そういったことを学生に考えさせながら、最終的には、太一がクエを殺さなかったことをずっと語らなかった理由は何か、を問うわけですね。実際、この問いは、光村図書の教科書で、かなり前から小学校の児童に問うていた内容です。注目すべきは、教科書会社から出している先生用の指導書には、なぜ太一がクエを殺さなかったことを語らなかったのかに関して、模範回答が用意されてはいない点です。どのように考えてもいいということが書いてあるわけです。これは大変面白くて、自然との共生ということを教科書では教えているのだけれど、その自然との共生を支えている原理原則、そういったものは最終的に自分が考えるべきだ、自分でつかみ取るのだ、という構造になっているわけです。そうした構造を教師候補の学生に提示し、教材の意味を考えてもらう授業を展開してきたのです。

ところが、後でも申しますが、私は光村図書のこの教科書を20年ほど使っているのですが、だんだん、よく言えば教えやすく、悪く言えば平板になってきています。太一がクエを殺せなかったこと、自然との共生はきちんと教えるのですが、それがどういう原理原則のうえに成り立っているのかに関しては問わなくなってきました。クエを殺せなかったことを太一が誰にもしゃべれなかったことを掘り下げる問いが、ここ2年ほど前から教科書から消えてしまったという状況になっております。自然との共生がどういう原理原則で成り立っているのかはさまざまに考えられます。自然への畏敬ということもありえるし、あるいは父から与えられた自然を大事にしようという世代間継承に伴う倫理観

に基づくこともありえるわけですが、そういうことに関して教科書の方はもう問わないと。自然との共生が大事だということで、児童への指導が止まっているというわけです。

このように少し残念な点はあるわけですが、先ほど申し上げたように大学の授業ではいのちの教育には二重の構造があるということを教えております。つまり伝えるべき価値と、児童生徒が自らつかみ取る価値観の形成という構造です。受講生の学生には、このような教材をもとに自然の崇高さや神への畏敬、またいのちの意味を考えようとするものもあります。そこから、宗教教育にもつながる面もあるのですが、別に宗教につながらなくても結構だという、そういうスタンスでやっております。

島菌 その、太一がクエを殺さなかったことをなぜ語らなかったのかという問いは、価値観の領域に関わることなので、これは哲学でもあるし、宗教でもあるという領域につながる可能性がありますよね。教材的にはそこまでいけるようなものがあるということですね。

岩田 そうですね。ただし2年前から光村図書は、先生がそのあたりを教えるのはもちろんいいけれども、教科書会社としてはおすすしめないという形になっていると思います。現場の先生も、ICTや英語、道徳など、様々なことを教えていなくてはいけないですから、ちょっと複雑な教材になると手に追えないという人も出てきます。それで教科書の方も分かりやすいように流れたということですね。それは現場の先生の実態からすると、現実的かなという感じがしますが、私としてはやはり残念に思っています。

国立大学における実践② 特定宗教との関わり

岩田 また、その他にも「哲学の基礎」では色々と工夫しております。例えばホスピスの関係者、私の場合は仏教者を呼んでいますのでビハラ僧になりますけれども、東北大学の谷山洋三先生や、大河内大博さん

という仏教者の方をゲストスピーカーとして呼んで、ホスピスはどのような状況なのか、ホスピスケアとはどういうことなのかについて話をしてもらいます。お二人とも僧籍を持っておられて、特定の宗派に属する宗教者であるわけですが、背広ではなく、作務衣などお坊さんであることが分かるような格好でお話ししてほしいとお願いをしています。その後、学生とゲストスピーカーの先生で質疑応答をして、最終的に学生に感想文を書いてもらっています。その際は当然、学生はホスピスケアに関連して、いのちの意味や終末期について色々書いてくれますけれども、なかには僧侶などの宗教者とリアルに話をしたのが非常に感銘深かったということを感じて書いている学生が毎年数人はおります。

ここで国公立の学校と特定の宗教との関係について申しますと、国公立の学校教育においては宗教的なものはあまり重視されていないのが事実でして、特定の宗派教育というのはいけないうことになっています。しかしながら、学校教育にふさわしい価値というものがあれば、宗教というものはい決して入り込んでいけないということではないわけです。例えば国語には平家物語のように仏教思想に基づくものもありますし、あるいは音楽の教育では教材として民俗的なものやキリスト教的なものも入っております。要するに、学校教育としてふさわしいものであるならば、宗教的な知識や情操を伝えるものが入り込んでも構わないと。それが結果的には宗教的情操の涵養につながることもありえるわけですが、そういうことは容認されているという構造になっています。

これは、社会見学や修学旅行などで神社や寺院・教会などに子どもたちを連れていくことを考えれば分かりやすいと思います。訪問される施設が歴史的、あるいは文化的に学ぶべき価値がある施設であるならば——儀式への参加や礼拝を強制することはしてはいけませんけれども——、そこを訪れること自体は容認されている、むしろ勧められております。宗教施設に行くわけですから、結果的にそのなかで宗教的な情操というものに触れる機会がありえるわけです。しかしそれは宗教的な知識を伝える、つまり教育上意味があるということならば了承されるわけですね。

もちろん、そういった教育のねらいと施設がうまく合っていない場合もあります。例えば少し前の話ですが、2013年5月に宝塚市立の学校に通う中学3年生が靖国神社を訪れ、遊就館を見学しました。建前としては平和教育ということだったそうですが、本当に平和教育として靖国神社に公立中学校の子どもたちを連れて行くのが相応しいのか、後に宝塚市議会で議論になったそうです。ですから、どんな宗教施設でも構わないということではないと思います。いずれにしろ国語にしろ音楽にしろ社会にしろ、それぞれの授業において、宗教的なものが実際に紛れることがあるわけです。こういった形で特定の宗教性というものを完全排除したような教育というのは、文化的にも歴史的にも非常に貧しいものになるかと思っています。そういった教育の実践は、宗教性に関してある種の無菌状態を作ってしまう、私としてはあまり望ましくないのではと考えています。

私は教育大学に勤務して30年ほどになります。日本全体としても、公的領域と私的領域を分けて宗教は私的領域だとする世俗主義的な傾向がたいへん強いですが、国公立の初等中等教育、特に大阪辺りではこの、宗教的なものが入り込むのを糺す雰囲気が強いということを感じてきました。積極的に言えば内面の信仰の自由を尊重し、同調圧力を加えない、否定的に言えばそもそも宗教を語れる場や宗教に触れることをタブー視する、そういう雰囲気が強まっているように思います。

こういった世俗主義的な枠組みは、現在の文科省の教育方針から考えると、ますます強くなっているように思います。私自身は、国公立小中学校で宗教教育を濃厚にすることは難しいと思っておりますが、そのなかで危惧しているのは、特に国語の教科書のなかで実用的な教材が増えており、人間の内面を描く物語の教材が減りつつあるということです。ここ20年間のうちで、よく言えば教えやすいけれども、悪く言えば人間の内面のコンテンツとなるような問いがなくなっている。例えば先ほど紹介した『海のいのち』のように、教材がたとえ一緒でも、そこで教える仕方というものに変化があるということで、人間性の深みというものをなかなか教えるにいくのかなどと思っております。私自身は、そう

いった宗教性、あるべき宗教を受け入れ、あるいはまた望ましくない宗教を忌避するようなものは、人間の土台として、ある程度小中学校で養うことができるし、養ってもいいのではないかと考えていますので、学校教育のなかで、特に国語の教材が平板なものになっているということに対しては、非常に危機感というものを持っております。

島菌 ありがとうございます。教員養成を念頭に置いた授業のなかで宗教につながるものを、国語の教材を例にとってお話をいただきました。宗教を直接教えているという意識はないけれども、実際には宗教に通じるものがあり、しかし、それが自覚されておらず、またそれが次第に縮小されているのではないかという懸念についてもお話しただけだと思います。皆さんご感想とか、あるいはご質問を伺いながら少し話していたらと思いますが、いかがでしょうか。

自分自身の価値観について話し合うこと

内田 自分が国語の担当ではないので、かみ合ったお話ができなくて申し訳ないのですが、平板化していく、してきているというのはとても分かるような気がしています。おっしゃっている平板化という意味にぴったりマッチしているかどうか分からないですが、「あまり面倒くさいところには突っ込まないでおこう」というような、悪い意味で「人それぞれだから」というので片付けることが増えているのかなと思います。高校生の間でも、「他の人が大事にしていることに自分ごときがあれこれ言えない」と考える傾向があると思います。やたら自分の価値を他所様に押し付けて、あるいは多数派ということを重ねて、「そんなの変だ」と言いつのることがないというのは、それはいい面でもあるのですが、でも同時に、あまり深いところまで行かないで、「私は私で、あなたはあなたで大事にしていることがあるので、じゃあ失礼します」みたいなところが、生徒、あるいは学生同士にもあるような気がしています。

問題は、それがその人個人だけではなくて、教員になっていくことだ

と思っています。もう一步進んでみて、ちょっとギクシャクしても話してみたり、最終的に別に一致する必要はないわけですが、もうちょっと深いところで対話をしてみると意外と面白い、ということをやったら分かるのにな、と残念に思うときはあります。文科省や教科書会社がそうした傾向に沿っているのは残念だなと思うので、先ほど平板化とおっしゃったのがよく分かるような気がしました。

岩田 全く内田先生のおっしゃる通りだと思います。大学生は非常に議論が“上手”になっています。文科省のほうでも、議論の仕方や論理的思考法などを積極的に教えていて、中高でトレーニングもおそらくしているので、非常にスマートに議論をするので感心することもあるんですけども、全体としてやはり今おっしゃられたように、「お互いが違っていいよね」と、自分たちのテリトリーを守りながら深いところは突っ込まない。マナーがいいと言えればいいんですが、そういった価値の根底についてお互い突っ込んで考えるということがなくなっている。また、教科書の方も議論しやすいような作りになっており、議論は活発であるんだけど、その内容は大概、実用的と申しますか、分かりやすいですね。答えが出ないような人間の深みというもの、そういったものはもう教材として取り扱わないと。まあ先生の方も教えにくいわけですから、教えやすいことで活発な議論ができるような、そういったものがどんどん増えているという感じがいたしますね。

佐々木 本当に大学生は、距離を保ってお互い傷つけないように上手にやっていくところがあって、古い人間としては「ちょっと待って」みたいなところがあるのは確かで、おっしゃることはそうだなと思います。

先ほどの二重構造のところと同じように、「社会貢献はいいことですか」という問いに対して、学生は「いいことだ」と答えるけれども、じゃあ、「あなたはどのような社会にしたいと思って社会貢献をしようと思っているのか」という問いに対しては考えたことがない。「世の中でいいと言われていることだから」とか、「困っているから、やってあげる」というようなところまでしか、議論が行かない。社会貢献といっても、そこを問わないと危うい部分があるという問いを、このあいだ出してみた

ところ、真剣に考えてくれました。いわゆる「みんながいいと思っていること」を問う機会が必要で、本当だったら宗教教育というのはその辺も突っ込んでいけるし、いくべきだと思うんですが。

また、最近気になっているのは、大学として導入することが文科省から求められている教育の質の客観的指標の幾つかが、卒業後、企業や社会にすぐに適応できる人間を育てるということに矮小化されている印象があることです。レジリエンスが、時として、会社でいじめにあっても辞めないで自殺もしないで、何とか頑張る力というような形に置き替えられがちであること、などです。ともすればその指標で大学教育が測られ、助成金にもかかわるといふ現実があるなかで、それだけではなく、人としてのあり方を深める指標を用意できないか、具体的には、OECDが行っているSEL (Social Emotional Learning) や、非認知能力など、昨今注目されている新しい学力観を入れていくことで、バランスを取れないかと考えているところです。

島菌 私自身は今の話を聞いて、私にとって高校の国語の先生の影響が実は非常に大きかったというのを思いました。社会科の歴史や倫理の授業にはあまり感銘を受けなかったけれど、国語の先生があけがらすはや暁鳥敏(真宗僧侶、1877～1954)の研究をしていた方で、自分でも戯曲を作ったり、文筆で活動しているような方だったんですね。そういう方に惹かれて国語の授業が好きだった。だから私は、理系から宗教学に行った理由にはその先生の影響があったことを、今ちょっと思いました。例えばM・エリアーデ(1907～86)⁴⁾のような宗教学者も自分で小説を書いたりしていました。先ほどの二重構造でいうと二番目の側面、つまり自分の価値観を支える根底について考えたいと思い、私は宗教学というのを選んだのかなと思います。子どもにもそういう欲求が無いということはないと思うんですが、いかがでしょう。

岩田 そういう要求はあると思います。ただ、そういった場が与えられず、分かりやすいところで現実的な話をする。そういうことを先生あるいは教科書会社が要求するため、子どもたちは非常に上手に話ができる

ようになる。しかし、そういったことを一步突っ込んで、少人数の授業などで話をすると、むしろ話すよりは一生懸命考えたり、自分の思いを伝えたりという、そういったことをすると思います。

先ほど言い忘れましたけれども、小学校の国語の教材に関しては注意しなければその変化が分かりませんが、高校の方に関しては明らかに変化があります。例えば中央教育審議会の答申では国語科に関して批判的な意見があり「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され」て、実質的に「講義調の伝達型授業に偏」り、同時に「教材の読み取りが中心にな」っていると述べています。これは一見もったものようだけれども、では何を文科省が進めているかということ、実生活において必要な資質能力のような現実的な能力を高めましょう、という方向です。そして、教科の方も編制されて、古典的な国語の読み物は縮小され、また教える時間も減っている。これは大きな流れで、また大学入試の方でも実用的な部分の比率が大きくなっている。これは将来的には、非常に大きな影響があるんじゃないかという危惧を持っております。

島蘭 最近、私の知っている範囲では、哲学教育を大学以下のレベル、つまり初等・中等教育にまで広げるといふ流れもあります。これは先ほどの話で言うと、ディスカッションや考える能力に力点があり、実用的な能力を重んじるという流れと少し違うように思うのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

岩田 哲学教育については、現在、本当に熱心にされている学校や指導する先生がおられるので、やはりニーズはあると思いますね。私は、哲学教育には非常に意味があると思っていますけれども、宗教学者のほうはあまりそこに立ち入らず、むしろ知識教育のほうに行きますね。一方、哲学教育の先生は非常に立派な方も多いのですが、宗教的なものが混じることを敬遠する先生が結構多いですね。その点、ちょっといかがなものかと思えます。哲学教育が盛んなのは大いに結構ですが、そこで行われているのは、宗教というものが無い哲学教育であると

というのが私の印象です。宗教を排除することは一種の、狭い哲学教育ではないかなと私自身は思っていますね。その人が、神というものを信じる、あるいは仏を信じるということも哲学教育の結果としてありえるわけですが、そういうことがないかのような前提で動いている。あらゆる哲学教育を知っているわけではないですけど、そういった印象を持っております。

しかし、哲学と宗教とは別に相反するものではない。もちろん哲学のタイプによっては、宗教的なものを排除することはありえるわけですが、宗教的なものと一体とまではいかないにしても、関係するような哲学は、むしろ伝統的には普通なわけです。ですから、もう少し上手に関係を持てればよいと感じます。

佐々木 いわゆる「中立性の神話」というと変ですけど、そういうことがやはり教育の中にはある感じがしています。実際できるかできないかは別としても、中立というか、どこの宗教にも偏らないのが良いんだと。でも、実際に生きる宗教や生きる人間としては、仏教だったり、キリスト教だったり、どこかに行き着くところがあるわけですよ。中等教育・高等教育において中立性の神話を乗り越えられるかどうか重要で、「実は、人間はそんなに中立的にはなれない」と指摘・確認して議論することで、現実に近い宗教教育ができるのではないのでしょうか。

ホスピスの話をさっき先生がしてくださいましたが、実際に臨床にいくと、死ぬということは本当に辛いので、やはり色々迷う。そこで迷われてお坊さんなどに話も聴く。臨床がない教育や哲学であればそこまで語らなくて中立的でいいんだけど、臨床としてはそういう超越的なものが必要で、現場としてはやっぱりその人の価値観に同伴することになるので、そのあたりをうまく整理して、宗教学以外の方にも伝えられるとありがたいと思っています。

岩田 本当に難しい問題で、子どもの哲学教育には意義があると思いますけれども、そういったものと宗教的なものは決して相反するわけでは

ありません。いま中立性の神話とおっしゃいましたけれども、中立のまままで生きるというのは、本当にごく少数の例外はあると思いますが、大抵の人は特定の価値観——神や仏を自覚的に信じるという人は日本の場合はそれほど多くありませんけども——、あるいはそれに代わるようなものを信じている人は結構多いわけですので、どういったものに我々は依拠しているのかという、そういったことを自覚するのが大事ですね。

哲学教育の場合、そうしたことはあまり問題視されていないくて、何かに依拠しているということはあってはならないかのような、そういう雰囲気があるのかなと思うんですけども、何にも依拠しないで生きられる人は非常に珍しいと私自身は思っているんで、むしろそういったことを自覚していくことが、哲学教育の現場であっていいかと思います。

いま、宗教学者の方では、小・中の教育からは手を引くというような雰囲気があります。宗教的情操に関して大きな議論があって、宗教的情操に関してはもう小・中の国公立で教えることはできないんだということで、小中の教育にはあまりコミットせず、大学、あるいは一般人の方に向けて宗教知識教育をしていくというほうに向かっている。それは悪くはないのですが、私自身としては、人間の基盤形成にはやはり小学生・中学生・高校生が大きいので、もう少しコミットしていただければありがたいと思っています。しかし、ほとんど手つかずという感じで、残念です。

内田 さっき先生方がおっしゃった、子どもや若い人も自分の価値観を話したい気持ちは意外とあるんじゃないかというのは、その通りだと思うんですね。そして話すに当たって、「これは哲学、これは宗教」と、そんなにきっちり分けて考えてはいないような気がするんです。よく日本人の宗教性で、例えばお墓参りや初詣に行って、でもクリスマスもやるじゃないかということが話題になりますよね。でも別に「これは宗教としてやっているんだ」とか、「これは私の宗教じゃないけれども、単におじいちゃんが好きだから手を合わせるだけなんだ」とか、いちいち考えていないと思うんですよ。そして別に——もうすっかり学問から遠

ざかってしまったので思うのかもしれないんですけども——、「日本人は本当に無宗教なのか、それとも意外と宗教的なのか」ということに、そんなに決着をつけなきゃだめなのかなと思うんですね。それを「いや、これは宗教的です」というふうにレッテルを貼ることに意味はあるだろうかと思うようになってきていて。そういう意味では岩田先生がおっしゃるように、ことさら線を引いて、「ここから先には立ち入らないようにしましょう」とか、あるいは「小中学生には、宗教学の、あるいは宗教者の側から手を出すのがちょっと厄介そうだから」と引いていくことなどは、やはりどちらももったいないような気がします。どうしても洗脳とか押し付けを警戒するのは当然で、それはあってはならないことなんですけれども、お互いの価値を尊重し合うことを大前提にするのであれば、ちょっと神様の話が出てきちゃったりとか、考えようによっては宗教なのかもしれない話が出てきてしまっても、そんなに問題なのかな？ という気はしています。

そして、これは私の勤務校の話なんですけど、すごく話し合うことにこだわる学校なんです。通常のロングホームルームでも話し合うことが多く、そこでは比較的実用的な、「夫婦別姓問題をどう思うか」のようなテーマをやっているんですけども、それとは別に、2年生が2泊3日でディスカッション合宿をして、15人ぐらいで5時間とか話したりするんです。それでその時間、少人数で話していると、実用的なところでやっぱり収まらず、結構深い話をするようになって、自分の価値観をおつけ合い、「意外と楽しかったなあ」という感想も出てきます。うちの学校の生徒が特殊だとは思わないので、おそらく多くの若い人は、場がありさえすれば良い機会にしてくれるんじゃないかなと思うんです。話の中でちょっと宗教めいたものが誰かの口から出てきたからって、「今は無しだと思う」みたいにはやっぱりならないわけなんです。何らかの場を提示して、お互いの交通整理は多少してあげてということはあると思います。

佐々木 その合宿は学年全体で行くんですか？ 希望者だけ？

内田 いえ、全員です。人数が多いので半分ずつにしますが、全員で行きます。

佐々木 教員がついていくわけですよね。教員の力量が問われますよね。

内田 そうですね。当然、その行事全体を担当する教員がいるんですが、引率者として、その学年の担任の教員プラス、何人か指名された教員もついていきます。メンバーが発表された後、生徒たちが選んだテーマによって、第一希望から第三希望ぐらいまでに教員を割り振るんですね。どのテーマをどの教員に渡すかは結構気を遣うらしいです。「なぜ勉強するのか」とか「女性の生き方」なんかだと、正直何とかなるんです。ただ、例えば「生と死」みたいなテーマが来てしまうと、もちろん年齢がすべてではないと思うんですけども、「あまり若い人にはかわいそう」とか、「もうちょっと上の方にお願ひしましょうか」とすることがあります。話し合いのときに、基本的に教員はあまり喋らないですけども、それでもやはり「先生はどう思いますか」と訊かれるときもあって。そこは何か公的な解答を要求されている訳ではなくて、それこそ「私という人間」みたいな感じになりますので、もちろん若くても立派な人もいるんですけど、一般論的に言えば、あまり若い人に、「なぜ人は生きるんでしょう？」という問いをいきなりぶつけちゃうのはちょっとかわいそうかなという感じはあります。



内田美和子(うちだ・みわこ)

1989年東京大学人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程修了。日本女子大学附属高等学校教諭。地歴公民科で倫理を中心に世界史、公共などを担当。

高校における実践① 現在の状況

島藺 そのあたりで高校の話に移っていただいて、さらに展開できたらと思います。

内田 はい。私は社会科の担当なので少し話がずれてしまう部分もあるかもしれませんが、実際に倫理や公共の授業でこういうことをやっており、そして生徒はこのような感じでそれを受け取っているというお話をさせていただきます。ただその前に、現在の高校の社会科の状況について、簡単に一般的な説明をいたします。

先ほども申し上げたように、2022年度に学習指導要領が改訂され、今年度(2023年度)は2年生までが新カリキュラムで、来年になると3学年とも新カリで揃うということになっています。地歴公民について申し上げますと、必修科目は三つあり、「歴史総合」、「地理総合」、そして「公共」です。

まず、このなかで宗教を扱うとしたら、それは知識教育であることが大前提です。特に地理総合では、学習指導要領のうち「世界の多様な生活文化と地理的環境との関わり」という項目に「宗教」が入っておりますので、そこではある意味宗教について堂々と扱えますし、実際に扱っている学校は多いと思います。ただ、「持続可能な社会づくりという観点」で「防災」があり、これは以前からあった項目ですけれども、おそらく3.11以降、あるいは昨今の気候変動との関わりから、とてもクローズアップされてきています。防災がクローズアップされるとどこかにしわ寄せがくるわけなので、宗教を地理総合で扱うこと自体は変わっていないのですが、比重としては少し軽くなっているような気がします。

それから先ほど、実用化や平板化というお話がありましたけれども、公共について言えば、「公共的な空間の担い手として社会の基本原則を理解すると共に、現実社会の諸課題について具体的な問いを立てて日常と関連付けて」というように、何かの役に立つことをやりましょうという意図がすごく匂うような書き方がされているんですね。これはアク

ティブラーニングとの絡みもあり、例えば模擬選挙とか模擬裁判の実践などがとても推されているので、思想よりはそちらに重点があるように思います。

そして、何といっても変化が大きいのが歴史です。今回、世界史と日本史を融合させた「歴史総合」が必修科目になりました。歴史総合では近現代の日本と世界を広く総合的・問題解決的に学ぶということなので、だいたい16世紀から後の時代をやるんですね。もちろん近現代を手厚くやろうということ自体は、意味があると思うのですが、宗教の扱いという点で言うと、とても残念な感じになっています。伝統宗教の立ち上がりのところは一切ない。十字軍もない、イスラムももちろんないということになっている。

歴史総合・地理総合・公共の3つが、必修修として日本全国どの学校も行う授業です。残りの科目は選択で、倫理はかなり冷遇されている選択科目だと思います。そもそも科目として立てていない学校も結構あるのではないのでしょうか。普通の子は受験を見据えて、世界史なり日本史なりを手厚くやる人が多い気がしますし、その選択履修の「世界史探究」「日本史探究」でも、政治史・経済史が中心で、文化や宗教はおまけのようになりがちです。どうしても、主権者教育とか消費者教育とか、役に立つ、現実世界を担う若者を育てるという点が強調されるので、自分の価値観を見つめるとか宗教について考えるということは、なかなかおざなりになりがちかなと思います。強いて言うなら、「グローバル化」もよく取り上げられるキーワードの一つなので、多様な価値観を学んで異文化理解を深めましょうという文脈で、宗教、特に最近はイスラムを取り上げることがあるというくらいです。

総じて社会科のなかで、宗教はそれほど重んじられておらず、以前と比べても後回し感が強まっているような気がしています。もちろん、実際にどういう授業をするのかは個々の教員に任されている部分はあるのですが、学習指導要領がこのように大きく変わり、そして大学入試ではある程度それを反映して問題を出す以上、多くの学校では、それらの枠を大きく超えて好きなようにやるというようにはならないと思います。

以上が一般的な流れです。

私の授業では、学習指導要領を無視しているわけではないんですけれども、比較的自由度が高い形でやらせていただいています。ただ、無宗教の私立の学校であるがゆえに、「なぜこんなにキリスト教ばかり扱うんですか」というクレームが保護者から出てきたら——実際にそういうクレームを受けたことは一度もないのですが——、それは対応せざるをえません。なので宗教の取り上げ方としては、「こういう理由があって、私は重要だと思うので、かなりの時間をかけてやります」と説明し、宗教に肩入れしているように見られまいということにとっても気を遣ってやっております。

高校における実践② 倫理と公共の授業から

内田 さて、倫理は様々な思想を学んで、その学んだ思想の内容を踏まえて、自分の生き方なり、あるいは現代の問題について、自分自身の頭で考えるということを目指している科目です。具体的に宗教について言うと、私が扱っているのは旧約聖書・新約聖書の思想です。例えば、旧約における創造主としての神はこういう性質ですということを教えて、そこで対比的に日本の神とこのように違うよねという話をしたりもするんですけども、そこで終わらせないで、例えばデザイナーベビーの話とか、生命倫理に関わるようなことについて、旧約だったら恐らくこのような判断をするだろうけれども、皆さんそれぞれどう思いますかということ、文章を書かせたり、グループディスカッションなどで考えてもらいます。あるいは、旧約における神と人間の関係についての話をした後に、少し脇にそれまして、じゃあカントについて考えてみましょうとか、実践理性の話もしたうえで、自由とはどういうものかをまた考えてもらおう、そういう比較的時系列を無視したこともやったりしています。あるいは、新約だとイエスのアガペーは当然やるわけなのですが、キリスト教とは関係ないところで、例えば障害についての配慮がずいぶん話題になって生徒もすでにその話は知っておりますので、実質的

公平について考えてみましょうということをやったり、あるいはイエスについての学習をすべて終えた後で今度はニーチェをやって、強いて言うなら自分はどちらに共感しますかということを考えてもらったりしています。

時間数としては一コマ50分授業で、旧約は先ほど申し上げたように、一回切ってカントを3時間ぐらいやってからまた戻ってきてということをやったりしているので、トータルで8時間ぐらいかけています。イエスはもう少しやっているかもしれません。というのは、宿題にするとあまりちゃんとやらないので(笑)、自分で思ったことを書く時間に1時間まるまる取ったりしていますので。そういう時間も合わせると、ということなんですけれども、結構な時間を使っているなと思います。

次に公共ですが、先ほどの模擬裁判を逆手に取ってというわけではないですけれども、人権や憲法について色々な精神の自由などを学習するときに、例えばエホバの証人の信者の生徒は剣道をやれないがそれで単位が出るのかという話とか、輸血の話、それから自衛官が殉職したら合祀されてしまった話や、地鎮祭・玉串料の訴訟とか、宗教の自由をめぐる判例でメジャーなものを取り上げ、実際の最高裁での判決を明かさないう段階で、自分ならどう判断するかということ、時間があつたらディスカッションしてもらっています。別に宗教だけを取り上げているわけではなくて、例えば国家斉唱や、医療看護現場での身体拘束の話なども扱うのですが、全体のなかのバランスとしては、宗教・信教の自由は結構大きな割合を占めているかなと思っています。

そしてこういう授業を受けて、生徒がどのように受け止めているかということなんですけれども、成果は大きく二つかなと思っています。一つは、当たり前ですが、やはりある程度時間をかけて考えれば、生徒はちゃんと深く理解できるということです。先ほどの自然との共生という話もそうなんですけれども、「自然を大切にする」「他の人の命も尊い」「どんな人でも大切だ」とか、言ってしまうと当たり前ですね。そんなことは高校生にもなれば、言葉のうえで分かってないわけではないと思います。ただそれが心底分かるというのはまた別の問題で、「放蕩息子」

のたとえ話（ルカ 15: 11-32）も、「散々やらかした息子が反省して帰ってきたら受け入れてもらえました」「それはよかった」「どんな人でも大切にするのがアガペーです」というのでは、まあいいことは言ってるけど綺麗事だなと、やはり生徒は思ってしまいます。なかには高校生にもなって無邪気に「本当に感動しました」とか言う人もいるんですけども、そういう人はむしろちょっと心配で（笑）、「いや、これ綺麗事じゃないですか」と言ってくれた方が安心するんですが。

放蕩息子の話に対して、生徒は比較的、優等生の兄の方に感情移入します。なぜ頑張っているのに報われないんだとか、やはり今の生徒は頑張っているけど報われない感じがあるのかなと思うんですけども、それはそれとして、その感情移入しちゃうのは分かるんですけども、でもそれが分かっているはずの父がなぜこういうふうに対応したのだろうとか、そういう兄は一生その感情を抱えて生きていくのでいいのだろうかというのを話すことで、さっき申し上げた実質的平等と形式的平等、あるいは合理的配慮とは何か、そういうところにまで話していく。つまり理解が及ぶようになると思うんですね。そこまでいかないと、現実の色々な場面で、自分はどのようにして生きたいのかなど、思想として学んだことと自分の生活や生き方が繋がってこないような気がします。

事前の打ち合わせでも話した「善きサマリア人」のたとえ話（ルカ 10:25-37）⁵⁾も有名だよと言って取り上げます。あれも、あらすじだけですと、「異民族も大事にしましょう」「異文化共生で良かった」ということで終わってしまいかねないけれど、ちょっと前後も長くにとって読むようにしています。サマリア人のたとえでは、「隣人を愛せよ」ということが律法にも書いてあるじゃないか」と言われた律法学者が、「いや、でも隣人とは誰なんですか」と問います。イエスがこの話を、サマリア人の話をしつつ「誰がこの人の隣人になったと思うか」と問い返したところまで、ワンパッケージにして読みます。すると例年、クラスに1～3人ぐらいなんですけれども、「これってやり取りが噛み合っていない、訊かれたことに答えていないですよね」というところに気がつくんですね。そして、「その噛み合っていないところに意味があるんじゃないか」

ということを言ってくれるんです。そこから話をすると、いわゆる隣人愛というのが、単にその仲間内の仲良しこよしではなくて、「博愛とはなんだろう」ということの、深い理解につながっていきます。単に「アガペーとはこういうことです」と教えて、もちろんそれは教科書に書いてあるし、もうちょっと言葉を足して私が話して終わりにしても理解されると思うのですが、ただ単にキーワードとその意味を頭で把握するというだけではなく、もうちょっと自分の気持ちに落とし込んで理解することで、それが自分のこれからの生き方にどのように関わってくるのか、あるいは関わってこないのを自分は選択するのか、というところまで持っていけるのかなと思っています。

それからもう一つは、最初にお話したように、うちの学校にいわゆる信者さんというのはほとんどいないのですが、信仰を持つ人、信仰のある人生、宗教の信者になる人生などを尊重する気持ちを持つようになるケースが多い気がします。さっきも申し上げましたけど、もともと多様性というのは、とても良いことであるというふうにされているので、自分とは異なる意見でも、「いや、そういう意見もアリといえバアリですよ」というスタンスを、生徒たちは比較的持っているんですね。これも現在必修になっている「情報」の授業で、例えばSNSの危険性とか、フィルターバブルの話とかも随分聞いていて、おそらく実感もしていると思うので。そういう意味では自分とは異なる意見でも、あるいは自分が理解できない意見でも、それは尊重しなくてはならないというのは分かっているんです。なので、例えば、統一教会問題のようなことがあっても、宗教だというだけで「怖い」という言い方は少なくともしないです。もちろんどう思っているかは、本当のところは分からないわけですが、宗教というだけで警戒するのではなくて、「宗教であれなんであれ、人権侵害はダメでしょう」「押し付けるのは問題でしょう」というスタンスが強いように思っています。なので、先ほどの判例の授業でも、「自分はエホバの証人の言っていることはとてもじゃないけど理解できない、一生きっと信者にはならないでしょう」と多くの生徒は言うわけです。でも、初めてやったときは意外だったんですが、「剣道

ぐらいは他のもので代替したらいいじゃないか」「単位を出さないのは人権侵害である」と、クラスのほぼ全員が言うんですね。輸血の方は命がかかっていることなので、「いくら信者でもそれは輸血をした方がいいだろう」と生徒は言うのかなと思ったんですけど、意外とそうでもなくて。これはクラスや学年にもよりますが、少なくとも半分以上は、「やはり本人が輸血されちゃったら天国に行けないと言っている以上、それは尊重すべき」と言うんですね。そういう意味では、「自分は信仰は持ってないけれども、真剣にそれを信じている人を否定すべきではない」という意識はかなりあると思います。それはそれで一つの成果じゃないかと思っているんですけども。

以上のことと関連して、でもやはり少し足りない、課題と思っていることを最後にお話します。一つはもう単純に、時間がないという話です。先ほど申し上げた、深く理解させるような授業をやろうと思うと、やはり時間がかかります。その一方で、このぐらいは知っておいてほしいという項目も結構いっぱいあって、例えば旧約新約をそれだけやっている傍らで、宗教に限っても仏教とかイスラム教はほとんどやっていなくて、それらを同じように深くやろうと思ったら一年では終わらないですね。そういう意味では知識量と深さを両立させるには、どういうようにすればいいのか、今の時間数では無理ではないかと思っています。これまでは、仏教については日本史である程度はやっていましたし、イスラム教に関しては、これは私の勤務校の特殊性だと思うんですけど、附属の中学校の総合学習のなかで国際理解教育というのがあって、そこがアフガニスタン一カ国を取り上げて、様々な角度から長い時間かけて学ぶことをしているので、相当イスラム教の知識はあるんですね。高等学校でも短期間、アフガニスタンから高校生を呼んで学校に来てもらうということをしていたので、その事前学習をしていた関係で、仏教とイスラム教が授業ではたいへん薄い感じになっていても、トータルで良からうと若干言い訳はできていたんですが。新カリキュラムになって、ついにうちの学校でも世界史か日本史どちらかを選ぶことになってしまったので、そうすると日本史を選ばない人は、仏教についての知識は

本当に申し訳ないぐらいになってしまいます。そしてアフガニスタンからも、現在はあのような情勢で高校生を呼ぶどころではなくなってしまっていますので、今後のことを考えると、仏教もイスラム教も、全然学習が足りず、今のままではよくないと思って困っているところです。

それからもう一つは、これも先ほど岩田先生の話のときにちょっと話が出た、敬して遠ざけあうというようなところですが、「他者の価値観を尊重するけれども踏み込まない」ということについて、本当はもうちょっと踏み込んで、なおかつ尊重もしてほしいわけなんですよ。そのためには、やはり信仰を持つ人を身近に感じる機会が必要、大切なんだと思います。ビハーラ僧の方に来ていただいて学生が「初めて身近にお坊さんの話を聴きました」と言って感銘を受けるというのは、すごく分かる気がしました。そういう意味では、私も一応、信仰を持っている者ではあるんですけども、立場上はあまりそれを押し出せないのです、生徒にとっては身近に信仰を持つ人を感じる機会がなく、残念だなどと思っています。

以前、アフガンの高校生を受け入れていた時の話ですが、日本に来ることを了承するようなおうちで、かつ英語もしゃべれることを条件にしていたので、あまりゴリゴリに伝統的ではない、さばけたご家庭のうちの子が来るんですよ。すごく今時のファッションをして、インドのポップスとか聞いちゃう普通の子です。なので生徒たちも「なんだ、普通の子だ」みたいな感じだったのですが、そういう子たちが一日に5回、すごくきちんとお祈りをするんです。それを見て生徒たちがすごく思うところがあったらしく、ちょっとふざけて、「すごい祈るけど、祈らないと罰とか当たっちゃうの？」ということを読んだ子がいて。そうしたらそのアフガニスタンの子が、「ううん、神様に感謝してるだけなの」って、すごくさらっと答えたんです。それが、聴いていた周りの子たちに大変感銘を与えていて。「不遜かもしれないけど、今日一日生きられるっていうのはある意味当たり前であって、それを今日もありがとうという気持ち、目に見えない何者かに感謝する気持ちに私はならないけど、悔るべからずだなどと思いました」って生徒が言ったんですね。今ど

きの言い方だと思いましたが、でも、「分からないけれども侮れないんだ」とか、「侮っちゃいけないんだ」ということを、理屈ではなく感覚として受け取るためには、やはりこのたいへんポップな若者であるアフガニスタンの子がお祈りすることに意味があったんだろうなあと考えています。それを偉そうな感じのシスターなり神父さんが来て、目に見えないけれども感謝ですということと言っても多分あまり伝わらない、「はい」みたいな感じで終わってしまうんだろうなと思うんです。そういうことを分かってもらうためには、こうした事例は有効なんだろうけれども、ただそういう機会を設けること自体が、なかなか難しいなとは思っています。なので、先ほど申し上げた授業時間数が足りないということと、身近な例というのは大切だけど難しいという、この二つが課題と言えるかなと思います。

高等学校の中で、いわゆるミッションスクールはまた別だと思えますけれども、私立であれ公立であれ、宗教系ではない学校にあっては、やはりまず提供できるのは知識なのかなと。ただそれが、できれば単語の知識だけではない、深い理解までいけたらいいなと思いますし、信仰を持つ人を尊重する姿勢を身につけるところまでいったらいいと思っています。それがやはり、昔ながらの、「病気になった」とか「貧しくて暮らしが立ちゆきません」とかももちろんそうでしょうし、あと「何か分からないけど満たされない気がする」ということでもそうでしょうけれども、何かしら人生について深く考えるとなったときに、その考える要素の一つの候補として、宗教が挙げがなくてもいいんですけど、挙げがったときに不幸じゃない出会い方をしてほしいと思っています。そういうことのために、基礎になったらいいと思い、いわゆる宗教教育ではないつもりですけども、高等学校の授業という形で宗教を扱っています。

島蘭 ありがとうございます。日本女子大学附属高校に行ったことはないんですが、校舎にいて20時間ぐらいの授業を受けたような感じがします(笑)。これだけのことを学べば、これはもう宗教を学んだと言えるんじゃないでしょうか。そういう意味で宗教リテラシーとは何かとい

うことを、高校の現場に即して深くお話くださったと思いますが、他の先生方、ご感想とかご質問もぜひお願いします。

岩田 ありがとうございます。今、島菌先生が言われたように、こういう授業が高校でなされるというのは、本当に模範のようで素晴らしいと思います。実は同僚とも、「高校は学習指導要領があっても、受験を抜きにすれば結構自由に授業ができるので、学校によってピンからキリですけど、割と先生の力量や勉強が生かされて、小中に比べるとかなりいいよね」という話をしていましたので、こういう授業が実際にされていることを知って非常に感銘を受けました。

私自身になるほどなと思ったのは、地理総合の授業で、持続可能な社会づくりや防災が中心になったと、これは本当に実感をするところです。いのちの教育を先生もされているようですが、結局、いのちの教育といっても今はもう明らかに文科省の方で、「いのちを尊重する」という心情的な問題から、災害があったときにどうするか、暴漢が学校に来た場合にどう対応するかという問題関心に移っています。もちろんそういう教育も大事なんだけど、それは消防や警察とか、そういう人が中心になってやるのであって、学校ではもう少し人間の土台作りのようなことがあればいいかなと思います。

また、地理総合の内容は実はよく知らないんですけども、私自身の印象では意外に地理が宗教について詳しい。他者理解という点では、歴史よりむしろ地理のほうが可能性があるのかなと感じるのですが、そこはどうでしょう？

内田 そうだと思います。やはりおっしゃるとおり教員次第という部分はありますけども、異文化理解といったときに、最近はイスラムがすごく多いですね。9.11以降なんでしょうか、イスラムを抜きにしては語れない感じになっていると思います。中東や、インドネシアなど東南アジアのイスラム圏を考えたときに、例えば企業の海外進出ですら、イスラムの理解がなかったらモノも売れないと。そういう意味で、彼らの社

会を理解するのにまず大事なのが宗教です、という形になっていると思います。なので、今、この必修になっている三科目の中で言ったら、一番きちんと宗教を取り上げるのは地理なのかなと思います。

佐々木 私もよく高校の地理の教材を授業で使います。それこそ高校までにちゃんと学んでいない学生たちが多くので、復習的に使うにもよくできています。NHKには映像教材がふんだんにあるので、それを見せると、いい形での宗教と人々の生活との関わりが実質的によく分かるようにできていると思います。それからJICA（国際協力機構）が、メンバーや子どもたちの教育のために作っている教材動画があるんですよ。内容は基礎的なことで、イスラム教徒が5回祈るとかそのレベルですけど、「JICAの人たちもこういうところも学ぶんだよ」ということで。地理の可能性は確かにあるんでしょうね。

高校がうらやましいのは、クラスがあって、ホームルームなども含めてコミットメントができることです。大学はそれぞれ学生が取っている授業が違っているので、一時間に一回しか会わなくて、基本的に教員はそれ以上のコミットメントはない。本学は小さいので、まだそれでも学生が取る科目で何回か会ったりはするものの、コロナもあって学生同士もそこまで出会えないし、大学全体として宗教について継続的に学ぶ機会を提供するということは難しいと思います。先生がおっしゃってくださった、一緒に何かを考えると、ディスカッションというのも、一回やって、ハイ次は別の授業、という形になるので、うらやましいと言うと変なのですけれど、大学としてどういうふうそこに醸成するのが課題だと感じました。

少し質問ですが、アフガニスタンの方を呼ぶときの資金は、学校側が出されるんですか？

内田 最初は出してくれなかったので寄付を募りましたが、所詮2週間ぐらいなので、そこまで高額ではなかったんです。3年目ぐらいから、「おかしくないですか」と散々言って、法人に予算化してもらいました

けれども。ちょうどタリバン政権が倒れたときに、女子教育支援で、女子大のコンソーシアムなどができたんですね。それで向こうの教員が来て、授業技術を学んで帰るということがあったときに、「先生が来るのももちろん大事だけど、生徒が生徒を呼びたいです」という話になって。今、そういう情勢ではないので、本当に残念ですけれども。

宗教知識教育と宗教情操教育

島蘭 宗教教育については、宗教知識教育か宗教情操教育かというような議論がありますね。内田先生の授業では、例えばアガペーについて考える、あるいはアフガニスタン人の宗教性について考えるという次元に行くには、宗教の知識が必要になるんだけど、知識を超えて、ある種の宗教の大事なところに踏み込む、それをなさっているという感じがしました。そのあたりを「宗教情操」という言葉で言うべきものなのかについては、いかがお考えでしょうか。

内田 そこが、自分自身でも迷うところというか。先ほど少し申し上げた、「そこに線を引かないとダメなんですか」というところなんですけれども。必ずしもキリスト教的文脈でなくても、困っている人を見たらおのずと手が出てしまうというのはありえるわけで、それをことさら「宗教」と言わなくてもいいような気がしています。

島蘭 サマリア人の話で、「噛み合っていない」と気づく子がいるという話は、すごく大事なことをおっしゃったように思います。どういうことでしょうか。

内田 ある意味すごく単純なことなのですが、「私の隣り人は誰ですか」という問いに対する答え方として、中学受験の国語の模範解答的には、「誰誰さんがあなたの隣人です」、あるいは「あなたの隣人は誰々さんです」というのが正しいと思うんです。それをイエスは、「誰が、この困っ

ている人の隣人になったと思うか」と、そもそも質問に質問で返しているし、その返し方もズレているんですね。そして最終的に、「あなたも行ってそのサマリア人と同じようにしなさい」と返すのは、つまり「誰があなたの隣人ですか」という問いには結局答えていないわけなんですよ。そうではなくて「あなたが隣人になれ」ということをイエスは言ったことになります。

生徒の気づき方は色々で、表現の仕方も色々です。去年の秋ぐらいに、とあるクラスにいた生徒の言い方をそのまま言うと、「イエスは最初わざと、意地悪をした」「はぐらかしている」というんですね。ただ、「なぜはぐらかしたか」というと、本当に意地悪しようと思っているのではなくて、わざとズレた答えをすることで、この律法学者に気づかせようとしているんだ」と言うんです。で、周りの他の生徒が「何を気づかせようとしているのか？」と言ったら、その説明してくれた子が、『誰が自分の隣人か』と問うと『隣人じゃない人』の存在を前提にしているから、“A”があれば“非A”がある、要するに、『この人がいて、これは隣人です、でもこの人は隣人じゃないです』という話になってしまうけど、『どこにいる人でも隣人になりなさい』と言うと、それはその人が動いて、行って隣人になる話です。だから、その人が動くことを前提にしてイエスはしゃべっているのに、律法学者の方は自分が動かないことを前提にしているので、その噛み合わなさが実は大事なんじゃないかと思います」と言ったんです。それ、結構深いことだと思うんですよ。「私とその場を動かずについて、隣にいる人だけを見て、隣人を大事にする」ということをやっているのが博愛というのが結局分からないんだと思うんですけども、そうではなくて「どこにでも自分が行けば、自分が誰かの隣り人になれば、その人が私の隣り人になるってことじゃないですか」ということですね。「その“動いていく”ということが、結局はイエスが一番言いたかったことじゃないか」ということを言って、結構クラス中が納得したんですね。それは、ある意味アガペーの本質なんじゃないかなと思います。「世界中どんな人のことも大事にしよう」というのは、やはりあまりにリアリティがなくて、「言っていることは分かるけ

ど……」となるんだけど、「困っている人がいたらそこに自分が出向けばいいじゃないか」というのは、ある程度リアリティがあると思うんですよ。それこそ、JICAなどの人はそれをやっているわけなので。そのときに、「いや、ちょっとアフリカは遠いから行かない」とか、そういうことじゃないと思うんですね。自分がアフリカに行けばアフリカの人が自分の隣り人になるのであって、それは最初の、「誰が隣人なんですか」と言っている頭では分からないことなので、それを分からせるために、わざとそういうズレた言い方をしたんじゃないかというのが、その子が言っていたことだったんです。でも、その発言を引き出すためには、何度も申し上げるように、やはりそれなりに時間が必要なんですけれども。

島菌 今のような進み方というのは、私としては想像するしかないところなんですけど、例えば哲学教育のディスカッションでも生じるし、いのちの教育をやっても生じるようなお話で、それがこの場合は聖書の知識とつながるから、宗教教育として非常に意味のある話になったという印象です。

内田 そうですね。おっしゃるとおり、これは題材が宗教だからというよりは、たまたまテーマが、この場合はイエスの思想でしたという感じですね。

島菌 エホバの証人のお話もありましたし、アフガニスタンの生徒さんなど、非常に具体的な場面で、宗教というものを身近に感じる、教室でそういう場面が生じるという例を色々挙げていただき、それが宗教リテラシーを考える大きなヒントになるという印象を持ちました。では続いて、佐々木先生のお話を伺えればと思います。

宗教系大学における実践① 宗教学科目について

佐々木 はい、恐れ入ります。白百合女子大学はフランス系カトリックの修道会が母体となっており⁶⁾、同じカトリックでもラテン系のスペインやイタリアとはずいぶん違うので、本当に一つの例でしかないのですが、本学において自分がどのようなことを行なっているのか、大きく二つの領域からお話をさせていただこうと思っています。

まず、本学には4年間必修の「宗教学科目」という、基本的にはいわゆる宗派教育に当たる科目があります。必修のため、半期でも落とすと卒業ができない学生たちが出てくるという、学生にとっても教員にとっても少しドキドキする科目(笑)でもあります。全学必修科目であるため非常勤の先生方に頼らざるを得ない部分が多いのが課題かと思えます。さらに建学の精神に根ざしたテーマ設定がされているものの、実際には各教員の専門性に基づく内容で授業が展開されざるを得ないことから、大学全体として、4年間で学生に最低限、何を身につけてもらいたいのかについての議論も以前より存在しています。

宗教学科目については、1、2年生は「キリスト教学」、3、4年生はそのキリスト教学を前提として「宗教学」を学ぶことになっております。先ほども高校との比較があったように大学にはクラスでの活動というものがあまりないので、1、2年生のキリスト教学は、授業中に自己紹介をするなどして学生たちにとっての止まり木的なものとしてのクラスを作る、HR的な役割も担っています。それゆえ、1、2年生はキリスト教学が半期で4コマあるわけですが、必ずしもキリスト教のことについて体系的に学ばせているわけではないため、3、4年生の学生たちに対し、ある程度の知識を前提に教えようと思うと、「サマリア人のたとえ」を知らないとか、——忘れていた可能性も大ですが——、そういうことも出てきます。おそらく他の大学でも同じだと思いますけれど、宗教学科目に関しては担当者に委ねられているところが大きいために、これだけは教えようというコンセンサスがまだ取れていない状況かと思えます。

私は宗教学科目のなかで、3、4年生の「宗教学」を担当していますが、

一番気をつけているのは、学生の側の忖度です。私の担当としてはキリスト教のことをメインに話さず諸宗教についても扱う、毛色がやや異なる授業となっているのですが、そこでたまにキリスト教やイエスの話をすると、「ここに感動しました」とか、「イエス様の生き方が素晴らしいと思います」と、あまり深めずに通り一遍のことを書いてくる子がいます。心根が良くなるので本当にやめるようにといつも言うんですけども、特にミッション系の学校から上がってきた学生と話してみると、自分で二重性を作ってしまうというか、本当は思ってもいないことを——教員への配慮からか——さらっと書いてしまうところがあります。ですから、ミッションから上がってきた学生たちの洗脳を解くという感じなんですよね。教員への思いやりを解くといいたいまいしょうか。大学という場なので、分からないことは分からない、いいと思わないことはいいと言わない、賛成しないことに対してちゃんと賛成しないと言って良いという保証をしていくことが、ある意味、大学の宗教教育のあり方と言えるかと思います。カトリックは神学生の養成でも基本的に哲学を修めてから神学を学びます。それゆえ、キリスト教であれどの宗教であれ、あなたの基本的な知性や理性を止めてしまったり、自分自身の問いや疑問を抑圧したりするように働くものだったらすぐ逃げまじうと。また、授業を「理解はしてほしいけれど、必ずしも賛成する必要はない」ということを、繰り返し伝えるようにしています。

もう一つの課題としては、宗教学科目は4年間ありますが、必ずしも体系立っているわけではないので、大学に入って初めて宗教に触れる場合、基本的な知識を学べていない学生たちがいます。一方でキリスト教系学校から上がってきた学生たちは、幼稚園から小中高とキリスト教の話ばかり聴いてきたので、辟易している部分があるんですよね。両者の間には宗教に関する基礎知識や宗教行事体験の差があり、それをどのように補うかが、私たちの今の課題かと思います。

なお、私自身は一般教養科目の授業で、いわゆる生命倫理関係やターミナルケアのことを取り上げています。他大学で看護倫理を教えています。最近、看護倫理のなかで文化が扱われることもずいぶんあるの

で、看護師として、その価値観の部分にどのように触れるべきかどうかという、いくつかのジレンマについて扱うこともしています。それは確かにいのちに触れるところですので、宗教に関係すると言えば関係するかもしれません。わりと、学生たちの反応がいい授業となっています。

宗教系大学における実践② 宗教を教えることと信仰をもつこと

佐々木 さらにもう一つ大きな話としては、宗教科教員の養成にかかわるものです。あるキリスト教系大学が提供している宗教科教員養成課程において、「宗教科教育法」の一部を担当しております。宗教学の専攻はない大学のため、履修者は毎年4～5名ほどで、ほぼ非信徒です。なかには母校の仏教系の学校で教えたいという希望を持つ仏教徒の学生さんもいるので、その場合には仏教を教える教案を作るということになります。

そこで見てくることのひとつとして、中学・高校で受けた宗教科の授業を「良い」と思っている学生はそれなりにいる、ということです。「自分は信徒ではないけれども、色々考えるべき大切なことがあると思うので、宗教の授業を教えたい」と望んで宗教科の免許を取る学生がほ



佐々木裕子(ささき・ひろこ)

白百合女子大学基礎教育センター教授。白百合教育センター副センター長兼事務局長。関連する業績として「19世紀イギリス及びフランスにおける女子修道会の連携に関する一考察」(『白百合女子大学研究紀要』第51号、2015年)、「日本におけるカトリシズムに基づく教育に関する宗教学的考察—シャルトル聖パウロ修道女会来日についての一考察—」(『白百合女子大学研究紀要』第48号、2012年)など。

とんどです。その意味では、高校までの宗教科の授業というのが、仏教であれキリスト教であれ、それなりに成功していると言えるのではないかと思うことがあります。

ただ、やはり一番の課題は、その学生さんたちの専攻が神学や宗教学ではなく、いわゆるアラカルト式で授業を取って宗教科の免許を取るといふ仕組みになっていることから、宗教に関する絶対的な知識量が本当に足りない点です。例えば、宗教科の免許を取ってキリスト教の学校に就職する学生がいても、最低限の知識がないと実際の現場で苦勞します。昨今は、宗教科教育法でも、宗教の授業を受ける生徒たちの背景も知っておく必要があるということで、日本人の一般的な宗教性とかそういう話もするのですけれど、それ以外に自分が教えようとする宗教の知識を、どうやって自習で身につけさせるかが大きな課題となっています。そのまま送り出すと学生が現場で潰れてしまう可能性があります。このことは、毎年課題として挙げられていますが、なかなかそこまでの余裕はないようです。先ほどのNHKやJICAのものや、それぞれ宗教科文化教育推進センター（本誌井上論文参照）が実施しているe-learning教材でもいいので、何か知識を身につけられるものを提供することがよいかと感じています。

それと同時に、他の学科と宗教科と2つ免許を持っていると私立学校では就職に有利だ、という理由で取るという学生もいますが、信仰を持たずに宗教系の学校で宗教を教えることは、現実としては非常に難しく、困難があります。宗教科の教員は、就職した学校では期待されることも非常に多く、実際の現場でいわゆる次の時代の執行部となる可能性も高いので、信仰を持たずに教える場合、宗教の免許をもっているのに建学の精神のベースとなる宗教のことをあまり知らないという、つらい立場に置かされかねません。私自身は、そこは非常にシリアスに考えており、宗教科教育法の授業では、「生徒たちからは“先生、お祈りしていて本当に信じているんですか”と訊かれるわけですから、そのときに何と答えるかを考えておかないと困りますね」という話から始めて、「学習指導要領やハンドブックがない宗教科を教えることは大変ですよ」と

伝えています。

もし各宗教系学校の宗教科の先生に対して、宗教リテラシーの醸成を担うことが期待されたり想定されたりするのであるならば、既存の宗教科の教員養成課程はあまりにも足りないところがあるのではと考えています。内田先生が先ほど「教えるための時間が足りない」とおっしゃっていましたが、同時に教員の知識不足というまた別の問題もありますし、さらに言えば、教会やお寺で何か宗教行事に参加したとか、宗教者と話をしたことがあるなどの経験もさほどない。それをどうにかしない限り、宗教リテラシーにおいても、宗教科の教員が果たせる役割は減っていくどころか、悪い方向に働いてしまう可能性もあるかなという懸念を個人的には持っています。

また、宗教に絡んでくる死の問題、生きること、生きづらさ、障害や病気、差別などに触れる機会が、今の大学生はたぶんあまりありません。そうすると、宗教について扱うとどうしても死やいのちの問題などが色々出てくるのに、自分は考えたことがない、本で考えたことはあるけれども、実際に病んで苦しんでいる人と伴走することも、若いので当然ながらない。コロナの関係ですっと外に出ることがなかったので、ボランティアなどで人と接することもあまりなかった学生たちも教員になっていきます。そうすると、宗教的な話題に関するディスカッションも表面的になってしまふところが出てくるのではないのでしょうか。

宗教系学校の存在意義として、宗教リテラシーの醸成にある程度貢献できる面はあると思うのですが、今のままですとやはり質の低下が気になる場所なので、それをどのように打開したらいいかと考えているところです。ミッション系の学校の場合はまだ、例えばアフリカとか色々なところに行って働いていた修道者やアフリカ人や様々な国の神父さんなどがあるので、その方たちを通して話を聴くことも多少なりともあるのですけれども、それでもこのコロナの間のギャップは非常に大きいので、ちょうどコロナが一段落しそうなところで、宗教的視点からも外との関わりを増やす、そんなことを考えられればと思っています。以上です。

島蘭 ありがとうございます。宗教教育というのは、特定宗教が行う宗派教育というものが基盤にあったはずで、その枠を超えて、特定宗教の枠にはまらないような宗教教育へ展開していくという方向で考えることもできると思うのですが、実はその基盤となる宗教系学校の宗教教育そのものが、不確かというか基盤の弱いものになってしまっているということかなと思います。ここではキリスト教系の、特にフランス系のカトリック大学が例として挙がっていましたが、仏教系の大学や高校なり、教派神道系の学校なども日本では宗教教育に力を入れているはずなので、そのあたりとも関連しながら考えてもいい例かなと思いました。みなさんの感想やご意見はいかがでしょうか。

岩田 はい。ありがとうございました。少しお訊きしたいのですが、宗派教育を中心にして宗教教育をするということと、制度上はそれほど難しくなくて割と充実しているのかなと思っていました。キリスト教系の学校ですと、最近はあまり見かけませんが、信者であることが公募の条件であったりして、てっきり、教員としてこういう大学に入る人は、全員ではないにしても信者もしくはそういう人が多いのかと思ったのですが、そうではないんですね。そのあたりはどうでしょう？

佐々木 C(クリスチャン)コードですね。カトリックでは神学部などは、ローマから特別に課された基準を満たさなければいけないなど、それなりの条件が決まっている場合もありますけど、それ以外は、一般の教員に関しては特にありません。

岩田 そういう条件は無しで採用されているということですね。私はよく知らなかったのですが、そういうのは普通なのでしょうか。

島蘭 カトリックはそういう傾向が強いんですかね。プロテスタントのほうが、Cコードがある。

佐々木 はい。プロテスタントでは、信者ではなくても牧師先生の推薦があることとか、どんな宗派であっても——カトリックであっても——キリスト教徒であることが公募の前提になっていることが多いと思うのですが。

岩田 なるほど。もうひとつ不思議なのは、私の見聞きしている仏教系の中高では、大抵その宗派の僧籍を持っている信者の方が宗教科の教員になり、大概、執行部に必要な人材になっていきますが、カトリックではだいぶ違うんですね。

佐々木 宗教科の教員でキリスト教徒でない方はほぼいないですが、例えば白百合の姉妹校の中でも、信徒でない宗教科の先生がいらっしゃいますし、現在、ほとんどの校長先生は信徒ではありません。フランス系のカトリックはそういうところがあるのかもしれませんが。経営する修道会によっても方針が異なるでしょうが。また、私がサバティカルで行ったボストンカレッジというアメリカのイエズス会の大学では、神学部の専任教員にイスラム教の方がいらっしゃいました。

岩田 しかし、私立で宗派教育ができるのに、信仰がないと十分な教育ができないし、もったいないように思います。

佐々木 おっしゃるとおりです。だから宗教科の免許を取る学生も困るんだと思うんですよね。高校の現場を見ていて大学とは違う難しさがあるだろうと想定できるので、宗教科の免許を取る前に、一応本人たちに、「同僚の先生や生徒さんたちに問われたとき、どうするか考えて」と言うんですけど。様々な宗教がある意味身近になった現代における宗教科教員の生涯養成も含め、信仰を持たない学生が宗教科を担う時代に対応した教育内容を考える時が来ているように思います。

島蘭 大学によると思うのですが、そういう学校のカラーをしっかりと維

持するということで、教員にも、ある種の宗教的な精神を体現してほしいという。そういう場を強く設けてくる学校もありますね。

内田 私立はそういうものだと思っていました。日本女子大学は宗教系ではないので、宗教はないですけど、それこそ創立者・成瀬仁蔵(1858~1919)の理念が強く、口の悪い生徒は「成瀬教」とか言うんですよ。三綱領という、「信念徹底」などの四文字熟語が三つあるのですが、おそらく全ての卒業生がそれを言えるし、それで作文を書けと言われてたら、そこそこそれなりのことを書けると思います。

島蘭 成瀬イズムは、かなり宗教を意識していた成瀬⁷⁾が、特定宗教に拠らない理念の教育を考えようとして日本女子大ができたということなので、そもそも宗教教育的な土壌があり、だからこそ、倫理の授業では教員が自主性を発揮できて、宗教の本質に関わるような授業ができる。やはり成瀬理念がないといけないんじゃないか。

内田 そうとも言えるかもしれないですね。

島蘭 そうすると面白い、日本だからこそできたかもしれない(笑)。

あとは仏教系幼稚園って多いですね、私はこれをもっと評価しているんじゃないかなと思ってるんです。これも宗教教育ですよね？

岩田 京大の非常勤の宗教学の授業で、自分の受けた宗教についてアンケートを取ったときに、幼稚園について書いた人が結構多かったですね。それが賛否両論でして、「儀礼が良かった」「何も覚えてないから無意味だったんじゃないか」と、両方ですね。

島蘭 それはキリスト教も仏教もということ？

岩田 そうです。あとは私、浄土宗系の東海中学・高校出身ですけれ

ど、同級生と話しても、あまり知識教育については印象がないのに対して、総本山の知恩院に集団参拝に行ったことは非常に面白く印象に残っているようなんですよね。だから、宗派教育の中心は儀式にあって、そういう儀式をできるというのはやはり私立の特権かなと思ったんです。

宗教について教える人材をどのように育てるか

内田 先ほどお話を伺いながら考えていたのですが、宗教科だけでなく社会科の教科でも、システムティックな知識はなくても教員免許が取れてしまうという点では同じだと思うんです。例えば史学科で「鎌倉仏教をちょっとやった。でも、あとの宗教のことはやっていないので、トータルに仏教が分かっているわけではない。かといって、経済についてもトータルに分かっているわけではなくて、楽市楽座を専門にしている先生の講義を聴いて単位を取りました」のような。それでも、世界史は分からないみたいな人も、日本史の免許ではなく「地歴」の免許が取っちゃうんですよね。

ただ、宗教科と社会科で何が一番違うかという点、社会科では教員になった後に教科書があるということです。あまり経験も積んでいなくてもどうしようと思っても、教科書や指導書があるわけじゃないですか。もちろん、あとは自分でがんばって勉強して肉づけしていくにしても、少なくとも骨組みはあるわけですよね。でも、宗教科の免許ということになると、それすらないので、本当にどうしたらいいか分からないんだらうな、と思いながら伺っていました。免許を出すにあたって、教科書の一つもなくていいのかなというか。

佐々木 本当に、そこなんですよね。少なくともうちに関しては、ようやくテキストを作るということになり、日本にはほとんど資料がなかったのでフランスや関係国に行って修道会の資料を集めてきたりしました。それで教科書もコアのようところがようやくできたので、幼小中高の発達段階別に、何をどう教えるかというのを議論していただく準備

をしているところです。ただ、一般的には、宗教科の共通の教科書というのはないですね。

内田 そうですね。ここで言っても仕方ないかもしれないですけど、宗教科に学習指導要領がないということに驚いてしまって。文科省があまりに無責任じゃないかなと思いつつ、かと言ってそんなに踏み込んでもらいたくもないのですが。少なくとも、本当に細くていいから、幹の一本も立てたらどうなんだろうと思いつつ伺っていました。

佐々木 本当は宗教系の学校がそこをちゃんと考えて、文科省に口出しをしてもらわないまでも、教派別であっても、最低限これは教えようというところをやるべきなんだと思いますけれど、カトリックの場合には、特に日本では修道会が多く入りすぎていることも関係しているかもしれません。例えば台湾だと、4つか5つぐらいの修道会なので、すぐに協力して色々なことができるようですが、日本はものすごく多いので難しい。それぞれ自分たちの修道会に総長がいてそれぞれの方針もありますので。司祭・修道者の急速な減少に伴う宗教教育の担い手の変化もあり、必然的に相互協力が必要という時代になってきたので、これから変わってくるかなと思っています。



司会・島蘭進(しまその・すすむ)

1977年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。東京大学大学院人文社会系研究科教授、上智大学グリーンケア研究所所長を経て、現在、大正大学客員教授。専門は宗教学・死生学。主な著書に、『日本人の死生観を読む』（朝日新聞出版、2012年）、『宗教を物語でほどく』（NHK出版、2016年）、『ともに悲嘆を生きる』（朝日新聞出版、2019年）、『新宗教を問う』（ちくま新書、2020年）、『なぜ「救い」を求めるのか』（NHK出版、2023年）、『死生観を問う』（朝日新聞出版、2023年）。

島 蘭 中等教育、初等教育も含まれるかもしれませんが、これは日本だけでなく世界的に、宗教を教える人を育てるシステムがないという課題があるかもしれません。もしかするとアメリカやイギリスは少し良いのかもしれないですが、ヨーロッパ諸国は特に、特定宗派の教育をやってきた伝統があるので、宗教一般を教えるという学問も弱いし、あまり発達していない。なかなか担う人材がいなくて、どうしても特定宗派のことを教え込む教育になってしまう。いま私たちが必要としているのは、教え込む教育をやってきた伝統から宗教リテラシー教育への転換ですが、なかなか簡単なことではないのかなと思いますね⁸⁾。

そろそろまとめたいと思います。本日は、それぞれの大学や高校での経験に即して宗教教育の問題点あるいは可能性について教えていただきました。宗教リテラシーを学校教育という観点から考えるというのが、今日のテーマでした。もちろん宗教リテラシーを養うのは学校だけではないと思いますけれども、様々な問題を抱えつつ、それでも今の枠の中でも色々な可能性がある、そして考えなければならない課題があるということが見えてきたかなと思っております。たいへん貴重な問題提起をいただいて、また活発な議論もいただきありがとうございました。

岩田・内田・佐々木 ありがとうございました。

注)

- 1) 関連する号として、『現代宗教2007』の特集「宗教教育の地平」も参照されたい。
- 2) 一例として、カール・ベッカー／弓山達也編『いのち 教育 スピリチュアリティ』（大正大学出版会、2009年）がある。
- 3) 文部科学省が定める学習指導要領は、社会の情勢等に合わせおよそ10年に1度改訂されており、高校では2022年4月より新しい学習指導要領の実施がスタートした。
- 4) ルーマニア出身の宗教学者。作家として『マイトレイ』（1933年）や『妖精たちの夜』（1955年）など、多数の幻想小説や自伝的小説も著した。
- 5) 本文中でも説明があるが、簡単なあらすじは以下の通りである。ある律法学者がイエスを試そうとして「何をしたら永遠の命を得られるか」と問うたところ、イエスは「律法にはなんと書いてあるか」と問い返した。律法学者は律法に沿って「神と隣り人を愛すること」と答えたところ、イエスは「あなたの答えは正しい。そのとおりに行えば永遠の命が得られる」と述べた。しかし律法学者は自分を正当化しようとし、イエスに向かって「私の隣り人とは誰ですか」と問いかけた。そこでイエスが持ち出したのが、サマリア人のたとえ話である。ある人が強盗に襲われて追い剥ぎにあったところ、祭司とレビ人が通りかかったが、彼らはこの人を見て見ぬふりをした。唯一サマリア人だけが彼を助け、介抱し、宿代も出してやった。ここでイエスは「誰がこの強盗にあった人の隣り人になったと思うか」と問い、律法学者が「その人に慈悲深い行いをした者です」と答えたところで、イエスは「あなたも行って同じようにしなさい」と述べた、というものである。
- 6) 白百合女子大学は、1878年に来日したフランス系修道会「シャルトル聖パウロ修道女会」を設立母体としたカトリック系の女子大学である。詳しくは、佐々木裕子・小林淑子「日本におけるカトリシズムに基づく教育に関する宗教学的考察—シャルトル聖パウロ修道女会来日についての一考察—」（『白百合女子大学研究紀要』第48号、2012年）。
- 7) 成瀬は、渋沢栄一らとともに宗教協力の場を模索していた（片桐芳雄『評伝成瀬仁蔵 女子高等教育から「社会改良」へ』日本女子大学、2021年、および見城悌治編著『帰一協会の挑戦と渋沢栄一グローバル時代の「普遍」をめざして』ミネルヴァ書房、2018年に詳しい）。
- 8) 世界的な状況については、藤原聖子『世界の教科書でよむ〈宗教〉』（ちくまプリマー新書、2011年）、山中弘・藤原聖子編『世界は宗教とこうしてつきあっている 社会人の宗教リテラシー入門』（弘文堂、2013年）などがある。

特集 試される宗教リテラシー

宗教文化教育が目指す宗教リテラシー

井上順孝¹

2011年に設立された宗教文化教育推進センター（Center for Education in Religious Culture）で推進されている宗教文化教育の目的の1つは、宗教（情報）リテラシーを高めることにある。グローバル化が進み、AI時代を迎えて情報化が新たな段階へと向かう中に、そのための具体的方法が模索されている。宗教や宗教文化についての基礎知識の習得には、とりわけ教える側のネットワーク構築や情報交換がこれまで以上に求められる。

¹ いのうえのぶたか：國學院大學名誉教授

1. はじめに

宗教文化教育推進センター（以下 CERC）が設立されたのは2011年1月である¹⁾。宗教文化教育の構想が2000年代に芽生え、10年近く試行錯誤を重ね予備調査を実施するなどして、CERCの設立に至った。主たる目的は自国の宗教文化や国外の宗教文化を理解する姿勢を養うことにあるが、カルト問題など宗教が関わるいわば「負の側面」にどう対処するかという課題も当初から含まれていた。1995年のオウム真理教による地下鉄サリン事件が、1998年の宗教情報リサーチセンターの設立につながり、同センターにおける諸活動が、2011年のCERCの設立の1つの礎となったので、この課題が重視されるのは必然的であった。

グローバル化と情報化が進行するにつれて、宗教リテラシーの問題は複雑さを増してきた。なお、宗教リテラシーは情報の扱いに焦点を当てれば宗教情報リテラシーの問題となるが、本稿では、問題を包括的に述べる際は、宗教リテラシーと表現する。21世紀に入ると、宗教リテラシーを伝える側にも学ぶ側にも、情報量の増加や思考の判断基準の多様化がますます降りかかってきているので、取り組みは難しくなる一方である。しかしながら、宗教リテラシーについて言えば、対応する局面が複雑化する反面、どのような社会でも時代でも向き合うべき基本的な事柄があり、取り組む上での欠かせない姿勢というものがある。これについての基本的学びを共有していこうとする姿勢が、CERCの設立にもつながったので、この点についての経緯と現在の課題について中心的に触れ、将来的展望についても補足する。

2. 宗教リテラシーを考える契機 ——1990年代以降の顕著な変化

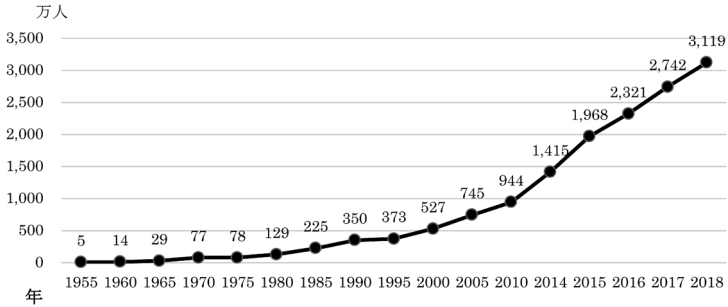
宗教リテラシーの重要性は、宗教教育の実態について1990年代から共同調査を重ねた後、2000年代に宗教文化教育という発想を得る中に強く感じられるようになった。20世紀末から21世紀初頭にかけては、

教育の現場には、グローバル化や情報化の影響はさまざまな形であらわれ、それまでの宗教や宗教文化についての教育ではカバーしきれないような事例が次々と生じた。グローバル化は、身の回りの宗教を理解するための基礎知識として身につけるべき内容をどんどん増やし、かつ多様化させた。一方、新しい情報ツールが短期間で続々と出現したことで、宗教や宗教文化についての情報の収集手段も様変わりした。これによって、どちらかと言えば教師の側が厳しい事態に直面することが多くなった。

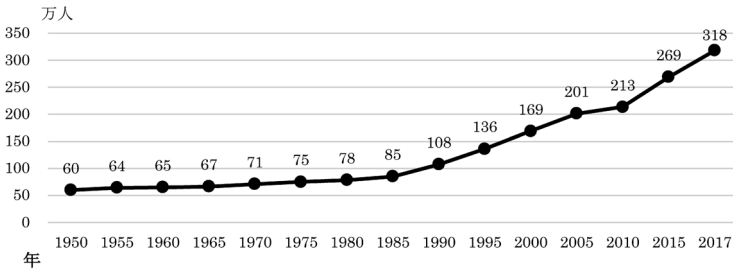
グローバル化の中で、外国からの旅行者、居住者、留学生が増え、国際結婚も増加した。多様な国の人びとに接することは、多様な文化、ひいては多様な宗教や宗教文化と接することにもなる。統一教会（現・世界平和統一家庭連合）、エホバの証人（ものみの塔聖書冊子協会）、モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）などは、日本国内でも積極的な布教・勧誘を行なってきているが、他方にはほとんど日本人に布教を試みることはない宗教を信仰し実践する人たちも身の回りに増えている。イスラム教、ヒンドゥー教、ジャイナ教、上座部仏教、シーク教、ユダヤ教などの信者である。彼らが日本人を対象に布教することはあまりないにしても、日本人がこれらの信仰を持つ人々、あるいは彼らの宗教文化と、日常生活習慣や行動形態を通して接する機会は増えてきている（グラフ1、2参照。当然ながら新型コロナウイルス感染症が流行した時期は激減した）。

他方で、留学、海外赴任、海外旅行などで、日本とは大きく異なる国外の宗教状況を体験する人たちも増えた。国外に行き、日本と異なった宗教環境を実感する日本人の数も20世紀末から顕著に増えた。各種の統計データをみると、以上は歴然としている。国外からの旅行者や居住者と、海外旅行をしたり海外に居住したりする日本人の数は1980年代あたりから増加のカーブを描き、21世紀に入ると、さらに増加傾向は進んでいる。

1970年代あたりまでであると、大学の授業において国外の宗教について説明するとき、ほとんどの学生は日本人であって、外国人や国外での生活を経験した人はそれほど多くなかった。海外旅行の経験を持つ者



グラフ1 外国人入国者数(法務省統計に基づく)



グラフ2 在留外国人数(同上)

も多くはなかった。1990年代になるとこの状況に変化が生じたことが日常的に実感されるようになった。帰国子女が増え、また海外旅行を経験した学生の数も増え、外国人留学生も増えた。個人的な体験を1つ述べたい。1990年代後半のことと記憶するが、日本の新宗教の国外における活動を概説した授業で、天理教はアフリカのコンゴにも支部があることに触れた。講義のあと、一人の学生がやってきて、コンゴの天理教会に行ったことがありますと伝えにきた。現地の雰囲気を少し語ってくれた。そういう時代になったのだと身近に感じたことを覚えている。教員はもはや専門領域の分野であっても、学生よりも総じて豊かな知識を持っているなどとは思ってはいけない。それを身につめられた出来事であった。

情報テクノロジーの発展は、別の方向から宗教リテラシーの必要性を

高めることとなった。なかでもインターネットの普及は、教育する側に大きな意識変革を求めるものとなった。今から思えば、まさに日本社会がインターネット時代へと突入していこうとする時期に実施されたのが、國學院大學日本文化研究所における宗教教育のプロジェクトであった。このプロジェクトは1990年度から2001年度までの12年間にわたった。最初の6年間は第1期で、国内の宗教教育について、宗教系の学校での面談調査、全国の宗教系学校からの資料収集、アンケート調査などを実施した。続く6年間は第2期で、国内での各種の調査を続ける一方で、韓国の宗教系の中学、高等学校、大学を10校以上調査するなどして、国際的視点から宗教教育を考えた。

調査を開始した時点では、情報化と言えば、主にマスメディアの影響が想定されていた。テレビやDVDなどの映像情報を宗教教育の教材に用いている中学校、高等学校は、情報テクノロジーを積極的に教育にとり入れているとみなされた。ところが新聞、雑誌、テレビといったマスメディア全盛期は、1990年代半ばあたりから、インターネットの利用が急速に広まったことで様変わりとなり、教室にもその影響が見え始めた。21世紀に入ると、現代宗教についての情報収集の主たる手段はインターネットを介したものとなった。各研究機関や宗教団体のホームページから得られる情報、SNSで得られる雑多な情報、スマートフォンに届くあまり自分の選択によらない情報といったものが、若い世代を中心に手軽に収集できるようになった。宗教や宗教文化に関する情報も当然この流れの中に組み込まれる。情報の質を吟味する機会をほとんど持たないまま、情報手段と情報量だけは飛躍的に増え、研究者や論文など書籍で得られる情報量を凌駕していった。

宗教教育プロジェクトを開始してからほどなくして気付いた中で、ここで言及しておきたいことが2点ある。1つは日本の公立学校では現代宗教、あるいは宗教問題を扱うのを忌避する傾向が強いということである。仏教、キリスト教、イスラム教などの歴史的展開やそれぞれの宗教の基本用語などは社会科の授業で教えられているが、それは基本的に受験用の知識としてである。現代社会で活動している伝統的宗教や新

宗教などについての知識を養ったり、宗教習俗、文学、芸術などに含まれている宗教文化について理解を深めたりするものではない。

もう1つは、宗教系の学校では、「宗教」の授業において、その学校が関係する宗教・宗派以外の宗教についてはあまり触れられないことである²⁾。キリスト教系の学校であれば聖書やイエスの生涯については詳しく教えても、神道や仏教、イスラム教などについてはあまり扱わない。仏教系の学校であれば、ブツダの生涯や教え、さらに自宗派の開祖やその教えについて触れることが中心で、キリスト教やイスラム教については深くは教えない。神道についてもさほど教えない。総じて自分たちの信仰する宗教以外を教える必要性を感じている教員は少数派と感じた。宗教系であっても大学の受験科目を重視するような学校にあっては、そもそも「宗教」の授業自体が重視されていないことがうかがえる場合もあった。グローバルな視点で現代宗教について学ぶための態勢が、調査した限りではきわめて脆弱に思えた。

3. オウム真理教事件の宗教教育への影響

第1期の調査が最終段階を迎えた1995年3月に、オウム真理教による地下鉄サリン事件が起こった。この事件はにわかには宗教教育の必要性についての議論を、広く日本社会に巻き起こすことになった³⁾。事件の衝撃は大きかったが、それまで宗教教育について実証的に研究していた人は限られていたこともあり、90年代後半に起こった宗教教育を巡る議論は理念や感情先行と言えるものが大半を占めた。「カルトに惑わされないための教育」があちこちで議論されたが、何を根拠にしているのかあまり明確ではなく、資料やデータの裏付けが欠如した主張が大半であった。カルトという言葉は独り歩きし始め、社会的に危険な団体と目された宗教についての評論や批判が際立っていた。

この時期のカルト問題を論じた評論などにおいては、宗教の危うさに関してオウム真理教を尺度にする例がよく見られた。当時のこの傾向に対し「オウム度」と特徴づけたことがある⁴⁾。社会的に批判的な眼が向

けられるようになった集団あるいは宗教団体は、オウム真理教とどう違うのか、どこが似ているのかという形で比較する物差しの登場である。

カルトという用語の広まりは、「宗教」というイメージが持っていた位置をときに逆転させるような効果すら持った。どう逆転させたか、やや極端な形で図式化するとこうなる。宗教は基本的には良きものであり、人間社会に必要なものであるが、中には間違った活動や行過ぎた教えを持つものがある。1970年代頃まではいくぶん保たれていたこうした宗教の捉え方が次のように変わった。宗教は基本的にはアブナイし、あやしいものが多い。また金儲けの手段と考えている団体が数多い。ただ、中には比較的きちんとした活動をしている団体もある。このように宗教を見る社会的視点が、少なからぬ人たちの間で逆転してしまった。この点はマスメディアの報道から推し量られた。こうした雰囲気の変化に即応するかのように、「若い世代においては宗教離れが生じた」とか、「宗教への無関心が強まった」とする論も見られた。ただこれらは確たる根拠に基づいていたわけではない。1995年以来続けられていた学生宗教意識調査の結果からは、むしろ学生たちは信仰を持ったり、宗教への関心を強める割合が、わずかではあるが増える傾向にあった⁵⁾。

この時期、現代宗教をグローバルな視点から捉えた上で、教育の視点からカルト問題に向かい合う研究はごく限られていた。それまで数年間宗教教育と取り組んできた経験からするなら、カルト問題について宗教教育の視点から取り組むべき重要な課題の1つは、宗教(情報)リテラシーを高めることであった。それは学生・生徒よりもむしろ教員の側に必要なものになっていたにもかかわらず、この点を意識化した研究は多くはなかったように見受ける。学生・生徒は現代の宗教について教えれば柔軟にそれが咀嚼される場合が多い。しかし、教える側にそれが欠けていれば適切な教育は望むべくもない。

オウム真理教事件によって一時的に高まった宗教教育への関心は、数年も経つと議論はしだいに下火となった。それはあたかもオウム真理教事件がいわば風化していく傾向と、歩を一にするが如きであった。カルト問題の根は何であるかの議論よりも、社会的に大きな問題になった出来事への

対症療法的な議論が主流であったので、これは当然かもしれない。

まだ宗教教育に社会が関心を抱いていた90年代後半に実施された宗教教育プロジェクトの第2期の調査では、主に韓国における宗教教育との比較がなされた。韓国の宗教教育は日本と類似した面と少し異なる面がある。公立学校での宗教の扱いは、日本と大差ないと感じられた。宗教系の学校における宗教教育は、日本よりも宗派教育がかなり積極的であった。この違いの主な理由は、キリスト教の占める割合の違いが大きく関係している。日本ではキリスト教の信者は人口の1%程度であるのに対し、韓国では3割近くに達する。日本では宗教系の学校を選ぶのは生徒の意思によつてだが、韓国では生徒の意思とは関係なく、宗教系の中学や高等学校に入学する例が多く出る教育システムであった。宗教系の私立学校を含めて、抽選で学校が決まることが多かったからである。宗教系の学校に入学すると、事実上宗派教育に当たるものを受けざるを得なくなる。それもあってか、在学中にキリスト教の洗礼を受ける生徒の割合も日本に比して格段に高い⁶⁾。

日本より宗派教育を受ける機会が多くなる韓国においても、カルト問題は起こっていて、問題の多い教団はサイビ(似而非)宗教と呼ばれた。1994年にはサイビ宗教の活動を批判的に扱った韓国の国際宗教問題研究所所長の卓明煥(タク・ミョンファン)が暗殺される事件も起こった⁷⁾。宗教リテラシーの問題は、日本固有の問題でないだけでなく、共通する課題が多いことを韓国調査によって認識し得た。

4. 宗教文化教育と宗教(情報)リテラシー

数年にわたる日韓の宗教教育の比較を終える頃に、具体的に構想されたのが宗教文化教育である⁸⁾。この構想にはプロジェクトに協力してもらった韓国の研究者たちからの意見も参考にした。また宗教教育プロジェクトが「宗教と社会」学会の学生意識調査プロジェクトと合同で1995年から実施した大がかりなアンケート調査の結果も踏まえた。アンケート調査では学生が宗教教育をどう評価しているかを知るための質問が毎回

設けられた。「宗教教育」と表現されると抵抗があっても、「宗教文化教育」という表現になると抵抗が薄れ、むしろ必要なことと受け止める割合が大半を占めることが分かった。CERCの発足にあたって、全国の36大学で5,005人の学生を対象としたアンケート調査を2008年秋に実施し、どのような宗教文化教育を学生が期待しているかも調べた⁹⁾。

この調査結果では、あまり予想しなかったことだが、もっとも聞きたい講義となったのは、「世界の神話」で60.7%だった。次いで「宗教が文学・音楽・美術・建築・映画などの文化に与えた影響」で52.0%だった。この背景にはRPGやアニメ、その他に世界の神話の素材が脱コンテキスト化されて盛んに用いられるようになったことが推測された。日本神話の教育というと国家神道が連想されがちであった世代とは、大きく異なる神話のイメージができていたことを示す。他方「現代のカルト問題」は36.8%でそう高くはなかったが、「キリスト教徒の生活」30.6%、「新宗教と呼ばれている近代以降の新しい宗教の活動」28.6%、「暮しの中の仏教」27.6%よりは少し関心の度合いが高かった。

2000年代に入って、宗教文化教育を具体化する仕組みを本格的に模索し始めた。ちょうどその頃、教育基本法改正の議論がなされていた。改正の議論においては、第9条に置かれていた宗教教育の条文の改正も俎上に載せられた。2006年に教育基本法が改正され、宗教教育についての条文も一部変わった¹⁰⁾。ただ改正内容は少し思いがけないものであった。宗教教育の条文の第2項が修正されるかもしれないという予想があったが¹¹⁾、改正案では第1項にのみ修正が加えられた。宗教教育の条文は第9条から第15条に移されたが、第1項の内容が「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない」となった。「宗教に関する一般的な教養」の部分新たに加えられた。

戦後の宗教教育の議論では、宗教教育のサブカテゴリーとして、宗派教育、宗教情操教育、知識教育の3つが挙げられるようになった。公立学校では宗派教育はできないが、宗教情操教育が可能かどうかについては長い議論があって意見は分かれていた。宗教文化教育の提唱は、膠着

した議論を超える意図もあった。この経緯については拙著『グローバル化時代の宗教文化教育』¹²⁾などで詳しく述べたので割愛するが、ここでは宗教情操教育と宗教文化教育とが目指す違いについて触れておく。宗教リテラシーの問題にとって大事なポイントだからである。

宗教情操教育とカテゴライズされた教育では、総じて好ましい宗教情操を育むことが目指された。このことは宗教系の学校ではとくに重視されたし、そのための具体的な教材が用意されていたりした。宗教情操はそれぞれの宗教の理念と結びついて具体的な教育が展開できる。ところが公立学校では、一般的な宗教情操を育むというのは現状ではきわめて困難と言わざるを得なかった。もしなにがしかでも宗教情操教育を行なうとすれば、教師の側に日本や世界の宗教文化の現状についての一定の基礎知識が必要になる。一般的抽象的な表現を求めるなら、今ならChatGPTがたいていの中学、高等学校の教師よりも無難な回答を示せるだろう。

宗教文化教育においては知識教育が基盤となるが、「真の宗教を知る」とか「良い宗教と悪い宗教を見分ける」、あるいは「好ましい宗教情操を養う」といったことを目指していない。その理由は、個人によって異なる価値の領域について宗教文化教育に関わる教員が適切な回答を示すのが困難であったり、1つの回答を示すことが適切でなかったりするからである。例えば「命を大切にする」、「国を愛する」、「自然を慈しむ」といった目標は、総論的には教えられそうに感じるかもしれないが、実際の生活の場面に即して教えることは非常に困難である。

他方で宗教問題において避けるべきこと、多様な宗教に触れるときに注意すべきことなどであれば、一定の方向性を示すことが可能である。無差別な殺人の教唆、詐欺的行為への加担、人権無視の発言や行動、人種・民族、宗教を理由にした排斥やヘイト言動など。宗教が関わってこうしたことが生じた場合には、その具体的事例に即して、どのように防いだり、避けたりしたらいいかを教え得る。実際に身の回りに起きていることを題材として考えさせることができる。これらは「リスクセンシティブな課題」として捉えることができる¹³⁾。ありていに言えば、理想

の宗教について論じたり、宗教的に好ましい人間を育てようとするのではなく、宗教に関連した避けるべき事態を確認し、そうした状況に陥らないような手立てを学んでいくことである。このことは情報化が進むと、より重要な目標になってきた。そしてそれは教える側の方に、より重くのしかかってきている。

5. 情報化の進行への対応

宗教教育の場においても、1990年代末くらいからコンピュータの利用やウェブ上の情報の扱い方を考慮に入れざるを得なくなってきた。1995年のWindows95の登場、1999年の「2ちゃんねる」の開設、2005年のYouTubeサービス開始、翌2006年のTwitterサービス開始と、それまでとはまったく変わったと言っていい情報環境が、教育の場にも影響を及ぼし始めた。21世紀になっても電子メールの使い方を覚えられない大学教員があちこちに見られる一方で、学生たちの大半は新しい情報ツールにすぐ馴染み、スマートフォンの登場とともに、情報のやりとりはそれまでとは大きく変わった。

世紀の変わり目頃の情報化が大学教育に与えた影響はいろいろな形で及んだ。1つ顕著な例を挙げれば、ウィキペディアがレポート作成などに与えた影響である。ウィキペディアが登場したときに、大学教員が惑わされた事例は数多くある。ウィキペディア英語版は2001年に登場し、日本語版も2002年以降しだいに充実していった。2000年代には学生がウィキペディアの存在を知り、レポート作成などに利用する割合が増えたが、大学の教員の中には当初ウィキペディアの存在自体を知らない人も少なくなかった。専門外のことを詳しく書いたレポートが増えたとか、同じような内容のレポートが目立つと語っていた同僚の教員に、それはウィキペディアを利用したからだと言ったことが複数回ある。いずれも教員はウィキペディアの存在について全く知らなかった。

ウィキペディアは当初誰もがこのオンライン事典の執筆に参画可能だったので、各項目の内容の書き換えはかなり頻繁になされた。非常に

論争のある事項であると、いわゆる「編集合戦」が展開されることもあった。これは実際に目にした例だが、ウィキペディアで、ある新宗教の教祖（仮にF氏としておく）が死去したように記述されているのを発見したことがある。それほど大きな団体ではないが、社会的には人目を惹くような活動をしていたので、それが事実ならマスメディアや他のウェブサイトで報じられるはずである。しかし確認した限り、ウィキペディア以外にF氏の死去を報じる記事は見つけられなかった。数日後、F氏に関するウィキペディアの当該記事は書き換えられていて、生存していることになっていた¹⁴⁾。

情報化の急速な進行に伴って「専門知の逆転現象」と筆者が名付けた状況が深まりを見せた¹⁵⁾。専門知の逆転現象の中には、専門とする領域においても、教員側の一般的知識の優位性が保てなくなるような状況が含まれる。専門知の逆転現象は宗教家の身にも生じたのであるが、ここでは宗教教育に関わる大学教員の場合に限って述べる。

宗教研究に従事する大学教員は、専門分野における知識に関しては、一般的に学生よりもはるかに豊かな筈である。しかし大学の一般教育、あるいは概論などに関わる講義では、自分の専門とする宗教関連の分野以外の現象にも言及しなければならない。図書館の蔵書、大学の研究室にある蔵書などがそうした広い知識を得る上での主たる源であった時代には、教員は通常は有利な立場にあった。それらの使い方や情報へのアクセス方法も慣れてきた。だが、インターネットの普及は、それを揺るがす事態をもたらした。ネット情報の利用に関しては、教員が優れているとは限らなくなってきた。教員の講義の内容が正確であるかどうかを、学生がリアルタイムでパソコンやスマートフォンを用いて調べられる環境も出現した。

グローバル化の進行が現代宗教に与える変化については、ある程度は方向性が予測し得る。世界的に広がった宗教についての基礎知識は、宗教研究に携わる教員のほとんどは一定程度身につけていると考えられる。グローバル化してもそれらの宗教についての基礎知識を大きく更新する必要はないと考えられる。とはいえ、仏教、キリスト教、イスラム教といった世界的広がりを持つ宗教は、国ごと、地域ごと、細かくはそ

の人ごとに理解内容と実践方法が異なる。グローバル化の進行は、その差異をさらに拡大していくであろうから、この点はより細かに確認することも必要になる。これもリスクセンシティブな課題となる。

他方、情報テクノロジーの発展となると、ほとんどの宗教研究者にとって変化の予測はかなり困難になる。スマートフォンもそうであり、AIもそうであるが、それまで経験していなかった技術が突然社会に広がることがあるので、対応はより難しくなる。グローバル化への対応であると、教員はそれまでの過去の経験を応用できるのに対し、情報テクノロジーの場合は、なかなかそうはいかない。むしろこのことは宗教研究者に限られた話ではなく、ほとんどの大学教員がそうした局面と向かい合っている。宗教研究に関連する分野では、情報化の進行で、宗教に関するフェイクニュース、陰謀論的な SNS 発信などが増えることに留意しなくてはならない。宗教リテラシーを養うには宗教や宗教文化についての基礎知識がこれまで以上に大事になってくる。

6. 宗教文化教育推進センターの二方向の目標 ——教わる側と教える側

宗教文化教育を通しての宗教リテラシーの養成は大学という場を出発点にしたが、それは手を付けやすかったからである。宗教リテラシーの養成は、中等教育、また社会人教育においても必要なことである。この点をどう考慮するかについて、CERC で宗教文化士制度を始める際にかなり議論がなされた。宗教文化士制度は2011年のCERC設立によって開始された。しかしながら、大学と違って、生徒にそうした教育の場を設けることは、大学受験を主眼に置くことの多い現在の中等教育においては事実上困難であることが、宗教教育プロジェクトの調査の経験からしても認識されていた。そこで中等教育の教員を一定の条件付きではあるが、宗教文化士制度の対象とすることをとりあえずの目標とした。宗教リテラシーの必要性を感じる教員が増えれば、中等教育の場でいくらかの影響を与えることも可能になってくる。

またマスメディア関係者にも宗教リテラシーについて考えてもらうことが必要ということから、これも一定の条件つきで宗教文化士制度の対象とした。実際のところ、宗教リテラシーはむしろ社会で働くようになってからの方が、より身近な問題となってくる。日常的にさまざまな職種の人、さまざまな信仰を持った人などと接するようになると、宗教問題へのリスクセンシティブな心構えが必要になる局面は否応なく増える。

宗教文化士認定試験が軌道に乗った段階で、中等教育の教員、社会人、さらには宗教について学ぶ機会を持たない大学に通う大学生にも、試験を受けやすくする環境を整えることがCERCの運営委員の間で議論された。そしてe-learning教材を履修して受験資格を得るという方法を取り、2年以上の準備期間を経て2021年から新しい受験方法が付け加わった。これはBコースと名付けられ、従来の大学における関連科目を履修した学生を対象にしていたものはAコースとされた¹⁶⁾。

教育の場における宗教リテラシーの養成では、教わる学生はどのようなリテラシーが必要になり、それをどうやって身につけさせるかを考えていかなければならない。それとともに、もう1つの目標についても具体策を考えていかなければならない。それは教える側の宗教(情報)リテラシーの向上である。日本における宗教教育の現状からすると、実は教員の側に宗教リテラシーが備わっているかどうか、非常に大きな課題となることを感じていた。このような見解を抱くようになったきっかけは、宗教教育プロジェクトで実施した調査経験である。

調査して強く感じたのは、宗教教育を担当する教員の側に、現代の宗教についての基礎知識が非常に乏しいということであった。公立の学校においては、現代の宗教について教えるような科目が少ないので、それに備える態勢をとっている教員が多いとは言い難い¹⁷⁾。宗教系の学校では宗教の授業が週に1時間あるのが一般的であった。前述のように担当教員は自分の学校に関わる宗教については教えるが、自派以外の宗教についての教育はほとんどなされていない場合が大半であった。

大学教員に目を移しても、実はこうした傾向は散見される。激しい変動と多様性の中にある現代宗教について、基礎レベルであっても網羅的に

カバーするのは、おそらくほとんどの大学教員にとってきわめて困難なことである。それゆえ、CERCでは学生に宗教について必要な素養を身につけることを目指すとともに、教員の側にもこのグローバル化と情報化が進行する時代における教育法や研究法を絶えず考えていく機会を提供することも目指している。「授業研究会」という有志の大学教員の集まりによって、相互の研鑽を図っているのがその1つの具体例である。宗教研究に関わる教員はそれぞれの専門分野があり、その分野に関しては深い造詣を有するとともに、独自の研究成果を出そうと努めている。しかし宗教文化教育は、専門の宗教研究者だけを対象にしてなされるものではない。量的に言えば、むしろ研究者ではなく他の職業に就く人、あるいは就いている人の方が多数派である。そうした宗教文化教育に携わる教員は、専門領域の研究以外にも一定程度の目を配る態度を養っておく必要がある。

7. AI時代を前にして

インターネットが普及し、さらにスマートフォンが情報入手の主要な手段となっていく時代に宗教リテラシーの問題を考えていくなれば、踏まえておかなければならないことを、とりわけ認知宗教学の観点から次の3つを指摘したい。1つは記憶の処理がアウトソーシングされることが多くなったこと。2つは情報源の不明な情報を受け取る機会が増加したこと。3つは情報の統合や判断のアウトソーシングがどんどん増える傾向にあることである。それぞれについて簡単に触れる。

- (1) 脳における記憶の処理は、記銘（符号化）、保持（貯蔵）、想起（検索）の3つの段階に分けられる。人々は近代社会において、脳が行なっているこの3つの段階を、それぞれにいわばアウトソーシングすることで、記憶能力を拡大してきた。インターネットが普及する前の「プレ情報時代」においても、メモをとったり、写真に写したり、録音したりするなどして、3つの段階すべてを外部にアウトソーシングしてきた。インターネット時代になると、パソコンが記憶のアウトソーシングにこれまでにない力を発揮し、スマートフォン時代になると、日常

的な記憶のアウトソーシングが一般化した。従来は脳に保持されていた筈の情報、たとえば知人の住所、電話番号などを、すっかりスマートフォンに頼るといった現象も生じてきている。漢字への変換をパソコンがやってくれれば、書けない漢字が増える現象も起こっている。脳は本来的に楽をしようとするところがあるとされるので、アウトソーシングする量が急増すれば、こうした現象も生じる。

- (2) プレ情報時代には、情報源が誰か、あるいはどの組織なのかを、たいてい知り得たし推測が可能であった。マスメディアからなされた発信であれば、主体は明白であった。新聞社、雑誌社、テレビ局単位、あるいはその部局として把握することができた。怪文書のようなものは情報源が不明であるが、それは稀な例である。インターネット時代になると、匿名の発信が増えた。本名を明らかにしなくても電子メールは送れるし、一度に大量の匿名のメールを送信できる。ウェブサイトが発信される情報も、実際に存在する団体のものかどうか分からない場合もある。ウィキペディアも、誰がその項目に関与しているか通常は分からない。生成AIでは、膨大な量の「ビッグデータ」から回答は確率的に生成される。自動応答の仕組みなので、プロンプトで与えた問いへの回答の情報源は誰かを確かめること自体が意味を持たなくなる。
- (3) 大脳皮質の前頭葉が主として担ってきた情報の統合と判断の作業にも、アウトソーシングが進んできている。スマートフォンには自分が主体的に探そうとしたわけではない情報が日常的に表示される。AIがその人向けと判断した情報が、スマートフォンにもたらされる仕組みがあるが、それらに依存することで、判断材料そのものがアウトソーシングされていることになる。ChatGPTにある問題への回答を求めることは、まさに判断のアウトソーシングであり、これがもたらす問題が教育の現場にも押し寄せてきている。

画像生成AIは、テキストから画像を生成する画期的なAIである。入力されたテキストに対応するような画像を膨大な情報量から生成する。同じテキストを入力しても異なった画像を生成する。ChatGPTが同じ問いでも、繰り返すと少し異なった回答をするのと同様である。生成

AIは回答をその都度確率的に選んでくるので、そのような結果になる。アルゴリズムが明確な問いへの回答であると、適切な回答が示される場合が多くなる。しかし稀にとんでもない誤答をする。ChatGPTでの長い回答テキストであると、どこか間違ったところはないのか探すのも大変である。しかし生成画像であると、不自然な画像は見つけやすい。イスラム寺院（モスク）とプロンプト入力したのに仏教寺院が生成されれば、おかしいとすぐ分かる。ただし、おかしさを瞬時に判断できるのはイスラム寺院の基礎知識がある人に限られる。モスクを知らない人が必要あってモスクの画像を生成させたつもりで仏教寺院を使ったとすれば、大きな間違いを犯してしまう。

この例で端的に示せるように、生成AIの回答の間違いに気付くには、それぞれの分野の基本的知識が不可欠になる。逆に自分の専門分野以外における生成AIの回答を真に受けることは、ときに大きな間違いを犯すリスクがある。現代日本においては、異なった価値観に基づく多様な宗教が存在する。宗教的偏見、フォビア、差別などの言説もネット上には氾濫している。SNSがその拡散を助長することも多い。さらにネット上には根拠の乏しい宗教論が満ち溢れている。それゆえ生成AIに現代宗教に関する情報の判断をアウトソーシングすることには大きな危うさが伴う。

宗教文化教育において、リスクセンシティブな課題は、現代宗教を対象にした場合は、カルト問題、イスラムフォビア、宗教対立、宗教的差別、宗教ごとの戒律への無知など多々存在する。生成AIの使用が広がっていけば、専門知の逆転現象はいつそう進行する可能性が高い。一人の教員がカバーできる範囲は限られているが、そのことが今まで以上に露わにされる。またロボットの開発に当たって問題となったフレーム問題は、生成AIにも同様に生じる¹⁸⁾。ある問題に対処する際に考慮しておくべき環境条件は無数にあるからである。宗教教育に際して、個別の事例に即してどのような前提条件を考慮しなければならないかに際して、もっとも必要になってくるのは現代宗教についての基礎知識である。

ただこの基礎知識を豊かにすることは、これまで述べてきたことで明

らかなように、個々の教員にとってはきわめて困難な課題である。それゆえ、教員側で適切なネットワーク形成に努めることで、弱点を補っていくしかない。そこでは宗教リテラシーのための基礎知識が何であるかについての試行錯誤が続くことになる。この点は実は CERC が当初から目指していたことの1つである。この必要性が AI 時代には急速に高まってくると考えられる。

8. むすび——今後の展望

MIT-IBM のデビット・コックス (David D. Cox) は、AI 研究では著名であるが、生成 AI のトレンドに関して、次のように指摘している。これは AI 時代における宗教研究者のネットワーク形成を考える上でも参考になる。

“When you want specific advice, it may be better to ask a domain expert for help rather than trying to find the single smartest person you know,”¹⁹⁾

つまり、特定のアドバイスが必要な場合には、単に知っている最も賢い人を探すよりも、領域の専門家に助けを求めた方が良い場合もあるという指摘である。この指摘は、専門分野の研究者のネットワークは、その専門領域に蓄積されたビッグデータに基づく AI の判断よりも、信頼度の高い情報を提供しようと適用できることに通じると考える。

宗教リテラシーの養成には、宗教研究の専門家たちの考察に基づいた具体的アドバイスが求められる。そのアドバイスを基礎的な知識を一定程度身につけた専門家集団のネットワークが担うことは、本格的な AI 時代になっても欠かせない。現代社会における宗教の活動形態が複雑性を増す一方で、人間が抱える宗教的な悩み、宗教から生じる葛藤、宗教的な解決といったものの大半には共通性が存在する。表面上の多様化とはうらはらに、根本的問題の性質は持続している。この点も基本的知識を必要とする理由になる。リスクセンシティブな観点からすると、専門的な知識を深めることと同時に、身の回りに見聞きする宗教や宗教文化のごく基礎的なことについて、より正確な知識を得ることが欠かせない。

CERCでの教員間のネットワークに基づく研鑽といった試みが増えることが、宗教リテラシーを高める上ではきわめて有効と考える。ただし、そのようにして形成されるネットワークによって導かれる方向性も、なんらかの偏りを持つことは避けがたい。その偏りはどうして生じるのか。どのような偏りなのか。偏りを克服する方法はあるのか。認知宗教学的観点に立つと、人間が無意識のうちに抱いてしまうバイアスからも目を背けるべきではない。理性的、論理的な議論だけでは解決できない感情の問題についてどう扱うかの議論も控えている。宗教リテラシーを構築する具体的方法を模索していく上では、宗教文化の特徴や現代社会の状況を踏まえるだけでなく、人間の意識や感情、文化の形態の進化論的な理解、脳神経科学的な理解も考慮せざるを得なくなってくる。

この点については、ここでは立ち入る余裕がない。ただ、こうした問題と向かい合う時の手がかりとしては、2010年代以降に注目されるようになったいくつかの研究が非常な参考になることだけは述べておきたい。というのも、人間の知覚や認知が対象を正確には捉えられない、さらには正確に捉えようとしてはいないなどと論じる研究が次々と出されているからである。たとえば英国の神経科学者カール・フリストン (Karl J. Friston) が提起している自由エネルギー原理 (FEP: Free Energy Principle) であり²⁰⁾、ヤコブ・ホーヴィ (Jakob Hohwy) の「予測する心」が議論している予測誤差の最小化といった視点である²¹⁾。またドナルド・ホフマン (Donald Hoffman) が提唱する FBT、すなわち世界はありのままに見ることができないとする「適応は真実に勝る」 (Fitness-Beats-Truth) の定理である²²⁾。これらは人間が対象を認識する際の限界や、解消しえない誤差などについて触れている。人間は対象を正確に知覚できないというだけでなく、そもそも脳は正確に知覚しようとしているわけではないとするのはホフマンの主張である。宗教リテラシーのようにすべての人の知的営みを念頭においた議論においては、その射程の限界についても意識しなければならない。上記のような最近の研究についても検討が必要となる。非常に重い課題であるので、これについては別の機会に論じることにしたい。

注

- 1) 宗教文化教育推進センターの設立式は、2011年1月9日に國學院大學常磐松ホールで開催され、土屋博・北海道大学名誉教授が初代センター長として挨拶した。
- 2) 1990年代の宗教教育のプロジェクトで、北海道から沖縄まで40校ほどの宗教系中学校と高等学校を訪れて宗教担当の教員や生徒たちに面談を実施したが、それによりこの点が実感された。
- 3) このとき起こった議論については拙論「オウム真理教事件を契機に創発した議論の展開—深まらない分析の背景にあるもの—」『ラク便り』79号、2018年で詳しく述べた。
- 4) 拙論「現代宗教を考える④九五年ショック」『寺門興隆』65、2004年。
- 5) この点については拙著「学生の宗教意識は20年間でどう変わったか—グローバル化と情報化が進行する時代に観察されたこと—」井上順孝編集責任『学生宗教意識調査総合分析(1995年度～2015年度)』國學院大學日本文化研究所、2018年を参照。
- 6) 日韓比較に関しては、科研費による研究成果として刊行された『宗教教育の日韓比較』國學院大學、2002年、『高等教育における宗教の扱いに関する日韓比較』國學院大學、2004年を参照。いずれも研究代表者は筆者。
- 7) 1990年代後半の韓国の新宗教とサイビ宗教問題については、李和珍「韓国新宗教研究の最近の動向—機関誌『新宗教研究』の内容から—」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』2、2008年を参照。
- 8) 2003年2月6日に放送されたNHK番組「視点・論点」で「宗教文化教育を」というテーマで話した。この番組においても、教師と生徒が共に宗教文化を学ぶ時代になったことを指摘した。
- 9) この調査は、科研費・基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化をはかるシステム構築」(研究代表者・星野英紀大正大学教授)による研究の一環として行なわれた。調査結果は、『宗教文化教育に関する学生の宗教意識調査報告書』大正大学、國學院大學、大阪国際大学、神戸大学、2009年としてまとめられた。
- 10) 当時、筆者は日本宗教連盟の理事をしていたので、中央教育審議会が実施したヒアリングに出席し、宗教文化教育なら公立学校でも可能である旨の意見を述べた。
- 11) 第2項は「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。」とあった。「宗教教育」の部分が「宗派教育」に変えられる可能性が一部で予想されていた。
- 12) 井上順孝『グローバル化時代の宗教文化教育』弘文堂、2020年の第4章「宗教教育から宗教文化教育へ」を参照。
- 13) リスクセンシティブという表現を用いるようになったのは、宗教文化教育の具体的方

法を考える研究会を行なっていたときに、ある企業関係者から、私が目指す発想は、企業で言えば、リスクセンシティブな視点というのに近いと指摘されたことがきっかけである。これに関連して、企業の宗教情報リテラシーについての調査も実施した。その結果については、井上順孝編『インターネット時代における宗教情報リテラシーに関する研究（平成21年度特別推進研究助成金研究成果報告書）』2010年を参照。

- 14) 生死に関わる事柄さえ、このようなフェイク記事を簡単に記載することができる。筆者自身についての事項がウィキペディアに登場したのを見つけたとき、生年が3年ほど違っているのに気付いた。実際より若い記述になっていた。いつ訂正されるのか関心を抱いたのでときどきチェックしていたが、数か月経過してから誰かが正しく書き換えていた。こうした基本的な誤りを日常茶飯のものとしながらも、ウィキペディアは広まっていたのである。
- 15) 専門知の逆転現象については、拙著『若者と現代宗教—失われた座標軸』筑摩書房、1999年の第II章で触れた。
- 16) 詳しくは宗教文化教育推進センターのホームページ（URLは<https://www.cerc.jp/index.html>）を参照。また新型コロナウイルス感染症の広がりでも対面での受験が困難になったのを機に、2020年から試験方法をオンラインにしたので、住んでいる地域によって生じる受験のハンディキャップをなくすこともできた。
- 17) ただ地理の教科書では、現代宗教についての記述も一定程度あった。
- 18) フレーム問題とは、「限られた処理能力しかない人工知能は、現実に起こりうる問題すべてに対処することができない問題」とされている。ロボット、そして人工知能は与えられた条件でしか回答を探さない。しかし人間は指示されなくても当然のこととして了解すべき前提条件があればそれを使う。
- 19) デビット・コックスの見解の紹介については、次のURLを参照。<https://research.ibm.com/blog/what-is-generative-AI>（2023年9月確認）。
- 20) 乾敏郎・阪口豊『脳の大統一理論 自由エネルギー原理とはなにか』岩波書店、2020年を参照。
- 21) ヤコブ・ホーヴィ『予測する心』佐藤亮司他訳、勁草書房、2021年（原著 Jakob Hohwy, *The Predictive Mind*, Oxford University Press, 2013）を参照。
- 22) ドナルド・ホフマン『世界はありのままに見ることができない—なぜ進化は私たちを真実から遠ざけたのか』高橋洋訳、青土社、2020年（原著 Donald Hoffman, *The Case Against Reality: Why Evolution Hid the Truth From Our Eyes*, W. W. Norton & Company, 2019）を参照。

特集 試される宗教リテラシー

不思議探究としての 「ファンタジー」のリアリティ

—子どもの物語の理解による宗教リテラシー—

大澤千恵子¹

本論は、子ども向けの空想的な物語としての「ファンタジー」において涵養される、宗教リテラシーについて考察を行う。「ファンタジー」は、近代西欧で誕生した児童文学に関連付けられるものだが、その出発点であるアンデルセン童話の特徴に着目する。複数の位相を持つ物語構造における命の不思議への探究や、読み手に生じるリアリティへの理解による宗教リテラシーについて論じていく。

¹ おおさわちえこ：東京学芸大学准教授

1. はじめに

現代の子どもたちは、マンガ、アニメ、映画、ゲーム等、様々な媒体を通していわゆる「ファンタジー」と呼ばれる空想的な物語に親しんでいる。それらには宗教的なテーマが含まれていることも多いが、個々の作品というよりも領域それ自体の特質に関わるものだ。児童文学研究者の神宮輝夫は、「宗教が神とよび絶対者と呼ぶもの、別の言葉でいえばふしぎの根源、宇宙の意味の探究はファンタジーそのもの」¹⁾だという。つまり、子どもたちは日頃から特に宗教と意識することなく宗教的なものに濃厚に接しているとさえいえるが、学校教育の国語科において学ぶ宮沢賢治の童話もその一つである²⁾。それらの物語の創作はもちろん受容にも、現実を超える想像力の働きが不可欠である。子どもたちは、日常の様々な場面で、想像力を働かせて現実とは異なる物語世界を受容すると同時に、宗教的なものにも触れる機会をもっているのである。

問題は、大多数の大人たちにそのような認識がほとんどないということだろう。近代においては、同じ虚構であっても写実的な小説が主流を占め、空想的な物語は常識的な大人の世界からは締め出されて、20世紀末頃まで重要視されてこなかった³⁾。子どもが楽しむようなたわいもない物語は、大人にとってさえ難解で、深遠な宗教とは無縁なものだと長い間みなされてきたのだ。だが、実際は、子どもを読者の対象として近代に誕生⁴⁾した児童文学は、当初から空想的な物語領域の中で、宗教的なものを含みこんでいたのである。

児童文学は、「主としておとなが、主として子どものために書いた文学作品」⁵⁾だが、「おとなの小説とのちがいはその幻想性によって区別されている」⁶⁾とされる。すなわち、妖精が登場したり、魔法が使えたりするような空想的物語と子どもたちの学校や家庭生活を描いた写実的物語群が二本柱となって発展したのである。児童文学の領域では、前者はファンタスティックな作風で現実とは異なる別世界が描かれた「ファンタジー」⁷⁾、後者はリアリストティックな作風で子どもたちの日常や冒険などが描かれた「リアリズム」⁸⁾と呼称される。

現代まで連なる児童文学「ファンタジー」の嚆矢となったのは、デンマークの童話作家アンデルセン (Andersen, H・C, 1805-1875) で、子どもと空想性が結びついた彼の作品には、近代において大人の世界からはみ出したり、不要とされたりしたものが流れ込んでいた。それらの中には、古来宗教において重要な役割を果たしていた、現実を超えた別世界を構築する想像力も含まれていたのである。アンデルセンは、「子どもの架空の世界にはいろいろな能力を動員して、そこに自分の哲学をもちあげ、子どもとともに遊ぶことができる大人である」⁹⁾作家として名前がまっ先に挙がる¹⁰⁾ことからわかるように、後の児童文学ファンタジーを方向付ける道を拓いたのである。

したがって、アンデルセン童話を通して、「ファンタジー」が宗教と深い関わりをもつことが理解できれば、大人の宗教理解をも深めることが可能になる。そして、「ファンタジー」に含まれる宗教性の詳細が明らかになれば、想像力と子どもの側面から理解することができ、宗教リテラシーを養ううえで大いに力となることだろう。

そこで、この稿では、「ファンタジー」が含みもつ宗教性について考察していくが、宗教リテラシーにおいて重要なのは、アンデルセン童話が、それまでとは異なる形で死後の生を描いたということだ。最初の創作童話「小さいイーダちゃんの花 Den lille Idas blomster」からすでにその特徴が見られ、著名な代表作「マッチ売りの少女 Den lille pige med solvstikkerne」や、「小さい人魚姫 Den lille havfrue」(本稿で引用するアンデルセン童話本文は、すべて大畑末吉訳『完訳 アンデルセン童話集』、岩波書店、1981年に依拠する)は、題名に「小さい lille」が入っていることからわかるように、子どもの視点からの生命の謎にかかわる問題が、時間や空間を超越した「ファンタジー」として語られている。そのことは、近代以前の口承の昔話(デンマーク語では eventyr)の他界観を継承していたともいえるが、アンデルセンは、それらに近代的な合理性と独自の想像力や神観念を織り交ぜながら、子どもたちに語りかけるような形で、魅力的に描いたのである。これらに通底している子ども特有の視点や考え方は、宗教の始原的なものに通じている。そこから

生み出される「ファンタジー」への理解を通じた宗教リテラシーの可能性について考察していく。

2. アンデルセン童話にみる子どもの論理

アンデルセンは、近代児童文学において「ファンタジー」の様式をいち早く確立し、他に類を見ないことから、「童話の王」¹¹⁾と呼ばれる。1835年に『子どものために語られたおとぎ話集 *Eventyr, fortalte for Børn*』を出版したが、自伝で「私はじっさいに子供を集めて話してやったとおり、そっくりそのまま紙に書いた」¹²⁾と述べているように、タイトルの字義通り子どもに語り聞かせた物語なのである。したがって、子どものための物語であることから、日本語の『アンデルセン童話集』という訳語は適切であるといえる。この童話集に、デンマーク民話の再話¹³⁾に混じって、オリジナルの創作童話「小さいイーダちゃんの花」が入っていたことは、「ファンタジー」の誕生におけるエポック・メイキングな出来事であった。なぜなら、フランスのシャルル・ペロー (Perrault, C, 1628–1703) や、ドイツのグリム兄弟、ヤーコプ・グリム (Jacob Grimm, 1785–1863)、ヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm, 1786–1859) によって再話された妖精物語・メルヘンと似た形式をとりながらも、個人の作家が創作したりテラリイ・フェアリー・テイルズ¹⁴⁾となっていたからである。一般的には、それぞれペロー童話、グリム童話、アンデルセン童話と同一に表記されるが、研究上は、物語の構造や内容が異なっていることから前の二つとアンデルセン童話は区別される。先述の神宮によれば、アンデルセンは、「昔話が与えた話の型を十分につかい、作者の思想をテーマにする、子どものための文学を生み出した」が、その最大の功績は、「子どものための文学が、人間の精神の生み出す最高のものを含みうること、そして、子どもがそれを正しく理解しうることを、人びとにさとらせたこと」¹⁵⁾であるとしている。本稿で論じる宗教リテラシーも、その点に依拠している。

2-1 命のつながりの核を見いだした幻想的再生 ～「小さいイーダちゃんの花」

「小さいイーダちゃんの花」は、いわゆる昔話とは異なり、主人公はどこにでもいる一般的な女の子で、時代も現代に通じる普通の世界である。その中で仲よしのお兄さんに「なぜ、わたしの花たちがしおれているの」と問う場面から物語は始まる。幼いイーダちゃんは、昨日まであんなに元気だった花たちが今日はこんなにぐったりして死にかけていることが心配で、お兄さんに尋ねたのである。この、花が死にかけている、という問いは幼い子どもの見方から発せられるアニミズム的なものである。しかし、花を通して、生きとし生けるものすべての生命はいつか必ず死を迎えるという生命の謎に対する素朴な疑問であるともいえ、神話の時代から人間が問い続けてきた原初的な主題といっても過言ではない。

あらすじについて述べよう。問いかけられたお兄さんは、花たちが人間の見ていないところで舞踏会を開いていて踊りつかれたのだと説明する。イーダちゃんは小さいながらも近代的な合理精神をもって「花はダンスをしない」ことを知っているのだが、色とりどりの花々が、よい香りを振りまきながらダンスをする魅惑的なイメージに次第に惹きつけられていく。イーダちゃんは花たちが元気になるようにと人形のベッドに寝かせ、「ほんとうに花が集まってダンスをしていたら素敵だな、見てみたいな」と思いながら床に就く。夜中に物音がして目を覚ますと、花たちが集まってダンスをしている様子を垣間見るといふ物語である。

この物語について、戦後に活躍した児童文学の作家であり、研究者でもある関英雄は、「子どもの自由な想像力の世界、子どもに特有の物の感じ方、子どもの内面を、子どものがわに立って、子どものために選ばれたことばで、これだけみごとに表現した文学作品は、それ以前にはなかった」¹⁶⁾と、高く評価している。要するに、子どもの視点から発せられた生命の謎に対する疑問に対して、大人であるアンデルセンは夢の中の幻想的な出来事として「ファンタジー」を構築することで答えているのである。実際、アンデルセンが現実の子どもの見方に寄り添っていた

ことは、童話に付けた自註¹⁷⁾からもわかる。この物語は、親交のあった詩人の幼い娘とのやりとりから着想されたものなのである。そのうえで、子どもの論理に基づいて、幼い子どもが納得し、満足する応答をしているといえる。

子どもの論理が特に際立っているのは、夜中に、イーダちゃんが自分の花たちのダンス・パーティーを垣間見ている場面である。イーダちゃんの花たちが、ベッドを貸してくれた人形にその御礼を言いながら、「明日には死んでしまうから、お庭に埋めてね、来年の夏またきっときれいに咲くから」とあたかも遺言のように伝えているのだ。イーダちゃんは、その願いを聞き入れ、翌朝いとこたちと一緒に花たちのお葬式をして丁寧に埋葬する。物語はそこで終わるのだが、物語内の論理に従った場合、翌夏にイーダちゃんが「私の花たちがまたきれいに咲いている」と考えるのは当然の帰結ということになる。

実は、このような子どもの論理を見いだす作家の姿勢には、西欧と日本では違いがあった。西欧では既述の子どもの論理に立って児童文学ファンタジーが描かれたのに対して、日本では、後に童心主義として批判されるように、大人から見た子どもの世界や、その愛らしさを基盤とした感傷的なものが優勢であった。近代日本の童話発展の基礎をつくった『赤い鳥』運動で知られる鈴木三重吉の子ども観を見ると、そのことがよくわかる。安藤美紀夫は、「ヨーロッパ世界では、…子どもの論理の発見が、児童文学を支え発展させてきた」¹⁸⁾のに対して、三重吉が子どもの論理にきわめて鈍感であったと述べる。その事例として、『赤い鳥』昭和7年2月号の「事実小話」¹⁹⁾という読者からの小さな投稿欄をあげ、以下のように断じている。

日本でも子どもの論理は、少なくとも子どもたちの中では明確に生きていた…にもかかわらず、この欄の存在は、目次にさえのせられていない…。チュコフスキーが宝石のように大事にしたものを、三重吉は、…流れるままに流してしまった…そこに、三重吉の鈍感を大きく包む当時の平均的な日本のおとなの子ども観をのぞき見

ることができる²⁰⁾。

つまり、子どもの論理自体は洋の東西にかかわらず常にみられるものなのだが、それを発見できる大人の存在があってはじめて「ファンタジー」は生まれ得るといえる。アンデルセンは、夏のデンマークという同じ空間に、時間軸を超えて咲いている花のつながりを見出す子どもの論理を発見して、夢の世界という形で「ファンタジー」を構築したのである。神宮は、「ファンタジー」は「ふしぎの根源をたずねる」精神的アプローチであるとする。神宮の言葉を借りれば「小さいイーダちゃんの花」における探究は、「人間の位置を定め、生命の存在の条件を知らせ、生命のもっとも充足したはじめとおわりの獲得のしかたを教えてくれる」²¹⁾のものであるといえよう。しかもそのことは、小さな子どもにとっての真実にほかならない。関が「児童の心情を内部から掴みうる文学者が、代弁者として、児童にかわって児童の真実を表現したもので…ここに、発生に絡む児童文学の本質的な性格の一つがある。アンデルセン童話はそういうものだ」²²⁾と述べるように、真理の探究と子どもの論理が重ね合わさったところに「ファンタジー」の本質がある。

2-2 誰でも行ける天国と「ほんとう」の救済～「マッチ売りの少女」

その後もアンデルセンは童話集を出版し続け、生涯にわたって157編²³⁾の童話を発表した。その中には、生命の謎に対して子どもたちが納得できる一つの答えとして、現実の死とそれを超克する別世界が多数描かれている。短編の代表作「マッチ売りの少女」もその一つである。貧しい少女はマッチが売れないと父親にぶたれるため家に帰ることができない。寒さのあまり少女は売り物のマッチを擦ると、その炎の中に次々とストーブやごちそう、亡き祖母などが浮かび上がる。最後のマッチの束のひときわ大きな炎とともに、女の子はおばあさんに抱かれて天の世界、すなわち神の御許に上っていくが、翌朝街角の隅に亡骸が発見される。最後の場面では街の人々が現実における少女の死を哀れに思っているのに対して、語り手は少女がおばあさんとともに寒いこともおなか

のすくこともない世界へ行ったことを誰も知らないのだと言う。

そうした語りが共感を呼ぶのは、物語の中で現実時空におけるマッチの擦過と、炎の中に浮かび上がる幻想が繰り返されたからにはほかならない。この物語の最も魅力的な場面はマッチの炎のなかの幻想であり、最終的に少女が天に上ったことが信じられなければ、そもそもそれらの幻想が語られること自体が意味をなさなくなる。したがって、読み手は、少女が大好きなおばあさんと一緒に天に上ったという語り手に賛同せざるを得ないのである。ただし、それは現実の死を否定するものではないことはいうまでもない。

物語世界の現実のなかで、少女が救われなかったことに対してキリスト者の目線からは批判的な声もある。日本基督教団と関係が深かった児童文学作家の大海は、この物語について「現状を変革する力」に乏しく、「悲惨は忘れられ、ファンタジーのみがふくらみつづけている」²⁴⁾と否定的な見解を示す。その天国は、「ifでしかなかった」のであり、「キリスト者にとって、天国はifではない。ファンタジーではない。それは実在する」と、大海は述べる。そして、「少女を救うものももしあったとすれば、…あのようなファンタジーではなく、「だれかが主イエス・キリストを着て、少女に手をさしのべることであった」²⁵⁾とする。要するに、少女の現実世界において、同じ世界を生きている人間がキリストの「御使い」として現れて、辛く苦しい状況から助け出すことが真の救済であると考えられているのである。

大海は、幻想としての空想性を否定し、キリスト教的奇跡としての救済にこそ宗教的リアリティがあると捉えていることは明白である。たしかに、現実を改善し変革しようとする意思は重要である。しかしながら、19世紀初頭の社会状況における貧困層の救済においては、どちらにリアリティがあって、どちらがより虚構的かは即断できない。貧しい環境の中でだれにも看取られることなく死んでいった少女がせめて天国へ行ってほしいという願いや祈りは、大海のいうような否定すべき「ファンタジー」だとはいえない。むしろ厳しい現実の前にどうすることもできない無力な人間の切実なリアリティがそこには横たわっている

といえるからである。

さらに言えば、大海のいう実在する天国はキリスト者でなければいくことのできない場所という制限がある。大海は、キリスト者ではない少女は、「もしも天国へ行けたら……」のみでほんとうに天国へは行けなかった²⁶⁾としているが、この「ほんとう」の語が指すものは宗教リテラシーにおいてとりわけ重要である。アンデルセンの思想の根幹には、誰でも行くことのできる天国とすべてを救済する神の観念があり、それが子どもの論理と結びついて生まれた「ファンタジー」のリアリティを問うものだからである。花やキリスト者ではない少女が再生される世界を「ほんとう」ではないとするのは、現実をたった一つの至高のものとして肥大化させた大人の論理である。だが、子どもの論理においては、それこそが「ほんとう」としての確信なのである。

ここで着目したいのは、子どもの論理に基づく「ファンタジー」内の確信は、死への欲求よりも生の豊かさにつながっているということだ。複数の位相を持つ「ファンタジー」だからこそ、死後の別世界における再生が豊かな生のイメージとのつながりを持ちうるのであり、子どもたちが、虚構としてこうした物語を読むことは重要である。なぜなら、頭の中で別世界が開かれることは、目の前のたった一つ時空がすべてである、という現実の閉塞感を打ち破る突破口となると考えられるからである。命のつながりや、死後の生としての天国を思い描くことで、花や少女の死で終わる短く狭い現実時空を超えて、永遠あるいは無限に多重化した生の可能性がひらかれるのである。

「小さいイーダちゃんの花」では花の転生が、「マッチ売りの少女」では少女が天国に行ったことが信じられている。前者は、時間軸の移動の中で、来夏に咲いた花の中に継承されている命の核を見いだす子どもの論理があり、後者は、現実には死んだけれども、今は寒いこともおなかのすくこともない別世界で幸せに過ごしているに違いないという子どもの確信にもとづいている。いずれも大人の合理的な論理や理解からは外れているが、子どもの論理に寄り添って想像力を働かせた著者によって表象された空想世界では、「ほんとう」のことなのである。

3. 童話「小さい人魚姫」の多重構造とその完結性

前章で述べた移動は、それぞれ時間または空間の一方だけの移動であった。比較的長編の創作童話「小さい人魚姫」は、オリジナル作品ではあるものの、伝承の人魚伝説から素材を借りてきているため、時間と空間の双方の超越がみられる。この物語にはとくに、伝承の物語のもつ前近代的で原初的な想像力との架橋がある。

アンデルセンの「小さい人魚姫」について具体的にみていこう。今なお人気を博す「小さい人魚姫」には、古来の伝承の物語²⁷⁾の要素が巧みに盛り込まれている。人魚は、ヨーロッパに限らず、水際に生活圏があつたり、水上の文化を形成したりした共同体では水の精霊の伝承は非常にポピュラーで、セイレーンや、ウンディーネなど様々な呼び名で古くから親しまれてきた超自然的存在である。島々や半島から成るデンマークの昔話にも人魚の男 Havmand や人魚の女 Havfrue と人間との異類婚姻譚はみられる。そして、他の多くの話と同様に最終的には人間側が裏切り、破綻する結末を迎える物語となっている。伝承の物語を素材とするとき、オリジナルの創作ではあっても、伝承によって培われた要素は引き継がれていることが少なくない。実際アンデルセン童話の人魚も、寿命が300年であることや、人間と違って「不死の魂」を持たないこと、また人間から愛されると「不死の魂」を授かることができることなどは、人魚伝承から受け継がれているものである。しかし、伝承では婚姻の破綻によってすべてを失った人魚の復讐を受けて人間が害を被ることが一般的なのに対して、アンデルセンの人魚姫は復讐ではなく自己を犠牲にすることを選択しており、典型的なパターンを覆している²⁸⁾。

それだけではない。キリスト教文化圏においては、神の救済の範疇からは外れる、非キリスト教的存在である人魚が「不死の魂」を手に入れる可能性も示唆されている点において画期的であるといえる。アンデルセンの原作が様々に抄訳されたり、アダプテーションされたりして、人魚姫のモチーフだけが有名になっている今日ではあまり知られていないが、海の底に住む人魚姫は、人間の王子への思慕を募らせると同時に、

人間だけが持つ「不死の魂」を希求しているのである。本来、人間のように「不死の魂」を持たない人魚は死んだら海の泡になって消えてしまうため、死後キラキラ輝くお星さまのところへ登っていくことができない²⁹⁾。この点だけ見れば伝承を継承しているのだが、子どもにもイメージできる、豊かな表現による海の底の描写や人魚の視点に立った地上の人間世界への好奇心や憧れは、アンデルセン独自の世界となっている。ここでは、古来の人魚伝承をうまく下敷きにしながら、未知の世界への好奇心や憧憬という子どもの論理に立って、構築された物語世界が顕現している。要するに、死後の不死の魂というキリスト教的言説に、子どもの論理が加わって、小さい人魚姫を通した未知の世界への憧れ、永遠性への希求として表象されているのである。

このように、「不死の魂」問題は、愛よりもむしろ、永遠性の希求という原初性をもっているわけだが、1989年に公開されたディズニー・アニメーション映画「リトル・マーメイド *The Little Mermaid*」(アメリカ)では、製作者側は、人魚姫の興味を王子にのみ絞って、不死の魂には触れなかったことを明かしている。そのことは、偶然にも創業者のウォルト・ディズニーが1940年代に企画した草案と同じであったという³⁰⁾。その企画を挟んで同アニメーション・スタジオが製作した『白雪姫 *Snow White*』(1937年)や「シンデレラ *Cinderella*」(1950年)は、それぞれグリム童話、ペロー童話を原作としたもので、既述のように、アンデルセン童話とは構造や内容的に区別されるものであるが、ほぼ同じテーマに絞られてしまったのである。また、絵本などの日本の子ども向け抄訳版では、海の泡となって終わるものも多い。そこでは、永遠性への希求は無視されて、自己犠牲的な悲恋(ディズニー版は愛の成就)の物語にとどまってしまうのである。こうした現状に鑑みると、大人の製作者や翻訳者たちは、「不死の魂」の問題が、この物語に不可欠な要素であるとは考えていないといっても過言ではないだろう。一見すると、「不死の魂」の問題はこの物語においては重要ではないようにも受け止められる。なぜなら、原作からその要素が削られても、今日まで物語自体が支持されてきたからである。愛の要素、また人魚という古来

の伝承の存在の魅力だけでも十分読み手を惹きつける力があるともいえる。しかし、こうした改変は、物語を地上と海の底の二相に単純化するだけでなく、成就においては、原作で描きだされた無償の愛とは異なるし、海の泡で消えては、人魚の救済も失われてしまうのだ。児童文学研究者の鳥越信は、「要求の充足という点は、児童文学にとって、ことに重要な点だ」³¹⁾とする。児童文学は、「どの作品も必ず、主人公の要求が完全に満たされるまでの過程が書かれて」おり、「中途半端で投げ出されたり、要求がみたされなくて終わるということはまずない」というのである。つまり、子どもの論理は、欲求の充足を求めるものであり、「子どもの独自の心理的欲求から発したことがらであるが、完全な充足感をもって終わることなくしては、とうてい児童文学としては成立しがたい」³²⁾のである。

したがって、「不死の魂」の問題なくしては、「ファンタジー」に繋がるリテラリイ・フェアリー・テイルズだからこそ込められた深い思想や、主人公の心理的欲求の充足を持ちえないことになろう。そのため、アンデルセン童話について神宮が指摘したような「人間の精神の生み出す最高のもの」としての超越的な世界を含むことも、また「子どもがそれを正しく理解しうる」³³⁾ことも希薄化してしまうのである。

原作には、この「不死の魂」への憧憬があったからこそ、人魚姫の悲恋の死で終わらずに、次なる別の世界が立ち現れる。海の底、地上の陸の世界とは異なる、空気の精（空気の娘）の世界が描かれ、人魚姫は地上世界での身体上の死を超えて、そこに転生する。さらに、空気の娘になって人魚の寿命と同じ300年間よいことをすれば不死の魂を得られることが明かされる物語の展開には、空間軸と時間軸の双方の移動が作用していることになる。

王子への愛は成就しなかったけれども、人魚姫は全てを失ったわけではなく、むしろ同じように希求していた不死の魂については、空間軸と時間軸の移動によって手に入れる切符を得ている。そのため、物語は海の底での願望の成就という帰結があり、大団円ではないものの、願望の充足においてはギリギリのところまでハッピーエンドといえなくもない終

わりを迎えているのである。

人魚姫の死は、他者への愛を基盤とした献身であり、再生（復活）も含めて、イエス・キリストのモチーフを踏襲しているし、超越的な神の存在も示唆されてはいる。にもかかわらず、それが宗教的というよりも文学的なのは、奇跡としてではなく「ファンタジー」として語られるからである。それでもなお、愛と永遠を求めて一すじに思いを貫いた人魚姫の死と再生には、非キリスト教的存在という本性を超えた神秘や敬虔がある。

比較児童文学に詳しい原昌は、アンデルセン童話について、「万物に対する平等思想、そして「親指姫」や「ひなぎく」にも見られる小さきものや弱きものへの同情と哀憐という博愛主義的な思想は、その童話のなかに、輝ける宝石のように散りばめられてい」³⁴⁾と述べる。そして、「〈死〉の問題にしましても、神に連なる宗教思想にしばしば結びついていましたし、アンデルセンにとって、それはけっして終焉ではなく、永遠への道でもあったのですし、だからこそ、その色調は明かるい」³⁵⁾のだという。「かれの童話が没後百年経た今日でも、不滅なのは、…かれがかれの心の深部で、人間根源の問題、つまり生と死、善と悪、贖罪と救い、神と信仰、愛と死などといった、人間にとっての永遠の課題に迫っていったところにある」としている。そして、「それが時間によって色褪せないなにかであり、エリオットのいう〈普遍的眞実〉への、作家の追究だった」³⁶⁾というのである。原が死を明るいと感じているのは、子どもの論理に基づいた死後の再生、永遠性への希求があるからであろう。

さらに原は「アンデルセンは、〈死〉を語るとともに、実は謙虚に神を語る」³⁷⁾と指摘する。アンデルセンが物語のなかで死を語る時、別世界での永世も同時に描き出されているが、その世界を司っているのは自身の信仰観に基づいたキリスト教的な神であることが仄めかされている。確かに、その根底には「この世には慈悲深い神がいまして一切をできるだけよいようにとお導きになる」³⁸⁾という、アンデルセンのキリスト教的神観念に基づく救済観がある。ただ、物語中の現実のはっきりし

た世界のなかに神が登場し、救済するわけではない。信仰を深めることを目的とした宗教的物語ではなく、主人公の願望の成就による物語の完結を志向する「ファンタジー」として描いているからこそ、子どもの論理に従ったリアリティ、永遠性への希求としての死と再生が可能となっている。アンデルセン以前や同時代のキリスト教的死生観言説にもとづいた子どものための物語は、当時ベストセラーになったものでも、今日ではほとんど読まれていない。それに対してアンデルセンの作品が没後ほぼ1世紀半経つ今なお読まれ、原のいう「不滅」を感じることができるのは、「ファンタジー」だからであろう。

以上のように見てくると、死と再生が描かれたり、神的なものの表象が示唆されたりする「ファンタジー」の領域では、何か一つの確立された宗教とはいいがたいものの、伝承の物語にみられるような原初的・始原的な永遠への憧憬や願望と子どもの論理がうまく結びついているといえる。だからこそ、そこに作者の宗教的想像力が自由に羽ばたけるような余地が生まれ、信仰の種類や有無を問わず、人間として生きる上で必要な宗教リテラシーにつながり得ると考えられる。だが、そのためには、現実と二項対立ではない「ファンタジー」の認識と、そこから生じるリアリティの感得もまた求められる。

4. 語りが開く「ファンタジー」の読み手のリアリティ

一般的に「ファンタジー」は、現実を超えた虚構性が強いことから、リアリティがないものと受け止められる傾向にある。しかし、「小さい人魚姫」をみると、「ファンタジー」の虚構性が度重なる転生によって深まったことで、かえってリアリティが生じているのである。「マッチ売りの少女」でマッチの炎がみせる幻想が繰り返されたのと同じように、海の底、地上、大気と空間軸の移動による転生が繰り返される中で、すでに読み手の中では固定された現実の地平が崩されている。そのうえで聞く、空気の娘による次の言葉は大きな意味をもっている。

わたしたちはよく、人にみられないで、子供のいる人間の家のなかへ、はいって行くんですよ。…よい子を見つけますと、…神様はわたしたちの、こころみの時を短くしてくださるのです。その子にはわたしたちが、いつ部屋のなかを飛んでいるか、わからないのです。けれども、わたしたちは、うれしさのあまり、ついそういう子にっこりほほえみかけてしまいます。すると、300年のうちから一年へらされるのです³⁹⁾。

これまでの物語のコンテクストから離れて、空気の娘たちと物語中の人間の子どもたちの関係性に話が移っているのである。話の筋とは全く関係のない子どもたちが空気の娘の状況を好転させる役割が語られるこの締めくくりは、アンデルセンの物語を聞いている子どもたちに語りかけている形式だからこそ成立する構成ともいえる。要するに、それまで人魚や王子や空気の娘など、自分たちとは異なる存在の架空のお話だと思って聞いていたところに、物語と直接関係しない普通名詞としての子どもたち、という登場人物とのつながりが明かされたことになる。普通名詞の子どもたちは、聞き手である子どもたち、そして読み手である子どもたちとの同化が容易である。このような物語の構造は、アンデルセン以前の、すなわち、ペローやグリム兄弟の再話には見られない。

同情や共感を情動的にはしたとしても、知覚的には虚構として読んでいたはずの読み手をにわかに物語世界に巻き込み、読み手もまた物語を構成する一部としてその世界を拡大している。というのも、人魚姫の願いを叶えるための試みの時は、人間世界の子どもたち次第で縮めることにも延ばすことにもなるからである。「ファンタジー」の物語構造の中では、現実と空想とが入れ子式に多重化する中で、唯一の現実としての優位性が失われ、固定化された現実あるいは空想という枠組み自体が消滅して無化される。この無化作用によって、物語の超越性が転じて、読み手にむしろリアリティを生じさせることがある。

既述のように、人間が古来魅力と怖れを感じてきたなじみ深い人魚像を継承しながらも、物語中の人魚姫はそこから逸脱している。彼女は辛

いながらも、王子のそばにいられることに喜びを感じ、きっと王子は気づいてくれるに違いないと希望を抱いているが、物語の展開は、人魚にとって理不尽である。聞き手や読み手はそこにもどかしさを感じながらも、物語の外側にいる自分たちはどうすることもできないことを知っている。しかし、終末部の時空を超えた語りによって、読み手はそのやるせなさから解放されることになる。外側の現実をも取り込むかのような、また別の位相があらわれて、読み手の今・ここが物語宇宙を形成する一つの世界の内部に移動し、主人公の願望の成就に作用する可能性が開かれているからである。ほんのわずかではあるものの、物語中の人魚姫を手助けできる新たな位相が開かれるのである。そこに子どもならではの喜びがあり、文学を虚構として読んでいるにもかかわらず、時空を超える語りには導かれるリアリティが生じている。

それまで、あくまでもお話の世界として自分の今・この現実とは切り離して愉しんでいたはずであるが、最後に人魚姫の再生を信じた子どもたちは、自分も「かわいそうな人魚姫」のために何かしてあげられる扉が現われ、自己の現実もまた物語世界を構成する一部となることが示される。ここにおいて、聞き手、読み手の現実も物語の中に取り込まれた新たな位相が現出し、より一層複雑な多重構造となる。現実と虚構あるいは空想の関係性が再構築されて生じた「ファンタジー」のリアリティである。物語を読んだ後の現実の生活のどこかで、心地よい風や花の甘い香りを感じた際、子どもたちが今もどこかに漂っている人魚姫をイメージすることがあるかもしれない。そのとき、子どもの論理においてはそれが現実の証明となり、拡張して読み手である子どもたちの現実にとってのリアリティとなる。

アンデルセンが目前の子どもに物語を語って聞かせたことに、自身も児童文学作家である中川正文は深い感銘を受け、「アンデルセンの文学がそれ以前の児童向け物語との決定的な違いを持つ秘密がわかったような気がした」⁴⁰⁾という。要するに、子どもに語るということ自体が、「ファンタジー」の創作に深く関わっているということである。語り手であるアンデルセンにとって、目前の聞き手である子どもがお話の結

末に満足することは最も優先されるべき事項であろう。そのことが、虚構の「ファンタジー」であるにもかかわらず、子どもにとっての「ほんとう」、すなわち子どもの論理のリアリティを生じさせることにつながっているのである。

以上のように見てくると、国語科教育にも深く関わっている宮沢賢治が近代小説ではなく、童話としての「ファンタジー」を自身の散文創作の場として選んだことは非常に意義深い。多重構造を持つ児童文学「ファンタジー」の世界観と複数の位相を持つ法華経的世界観、また欲求の充足と賢治自身の信仰的希求は、驚くほど自然に重なり合うだけの近似性があるといえるからである。

童話の創作にあたって、その契機にも内容にも賢治自身の法華経信仰が大きく影響していたことは広く知られている。だが、その点についてはこれまで近代文学の枠組みで論じられることが中心で、当時は童話と総称された児童文学の「ファンタジー」であることからの言及は多くはなかった。しかし、「ファンタジー」の多重構造それ自体に、「ふしぎの根源、宇宙の意味の探究」⁴¹⁾があるとすれば、賢治が自身の宗教的世界観を「ファンタジー」としての童話によって描いたことは合点がいく。それだけではない。そうした深遠な思想が物語の中で描かれる時、「子どもが正しく理解しうる」という点が重要なのである。賢治もアンデルセンと同じように自作の童話を語って聞かせており、子どもがその物語世界の良き理解者であることを認識していた。大藤幹夫によれば、賢治は、「大正7年の夏、童話「蜘蛛となめくじと狸」「雙子の星」などを書いて弟妹たちに読み聞かせて」おり、実弟・宮沢清六もその時のことを記憶しているという。また、大藤は、賢治が「童話の批評を求められたとき「こどもらに読んで聞かせてあとでそっと質問して試してごらんになれば」と返事をしている」⁴²⁾ことにも着目している。大人である作者にとって、他者としての子どもの反応は、自らの物語の有効性を確認するうえで重要な意味をもっている。子どもたちは耳で聞いてつまらない話には、すぐに飽きてしまう。逆に、たとえ大人の論理ではよくわからない物語でも、子どもの論理にそって面白ければ、目を輝かせて聞

き入る姿を見せる。その様子は直に語り手が感じ取れるものである。

特に子どもたちは、空想世界のものが、現実を重ねあわされるときにより一層大きな喜びを感じる人が多い。例えば、クリスマスにもらうサンタクロースからのプレゼントが特別な意味をもっているように、「ファンタジー」には子どもの論理としてのリアリティがある。自作を語って聞かせた賢治は、「ファンタジー」の特性や子どもの論理に則っていれば、深遠な思想を物語に込めても子どもたちが理解できることをわかっていたと推察される。賢治は、アンデルセンが拓いた「ファンタジー」を継承し、日本と西欧、前近代的と近代、空想と現実、大人と子どもが融合した独自の物語世界を構築した。

要するに、子どもに語って聞かせた賢治は他の近代文学作家とは異なり、「ファンタジー」の中に独特のリアリティを感じる子どもの論理の重要性に対して自覚的であったといえ、そうした観点から再考される必要がある。ここで一つ一つの賢治童話については紙幅の都合上詳細に述べることはできないが、賢治童話を通した宗教リテラシーは、「ファンタジー」の中に含みこまれる、尽きることのない「ふしぎの根源、宇宙の意味の探究」⁴³⁾ および「人間の精神の生み出す最高のもの」⁴⁴⁾の表象に対する理解であるといえよう。

5. 結語

現代の子どもも大人も触れる機会が多い「ファンタジー」は、宗教的なものに親しむ素材に満ちている。そこには、誕生の当初から、子どもの論理におけるリアリティに寄り添いながら、ファンタスティックに表象された「ふしぎの根源の探究」⁴⁵⁾があった。したがって、単にたまたま宗教を素材に使っているのではなく、死を超えた永世への希求や、大いなる命とのつながりといったテーマが「ファンタジー」の根底にあるということになる。アンデルセンが創始した近代児童文学「ファンタジー」は、的確にそこを捉えたもので、「小さいイーダちゃんの花」、「マッチ売りの少女」、「小さい人魚姫」を読み解いていくと、そのこと

がよく見えてくる。それは原初的な子どもの思考様式に近いもので、かえって大人が見逃してしまうようなものであるがゆえに、それらを正しく理解することは、宗教リテラシーにつながる。

花の命の終わりに大いなる生命のつながりを見出した「小さいイーダちゃんの花」や、現実の悲しい死を超えた天国への祈りが希求された「マッチ売りの少女」には、子どもの論理を理解した大人の作者による生命のはじまりと終わりに対する探究が、小さなもの弱いものへの温かいまなざしによって、幻想的に美しく描き出されている。また、複雑な多重構造を持つ「小さい人魚姫」の原作には、他で削られることの多い「不死の魂」の希求が描かれていた。その物語世界には、身近で魅惑的な超自然的な存在として長い間親しまれてきた人魚という伝承的モチーフと、空気の娘として表される大気のもつ空間を超越する普遍性が見事に合致した入れ子式の多重構造を見いだすことができる。度重なる時空の移動は、人魚姫の壮大な天路歷程ともいえるが、そうした多重構造は現代「ファンタジー」の始まりともいえるリテラリイ・フェアリー・テイルズの特徴であり、不死の魂を得る可能性を手にしたことによる救済は、欲求・願望の充足を好む子どもの論理からくるものであった。永遠性のなかで完結させようとする欲求と願望の充足のなかで、読み手の中に現実を超えた新たなリアリティが立ち上がる「ファンタジー」の様式は、アンデルセン以降、イギリスを中心とした児童文学や日本の賢治童話にもみることができ、時代や地域を超えて継承され続けている。

このような「ファンタジー」の中の超越的な深い思想に裏打ちされた中で獲得される新たなリアリティについての理解をもつことが宗教リテラシーの涵養につながると考えられる。エンターテインメントだけでなく、現実を超えた想像力によって立ち上がる新たなリアリティに着目して現代の学校教育や社会教育が進められていくことができれば、「ファンタジー」を通して宗教リテラシーの育成に大いに貢献することができるだろう。そこまでいかななくても、そもそも「ファンタジー」が宗教的なものを濃厚に宿していることを踏まえて、「ファンタジー」に接していくことができれば、子どもがそれらの受容により理解し獲得してい

る、宗教リテラシーが明らかとなり、大人にとってもそうした宗教リテラシーが再構築され得るといえるだろう。

注

- 1) 神宮輝夫『児童文学の中の子ども』日本放送出版協会、1974年、54頁。
- 2) あまんきみこも、宮沢賢治同様、長く国語教科書に多くの「ファンタジー」が収載されており、作品が帯びる宗教性を見出すことができる。拙稿「あまんきみこ作品における物語の「真実」—「白いぼうし」にみるファンタジーとリアリティの均衡点」東京大学宗教学研究室編『東京大学宗教学研究室年報』第38号、東京大学宗教学研究室、2021年、41-49頁。
- 3) 拙著『見えない世界の物語』講談社、2014年、参照。
- 4) 「児童文学の発生は、まったく近代に属する。西欧では、1835年、アンデルセンの第一童話集が世に出て以後、日本では今世紀に入って明治の末年に小川未明の第一童話集が世に出て以後、「赤い鳥」の文学運動が育ちをはじめからである。」関英雄、「児童文学の本質—おとなと子どもの間にかけた橋—」(『児童心理』第9巻第7号、金子書房、1955年所収。日本児童文学者協会編『現代児童文学論集 2 現代児童文学の出版1955-1964』日本図書センター、2017年、21頁)
- 5) 同前、21頁。
- 6) 古田足日「さよなら未明—日本近代童話の本質—」(古田足日『現代児童文学論』くろしお出版、1959年所収) 同前、252頁。
- 7) 「ファンタジー(あるいはファンタシー)という外来語が、このような特異な文学用語として日本で使われるようになったのは、…『子どもと文学』(石井桃子ほか著、昭和35年、中央公論社)の刊行以後だろうと思う。」佐藤さとる『佐藤さとるファンタジー全集 15 ファンタジーの世界』講談社、2011年、56-57頁。
- 8) 「フィクションではリアリズムの小説が幅を利かせ…大人の世界から追放されたファンタジーは、子どもの本に避難した。そこでファンタジーがとても栄えたので、想像力によるフィクションは「子ども向け」だと考えられるようになった」アーシュラ・K・ル＝グウィン、谷垣暁美訳『いまファンタジーにできること』河出文庫、2022年、41頁。
- 9) 石井桃子・いぬいとみこ・鈴木晋一・瀬田貞二・松居直・渡辺茂男『子どもと文学』中央公論社、1960年、204頁。

- 10) 「アンデルセンは、そのようなことのできる作家でした。また、ルイス・キャロル…もそのような人でした。」同前、204頁。
- 11) 「彼は王である。なぜなら、彼は物語という小さな枠のなかに宇宙のあらゆる舞台を取り入れることができたからである」ポール・アザール、矢崎源九郎・横山正矢訳『本・子ども・大人』紀伊國屋書店、1957年、138頁。
- 12) H・C・アンデルセン、大畑末吉訳『アンデルセン自伝 わが生涯の物語』岩波書店、1981年、280頁。
- 13) 「私自身が子どものころに楽しんだ話であまり知られていないと思うお伽話です。それを徹頭徹尾私が子どもにお話をして聞かせるときの語り口調で書きました。」(1835年2月10日、書簡) 鈴木徹郎「アンデルセンの童話作家としての姿勢」日本児童文芸家協会編『児童文芸 秋季臨時増刊号 児童文学はだれのものか』日本児童文芸家協会、1981年、58頁。
- 14) 神宮輝夫は「昔話(メルヘンとかフェアリー・テイルズなど)と、アンデルセンやオスカー・ワイルドなどの個人によってつくられたメルヘン、あるいはリテラリイ・フェアリー・テイルズ」を区別している。神宮輝夫『童話への招待』日本放送出版協会、1970年、149頁。
- 15) 同前、40頁。
- 16) 関、1955、2017年、23頁。
- 17) 1863年の自註で「詩人ティーレの家で、幼いお嬢さんのイーダちゃんに植物園の花のお話をして聞かせた際にできたもので、そのときこの子が言った二、三の言葉を覚えておいて、あとでこの童話をかいたときに中に入れた」と述べている。H・C・アンデルセン『『童話と物語』のための自註』日本児童文学学会編『アンデルセン研究』小峰書店、1967年、336頁。
- 18) 安藤美紀夫「作者にとって児童文学とは何か」猪熊葉子・安藤美紀夫『児童文学とは何か』明治書院、1974年、94頁。
- 19) 「或うちの、四つになる女の子に、「あなた東京へいつたことがある？」とき、ましたら、「ある。」とこたへました。「いつ?」「あたしの大きいとき。」(宮城、中村勝彦)／母「母さんの子どものときに、こんなに大きな電がふつたことがあつたわ。」子ども動物のヒヨウとまちがへて「それではお母さん今に象がふつて来たら、どうしませう。」(神奈川、岩波末)／僕の弟が、お医者さんが来て聴診器をあてられたのを見て「お医者さんの電話はおなかからきこえるの?」と言ひました。(高崎、松本文男)／私の妹は今年7つです。一昨日仮名の「へ」の字をおしへましたところ、今日、新聞の広告を見て、首をひねつて笑つてゐます。「どうしたの。」とき、ますと「でも兄さん、への字が立つてゐるわ。」と言つて指さすのを見ますと「く」の字でした。(福岡、大山

- 義夫) / 私の弟は、チヨンマゲのことをチヨンガメと申します。(逸名) 鈴木三重吉編『赤い鳥』昭和7年2月号、赤い鳥社、1932年、39頁。
- 20) 同前、95頁。
 - 21) 神宮、1974年、54頁。
 - 22) 関、1955、2017年、22頁。
 - 23) アンデルセンの著作は多数あるが、自身が「童話」として出版したものは156編であった。2012年に原稿が発見された“Tællelyset” (獣脂ろうそく) は、初期のアンデルセン童話であることが正式に認められたため、現在は157編ある。
 - 24) 大海赫「キリスト者とマッチ売りの少女」日本児童文芸家協会編、1981年、101頁。
 - 25) 同前、100頁。
 - 26) 同前、101頁。
 - 27) 「海底深く人魚族が住み、地中には沼女のぶきみな醸造所や地獄の前庭がある。天は神や天使の国で、寒々とした空間ではない。これはデンマークの自然景観から生まれた民間信仰の描く、民話伝説の地図と同じである。」鈴木徹郎「アンデルセンのメルヘンの世界の魔法」日本児童文芸家協会編『児童文芸 春季臨時増刊号 現代のメルヘン 魔法とSF』日本児童文芸家協会、1979年、27頁。
 - 28) 人魚姫の「愛」の問題については、献身と自己犠牲の違いから拙著『〈児童文学ファンタジー〉の星図』(学芸大学出版会、2019年)で詳しく考察している。
 - 29) 原作では、長老的存在である人魚姫のおばあさまによって「わたしたちには、不死の魂というものが無いのです。…ところが、人間には、魂というものがあって、肉体が死んで土になったあとでも、それはいつまでも生きています。そして、澄んだ大気の中を、キラキラ光っているお星様のところまでのぼって行くのです」(135頁)と説明されている。
 - 30) 『リトル・マーメイド PLATINUM EDITION』(2006年) DVD所収の映像特典「製作の舞台裏」の「アンデルセンの原作から映画へ」における共同脚本・共同監督のジョン・マスカーはインタビューで、「不死の魂」については触れない選択をしたことを明かしている。
 - 31) 鳥越信『新編 児童文学への招待』風濤社、1976年、54頁。
 - 32) 同前、54-55頁。
 - 33) 神宮、1970年、40頁。
 - 34) 原昌「神と愛と死と アンデルセンの創作童話をめぐっての覚書」日本児童文芸家協会編『児童文芸 作家論 アンデルセン 1974年9月号』、日本児童文芸家協会、1974年、11頁。
 - 35) 同前、11頁。

- 36) 同前、13頁。
- 37) 同前、11頁。
- 38) アンデルセン、大畑訳、1981年、3頁。
- 39) H・C・アンデルセン、大畑末吉訳『完訳アンデルセン童話集 3』岩波書店、1984年、156頁。
- 40) 中川正文「児童文学とはなにか」中川正文編『児童文学を学ぶ人のために』世界思想社、1977年、13頁。
- 41) 神宮、1974年、55頁。
- 42) 同前、中川編、186頁。
- 43) 神宮、1974年、55頁。
- 44) 神宮、1970年、40頁。
- 45) 神宮、1974年、55頁。

特集 試される宗教リテラシー

イスラム教の知識を学ぶ授業を通して 宗教リテラシーを身につける

—宗教について深い理解を持った人材育成—

中嶋（川瀬）寧々¹

宗教に対し誤解がないよう、人々は宗教リテラシーを身につける必要がある。「宗教について深い理解を持った人材」を増やすためにどのような授業が必要か検討し、授業を実施した。生徒の感想を分析しながらその成果について考察していく。

¹ なかじまねね：国府台女子学院講師

1. 2023年——宗教問題と必要なこと

古代から宗教は存在しているが、宗教を取り巻く文化は日々変化している。また、宗教についての問題も日々起きている。私は「宗教リテラシーを身につける授業の開発—宗教知識を活用する場面を想定したマンガ教材—¹⁾という、宗教リテラシーを身につけるための授業研究論文を2019年に執筆した。それから4年の月日が経つが、その間、誰もが想像もしなかったような事件が起きた。安倍晋三・元首相の殺害事件である。「捜査関係者によりますと、山上被告は捜査段階の調べに対し、母親が多額の献金をしていた「世界平和統一家庭連合」、旧統一教会に恨みを募らせた末、事件を起こしたなどと供述したということです。²⁾とNHKのニュース記事でも報じられており、旧統一教会の活動が事件の動機に関与している可能性があると言われている。

この事件をきっかけに、宗教二世問題は注目を集めるようになった。そして、その深刻さが浮き彫りになり、書籍なども多数売り出され、問題を目にする頻度が明らかに増えたに違いない。国内で大きな関心を集めている今だからこそ、宗教に対し誤解がないよう、人々は宗教リテラシーを身につける必要がある。特に、これからの日本を担っていく若者に対しては、宗教を建学の精神としているような学校のみならず、国公立の学校でも積極的に宗教を知る時間を設けるべきであると考えます。

作家、ジャーナリストで正覚寺住職でもある鶴飼秀徳氏は、「旧統一教会問題が生じたのも、社会全体の宗教に対するリテラシーの低さがあると考えます。日本が真の共生社会を目指すためには、宗教にたいする学びと理解が欠かせない。」と考え「公立学校において「宗教」の科目は必要か？」³⁾という記事を書いている。そこでは、安倍晋三元首相の国葬での違和感、大学の授業での学生の様子など具体的な事例を挙げながら、日本人の宗教リテラシーが低い事実を述べている。また、「①行為の目的が宗教的意義を持ち②行為の効果が宗教に対する援助、助長、促進又は圧迫、干渉等になるような行為」になっていなければ、政教分離違反といえないのだ。したがって、公立学校が宗教の歴史や概論のよう

表1 「公立学校において『宗教』の科目は必要か?」についての回答

公教育に宗教の科目を入れることを賛成	67.2%
公教育に宗教の科目を入れることを反対	23%
どちらでもない	9.8%
その他	0%

な授業を実施することは何ら、問題がないはず」というように、日本の制度として、国公立学校が教育の中で「宗教」を扱うことに問題がないことを示している。しかし、国民の感覚として、国公立学校が教育の中で「宗教」を扱うことをどのように考えるかは見えてこない。さらに、鶴飼氏は「公立学校において『宗教』の科目は必要か?」⁴⁾というアンケートを2023年1月20日～3月31日に実施した。投票の結果は、表1の通りである。

投票数が61票のため、このアンケートの回答を国民の感覚として取り上げるのは難しい。しかし、他にこのようなアンケートを取ったデータが存在しないため、この結果を参考として日本国民の感覚を探っていく。

上記の結果を踏まえると、公教育に宗教の科目を入れることに賛成する人が半数を超えているが、反対をする人も一定数存在する。では反対に投票した人の意見を参照しながら、どのようなことが教育現場で宗教を扱う際の懸念事項になってしまうのか紹介する。「特定の宗教について肩入れして教えるのには絶対に反対。信仰は個人で決めるもので刷り込まれるものではないし、単に歴史について知りたいのであれば歴史/社会科などで教えればよいだけの話。一方で宗教との関わり方や、カルト宗教への対策などは道徳などで対応すればよい。わざわざ科目を新設してまでする必要はない。」先述したのは、反対に投票した人の実際の意見の引用の1つである。反対に投票した人は、概ね、宗教を教えるということに対する懸念を持っている。そして、その多くは、特定の宗教に教えが偏ってしまい、信仰を刷り込まれてしまうというイメージを持つようだ。また、科目として宗教を扱うことには反対をする人がいる

が、宗教自体を扱うことは求めているようである。

社会でも道徳でも宗教の授業でも、どのような時間でも可能である全ての教育現場に普及できるような汎用性のある宗教の内容を扱った授業を開発すべきではないだろうか。2006年の教育基本法改正により宗教の一般的教養を教えることが明記されて以来、宗教を扱うことに対するハードルは以前よりは明らかに下がっているように感じる。

2. 社会に求められている宗教リテラシー

宗教リテラシーはどうして社会に求められているのか、どうしたら身につけることができるのか、2023年になって発表された、いくつかの論考を通してまとめていく。

中外日報は社説で「宗教リテラシー 宗教軽視は日本文化の弱点に」⁵⁾という記事を書いていた。「日本人の多くは、日本の宗教についてうまく理解できておらず、そもそも宗教とは何かについて、自分に関わりのあることとして理解しにくいと感じている。」と日本人の宗教観について述べている。また、宗教リテラシーを育むために、「学校での宗教教育を充実させるというのは一つの有力な考えだ。だが、公立学校でどのように宗教教育を行うのかについて、十分に議論されておらず、理解も進んでいない。他方、道徳・倫理、国語、社会・地理・歴史・公民などで実際には宗教に関わる題材がしばしば扱われている。しかし、それを宗教として取り上げ、学ぶという姿勢が足りないのだ。」と、学ぶ場の少なさを問題として掲げている。そして、その解決策として「宗教を主題化して学ぶ場を広げるということだ。学校教育においても、学問領域においても、論壇や報道といった場においても、もっと宗教を大きな話題として取り上げるということだ。そのためには、高等教育において宗教の研究教育を重視する必要がある。日本の文化や社会、思想の理解において、宗教の持つ意義にもっと注目すべきである。とりわけ、儒教や神道、民俗文化における宗教性をどう捉えるかという問いを深めることだ。宗教軽視は将来にわたって日本文化の弱点ともなりかねない。宗教

について、とりわけ日本の宗教について深い理解を持った識者が増える必要がある。」と記述している。

著述家であり、芸術文化観光専門職大学教授の山中俊之氏は、2022年7月に「日本人の「宗教偏差値」が世界最低レベルになった3つの理由」⁶⁾という記事を書いている。「世界宗教偏差値」があるとしたら、日本はおそらく世界最低レベルです。理由はいろいろありますが、私は次の三つの影響が大きいと考えています。」という書き出しで、日本人がどうして宗教リテラシーが低いのか理由が述べられている。その理由として、「地理的な理由」「神道がもともとあり、その上に仏教を受け入れた」「江戸時代の檀家制度と明治以降の国家神道」の3つを挙げていた。日本人の宗教リテラシーを上げるためには、我々が日本ならではの宗教性を持つことに気づくこと、つまり中外日報の記事で述べられていた「宗教について、とりわけ日本の宗教について深い理解を持った識者が増える必要がある。」のだろう。

『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』⁷⁾で牧師で宗教学者の小原克博氏は、「宗教の聖典や歴史などを細部にわたって勉強することが必要なのではなく、その人は遠い外国から来たかもしれないけれども、いま同じ社会に住んでいる、一緒に生きている。そんな隣人たちが尊んでいるものを、自分も尊ぶことができるような境地に達する宗教リテラシーを、きちんと底上げすることができれば、日本の民主主義の豊かさにつながっていくと思うんですね。」⁸⁾とこれからの日本人のあるべき宗教リテラシーを身につけた姿について述べていた。記述を踏まえ、宗教について、深い理解を持つだけでなく、人々は自身と異なる宗教、文化を持っている存在に対し、重んじることができてはじめて宗教リテラシーが身についたと言えるのだろう。上記を身につけるために、具体的にどのような教育を現場は行うべきなのか。次の章で考察していく。

3. 宗教リテラシーを身につけるために 教育に求められていること

中外日報は「宗教について、とりわけ日本の宗教について深い理解を持った識者が増える必要がある。」と述べていたが、どのような教材が必要なのか検討する必要がある。

教材を考えるにあたり気をつけなくてはならないのが、特定の宗教に偏っていないかという点である。藤原聖子氏は自身の著書である『教科書の中の宗教—この奇妙な実態』⁹⁾で、倫理の教科書の内容の1つとして、「ブッタの思想に学ぶ」という節を取り上げて解説している。また、この箇所は明らかに、「単に宗教を伝達しているのではなく、「ブッタの教えはあなたにとって大切な指針になる」と価値判断を下し、読者である生徒にそれを受け入れるよう促している。」と述べている。そしてこれは宗派教育にあたるという懸念を挙げつつも、キリスト教やイスラム教の説明にも同様の記述があれば問題はないと発信している。だが、引用したこちらの教科書は、それを満たせていなかったため、国公立学校で使用するにあたり適した教材とは言い難いものになっていた。このように、既存の教科書を用いるとしても、特定の宗教に偏った表記がないか確認をしなくてはならない。また、中には宗教の知識の説明において偏見や差別的表現を用いている教科書も存在している。「なぜこのような教科書の偏見が見逃されてきた原因をより広くとらえれば、「関心のなさ」という問題があるかもしれない。」¹⁰⁾と述べられている。生徒はもちろん、高校で教える教員ですらあまり関心を持っていないという要因が挙げられている。宗教について、とりわけ日本の宗教について深い理解を持った識者を増やすためには、何かしらの工夫が必要なかもしれない。

さらに、2つの授業実践を具体的に考察していくことで、日本の宗教について深い理解を持つことに繋がるきっかけを見つけていきたい。3.1.では元・東京都杉並区立和田中学校校長の藤原和博氏（以下藤原氏）、3.2.では2019年度に私自身が行った授業実践を再検討していく。

実践校は、千葉県にある私立国府台女子学院である。当時は大学院生の立場で授業実践を行ったが、現在は仏教（宗教）科の教員として勤務し、中学生、高校生の仏教の授業を担当している。

3.1. よのなか科の授業実践

先述の通り、実際にどのような授業が行われているか実践をみていく。

「よのなか科」の授業は、「元東京都杉並区立和田中学校校長の藤原和博氏が提唱している「学校で教えられる知識と実際の世の中との架け橋になる授業」のこと。教科書を使った受身の授業とは異なり、自分の身近な視点から世界の仕組み、世の中の仕組みなど、大人でも簡単に答えを出せないテーマを扱う。」¹¹⁾ また、教材はSRJの商品であり、学習塾・小学校・中学校・高校・専門学校など幅広い教育機関で導入されている。

今回考察を行う「宗教について考える」授業は現代社会編の1つであり、「その1」と「その2」が存在している。まずは「その1」から考察していく。「その1」の授業、ワークの流れは表2の通りである。

1.～3.までの授業は知識の習得に力をいれた内容であるが、4.に関しては能動的な授業となっており、大変興味深いものであった。宗教団体

表2 よのなか科の授業「その1」

1. 宗教とは何か考えてみよう。	(1)「宗教」という語句の意味 (2)「宗教」と聞いたときに持つイメージ
2. 日本の生活と宗教のつながりを見てみよう。	(1) 次の質問に、YESかNOで答えよう。 (2) 日本の宗教に関するデータ ①日本には宗教団体がいくつあると思うか？ ②信者数の総計から気づいたことを書こう。
3. 世界三大宗教を見てみよう。	
4. もし宗教をおこすとしたら？ ～教祖ロール・プレイング～	①教団名(〇〇教、〇〇会など) ②教義(教え) ③儀式(セレモニー) ④理想の人間像(信者育成)

の立ち上げの仕組みを自分ごととして捉えることが可能となる。ただ、この授業に関しては生徒が1.~3.の授業で、宗教の魅力を理解し、教義について何らかの気づきがないと、このロール・プレイングは意味をなさなくなってしまうのではないかと考えた。生徒が遊び半分で適当な宗教をつくることや、創唱宗教（新宗教含む）へのバイアスを生みかねないことを懸念している。この授業によって宗教が意外に自身に近い存在であることや、日本の宗教について新たな気づきも得られるとは思いますが、それは一時の興味や関心に過ぎないのではないかと感じ取れた。また、日本の宗教に関するデータを知ることで、日本の宗教を理解したとは言い難い。どうして日本は、さまざまな宗教の文化が根付いているのか、その背景も知らなくてはならないだろう。上記は次のセクションで述べる、筆者が2019年に国府台女子学院にて行った授業実践にも言えることであった。

続いて、「その2」¹²⁾の内容についても考察していく。「その2」の授業、ワークの流れは表3の通りである。

「その2」に関しては、「その1」の内容を踏まえ、より宗教を身近に考える工夫がなされている。宗教の理解へのアプローチ①では、「人気の

表3 よのなか科の授業「その2」

1. 宗教の理解へのアプローチ①	(1)「人気のテーマパークやブランド」と「宗教」 (2)「人気タレント」と「宗教教団の教祖」 (3)「ファン」と「信者」
2. 宗教の理解へのアプローチ②	質問 どんな状況・心境のときに神様や仏様に頼りたくなるか書いてみよう。
3. 宗教の理解へのアプローチ③	質問 次のような意見を持っている人に、どのように反論するか書いてみよう。 『ちゃんと努力し、しっかりと自分自身を持っている人は、宗教に頼ることはない。宗教を信じているなんて、弱い人間のすることだ。』
4. 人間にとって宗教とは何か？ ～私の意見～	「人間にとって宗教とは」という書き出しから、自身の意見を書いてもらうワーク。

テーマパークやブランド」と「宗教」の共通点や「ファン」と「信者」の違いなど、普段使う言葉と宗教に関する言葉を並べて相違点を可視化している。ただ、ここでも注意すべき事項がある。それぞれの言葉は意外性があり興味を引くきっかけには成り得るのだが、意図を理解できず違和感や嫌悪感を持つ人もいるかもしれない。「ファン」や「信者」からみて、「人気タレント」と「宗教教団の教祖」が横並びになっており、同じ要素を持つと言われたらそれぞれ納得がいかないという感想を持つ人もいだろう。例えばこのようなワークを行う前に、アイドルという言葉は偶像や崇拜される人や物という意味合いを持つ、日常的に使う言葉の中には宗教的な要素を含むものもたくさんあるなどと、説明した上でワークの意図を示しつつ、実施しなければ授業内容の理解に繋がらないと感じた。ただワークを実施するだけではなく、話者の言葉選びも重要である。

言葉選びに関しては、宗教の理解へのアプローチ③の言葉にも別の懸念がある。ケーススタディは生徒主体の学びとなるため、生徒がどのくらい理解をして、学んだ情報を使いこなすことができるかを見ることができると、大変興味深いのだが、『ちゃんと努力し、しっかりとした自分自身を持っている人は、宗教に頼ることはない。宗教を信じているなんて、弱い人間のすることだ。』という言葉自体が大変強いものに感じる。一面的にしか宗教をみることができない人に対し、宗教はどのようなものか説く以前に、伝え方の語気の強さなどの他の視点に目がいつてしまい本筋と異なることを書き始める生徒が出てくるのではないだろうか。また、仕返すように、強い言葉で反論してしまう生徒もでてくるのではないかと考えた。そのため、人と異なる意見を持った際、どのように自分の意見をつたえるかなど別の要素の学びを1つ入れることができたかと考えた。授業の受け手である生徒が誤解のないような説明を行うことを常に心がけなければならない。また、宗教の理解へのアプローチ③や4.「人間にとって宗教とは何か?」のような自由度の高い記述ワークは意図とずれないように、回答を誘導しない伝え方でワークの意義も伝える必要があるだろう。教師側からの指示も明確になるよう

に気をつけなければならない。特に宗教の理解へのアプローチ②に関しては、自身のことを振り返りながら記載すべきなのか、それとも一般的にどのように考えられているかを検討するのか、指示を明確に行わなければ、書き出すことが難しい生徒もいるだろう。懸念点をいくつか挙げたが、このワークを通して、自身の宗教に対しての考え方を深めること、そして日本の宗教について深い理解を持った人材を増やす見込みはあると感じられた。生徒がどのような反応を示しているかを繰り返し分析することで、この教材の真価を発揮できるだろう。

3.2. 宗教知識を活用する場面を想定したマンガ教材の再検討

宗教リテラシーを身につけることを目的とした、グローバル化社会の中で活用できる宗教の知識やそれを踏まえた行動を、マンガ教材を通して生徒が行うことができる教材を開発し、中学高校の仏教(宗教)科で実践を行い、教材の有効性や課題を明らかにしたのが、先述した2019年に行った授業の実践開発である。以下に概要をまとめる。

授業は国府台女子学院で2018年11月に実践した。受講者は中学部2年3組37名、高等部2年3組44名、高等部2年5組41名である。

グローバル化社会の中で活用できる宗教の知識を学び、それを踏まえた行動を、マンガ教材を通して、生徒が実践を想定して行うことができる教材を作成し、用いた。マンガ教材を用いる理由は、宗教の取っ付きにくさや負のイメージを、マンガを通して払拭することやマンガを通して宗教をデフォルメ化することによって生徒の関心を引くことが可能になると考えたためである。宗教リテラシーを習得できたかどうか判断するために、3つの段階を設定した。3つの段階を達成できれば、実践の効果があつたと評価する。これらが習得できたかは、授業前と授業後に生徒へ実施したアンケート、授業の感想、授業内における生徒の様子で判断していった。以下が3つの段階である。

1つ目は、日本の宗教文化や価値観の理解を深められたか。

授業を通して、多くの生徒は、日本の宗教文化や価値観を十分に理解していた。無宗教とは一体どういう意味で使われる言葉かを伝えること

で、日本人の宗教観、無宗教の意味を他の宗教観を持つ人々に語れる能力を養うことができた。しかし、すべての生徒が無宗教の意味を書き出すことができなかつたことやよく考えられていないと読み取れる回答もあったため、自分ごととして考えるまで、生徒の意欲を掻き立てることができなかつた。

2つ目は、死生観について宗教を通して深めることができたか。

高校生は、深めることができていた。中には普段日本人にとってなじみの薄いイスラム教の思想を知った際に、イスラム教の思想に共感できる点を見出す生徒もいた。しかし、中学生の中には、自身が考えていた死生観がどの宗教に基づいていたのか授業を通して考えることができた生徒もいたが、自身の死生観を考えたことがなかつた生徒も多くおり、活動の最中に戸惑う姿も見られた。「死」に対してのイメージが想定できない生徒に配慮し、マンガを取り扱ったが、生徒のイメージの補完は、物語を通して達成できなかつた。

3つ目は、宗教を信仰する気持ちにいかに寄り添うことができるか。

結果としては、日本人の宗教観や文化を見つめ直すことによって、授業の前よりも、宗教を信仰する気持ちがわかると答えた生徒が増えた。また、授業を通して、「日本人は特定の宗教を持たないため、宗教に対して寛容になれる」と考え、自身の立場から宗教と向き合うことができる生徒もおり、自分ごととして宗教について考えることが可能となり、宗教を信仰する気持ちに寄り添う姿勢も見られた。多様な宗教を持つ人々との交流をうまく行えるようになることができていたかは、具体的に宗教の知識を役に立たせることを目的とした活動を行うことがなかつたため、成果として達成できたと断言はできない。

我々は、自分ごととして深く宗教を理解できる教材を作る必要があるだろう。2019年の授業実践は宗教を学ぶきっかけ作りにはなったが工夫や手法に拘りを持った結果、内容を精査することができなかつたようにも感じる。また、マンガを使用することで宗教のマイナスなイメージは払拭でき、イメージの補填に役に立つ場面もあったが、生徒に対し宗教を学ぶ意義を伝えきれなかつたと考えた。2019年の授業実践では、

宗教知識を用いた判断・運用能力として宗教リテラシーを定義して、それをいかに身につけることができるかに着目していた。しかしそれだけではなく、自身とは異なる宗教を信仰する人々を認め、寄り添う姿勢を身につけるための深い理解が必要であると、現在の社会、日本人の宗教リテラシーの低さを通してあらためて感じるようになった。では、宗教について深い理解を持つことを目的とした授業はどのようなものなのか、次の章で検討していく。

4. 宗教について深い理解を持つことを目的とした授業の検討

本章では、実際に宗教について深い理解を持つために、どんな授業が適しているのか考察していく。

上越教育大大学院の塚田穂高准教授は朝日新聞の記事¹³⁾で「教科書を見ると、中学「社会」の地理では世界の宗教分布はもちろん、世界の人々の暮らしと関連した諸宗教の習慣、タブーなどを扱っています。歴史では仏教やキリスト教、イスラム教の起こり、世界史の背景にある宗教の動きを説明しています。高校でも従来の日本史・世界史・倫理などに加え、「地理総合」で宗教と生活を手厚く扱うようになりました。「公共」では、消費者問題の中で靈感商法を載せています。単なる知識だけではなく、様々な国の人々がどんな価値観をもち、どんな生活をしているのか、異文化理解、多文化共生に主眼を置いた「宗教文化教育」が進められています。学校現場と教員の置かれた状況を考えると、無責任に「何かを新たにせよ」と言うのではなく、今ある枠組みで工夫し、内容を充実させることが現実的です。」と述べている。実際、「地理総合」では従来より宗教について講じる機会が増えている。しかし、それとは逆に「公共」や「歴史」では多くの事柄を学ぶことが要求されており、相対として宗教の扱いが小さくなっているのが現状である。そのため、学校教育のなかでは、宗教を講じる機会が減っているのが現状となっている。また「靈感商法」を扱うことは大切だが、それだけでは宗教の負の側面しか扱うことができない。今ある枠組みで工夫し、内容を充実させ

ることが現実的というのであれば、負の面だけでなく、宗教の魅力も伝える必要があるだろう。「公共」では「第2章 人間としてよく生きる」という章で宗教についての内容を扱う機会がある。宗教があることにより、共通の習慣や文化を持つようになったこと、宗教は人々の間をつなぎ、その宗教を信じる人々の社会の基礎ともなっていること、宗教は人間の生き方や社会のあり方に大きな影響を与えてきたことなど、宗教の正の面も扱うべきである。

さらに、内容を充実させるために必要なこと、それは宗教の表面的な知識のインプットではなく、教義も扱うことだ。具体的には、キリスト教の黄金律の考え方や仏教の縁起の思想など古代から現在、そして今後も続いていく宗教ならではの考え方である。自分が今当たり前のように行っていること、感じていることなどの根幹に触れる時間をつくることで、自己理解ができるようになり、自分の持つ宗教性なども知ることになるだろう。最終的にそれが異なる宗教、文化を重んじることができる宗教リテラシーを身につけることに繋がると考える。

では、上記のような内容を教育現場で扱うことができるのだろうか。3.1.と3.2.では、教育実践を通して、宗教の教義を深く教える必要があると述べたが、宗教の教員免許、ならびに宗教に知見を持つ教員が国公立の教育の現場にいるほうが珍しい。だが、知識としてのみならば、教義を丁寧に教えることはどんな教育現場でも可能であると考えた。その際、1.で取り上げたアンケートや3.でもあったように、特定の宗教について肩入れをして教えることはないよう配慮が必要である。

勤務校では、「仏教」科というカリキュラムの枠組みで、仏教以外の宗教についても教える時間を設けている。それは、宗教リテラシーを持つためには欠かせない時間なのだ。多文化、他宗教を知らなければ、自身の考えも深まらず、気づきや学んだことを実践的に活かすことに繋がられないのだ。2019年の授業やよのなか科の授業などでも、生活の中で活かすことを想定しているが、生徒が宗教の知識を自然と活用ができるようになる、また、宗教の知識は実生活において必要なことであると自覚し、学びたいと思うような気持ちを育むことはできていないのでは

ないだろうか。足りないものは教義そのものの魅力を生徒に伝えきれていないことだと考える。上記を踏まえ、勤務校ではさまざまな宗教の教義も欠かさず教えるようにしている。

仏教校でキリスト教やイスラム教の内容を扱う授業を行うこと、つまり自身と関わりが浅いと感じている宗教について学ぶことで、深い宗教理解を達成することができるのなら、国公立の学校でも宗教は授業で扱うことができるのではないかと仮定した。また現状では、私立宗門校と国公立学校ではカリキュラム構成をはじめとする前提の違いは多くあるが、まずは、自身と親しみのあまりない宗教を生徒は受け入れることができるのか、学ぶこと自体にどのような感覚を持つようになるのか、今回の実践を通して情報を得ることを本研究論文の目標にしたい。さらに、宗教知識を教えることで、異なる宗教や文化を重んじることはどこまで達成できるのかも同時にみていく。

5. 授業実践

中学2年生にイスラム教についての知識を教える授業を行った。簡単に授業の概要を以下に説明する(表4)。

この授業は、中学2年生の5クラス、193名に実施した。期間としては、1学期4～6月の約3ヵ月間、枠組みは週に1回の道徳の代替となる仏教の授業で行った。授業時間は全8回である。

授業の目的は、生徒に正しい知識の習得をさせ、宗教リテラシーを身につけさせることさらに宗教について深い理解を深め、宗教を信仰する人に対し寄り添う姿勢を身につけさせることである。そこで、知識を深めることで異なる宗教や文化を重んじることができたかどうか授業の様子やアンケートをみて考察していく。

授業の工夫点として、授業の効果がより浮き彫りになるよう、教師は極力自身の考えは発さず、生徒にどのように感じるか毎時間投げかけるように心掛けた。また、自分ごととして捉えられるように、イスラム教に関するさまざまな情報を与えるようにした。工夫点として、身近な出

表4 国府台女子学院での全8回の授業内容

内容	生徒の実際の様子
<p>【1回目】 イスラム教についての基本情報を伝える。 7世紀のはじめ、アラビア半島でムハンマドが開き、神（アッラー）に絶対的に従う宗教であること。二大宗派があり、それぞれどのような特徴をもっているか。また、ムハンマドは信仰の対象ではないことを細かく伝えた。</p>	<p>基本的な知識を淡々と覚えていた。 シーア派とスンニ派の違いに戸惑いながら理解しようと努めていた。</p>
<p>【2回目】 ムハンマドの生涯について話す。 アラビア半島のメッカに生まれたことや生い立ち、結婚、そしてジブリールとの出会いから、イスラム教の教えを伝道するようになったことを、口頭で伝えた。その際、みんながムハンマドの立場だったら「どのように感じる?」「どのように行動する?」などと、適宜問いかけながら説明するように心がけた。 また、偶像崇拝が禁止されていることをただ、禁止事項として知るのではなく、その理由も含め学んでもらった。また、聖戦（ジハード）が「神の教えに従って努力する」という意味が本来はあること、現在ではどのように使われているかなど、由来や理由も知ることができるようにした。</p>	<p>ストーリー仕立てで、ムハンマドの生涯について話したため、前回よりもイスラム教に興味関心を持った生徒も増えているように感じた。ムハンマドの生い立ちや苦しんだり、悩んだりする姿に、親近感を覚えているようであった。また、漢字とアラビア語で表現される言葉、聖戦とジハード、聖遷とヒジュラなどの言葉を覚えることに大変力をいれていた。</p>
<p>【3回目】 イスラム教のイメージの変革 イスラム教についての基礎知識、その歴史を十分に学んできた段階で、マンガ教材を用いた導入を行った。2019年と異なる点は、既存のマンガを用いたことである。今回の授業では、『サトコとナダ』¹⁴⁾というマンガを、導入の時間に生徒に見せることにした。全編を紹介できないため、アメリカ合衆国の大学に通う日本人留学生サトコと、彼女のルームメイトでありサウジアラビア出身のイスラム教徒であるナダの文化交流を描いたマンガであることをはじめに説明した。 実際に取り扱った内容は、以下である。 『サトコとナダ』1巻 p. 86 マーシャーアッラー p. 95 メッカ マンガを導入に用いたあと、今回は六信について説明した。 神、天使、啓典（クルアーン）、預言者、来世、天命について順番に説明していく。クルアーンの説明をする際、ユダヤ教の聖典であるヘブライ語聖書（旧約聖書）、キリスト教の聖典である新約聖書の説明も行い、他の宗教の説明も適宜行った。</p>	<p>1、2回目の授業を受け、イスラム教に厳格なイメージを感じている様子であったが『サトコとナダ』のマンガを通して、イスラム教徒が実際にこの世界で生活しているということ、近い未来自身も関わる可能性があることに気づくことができ、イスラム教を身近に感じているようであった。</p> <p>国や文化、宗教が異なれば、さまざまな価値観があるということも理解できるようになり、イスラム教徒が信じる6つのこと（六信）を大切にし寄り添う姿勢を養えたためか、真剣に話を聞いている生徒がほとんどであった。</p>

【4回目】今回も再びマンガ教材を活用した。

実際に取り扱った内容は、以下である。

『サトコとナダ』

p. 9 かぶりもの p. 10 おなまえ

p. 11 ラマダーン p. 96 秘密道具

p. 101 方角

さらに、実際に礼拝のアプリである「Muslim Pro - コーランアザーン、イスラム教」を使いながら、礼拝について説明を行った。そのあと、五行である信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼の説明を行った。信仰告白は実際にどのような言葉を唱えるかまで説明を行い、イスラム教が一神教であることを今一度説明した。また、その際、アッラーとムハンマドは異なる立場であること、信仰はアッラーのみとなることを教えた。

断食に対し、反応があったため、宇宙飛行士やスポーツ選手は断食の期間はどのようにしているのか、またそのようなことを決めるのはイスラム法学者であることを説明した。

アプリを起動し、使用することで、イスラム教徒がこの世界で共に生きているという実感がさらに沸いたようであった。

また、授業内でイスラム教は厳格なイメージが強かったため、時代と共に文化をアップデートしているイメージがなかったと驚く様子も見受けられた。

五行を知ると、自分と重ねた意見を発する生徒もでてきた。ときには「めんどくさそう」「自分ではできない」というような声も上がったが、それを大切にしているイスラム教徒に対しての批判の声ではなかった。中には経験したら、イスラム教徒の気持ちがわかるのかもしれないと、積極的に寄り添っていく姿勢を見せた者もいた。

【5回目】今回は、日本財団のYoutubeチャンネル¹⁵⁾にアップロードされている「【礼拝は1日に5回!】日本人とトルコ人のムスリム夫婦に1日密着してみた」¹⁶⁾という動画、五行が1日のうちにどのように行われているか、イメージを掴んでもらうことを意図とし見てもらった。

そして、イスラム教の文化について伝えていった。豚肉を食べることができないことや、豚肉以外の肉も折りを捧げ食用にしたハラール食品でないと食べることがないことを説明した。また、お酒が禁じられていることや、ヒジャブで頭部や身体を覆わなければならないことを教えた。

今までイメージの補填として使用していたマンガは、アメリカ合衆国が舞台だったが、今回見た動画は、日本が舞台で今現在も日本に暮らすイスラム教徒の夫婦であることからより親近感が生じていた。中には、「会いにいけるんだ」と呟く生徒もいた。また、日本の中でイスラム教徒同士が日本で助け合っていることに気づいた生徒も多くいた。

豚肉が食べれないことを受け、「こんなに美味しいのに、もったいない」という声も上がったが、それが我慢ではないということも理解し、イスラム教徒の人が豚肉と知らずに、豚肉を口に運びそうになったら止めてあげたいなど、現実の出来事に落とし込んで、学んだ知識をどう活かすかをよく考えていた。

【6回目】前回、ヒジャブについて興味を示している生徒がいたため、種類やヒジャブを使ったオシャレについて紹介した。また、今回は、イスラム教と日本の関わりとして、インドネシア味の素事件¹⁷⁾や『鬼滅の刃』¹⁸⁾のブルーレイおよびDVD第4巻の特典CDにイスラム教に関わる音声の不適切な使用の判明した記事¹⁹⁾を取り上げ、社会で宗教リテラシーが欠如していたため問題が起きてしまった事実を伝えた。特に後者について説明する際、アニメックス側が悪いという言い方は決してせず、生徒にどうしてこのようなことが起きてしまったのか、二度とこのようなことを起こさないためには何が必要か考えてみようとしてだけ促した。

生徒は嬉しそうにヒジャブやニカブの説明を読んでいて、形や色など選択肢が豊富なことを知り、ルールはあるけれどもその中で最大限に楽しんで生活していることも伝わったようだった。また、日本で起きた出来事を知り、生徒はとても驚いていた。特に『鬼滅の刃』の問題においては、大変衝撃を受けていた。感想にもあったが、「授業でこのような内容を知り、今後気をつけることができるわたしはラッキーだった」という記述もあり、生徒は宗教の授業を受ける意義をも見つけていた。知らないことが誰かを傷つけてしまうことに繋がってしまうという危機感も覚えていた。

【7回目】導入で日本人の宗教リテラシーが低いという記事を導入で取り扱った。その後、一夫多妻制度の説明と、どうして一夫多妻制度が存在するのか話した。また、報復、報復の拡大、血の代償という言葉に触れながら、ハンムラビ法典とイスラム教の考え方の結びつきを話した。ここまでの、知識のインプットの時間である。

6回目ですべて具体的な問題や事件を知ったため、生徒は日本人の宗教リテラシーが低いと思われている事実にも納得しているようであった。また、一夫多妻制度に対し、最初は理解できないという反応を示していたが、理由を知ったことで受け止めている様子であった。また、ハンムラビ法典はすでに社会科で習った内容であったが、社会で習った内容と宗教の授業の繋がりを感じ、教科を横断的に学ぶことに生徒自身が意義を感じているようであった。また、報復という言葉の強さに、最初は戸惑っている様子であったが、報復がこれ以上広がらないようにするためにある考え方だと知り、画期的であるということも理解しているようであった。

【8回目】最後に生徒のアウトプットの時間を設けた。アウトプットの形として、イスラム教についての新聞を作成してもらった。ただ、新聞を作るだけでなく、ターゲットはイスラム教について知識のない自分と同じ中学生という設定にした。そして、授業の感想を書いてもらった。

生徒の多くは、授業で自分が興味や関心を抱いた内容を中心に新聞作りを行っていた。また、授業を受けてより知りたいと感じたことを積極的に調べ、内容に反映させていた。中には教師も知らないような内容も必死に探してきてまとめている生徒もいた。さらには、他の宗教との比較や宗教全体の話しに派生させるなど、イスラム教についてただ内容をまとめるのではなく、自分が感じるイスラム教の魅力をまとめたり、日本人に知って欲しいと思うイスラム教の知識を考えたりと、新聞を通してより深く思考している様子も見受けられた。

来事やイスラム教徒の文化をマンガ教材やニュース記事を紹介したり、動画を流したり、さまざまな媒体を手段として用いたことが挙げられる。

イスラム教は、日本における多くの人々にとって馴染みのない文化や風習をたくさん持っている宗教であるため、知識を得るだけでも生徒はさまざまな感じ方をするであろう。この授業では、最後に授業の感想を生徒185名(受講者のうち8名が欠席)に尋ねた。授業の感想になるため、生徒の回答の自由度はとて高くなる。自由であるからこそ、生徒が本当に理解したこと、感じたことが見えてくるだろう。その回答を参考に、生徒の知識の理解度を測りつつ、より深い理解を持つことができるか分析していく。生徒の意図と異なる解釈をしないために、回答は生徒の記述をそのまま利用している。そのため、曖昧な表現も中には存在している。

理解度は5段階で下記の表5の項目に分けることにした。

1段階目である、イスラム教について興味関心は見られず、抽象的な授業の感想を述べている生徒の割合は全体の4%である。また、2段階目のイスラム教について興味、関心がありつつもまとめるまでには至ら

表5 生徒の理解度の段階分け

1段階	イスラム教について興味関心は見られず、抽象的な授業の感想を述べている。 例：楽しかった。面白かった。
2段階	イスラム教について興味、関心がありつつもまとめるまでには至らない。宗教・異文化に寄り添う姿勢はない。 例：私はめんどくさいことがものすごく嫌いで礼拝や断食をめっちゃめんどくさく感じた。私にはとても無理そうでした。
3段階	イスラム教について学んだことが、まとめられている。 例：イスラム教の守らなくてはいけないことには全て意味があるということに気づくことができた。断食と絶食は異なることを知った。
4段階	イスラム教について学んだことと自分の考えや経験をまとめている。 例：ヒジャブはおしゃれを制限するものではなく、守られているように感じた。
5段階	イスラム教について学んだことと自分の考え、生き方、社会のあり方など、多角的に宗教について考えを深めることができている。さらに、異なる宗教を重んじる姿勢を持っている。 例：知らないでイスラム教徒の人を傷つけてしまうこともあり、もっと日本でも知って欲しいと思った。みんなが思いやり宗教を理解し、もっと豊かになってほしいと思った。

ない、または、宗教・異文化に寄り添う姿勢はない。生徒の割合は13%であった。つまり、イスラム教の知識や教義を丁寧に教えたが、理解にまで到達できなかった生徒は全体の20%未満であった。つまり全体の80%以上の生徒が理解はできているのであった。特に、一番多いのは3段階を達成できた割合で41%、その次に4段階目で25%、そして5段階目は19%であった。また、4段階目、5段階目にいると判断した生徒の感想はイスラム教に対し、よく思考しているものが非常に多い。そのため深い理解に到達できたのは、44%であった。4、5段階目の記述の一部を以下にまとめ、適宜分析しながら見ていく。

4段階目と評価した感想は以下である。今までイスラム教に対しどのようなイメージを持っていて、授業を受け、どのような印象が変わったかなどをまとめている意見が多くあった。またどのような気づきが生まれたか、よく自分の中で整理できている生徒もいた。

- 豚を食べれないことをかわいそうと思っていましたが、自分たちの生活に合わせているだけで、かわいそうでもなんでもないと過去の自分を恥じました。
- イスラム教徒の方がイスラム教をどのような気持ちで信仰しているかにふれ、だからこそ宗教についてもっともっと理解をもっていくことが大切なのかなって思いました。宗教について深く知ることによって宗教の持っている役割、重要性について少しわかるようになった気がします。
- ムスリムのひとは我慢しているわけではなく自発的にやることに気づきました。
- イスラム教の人たちは豚肉を食べてはいけなだけでなく、食べたくないことに気づいた。
- 日常生活や社会で習ったことが仏教にも繋がっていると感じた。
- 生きている場所が違うだけでこんなにも生活が変わることを知り、一度わたしもイスラム教徒の生活を体験したいと思った。
- イスラム教について学ぶ前、私は1日5回礼拝をしたり、頭部をヒジャブで覆わなければいけなかったり、表面的な知識のみで、信者たちは辛くないのかな、大変じゃないのかな、といったイスラム教徒ではない考え方をしてきた。しかし、本当のムスリムの人はそんなことは思わず、神を信仰し、ムハンマドを信じてきたと知り、今までと違った新しい価値観を知ることができた。一夫多妻制が戦争未亡人を救うためだと知り、イスラム教徒の気遣いがこのような制度を作ったと思うと心の優しいひとたちばかりなのだと感じた。
- 自分の普通と他の文化で生活している普通が違うことをしっかり理解した上で、様々な方々と関わっていく必要があるなと感じました。今後は、人は十人十色であり、考え方も生活の仕方も多様であるということを常に頭に入れながら周りの人たちに接していきたいです。

- イスラム教に対し、怖いイメージを持っていた。しかし喜捨の考え方は良いと思うし、何より何も知らずに勝手に恐れるのはやめようという教訓になりました。
- ムハンマドは民衆と共に働き、時には教えを守るために戦争を行ってきた良心のあるひとだからこそ、今でもイスラム教を大切にしたいと思う人が大勢いるのではないかと思います。いつかムスリムの人など仏教徒ではないひとの意志を尊重し、親しく交流できたらなと思いました。

以下は、授業内容だけではなく、自身の体験を感想に記していたものである。

- 私が通っている小学校にムスリムの男の子がいました。給食ではなくお弁当を持参していましたが、あるとき水も飲まず、お弁当も持参していない時期がありました。ずっと疑問に思ってもやもやしていましたが、授業を受けてわかりました。
- 2日前にムスリムのひとを電車でみました。授業で習わなければ、なぜヒジャブを着ているかわからなかったと思います。
- この間おでかけしたときに、ハラール商品が売ってたので買いました！美味しかったです。

さらに、イスラム教の魅力を見出していた感想もあった。また、今後自分はどのように行動すべきか考えを深めた感想もあった。これらは、授業内で私が何かを発したわけではなく、生徒が自身で思考し見つけたものである。

- ヒジャブはおしゃれを制限するものではなく、守られているように感じた。
- 日本にいるムスリムのひとは不便だからこそお互いに協力していいなと思った。

- 礼拝は自分の心をスッキリさせているものなのかなと感じた。
- 仏教の時間は自分のことも考えられる時間となった。
- 怖い宗教だと思っていたが、戦争未亡人を助けたり、救貧税等の助け合いをしたりしてとても素敵な宗教だなと感じました。
- もっとイスラム教について学んで、知らずに粗相をしてしまわないようにしたいです。
- 自分が大人になって問題を起こさないようにイスラム教だけではなくキリスト教についても知りたいと思った。
- 授業のおかげで、ムスリムの人にあったら学んだ知識を活かせると思いました。

5段階目と評価した感想は以下である。世界や日本の社会がどのようなものになっていくと良いか、学び得たことをもとに検討した内容を記述している生徒がいた。以下の感想を読むと、知識を習得するだけでも、深く理解を行うことが可能であることがよくわかる。また、異なる宗教や文化を重んじる心も養うことができているため、5段階目は宗教リテラシーを身につけることが達成できているとも判断できる。

- 知らないでムスリムの人を傷つけてしまうこともあり、もっと日本でも知って欲しいと思った。みんなが思いやり、宗教を理解し、もっと豊かになってほしいと思った。
- ハラル認定されたお肉が普通のお肉と味がそこまで変わらないと聞いて、だったらスーパーにも置いてもらって一般人も食べればいいと思った。日本の宗教知能も上がると思う。
- 最近では礼拝の時間を知らせてくれるアプリや、礼拝の部屋を設けたり、ムスリムに対する理解も進んでいてすごいと思います。ハラルの認証があるお店など日本にも少しずつだけ増えてきていることを知り、これからもそれぞれの文化を尊重して理解のある世界になってほしいと思った。

- イスラム教のひとが快適に暮らすために、礼拝する場所を増やしたり、ハラール商品を置いているお店が増えるといいと思った。
- いつか仕事や旅行で違う宗教の国に行ったときや、仕事場にムスリムの職員がいた時に役に立つと思います。一人でも多く宗教の多様性やルールを知っている大人や子供が増えるといいなと思います。
- ムスリムのひとはいつも身体を覆っていて「暑くないのかな大変そうだな」と思っていたけど、色々バリエーションがあって「なんか着るの楽しそうじゃん！」って思った。今は男女の性別をなくそう！という動きが世界であるが、ムスリムのそういうルールは今後どうなっていくだろうと疑問を持ちました。まだまだ世界にはイスラム教以外にも多種多様な宗教、文化があるし、それぞれのルールがあるからそういうことを全部受け止めて協力、助け合うことがわたしたちにできることだと思います。あとグローバリズムで宗教がなくなってしまうか心配です。
- 日本にも多くのムスリムがいると知り、イスラム教を身近に感じるようになりました。また、まず宗教を知ることが大切だと思った。偏見を持っている人にも宗教を知ってもらい、それについて理解してもらえれば、多様性をもっと広がると思った。
- 宗教に関する問題は、法に触れるかだけではなく、その宗教を信じている人々の気持ちも一緒に考えなければならないと解決できないと気づきました。もっと多くの人々が宗教に関心を持ち、問題が減ったらいいと思います。
- イスラム教徒の女性がヒジャブを被らなかつた、体の一部を出していたという理由で拘束されたり亡くなったりするニュースをみました。女性の自由がもっとある国になってほしいな。と思いました。

さらに次の2つの感想を分析していく。

- 仏教の授業を受けてからイスラム教の女性に対する考え方が変わった。以前はヒジャブを着ている女性を見かけると、「イスラム教では女性を卑下している」というイメージが強くなるとなく後ろめたい気持ちになっていたが、授業を受け、女性もイスラム教に支えられているのだと感じた。また同性愛がイスラム教では禁じられていることを知り、多様な人々への理解の実現を目指している現代社会では、イスラム教徒とLGBTの人々との対立が起きていないか心配になった。そういった対立を防ぐためにも他人（異教徒）への理解を深めるために仏教という教科を学んでいきたい。

上記の感想は、イスラム教や信仰心が信者にとってどのようなものになっているかまで、理解を深めることができていた。さらに社会で問題となっていることにも触れ、異教徒への理解を深めることがどのようなことに繋がっていくのかまで思考をめぐらすことまで達成できていた。

- 弟にイスラム教のイメージを聞いたときに、イスラム教に限らず宗教とは危ないもの、詐欺と習ったとっていて、授業の内容を話すとなんか意味があるんだとわかってくれた。イスラム教をあまり知らない人について教えたいと思いました。

授業で習ったことを家庭で話し理解を深めたという報告を受けることがしばしばあった。この感想もその1つである。家庭でのなにげない1つの話題だったのかもしれないが、このような行いが、さらに広まっていくと宗教リテラシーを持つ人が日本の中でも増えていくだろう。生徒の弟は、宗教とは危ないものであり、詐欺であると教わったとのことだが、実情どのように教わったのかはわからないが、それが事実なら、教師の宗教に対するリテラシーを一刻も早く高めなくてはならない。ま

た、4.で「公共」では、消費者問題の中で靈感商法を載せているという話を取り上げたが、もし宗教についての知識がそこでしか扱われることがなければ一面的な印象のみで宗教をどのようなものか判断してしまう。宗教に関する一面的な知識や誤った考えが広がることは、誰かを傷つけてしまうことに繋がってしまう。今回の事例は、まさに宗教を信仰するすべてのひとを偏見を持ち、差別的に見てしまうようなきっかけにも繋がってしまう危険性がある。どんな宗教を信仰していたとしても、信仰の自由があること、それを特異なものとして扱わないこと、価値観や人間形成を宗教を通して育んでもらいたい。そして、宗教に対して深い理解を持てる人間になって欲しい。

さらにそのように伝えたわけでもなくとも生徒にそのように伝わってしまったのなら、伝え方に問題があるのだろう。宗教に関しての発言はより配慮すべき事柄が多い。宗教の知識や教義は国公立の学校でも扱うことができると考えていたのだが、まずは教師も宗教について深く理解をする必要がありそうだ。感想を経て、現状の課題が1つ見つかった。この問題は、教師が目の前の課題をこなすことで精いっぱい、なかなか宗教について知識を増やすことができない実情を踏まえつつ、教育業界全体で検討していかなくてはならないものとなる。

6. 授業、感想に対しての考察とまとめ

今回の実践では、感想をもとにイスラム教に対して深い理解を行うことが達成できたかを分析してきた。その結果、8割の生徒が興味関心を持ち、イスラム教の知識を理解することを達成することができていた。また、全体の4割の生徒はイスラム教について深く理解をしているようであった。この結果から、何か特別なワークや工夫をしなくても、丁寧にイスラム教の知識や教義を教えることによって、生徒は宗教の知識を理解することができ、そのうちの半数は深い理解が可能となることがわかった。また、この結果が、馴染みのない宗教や文化を学ぶことでどのような感じ方をするかを知る基準にもなったであろう。1段階目である

4%の生徒は攻撃的であったり、マイナスな内容を書いているわけでは決してない。今回は授業の最後に感想をとったが、学期の途中でその4%がどのような生徒であるか把握し、その層に向けてアプローチをしていくことで、生徒全員の理解度を上げていくことができると考えた。授業を実施する教師の負担を考慮すると、どのようなカリキュラムを行うべきかまだまだ吟味する必要はあるが、宗教を学ぶことで生徒は新しい気づきや学ぶことの楽しさ、思考力、それらがあらゆる他者を価値のある存在として尊重する能力に結びつくだろう。

また、生徒の感想を通し、教師も宗教について深く理解をする必要があることがわかった。中央教育審議会が2021年に提示した、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」²⁰⁾では、「日本人の子供を含め、異文化理解・多文化共生の考え方に基づく教育の更なる取組」を必要としていることを明言しており、そのために「学校における異文化理解や多文化共生の考えが根付くような取組促進」「異文化理解・多文化共生の考え方に基づく教育の更なる普及・充実、教員養成」を唱っている。上記を達成するためにも、教師の宗教に対する理解度の向上、ならびに宗教リテラシーを身につける必要があることをあらためて認識した。宗教を学ぶためのカリキュラムの検討、授業実施の前に、まずは、教師が宗教について深い理解を持った人材になることが必要となる。

先述した通り、国公立の教師が、目の前の課題をこなすことで精いっぱい、なかなか宗教について知識を増やすことができない実情があるのは理解している。ただこれは、授業に必要な知識のインプットではないと考える。人として生きていくために必要なマナー、リテラシーの一つである。人を殺してはいけない、盗みを働いてはいけない、そのような価値観は、哲学や宗教がもととなった。教育現場は、生徒の学力・知識のみを伸ばす場所ではない。人間形成をする場所でもある。宗教を学ぶことは人間形成の一環ともいえるのではないだろうか。専任の講師を雇うなど、授業の運営の仕方はさまざまな検討ができると思うが、できたら教員自身も宗教リテラシーを身につけて、教育現場で知識を用いて欲しい。授業をするだけでなく、異なる宗教を持った生徒への対応と

してもその知識は必ず活きるだろう。

日本人が宗教リテラシーを身につけるためには、我々がいかに当事者意識を持って宗教と向き合うかにかかっている。生徒に理解を促す前に、まずは大人が考えるべきであると今一度感じさせられる授業実践となった。そして生徒の感想を参考に成果を得ることができた。このような成果を積み重ね、宗教を教育現場で扱う優位性が、目に留まるようになったら、かねてから問題になっていた、宗教を学ぶ場の少なさも解決に繋がるかもしれない。

注

- 1) 川瀬寧々「宗教リテラシーを身につける授業の開発—宗教知識を活用する場面を想定したマンガ教材—」『授業実践開発研究』第12巻、https://ace-npo.org/fujikawa-lab/file/pdf/bulletin/2019/06_kawase.pdf (2019)
- 2) NHK NEWS WEB「安倍元首相銃撃事件山上被告“旧統一教会への恨みが事件に”」(2023/07/08) (最終確認 2023/09/30)
- 3) 鵜飼秀徳「公立学校において「宗教」の科目は必要か？」<https://surfvote.com/issues/a10w6u8315gh> (2023/01/20) (最終確認 2023/12/18)
- 4) Polimill (ポリミル) Surfvote 開票結果「公立学校において『宗教』の科目は必要か？」<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000062.000088829.html> (2023/04/17) (最終確認 2023/09/30)
- 5) 中外日報「宗教リテラシー 宗教軽視は日本文化の弱点に」<https://www.chugainippoh.co.jp/article/editorial/20230526.html> (2023/05/31) (最終確認 2023/09/30)
- 6) DIAMOND online「日本人の「宗教偏差値」が世界最低レベルになった3つの理由」<https://diamond.jp/articles/-/306893> (2022/07/28) (最終確認 2023/09/30)
- 7) 島蘭進, 積徹宗, 若松英輔, 櫻井義秀, 川島堅二『徹底討論! 問われる宗教とカルト』NHK 出版新書、2023年
- 8) 同上、p.155
- 9) 藤原聖子『教科書の中の宗教—この奇妙な実態』岩波新書、2011年、p.4-5
- 10) 藤原聖子『教科書の中の宗教—この奇妙な実態』岩波新書、2011年、p.134
- 11) EDUPEDIA「よのなか科～現代社会の諸問題編～「宗教について考える(その1)」」

- <https://edupedia.jp/archives/17981> (2023/07/22) (最終確認 2023/12/20)
- 12) EDUPEDIA「よのなか科～現代社会の諸問題編～「宗教について考える(その2)」」
<https://edupedia.jp/archives/17987> (2023/07/22) (最終確認 2023/12/20)
- 13) 朝日新聞 DIGITAL「宗教教育の現状は? 上越教育大大学院の塚田穂高准教授に聞く」
<https://www.asahi.com/articles/ASR444SXNR3YPCVL004.html> (2023/04/05) (最終確認 2023/09/30)
- 14) ユベチカ『サトコとナダ 1巻』星海社(2017/07/08)
- 15) 日本財団 YouTube チャンネル <https://www.youtube.com/@NipponFoundationPR>
- 16) 同上「【礼拝は1日に5回!】日本人とトルコ人のムスリム夫婦に1日密着してみた」
<https://www.youtube.com/watch?v=1EqOllEjTRI> (2021/11/05) (最終確認 2023/12/19)
- 17) Cilsien - SEAsia Info Clips「インドネシア味の素事件」 <http://cilsien.info/factsheet/factpage%E3%80%80> (2001/01/09) (最終確認 2023/09/30)
- 18) 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』2016年11号から2020年24号まで連載された週刊少年ジャンプのマンガ
- 19) J-CAST ニュース <https://www.j-cast.com/2019/11/22373414.html?p=all> (2019/11/22) (最終確認 2023/12/19)
- 20) 中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」https://www.mext.go.jp/content/20210428-mxt_kyoiku01-00014639_10.pdf (2021/1/26) (最終確認 2023/09/30)

特集 試される宗教リテラシー

座談会 宗教者としての幸せと リテラシーを育む子弟教育

岡田正彦¹・小平美香²・林田康順³

司会 弓山達也⁴

2023年8月21日実施(於 大正大学)

宗教リテラシーは、通常、一般の人間が宗教文化への知識や理解を有することに関わるものとして位置づけられるが、宗教者の家庭で生まれ育ち、その継承を求められることもある子弟の場合はどうだろうか。今回の座談会では、それぞれ天理教・神社神道・浄土宗の宗門校大学において子弟教育に携わっている3名の方に、これからの子弟教育をより豊かなものにしていくために大事なものは何か、各大学のカリキュラム編成、地域社会との関わりやいわゆる2世問題などにも触れながら、語っていただいた。



- ¹ おかだまさひこ : 天理大学人間学部教授、天理教富良野分教会きょうと教人
² おだいらみか : 学習院大学文学部講師、ときわ台天祖神社宮司
³ はやしだこうじゅん : 大正大学仏教学部教授、浄土宗慶岸寺住職
⁴ ゆみやまたつや : 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授

宗教者になるまで

弓山 今回の座談会で取り上げる子弟教育は、いわゆるミッション系と呼ばれているような学校で行われる宗教者としての学生教育で、一般の非宗教の学生を念頭に置いた宗教教育に比べると、かなり違っており、なおかつ見えづらいところもあるかと思います。実際私も、大正大学の鷺見定信先生¹⁾ (2010年遷化) が「子弟教育は難しいのよ」というお話をなされたのをきっかけに、2004年に「現代における宗教者の育成」というシンポジウム²⁾を開くまで、こういうことが問題になっているんだということを十分に認識していませんでした。例えば、後継者が減少しているなかで、どう先細りさせず、かつ優秀な人材を育成するのか。そこには当然学力の問題、信仰心やモチベーションの問題、家庭が宗教の場なわけで、どのような環境で育てられてきたかなど、ナイーブな問題とからんできます。大学以外の教団内の教育機関・養成講座でも資格を取れるなかで教団立の大学に入ることにはどういう意味があるか、という問題もあるでしょう。“一度宗教者の資格を取ったら終わり”ではないフォローアップやリカレント教育も射程に入るかもしれません。

昨年、安倍首相襲撃事件の後に2世問題が大きく社会的にクローズアップされて、子弟教育は時にネガティブに語られている傾向があるのではないかと思います。つまり、お寺の家に生まれたから自動的に大正大学に入って資格を取って法統を継ぐ、というようなことが当たり前だった時代がずっと続いてきたわけですが、お寺も天理教の教会もお宮さん(神社)も、宗教の家庭に生まれたからそのまま宗教者にならなければいけない、ということに対し、宗教以外の人からもしかすると面白可笑しく、選択肢がないという意味で否定的に見られてきた面もあるでしょう。このあたりも、ぜひ今回先生方のお考えを聴かせていただければ幸いです。

そしてこのことは宗教者や教団だけの問題ではないと私は考えています。東日本大震災後、スピリチュアルケアや臨床宗教が話題になっているように、ターミナルケア・グリーフケア、青少年の生きがいに宗教者

が関わる場面が増えています。そもそも多くの人は初詣や葬式やキリスト教式の結婚式は宗教ではなく習慣だというのですが、そこでは宗教者を中心に宗教儀礼が行われます。見方を変えれば、私たちの生活の隅々まで、要所要所に宗教文化を見て取ることができます。そこでの宗教者の、大変失礼な物言いをお許しいただければ質の問題は、私たちの生活の問題と言っても過言ではありません。習慣とみなされる初詣や葬式や結婚式で、私たちは過去や未来に思いを馳せ、生きるとは死ぬとは何か、愛とは何か、家族とは何か、少なからず考えるんだらうと思うのです。そしてそこに宗教者がいます。宗教者としての助言や寄り添いがほしい、逆に毅然と向きあってもらいたい、いや何か一言でもいいからほしいと思うのは自然なことでしょう。繰り返しになりますが、子弟教育・宗教者の育成というのは、宗教者や宗教教団だけのものではなくて、普段は「宗教なんて」と言っている世俗の人間の、その豊かな生活、そして宗教リテラシーの問題に直結していると私は考えています。

今日は、大正大学8号館新礼拝堂のご本尊様から始まりまして、構内の鴨台観音さざえ堂や、子弟教育の現場である法儀研究のための勤行室ほんぎょうを拝見させていただきました。それでは、自分がどんなふうにならなかに宗教者になる教育を受けてきたのか、そのあたりと絡めて自己紹介をしていただきたいと思います。まずは岡田さんからよろしくお願ひいたします。

岡田 岡田正彦と申します。天理大学の人間学部・宗教学科で、もう25年以上教鞭をとっております。よろしくお願ひします。

私は、北海道にある天理教の教会の次男として生まれて、信仰は5代目です。天理大学宗教学科の出身で、さらに天理教校本科という教師養成のための教育研究機関——当時は研究課程だけでしたが、現在は実践課程が併設されています——で学びました。本科の在学中に「天理大学が改組する際に、教員を目指してみないか」ということになり、「神道と仏教どっちを勉強したい？」と訊かれて、「仏教のほうに関心があります」と答えると大正大学の大学院を勧めていただきました。修士課程を修了後、博士課程に進んでからアメリカへ留学し、最終的にはスタン

フォード大学でPh. Dを取って帰国し、天理大学に奉職しました。

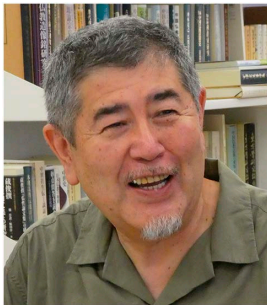
子弟教育の関係でいうと、天理大学では宗教学科だけではなく全学のプログラムとして「伝道課程」(1962年設置)があり、それに登録して指定の単位を取得すると、教人(教師)の資格が取得できるようになっています。

弓山 ありがとうございます。では、小平さんお願いいたします。

小平 小平美香と申します、よろしくお願ひいたします。

ご本尊様をお参りさせていただいた感想から申しますと、大正大学に今回初めて伺わせていただきましたが、学生さん方が御仏の前で授業を受講されるというお話をうかがって、非常に素晴らしいと思いました。

私は両親とも神職として奉仕する神社で育ちました。神道系大学には進学せず、学習院大学を卒業後、金融関係の企業に就職しました。会社では人事部門に配属になり、採用や研修を担当する人材開発室という部署で働いていました。その後、結婚を機に学習院大学の教職課程(現・文学部教育学科)で3年間副手となり、夏休みにはじめて神職資格(直階)を神社庁の講習会で取得しました。この講習会を受講して神道や神社のことを、もっと知りたいと思いました。それで國學院大学の「神道学専攻科」で、一年間みっちり勉強することになりました。この専攻科での勉強がとても面白かったので、さらに学問として神道を勉強してみ



岡田正彦(おかだ・まさひこ)

天理大学宗教学科教授。1962年生まれ。天理大学の教員として教育・研究に従事しながら、長年サークルの顧問として学生の信仰活動やボランティア活動をサポートし、教師養成の機関である天理教校の教育にも携わってきた。天理教を信仰する教員がつくる「道の教職員の集い」の活動も続けている。

たいということで、大学院の進学を希望したのですが、「勉強よりも早く跡取りを」という先生からのアドバイスもあり悩みました。結局学習院大学大学院の哲学専攻に進んで神道を学び、現在國學院大學では兼任講師として神職課程の教学に関する授業を担当させていただいています。

弓山 ありがとうございます。では、林田さんお願いします。

林田 大正大学の林田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日は私どもの大学にお運びをいただきありがとうございました。お参りいただいたご本尊様は、本学が有する唯一の重要文化財ということで、素敵な仏様のもとで、うちの学生さんたちは4年間見守られて卒業していくということであろうかと思ひます。その後お運びいただいた「さざえ堂」は、近隣の方にはたくさんお参りをさせていただいて、そこで毎週必ず法要があつて、適宜イベントが組まれているところでございます。天台宗から浄土宗までの勤行室もご覧いただきました。お坊さんの資格を取る学生さんたちが、毎週、授業で6コマ以上必ずあの教室で勉強しています。

私自身のことを申し上げますと、私自身もお寺の子で、小学生の頃から、夏休みになると父に言われてお経の練習を毎日勤めておりました。けれども大学は慶應義塾大学の法学部に行きました。浄土宗には大正大学と佛教大学のほかに養成道場があり、他大学に行った者はそこでも資格が取れるということでしたので、そちらに参りました。3週間3回のプログラムを終えると、増上寺ないし知恩院さまで、最後の「伝宗伝戒道場」という行を受けることができます。私はそれで、大学3年生の12月にお坊さんの一番下の資格をいただくことができました。

一方、法学部では3年生で憲法のゼミに入つて勉強をするようになりました。仲間に元気な友人が多く、もちろん、半分以上は無宗教で、「宗教なんて何の意味があるの？」みたいな感じの人が多かつた。毎週、ゼミの後には三田で飲み会があつて、宗教論戦でかなり戦つたんですけ

ど、なかなか太刀打ちできないような状況でした。

残りの半分は、創価学会の学生さんが2~3人おられますし、原理研究会の先輩も後輩も同輩もいましたし、あとは神道の理論右翼みたいな方もいました。一つ下には幸福実現党の初代党首を務めた饗庭くん(現・あえば浩明氏)、二つ下には創価学会の学生部長がいました。創価学会の友達は何人かいたので、何回か学会の会館に行かせていただきまして、ご存知のように車座になって折伏の体験談などをお互いにする。折伏の体験だけだと思ったんですが、お医者さんや看護師さんが来て健康講座をやっていたりして、「すごいな」と思いました。創価学会の友達は日蓮聖人の御書を必ずカバンに入れていて、真っ赤にしながら勉強しておりました。友人には外交官や弁護士になるという学生が色々といいましたが、30年ほど前ですから池田大作さん(2023年11月逝去)もお元気だった頃で、彼等が学会の会合に行くと池田さんとかがお話しなされて、肩叩かれて「がんばれよ」と言われて、それで友人はその次の日はすごく元気で、「今日は2時間お題目を唱えてから勉強するんだ」と言うんですね。「私も浄土宗でお坊さんの資格をもうすぐ取るのだけれども、きちんと勉強しないと彼らに追いつかないな」ということをすごくひしひしと感じまして、「大正大学であらためて浄土宗の勉強をしよう」ということで、勉強しはじめました。

そのようなことで今は研究者の道を進ませていただいております、浄土宗の学監がっかんという役目も仰せつかっております。毎年、大正大学で35人ほど、佛教大学や養成講座と合わせて100から120人くらいが、知恩院と増上寺で浄土宗のお坊さんになっていきます。彼らがお坊さんになるところまで、しっかり見守って卒業まで責任を持って送り出す仕事をさせていただいております。

弓山 ありがとうございます。ここまででご質問などどうでしょうか。

岡田 林田さんの話を聴いていて思ったことを。大正大学に入学するまで、私には「新宗教」と呼ばれる自分たちの立場について、一般社会か

ら偏見を持たれているというネガティブな意識がある一方で、「“葬式仏教”や神社の初詣に行く人たちとは違って、天理教の教会に来ている人たちは、もっと真摯に信仰を求めている」というポジティブな意識の両面がありました。しかし、大正大学に来て藤井正雄先生（2018年遷化）と出会い、かなり認識をあらためました。私は藤井先生のことをよく、良い意味で「浄土宗ファンダメンタリスト」と呼ぶんですけれども（一同笑）、すごく堅固な信仰心というんですかね、毎日の朝夕の勤行で阿弥陀仏の名号を唱えて祈るような姿勢に驚きました。

伝統仏教の方々の信仰生活は、そういうものではないかと思っていました。「私たちは信仰について真剣に考えているけれど、仏教の普通のお寺では、ただ葬式をやっているだけで、儀式は形式だけだ」と思っていたのです。しかし、「いや、そうじゃないんだ、日常生活のなかにはやはり個々の信仰が活かされていて、祈りを捧げることが毎日の暮らしを支えている」と気づかされました。「葬式仏教」や家の信仰ではなくて、個々の信仰にもとづいて自らの人生に向き合う意識は、やはり浄土真宗や浄土宗、さらには他の宗派の方々のなかにもあるんですね。

弓山 林田さんも、夏休みにお父さんとお経の練習をしていたということでしたね。

林田 私たちくらいの子世代のお寺の子というのはほとんど、小学生のときに父親に連れられて、「夏休みだからやるぞー」と言って、朝起きると、ご本尊様の前で日常勤行式というのを勤めるんです。子供だと、40日間やっているとお普通にすぐ覚えちゃうんですね。小学校のときに基本のお経はほぼできるようになっていました。

弓山 今と昔でも違いますか。

林田 今はなかなかできないというのはありますね。やっている子もいますけれども、少なくなっています。

弓山 岡田さんも小さいときには「おつとめ」を？

岡田 家が教会ですから毎日していました。毎日の暮らしの基盤に祈りの機会があるかないか、その祈りの時間をどのように過ごすのかということが、子弟教育に深くかかわってくると思います。お寺の場合もご住職の子どもだけではなくて、やはり関係のある人たちの子どもたちが、お寺や家庭で一緒に手を合わせる機会はあるわけですよね？

林田 お寺の以外の子供さんが集まるお寺さんはあります。ただ、ごくわずかのお寺さんだと思います。

弓山 小平さんのところはどうか？ お宮さんでもご家族と一緒に、小さいときから手をあわせるような習慣というのはありますか。

小平 そうですね。小学生のときから巫女の格好をして、ご奉仕したり、巫女舞をしたり、子供のときから家族でご奉仕していました。氏子地域の安寧を祈る日々の祭り（日供祭）がありますから「神職は365日休みなすだ」と父から言われていましたね。家族で外食や旅行した記憶がありません。

弓山 留守にできないわけですからね。

養成の流れ① 浄土宗僧侶の場合

弓山 自己紹介をいただき、ありがとうございました。

では続きまして、僧侶・教人・神職になるとときには、各教育機関でどういう子弟教育が行われているのか、どのような流れでどういうことを勉強して、どういう階梯で進んでいくのか、そこにもし課題などあれば、お教えいただければと思います。まずは林田さんからお願いいたします。

林田 大正大学仏教学部宗学コースのカリキュラムは、簡単に申し上げますと、基礎部門（基礎仏教学）、応用部門（いわゆるゼミ）、語学系・現代社会系・宗学系（各宗派の教え）などの専門部門、法儀部門（お経の勉強）という形でそれぞれ進んでまいります。今日の宗教リテラシーの話では「現代社会系」が一番メインになるかなと考えております。

将来僧職に就く学生のための子弟教育としては僧階取得科目があり、仏教学科でどの科目をとってお坊さんになっていくのかは、天台宗・真言宗豊山派・真言宗智山派・浄土宗・時宗と、各宗派でそれぞれなんです。浄土宗の場合は、浄土宗が決めた「宗定科目」に該当する科目を、大正大学や佛教大学や養成講座で開講しています。ただやはり、私が学んだ3週間の養成講座だとどうしても授業時間が大幅に減ってしまいますので、そこが課題だと考えられます。大学の方が授業時間がきちんと確保できます。

宗教リテラシーの話として、浄土宗では、浄土学や仏教学によって律師や少僧都といったお坊さんの資格（「僧階」）を取得できるのに対し、いわゆる現代社会の常識、お坊さんとしての教養といった科目も別途学んでいかなければいけないのではないかということで、大正大学では宗教学とか心理学とか仏教社会福祉とかいう科目を取ると、輔教という資格（「教階」）が取得できるようになっています。「現代社会と仏教」は選択科目で、例えば寺院の社会貢献について学んだり、生命倫理の出生前診断、人工妊娠中絶・脳死臓器移植などを扱うものもあつたりします。

私たちの時代は、仏教学や、天台学・真言学・浄土学といったそれぞれの宗学を勉強すればそれでよかったですけれども、こういった「現代社会と仏教」のような科目を学ばせることによって、彼らに少しでも宗教リテラシーを養成していただくということです。特に、「現代社会と仏教」がどれも選択科目なのに対して、数年前に、すべての宗派の了承をいただいて必修で「実践僧侶論」を開講しました。人口減少社会になって、高齢化や過疎化が寺院の住職として問題になってきたなかで、講師として「お寺の未来総合研究所」の井出悦郎先生、税理士の河村照円先生、臨床宗教師の大島慎也先生、「ひとさじの会」の吉水岳彦先生³⁾

などの先生方に来ていただき、参考書でも『お寺の教科書』（松本紹圭・井出悦郎著、徳間書店、2013年）といった有名どころを用いています。

弓山 ありがとうございます。大正大学のほうでは、今、子弟の割合はどのくらいです？

林田 毎年1,000人受け入れて、宗学コースは70人ぐらい、あとは他の学科にポツポツといる感じですが、80人はいないと思いますね。

弓山 実践僧侶論についてもご説明いただきましたが、前提としてまずは、宗学と法儀が両輪というように考えてよろしいのでしょうか。

林田 「行学一致」「行学双修」と色々な言い方をしますが、「行」、広く言えばお経・お作法の練習と、それから「学」、仏教の基本と法然上人の教え（浄土学）です。この行と学を並行して学んで勉強していきます。同じように、真言宗ですと「事相^{じじょう}」が勤行室で加持祈祷などの作法を勉強するもの、「教相^{きょうそう}」が仏教とお大師さまの教えの勉強です。大正大学ではそのように両輪でやっております。

小平 神職課程にも実習はあるのですが、禊のほかに修行と定義されたものはありません。仏教では、修行と実習はどのように位置づけられているのですか？

林田 基本的に、仏様の前でやるもの、浄土宗でいうとお経の練習は、みな「行」と位置づけております。先ほどご案内した4宗派の勤行室では、みな仏様がいらっしゃるので、行になります。同じように、知恩院さまにも増上寺さまにも比叡山さまにも、みんな仏様がいらっしゃいますので、その前で修行すれば行になります。もしいなくても、行という気持ちがあれば行になります。もちろん、先ほどの「学」の授業も、仏様の前でいたしますし、授業のはじめとおわりには、必ずお念仏を称え

ますが、こちらは、実習というよりも、講義になりますね。

岡田 勤行室は大学の施設のなかの一室ですけど、一応、正式なお寺として位置づけられるということでしょうか。

林田 そうですね。宗教法人ではないですけど、気持ちとしては道場のようなものです。

養成の流れ② 天理教教人・教会長の場合

弓山 ありがとうございます。では続いて、岡田さんお願いします。

岡田 天理大学の場合も、先ほどの大正大学と同じように履修科目の一覧表やカリキュラムの指定があります。ただ、伝道課程に関しては必ずしも宗教学科の学生である必要はなくて、天理大学に入学した学生で資格課程を希望し、在学中に必要な単位を習得して卒業の要件を満たせば修了資格が与えられます。これは天理教校に行かなくても、天理教校に行くのとはほぼ同じ資格が与えられる、という感じです。

私が専門としている近代日本宗教史から言うと、こういった資格制度は、明治の「^{たいきょうせんぶ}大教宣布」運動（1870～84年）から始まっています。明治政府は「^{きょうどうしやく}教導職」という宗教家の認定資格をつくるわけですけど、公職としての教導職が廃止された後も、国の指導で各宗派や各教会単位で教師資格を認定するための基準を作ることが、公認の宗教団体の要件になりました。1895年に「教規宗制中に教師検定条規を定むる件」という内務省訓令がだされて、僧侶や神道教師になる人の選定基準が厳しくなります。新しい宗教団体であった天理教の場合は、教派として一派独立するとき、教師になる人たちの教育レベルや「教師」の認定基準が問題になりました。そこで設立されたのが、天理教校（1900年設立）です。それを前身として、現在の天理大学（1925年設立の天理外国語学校を前身とし、1949年大学化）も含めた学校制度ができあがっていきました。

当初は教師養成を目的とした中学校として発足した天理教校は、のちに純粋な天理教の教師養成機関として再編され、「本科」と「別科」が設置されます。「本科」が本格的に始動するのは戦後ですが、戦前にはまず設置された「別科」に希望者が殺到し、6か月の修養期間を経て教師の資格を取得するようになります。戦前に生徒が一番多かったときは、6か月ごとに1万人近い別科生が入れ替わるほどでした。その人たちが生活する場所（修行施設）として、各教会の詰所が整備され、現在の天理市の街並みが造られていきます。その後、6か月から3か月に短縮されて「修養科」になりますが、教師養成の機能は現在にまで継承されています。こういう国の宗教政策と直接リンクして、仏教も神道も含めて、それぞれの宗教系学校が教師の養成機関やカリキュラムを作っていたのだろーと思ひます。天理教の教師養成制度と教育機関の成り立ちも、こうした歴史的背景を反映しています。

弓山 天理大学には、先ほど見学させていただいた勤行室みたいな部屋もあるんですか。

岡田 あります。元々は大学の中に、礼拝堂と同じような礼拝施設がありました。しかし、天理大学の場合は近隣に教会本部がありますので、大学の中に参拝する場所を造るよりは、教会本部の神殿に足を運ぶほうが良いということになって、礼拝施設自体は閉鎖になりました。ただ、私たちにも法儀と同じように「祭儀式さいぎしき」がありますので、そういう実習は学内の教室を使って学ぶことになっています。それはよく似ていますね。

これは何となく考へているのですが、学校の教育課程に教師養成のカリキュラムを組み込んでいく場合は、さまざまな宗教系の大学のプログラムなどを参考にしながら制度を考へていくので、たぶん相互に情報交換ができたのではないかと想定しています。かつて大正大学に人間学部ができたとき、天理大学が先に人間学部を設けていたので、天理大学に大正大学の先生方が訪問して意見交換をしたことがありました。そうい

う情報交換を通して、宗教系の大学はある程度情報を共有し、カリキュラムのもとになる枠組みをつくってきたのではないのでしょうか。

林田 学生さんが全学で3,000人ほどのことですが、天理教の信者さんはどれくらいいるのでしょうか。

岡田 入学したときに「天理教とどういう関係がありますか」というアンケートを取ると、大体3割ぐらいですね。ほかにはスポーツ関係の人も多いです。

弓山 宗教学科のなかでは、何人くらいが教会のご子弟なんですか？

岡田 ほぼ100%に近い。昔からずっとそうです。受け入れ側はまったくオープンですが、やはり天理教の信仰を前提にした講義や活動が多いので、そうではなく「ちょっと興味があるから」というのでは、居場所を見つけ難いかもしれません。

林田 教人さんとか教会長さんになる人たちは、ほぼ宗教学科に入ってきているのですか？

岡田 いや、宗教学科以外の人も多いです。その人たちの多くが伝道課程修了者の資格の取得を希望します。このため、伝道課程の登録者が毎年100名以上はいる感じです。

林田 天理教校と天理大学の棲み分けというのはどうなっていますか？

岡田 もとは同じ学校だったんですけど、現在は法人そのものが違います。

林田 浄土宗で言うと仏教大学も大正大学も同じ浄土宗のお坊さんに

なって、カリキュラムも基本的には宗で定めた科目を組んでいるのでお坊さんの位も同じですが、天理教校に入るメリットや、天理大学と違う理由はあるのでしょうか？

岡田 天理教校は、英語でのいわゆるセミナー（神学校）のような、本山に付属の学校ということになると思います。神職養成機関（いくつかの神社が設置）や、浄土宗でも本山にありますよね。

林田 毎年、教人さんや教会長さんになる数は、天理教校と天理大学で半々くらいなのですか。

岡田 天理教校の方が、もしかしたら多いかな。ただ、その辺りはどちらかというところ、いわゆる形式的な資格よりは個人の資質のほうが重視される世界なので、あまり何年間勉強したから優れている、という感じではないです。

弓山 祭儀式の授業は、宗教学科に入ると必修なんですか？

岡田 いや、祭儀式に関しては必修ではないです。

弓山 週に何時間でしょうか。

岡田 伝道課程での祭儀式の時間は、週1回です。しかし、おつとめや鳴り物などの練習をすべてやっているので、通年で30コマくらいですね。結構あるんですよ。祭儀式は、私たちが子どもの頃には神道色がより強く、神殿にも注連縄が張ってありました。しかし、少しずつ神道色が薄くなって、現在は注連縄もありません。かつての「祝詞」は「祭文」になっていますし、この祭文は祭文とも違います。亡くなった方への誄詞も神道的な難しいものではなくて、故人の生前の功績と人柄を現代語で平易に伝えるかたちになっています。そういうふうにして、少しずつ

変わっているんですけど、毎月の月次祭で中心となる役割を担うことが教会長の務めなので、その基本的な祭儀の作法や決まりが分かっていると、教会長としての責務を果たすことができません。そのあたりは、僧侶でも神職でも一緒だと思いますけれど。

弓山 祭儀式は、いわゆる実習という形で、教会本部の神殿で行うこともあるわけですか？ それとも全て大学のなかの施設でやるんでしょうか。

岡田 大学の施設を使って学んでいます。ただし、講師は大学の教員が担当するのではなくて、教会本部の方々に直接来ていただいて、指導をお願いしています。

林田 教人さんというのは、私たちがいうとお葬式であったりご法事であったり、お施餓鬼とかお盆といった年中行事を執行する、お坊さんのように位置づけられているという理解でよろしいのでしょうか？

岡田 教人はその文脈で言うと、お坊さんになる資格を持っている人ということですね。最終的に教会長になるためには、さらなる講習と資格検定があります。葬儀式などもありますので……。

養成の流れ③ 神社神職の場合

弓山 ありがとうございます。最後に小平さん、お願いいたします。

小平 神職養成機関のある大学は、皇學館大学・國學院大學です。平成14年に國學院大學の文学部神道学科が神道文化学部になりました。広く宗教・文化としての神道を学ぶ学部ですので、必ずしも神職資格をとらなくても良いのですが、せっかく入学したのだから神職資格を取ろうという一般家庭の学生さんが多くいらっしゃいます。

先ほど岡田先生のお話にありました祭儀式とか法儀は、神職課程では

「祭式」がこれにあたります。大学には祭式教室というのがあって、神殿に見立てた大きな模擬神殿の扉が3つ並んでいます。祭式の他に祝詞作文の授業もありますが、祭式の授業の中で祝詞を奏上することはあっても、祝詞奏上、唱え方の授業はありません。祝詞の唱え方は神社によってかなり違います。大学では抑揚を全く何もつけずにそのまま、棒読みで習います。神職子弟の場合は親の祝詞を聴いているのでだいたい分かるのですが、大学ではじめて習ってそのままぼんと現場に出た神職さんは、どのようにも染まれる一方、どういう風に祝詞を唱えたらいいのか、最初は戸惑うのではないかと思います。

神職課程の授業の特色としては、祭式と神社での実習が挙げられると思います。祭式はお祭りの作法を学びます。実習は伊勢神宮をはじめ各地の神社で行うものです。國學院大學では、まず明治神宮で実習を行います。学部以外にも、神職子弟の教育制度として4年生の大学を卒業してから入学する神道学専攻科や、高校を卒業して神社に住み込みながら夜間学ぶ別科というようにいくつかの課程がありますが、根幹となる授業は共通しているはずで、神道文化学部には、卒業と同時に指導的な神職として活躍する人を育てる「明階総合課程」というのがあり、先ほどの林田先生のおっしゃっていた「実践僧侶論」のように現代の神職に求められている課題を考える授業もあります。私も現場の神職という立場から、現代の神社・神職を取り巻く問題を取り上げるようにしています。

弓山 実習はどのくらいの期間やるんですか？

小平 在籍する課程によって実習の数も異なりますが、一度の実習は3泊から4泊くらいでしたね。私の時は明治神宮で基礎集団実習というのが最初にありまして、なかなか厳しかったです。夜間参拝といって、夜間ご神前で石畳の上に正座して神拝詞を唱えたり、大祓詞という祝詞を正座して1時間近く唱え続けたり。

弓山 國學院大學に勤務している時に、一夏ずっと白衣を着た人たちが

いて、大変そうだな、期間が長そうだなと思ったんですけど。

小平 それは講習会ですね。夏の間、神職資格取得のための講習会を大
學が開催しています。取得する階位によって期間も異なりますが、1か
月から3週間で資格が取れるというものです。仕事をしながら取得でき
る大阪国学院の通信教育など、いくつか資格を取る方法があります。最
初に私が神職資格を取得したのは、東京都神社庁が開催した直階講習会
という、神職子弟や家族を対象にした講習会でした。

弓山 各都道府県の神社庁が講習会のカリキュラムを持っているとい
うことですか？

小平 そうです。各都道府県の神社庁に研修所があって開催されています。

弓山 東京都で何人くらいがそれを受講されているんですか？ 数十人
規模なのか十数人なのか。先生が受けられたときには、何人くらいを受
講者が？

小平 年によっても異なりますが、私の受講した時にはだいたい40～
50人位でしたでしょうか。ここ数年はコロナ禍で行われていませんで
したが、ようやく開催されるようになったところです。

林田 先生のお話のなかで、神社ごとに祝詞の唱え方が異なっている
ということがありました。私たちの場合だと浄土宗で統一のお経をあげら
れないと困るので、行のときは必ず宗定の法要を勤めるのですけれど、
そういうことはないのですね。

小平 ないですね。大祓詞を皆で一緒に奏上するということはありますが。

林田 お作法はないんですか。

小平 もちろん祝詞を奏上する共通の作法はあります。

林田 なるほど、控所から神様の前に行って、そこでさまざまなお作法をして、それは同じなのですね。祝詞の上げ方だけ全然違うということなのですね。

小平 はい。祝詞の内容やそれをどういうふうを読むか、抑揚などが違いますね。

岡田 伸ばしたり、リズムとかね。

林田 なるほど、そういうものなのですね。

小平 同じ祝詞であっても違いますね。太鼓の叩き方なども違うと思います。

岡田 個性を尊重するのは、賢いやり方だと思います。それを全部共通にしてしまうと、みんな同じになってしまうので。

小平 一社の故実に則れるように、色をつけないように教えている部分はあると思います。

弓山 先ほどのお話を伺って、お坊さんと違って神社の場合は、取ろうと思ったら誰でも資格を取れるじゃないですか。ちょっと神社に関心があるとか、日本文化に関心があるから神職に資格を取ってみようかな、という人も取れますよね。

小平 そうですね。大学の神職課程を履修すれば、神職資格は取得できます。

弓山 社家じゃないのに取っている人って大体どのくらいいるんですかね。

小平 かなり増えていて、半分以上が社家でない一般家庭の学生さんです。また、神職の求人数に対して、希望する学生数が少ない状況です。地域によっては生活が厳しいこともあり、神職になりたいという人が少なくなってきているのかもしれない。

林田 お寺は、江戸時代からの流れでお檀家さんがいらっしゃいます。もちろん地方は少子高齢社会でだんだん厳しくなっていますが、まだお寺で生活できる割合は高いと思います。それに対して、大きくて名前の知られている神社だと七五三とかの収入があると思うのですが、それほど大きくない神社だと、それだけでは生活できない人が多いような気がするのですね。神社の数のほうが、お寺の数よりも多いですよ。

小平 はい。よく神社の数はコンビニよりも多いと言われますね。

林田 そうですよ。そうすると、神社だけで生活ができる方でないと、大学に行って興味で資格を取るというのは少し躊躇してしまうような気がします。そのあたりはどうですか。

小平 そうですね。資格を取る選択をしていても最近では「福利厚生が



小平美香 (おだいら・みか)

ときわ台天祖神社宮司。学習院大学・学習院女子大学非常勤講師、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所共同研究員、ほか。『女性神職の近代—神祇儀礼・行政における祭祀者の研究』(ぺりかん社、2009年)、「神道における女性観の形成—日本思想史の問題として」(前田勉・苅部直編『日本思想史の現在と未来—対立と調和』ぺりかん社、2021年)など。

しっかりしていない神社には奉職したくない」とはっきり言う学生さんもいます。専業神職が理想という考え方はまだありますが、都内で兼業されている場合も少なくありません。人がいなければ神社は成りたっていきませんから、過疎の問題も深刻ですね。

林田 過日、伺った鳥根県の石見では、長州藩の隣の津和野藩が、明治維新の際にお寺を潰して、神式のお葬式をやっている方も多という話を聞き、そういう地域もあるのだと勉強になりましたが、全国的には、やはり江戸時代以来、お葬式やご法事は仏教が一番強い気がします。そういう意味では、神主さん方の経済的な基盤は大変なんです。

岡田 昔から、地方のお寺のお坊さんは学校の先生や村役場・町役場の公務員を兼務されている方が多いですよ。

弓山 土日に休めるので。

林田 浄土宗の場合、滋賀県のように小さいお寺さんが多い地域では、数百年のあいだにシステムができあがっていて、例えばみな一般のお仕事をしていて、土日だけご法事やお葬式を勤めるという形をとっています。ですから、お檀家さんたちは「うちの住職は、平日は仕事をしている」という前提があります、しかし、そういう伝統のない地域は問題が多いです。あるいは、昔は公務員や学校の先生方がたくさんいまして、「すみません、お葬式で……」と言うと「行ってこい行ってこい」といった感じで柔軟な対応ができたようですが、もう今はそうはいかない。一般企業や役所で、「お葬式行くから休む」とは言えないですよ。結局、就職するところとしては総大本山などの大きなお寺さんや宗務庁といったところになってきています。そうした流れの中で、「前の住職は平日でも勤めてくれたのに、今の住職は……」となってしまうと、そこが本当に難しいところですね。

岡田 お寺自体の兼務も増えていきますよね。私が住んでる地域でも3か所くらい、同じ方が。

林田 大変な状況になってきています。

時代変化のなかで

弓山 ありがとうございます。大体一回りしたということで、各論に移らせていただきます。先生方が受けられた子弟教育と今の子弟教育で、変わらないというところもあるかと思うんですけど、情報化時代で生まれたときから携帯電話が身についているようなご子弟とは、やはり教える内容や方法が違うのではないのかな、と思うわけなんです。先生方が受けられたときと今の子弟教育についてどこが違うのかということで、もしお気づきの点があれば教えていただきたいと思います。

岡田 私からでもいいですか。この場合、むしろ変わっていないことが問題になっているのかなと思っています。天理教では「少年会」というのがあって、子どもが自分の教会で、毎日の参拝に加えて地域の人たちで企画した行事に参加したり、夏休みに全国各地の教会から子どもたちが30万人くらい集まる「こどもおちばがえり」に参加したりして、幼い頃から信仰的な雰囲気を楽しむことができる機会が設けられています。こうした育成プログラムは、さらに高校・大学に学ぶ人たちにも段階的に提供されていて——天理教校もありますけれど——、そういうところで個々の信仰心を培っていくかたちがずっと採られてきました。それは、現在もあまり変わっていない。天理教の二代真柱である中山正善氏は、1952年に子弟教育の精神的な支柱として「信条教育」という言葉を作りました。そのあたりの経緯については、最近の成果のなかで澤井真さんが上手くまとめてくれています⁴⁾。このように、一貫した子弟教育活動のかたちが成立するのは1970～80年代ぐらいのことで、この確立したシステムが現在も受け継がれています。しかし、60年近い時間

を経て、さまざまな状況が変わってきました。これからの方向性について、真剣に考えなくてはならない段階になっていると思います。

弓山 岡田さんは、学部長として新しい科目を立講するとしたら、どういう科目が今の子弟教育に必要ななってきますでしょうか。

岡田 それは当然、社会活動のような実践的な側面を取り入れていくことでしょうね。それこそ『現代宗教』でもしばしば取り上げられているような、地域社会における宗教施設や組織——天理教の教会を含む——の役割などについて、もっと具体的に学生たちに考えてもらえるような、工夫が必要だと思っています。

弓山 ありがとうございます。

林田 先ほど、こどもおぢばがえりに30万人いらっしゃるというお話がありました。大正大学のある巣鴨（天理教東京教務支庁も所在）では、昔は法被を着た信者さんをたくさん見かけましたが、人数的にはどうですか。

岡田 それ（信者数の減少）は、どこの宗教団体でも同じだと思います。大事なことは、この状況をどう捉えるかということですよ。必ずしも



林田康順（はやしだ・こうじゅん）

大正大学教授、大正大学総合仏教研究所所長、浄土学研究会理事長、大本山光明寺記主禪師研究所所長、浄土宗慶岸寺住職など。『なむブックス⑬〈私〉をみつめて—法然さまのやさしい教え—』（浄土宗出版室、1999年）、『青春新書 図説あらすじでわかる！ 法然と極楽浄土』（青春出版社、2011年）など、著書・論文多数。

ネガティブに考える必要はないのではないか、という気持ちもあります。

弓山 教団のご子弟以外の方が、天理市に、例えば、観光や修学旅行で訪れるということも、もっとポジティブに捉えた方がいいということですかね。こどもおちばがえりに天理教のご子弟ではない人たちが来るということですよ。

岡田 それ自体が昔から、あらためて言葉にはしていないけれど、社会貢献活動の一環という意識はあったと思います。なかなか、夏休みに子どもの相手をする時間が取れない人たちの代わりに、子どもたちを連れてくるというような……。

弓山 ありがとうございます。岡田さんはあまり変わっていないということですけども、林田さんはどうでしょうか。

林田 そういう意味では、本質的な部分ではうちも全く変わっていないと申し上げられるのかなと思います。ただ、マンションなどで、20年ほど前は畳の部屋が必ず一部屋はあったのですが、今は畳の部屋がないという状況があります。もちろん神棚もほとんどないし、仏壇でさえだんだん減ってきています。そういうなかで、先ほど申し上げたように私たちの時代だと、お寺の子たちはほとんどみな父親に連れられて夏休みはお経をあげていたのですが、話を聴くと、そのパーセンテージがやはり減ってきています。もちろん、最終的にはお坊さんの資格まで育て上げてから送り出しますし、子どもの頃からやっていないからダメだというわけでは全くないのですが、全体的な感覚では、子どものころから宗教的情操が養成されている割合が多いほうが、教団としてはプラスになっていくのかな、という気がしています。例えば知恩院さんですと「おてつぎ運動」という信仰運動を長らくやっておりますし、私の住んでおります神奈川教区だと「夏期僧堂」という実習を鎌倉材木座の光

明寺で実施していて、私も小学校のときに行っており、その頃からずっと続いているお坊さん仲間が多くありますが、そういったものなどに行ってお互い切磋琢磨しながら進んでいくということが少しずつ減ってきているのかな、と思います。繰り返しになりますが、なければいけないというわけでは全くないのですが、あったほうが、より広い人間関係・社会情操関係が一層育まれるのかな、という気はしております。

カリキュラムについて、浄土宗の場合には比較的に不断に見直しが行われていて、鷲見先生のような方がいらっしゃって、まだ宗教リテラシーという言葉もありませんでしたけれども、「現代社会に関わる科目が浄土宗僧侶には必要なのだ」とおっしゃっていただいたので、カリキュラム的には、他の宗派に比べると充実しているのかな、という気はいたします。しかし、近年は、先ほどの実践僧侶論に代表されるように天台宗・真言宗なども広く受講することを促すようになってきているのはありがたいことだなあ、と思っております。

弓山 林田さんのお立場でなかなか言いづらいことなのかなと思ったんですけども、いわゆる家庭教育がおろそかになっているというか、それを経ずに、「大正大学に預けたんだから一人前のお坊さんにしてくださいよ」という話なんですよ。

林田 そうなんです。子どもたちの側からすると色々習い事であるとか忙しいかもしれないし、「この子に跡を取ってもらうためにあまり厳しく言えないなあ」みたいな思いもあるかもしれません。

弓山 ご自坊では何もしなくて、大学に来てから初めてお経だ、修行だっていってもなかなか難しいと思いますが。足袋を履いたこともない子に「はやく足袋を履け」みたいな。やはり日頃からやっていないと急には身につかない。

林田 そうですね。お経の勉強を子どものころからやっている子も多い

のですが、やっていない子は面接のときに、「4月までにお父さんと一緒に朝お経を読む練習をしてきてね、あと、一回お衣を着てみてね、入ってからもやるけれども、入る前に少しでもやっておくといいよ」という話をして、彼らに促しています。

岡田 それは、うちも同じような状況ですね。

弓山 天理大学でも、例えば「みかぐらうた、全部できないんですけど」みたいな子が入ってくるんですか？

岡田 できない人は多いですよ。だから「入学までには、ちょっと見直しておいてくださいね」とか。ほぼ状況は同じですね。

林田 本当に同じなんですね。

弓山 別席を運んでいる（本部で教えを聴いている）子は？

岡田 それなりにいますけど、運んでいない子もいますよ。

弓山 小平さん、どうでしょうか？

小平 さきほど神社庁の直階講習会を受講した話をしましたけれど、この講習会というのは、昭和36年に東京都神社庁が、資格というよりもむしろ、神道の知識を持っていることが非常に大事だということで家族向けの講習会を行なったことが発端です。この講習会は、神職の奥さん・娘さん・お嫁さんというように、神社の女性たちが資格を取って女性神職が増えていくきっかけにもなっていました。お母さんが神職の資格を持って子どもに神社のことを教えるという、家庭での子弟教育というのが非常に大事だということが前提にあったそうです。今は神社庁と青年会が都内の神社で開催する小学生を対象とした夏休みの子供神社

体験学習というのがあり、プログラムの中には神職の体験もあります。今は広く氏子さんたちのお子さんを受け入れています。もともとは子弟教育の一環で始まっており、神社庁としての子弟教育重視は変わらないと思います。

今日の座談会でいうところの「子弟教育」とは、神社でいえば社家の子弟に限定するのか、それとも社家に関わらず神職を目指す次世代に対する教育という意味なのかをお伺いしたかったですけれども。

弓山 そうですね。神社本庁の場合は必ずしも社家ではない人たちも講習を受けますので、ご家庭が宗教的な環境ではない場合も想定しています。

小平 神社の社会活動としては、「地域」がキーワードになると思います。その土地で育ってきて神職になる場合は良いのですけれども、神職の子弟でない場合、土地との関係が全くなく、地域の歴史も分からないなかで氏神型神社の神職として奉仕していくのはなかなか厳しいことだと思います。大学だけでこうした教育を行うのは難しいかと思いますので、やはり現場で行われていることを見聞きする体験が大事だと思います。

弓山 必ずしも神職の養成科目の中にはそういう科目があるわけではないですね。

小平 そうですね。國學院大學で観光まちづくり学部が2022年に設置されましたが、観光地でなくても、神社というのは地域の観光資源となりうる、そのまちの特色をもった重要な場所であろうと思います。奉仕している神社では、神社を中心としたまちづくりができるよう力を注いでいるところです。

林田 大正大学でも地域創生学部が立ち上がりました。

小平 そうでしたか。地域とのつながり方は、大学だけではなかなか学べない課題なのかなと思います。かといって、神職子弟だけではなく神職でない家の方にも神社の担い手として支えていただかないと、神社は人手不足で立ち行かなくなっていくと思います。やはり広い意味での子弟教育が必要ですね。

2世問題をどう考えるか

弓山 ありがとうございます。今のお話を聴いていて、家庭教育との関わりにずいぶん言及いただいたわけですが、この話題は、どうしても2世問題を抜きにして語ることはできません。「宗教2世」と言わずに「カルト2世」と言ったほうがいいんだと釈徹宗さんがおっしゃっていたり⁵⁾、逆に宗教以外でも世襲制の問題はあったりするので、ちょっと難しいトピックです。先生方はいずれも、宗教5世だったり、第何代だったり、もしかすると第何十世になろうかと思うんですけれども、宗教2世の問題が1年間にわたって社会で大きく取り上げられているなかで、どうお考えかをお聴かせいただければと思います。

岡田 以前に宗教文化士の集まりがあったとき、この話題になったことがありました⁶⁾。よく「宗教2世」って言うけれど、実際には「教員2世」とか「呉服屋2世」だっているじゃないですか。やはり時代が変わってくるなかで、多くの職種や職業が曲がり角に直面して、厳しい状況になっている。私の同級生にもかつて、文房具屋の子どもや呉服屋の子どもがいて、それぞれ故郷の町では羽振りがよかった。しかし、現在ではそのどちらも故郷の町には残っていません。彼らは子どものころから、家業を継ぐものだと思ってやってきたけれど、世の中が変わってしまって親世代の思惑通りには行かなくなっています。教員である親世代が、子どもに「教員になれ」と言うのは、狭い社会経験を通して子どもの将来について考えるから、なにか押しつけがましくなって、しばしば子どもが苦しくなってしまう。こうした後継者問題は、とくに宗教関係者に

限ることではなく、どの職種や家業の場合も「ほとんど同じじゃないの?」と感じます。

社会との関係については、釈徹宗氏の言うことも一理ありますね。社会的に問題視されるような価値観を強制的に植え付けることは論外ですが、生まれ育った環境のなかで自分の人生を選択していくことは、あらゆる人間にとって避けがたいことです。だから後継者や親子関係の問題自体は、もっと一般的で普遍的な課題であって「宗教2世」といった対象を限定した表現では語りきれないと思います。もし、現代の社会問題として取り上げるのであれば、「カルト2世」の方が良いですね。ただしその際には、すべての宗教者は自らの行動規範が「カルト」と見なされることがないように、つねに厳しく自省する姿勢が不可欠であると思います。

弓山 「農業2世」や「漁業2世」だったらむしろ、美談としてNHKあたりで取り上げられたりするわけですね。

岡田 そうです。だから、問いの次元を区切って考えるというのが、一つの考え方かな。

弓山 林田さんと小平さんは神社や寺院を継ぐにもかかわらず、そもそも宗教立ではない大学(学習院大学・慶應義塾大学)に進学したという



司会・弓山達也(ゆみやま・たつや)

東京工業大学教授。法政大学、大正大学大学院に学び、博士(文学)。國學院大學・立教大学・聖心女子大学・聖学院大学非常勤講師、大正大学教授などを経て2015年より現職。著書・共著に『天啓のゆくえ—宗教が分派するとき』(日本地域社会研究所、2005年)、『平成論—「生きづらさ」の30年を考える』(NHK出版新書、2018年)など。

ことは、何か違う道を考えていたわけですね。

林田 そうなんです。私の場合には、「坊主丸儲け」だとか「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」などという言葉が世の中に広まっていて、「葬式仏教」という言葉も、本来的には大切な言葉だと思うんですけども、揶揄的に言われていて、宗派を超えて、みな、高校までに色々なところでそうしたことを聞かされながら育ってきているわけです。そうした意味で、彼らがそれでもお坊さんを目指そうとして大正大学に入ってきてくれたり、あるいは大正大学でなくても養成課程に入ってきてくれた子たちというのは、私としては「よく来てくれたな」という想いでいっぱいなんです。彼らも、仏教に対する「坊主丸儲け」といった言葉をマイナスイメージとして聞かなかった子なんて一人もいないわけです。でもそのなかで、お父さんの姿を見たりお母さんの姿を見て入ってきてくれる彼らの想いをしっかり育てていきたいな、というのが、私の今のスタンスです。伝統仏教は、門戸を広く開いて募集はしていますけれども、たくさん来てくれるわけではありませんので、お寺に生まれた子供たちを金の卵として一所懸命育てていくことが基本であり、一所懸命に育てていくことが大切だと思っています。おっしゃるようにオウムであったり統一教会であったりエホバであったり、実に多くの問題が山積していることは承知していますし、2世3世が社会的な問題になるようなところも多くあります。しかし、そうではなくてきちんとした教えに基づき、社会的にきちんと認められたお仕事であれば、歌舞伎だってお魚屋さんだってお豆腐屋さんだっておみんな代々やっているわけですから、きちんと育てていくというのが大切だと思っています。その伝統を大切にするのが、保守ということなんだろうなあと考えております。

弓山 宗教2世に関しては「宗教2世文学」というジャンルがあるくらいに漫画がたくさんあって、私も読むのですが、宗教2世の問題として漫画で批判的に描かれているのは、価値観や精神性への侵害だろうと思います。例えば魚屋の息子が魚屋になっても「俺のハートはロッカーな

んだ」とか、大工になっても「ボクサーとしての牙は抜かれてないぜ」というように、職業と価値観や精神性は分けて考えられるのに対して、宗教2世は、信仰が価値観であるとか、精神性であるとか、生き方全てに大きく関わっていて、価値観や精神性を強く束縛するところが、「歌舞伎2世」とか「床屋2世」といった他の職業の2世は違った、社会からの批判がされているのかと思います。

林田 浄土宗や天台宗・真言宗の場合には、先ほどの実践僧侶論ではありませんが、浄土宗のお坊さんがロッカーになっても構わないし、事業を始めても構わない。お医者さんになることもできますし、社会福祉の活動をしたり、色々な仕事をしていただいても全く構わない、という大前提があります。それはそれで構わないのです。浄土宗では「教学・布教・法式」と言うのですが、教を勉強する教学、一所懸命法話の勉強をする布教、お経を一所懸命勉強する法式、これが基本だと言われていますが、それ以外にも、自分の持てる力をどんどん社会に還元してください、というスタンスで送り出しているのです、音楽やっているお坊さんも多いです、色々な社会活動をしているお坊さんも多いのかなと思っております。

弓山 そういうところがやはりカルトと違っているということなんですかね。

岡田 それはすごく難しい。「カルト」と「カルトじゃない」という差異をどう線引きするのか。弓山さんが言いたいけれど、ここでははっきり言っていないところで、やはり微妙なんです。天理教だってその活動をどう捉えるのかは、判断する人の見方に依って変わってくる。だから「カルト2世」という言葉を使うのは難しく、「ここまではカルト」であり、「ここから先はカルトじゃない」と線引きして、はっきり公言できる勇気があるのなら言ってもかまわないけれど、そんな線引きをしたら、これは大変なことになると思います。こうした線引きは、

当事者が自省のために意識することであって、部外者が勝手にレッテルを貼れば、とても暴力的な定義になる。だから、それは簡単には言えないわけで、微妙なところですよ。

弓山 小平さん、どうでしょうか。宗教2世・カルト2世の問題について。

小平 宗教2世というと、ご両親が熱心な新宗教の信者であることに對して、疑問や悩みを抱えながら、信仰から一步距離をおいて学問として仏教を学んでいた学生時代の友人を思い出します。信仰が親から子へ何代も続いていくということは、宗教組織としては誉れである一方、継承に選択の余地がないというのは伝統宗教でも問題でしょう。神社の家に生まれても継がない、長男が継がなくて長女が継いだという話も聞きますし、神職子弟であっても強要できるものではないと思います。

岡田 それで、今日は宗教教育について話をしようと思っていました。天理大学の宗教学科では、教職課程で教科「宗教」の資格が取れるんですよ。天理教の子弟教育としての「宗教」の科目は、天理高校・天理中学校などの系列の学校における天理教の教義や歴史の学習を指導する教科です。「宗教」というよりは「教義」の科目なのですが、それでもこの教職課程の指導では憲法の第20条（信教の自由）と、それに基づく旧教育基本法の第9条（宗教教育）⁷⁾を大事にしています。その場合に一番重視しているのは、「信仰しない自由」を認める指導の姿勢です。あそこで強調されている「信教の自由」の大前提には、特定の宗教を信じる自由と特定の信仰を強要されない自由の両方があります。そのことを踏まえていないと、「宗教」の授業はできません。

だから、私は学生に「教室のなかに天理教とは関係のない人がいても、“あなたはこの授業に関係がないから、出て行ってください”とは言えないこと、あるいは信じないことに否定的な姿勢をとることもできない」ということについて、かなり時間をかけて伝えています。宗教系の私立

学校であっても、憲法の第20条と教育基本法の第9条をもとにして運営されています。たとえ、各宗教の伝統に基づく宗派教育は認められていても、宗派教育が認められていることは、決して特定の信仰を強要することが認められていることではありません。「信じない」という選択肢を認めたとえで、「私が信じている価値について、あなたはどのように考えますか」と問いかける姿勢が大前提です。もちろん、私自身もこうした姿勢を大事にしています。

林田 「カルト」についてはさまざまな定義があるのですが、その一つとして、選択の自由がない、あるいは、非常に狭い、ということが大きいと考えています。そういう意味で、浄土宗のお坊さんにならないという選択肢ももちろんあります。ですから、お坊さんの道を歩み始めた子たちを「えらいな」と言って褒めてあげることが大切だと考えています。お友達から「坊主丸儲け」「葬式仏教」などと言われた経験のないお寺の子などいません。しかし、お父さんやお母さんの後ろ姿を見て、あるいはお檀家さんからさまざまな言葉をかけられて、「お寺は大切な仕事なんだな」「お坊さんは尊敬されているんだな」などということはどこかで思っているはずなんですね。もし、例えば「あんな親父になどなりたくない」「こんなところにいるのは嫌だ」などと思ったら、後を継ぐという選択肢は出てこないですよ。カルトではないので。お寺を出ていくという選択肢は充分にあるのですが、お坊さんの道を歩み始めた。もちろん、「お坊さんになるつもりはなかった」などという子もいますが、三つ子の魂百まで、でして、どこかにお寺をプラスに思ってくれているから、曲がりなりにも、この道を歩み始めてくれた。そういうところが大切だと感じています。こうしたことは、それこそお魚屋さんでも床屋さんでも、基本は同じなんだろうなと考えています。

弓山 ある種、宗教リテラシーとも関わってくるんですけども、よくありがちな「なんぼのものじゃい」と言って出ていって、違う職業とか違う価値観に触れて、自分の自明としていたことを一旦否定して、「でも

やっぱり、帰るべきところはここなんだ」ということで戻ってくる強さが、宗教者としての強さにもつながってくるし豊かさにもつながってくるのかな、と思いますよね。

岡田 やはり偏見は、変えてほしいと思いますよね。普通に考えてみたら分かると思うけど、普通に結婚して普通に子どもが生まれて親になったのに、その子どもに「地獄に堕ちる」と脅すなんてことは考えられない。普通は「この子に幸せになってもらいたい」としか考えません。ましてや、子どもに呪いをかけるような言葉は使わないですよ。「宗教団体に属している人は、そういうことを考える」と思うことがおかしい。

弓山 それは冒頭で言ったように、多くの日本人は宗教的な家庭のことを知らないので、何か特殊な考え方に支配されていて、「家を継がないと地獄に堕ちる」とか親が言うんじゃないか」と考えてしまうのだと思います。

岡田 私たちの子弟教育は、あくまでもその人の幸せを願い、どの人にも幸せな未来を見つけてほしい、という姿勢を大前提にしています。無理矢理に信仰を強制して、選択肢を与えないというのはおかしいし、そうではないはずですよ。

弓山 では、このあたりはゴチック体にして強調して記しておきましょう（笑）。

宗教者にとっての宗教リテラシー

林田 かつて、ハーバード大学に留学経験のある戸松義晴さんと話をしたとき、ハーバードをはじめとする神学部から派生した大学は、すべて大学院に宗教者の資格課程があると教えていただきました。つまり、法学部であったり商学部であったり、さまざまな勉強をして、多くの友達

と触れて、あるいは社会に出て、それから大学院で神父さんなり牧師さんの資格を取っていくというのです。わが日本も、そのようにすることができればいいのだろうなあ、と今でも思っているのですが、現状ではなかなか難しい。そういう意味では、先ほども申したように、宗教者としてのリテラシーを育てられるような授業を4年間のなかに組み入れていくのが、今の私たちができる精一杯のところなのかなと考えています。

弓山 宗教リテラシーには2つの面があるのではないかと思います。一般の人が宗教的な知識とか宗教的な文化のことを分かって人生がより豊かになるということも宗教リテラシーのなかにあるでしょう。それに加え、林田さんが何度か言及されていたように、宗教者が他宗教のことや、宗教以外のこと、例えば福祉とか看護とか医療とかを知ることによって、より深い宗教的な素養を身につけることも宗教リテラシーかなと思っています。

実践僧侶論は、必修になったと聞いて驚いています。私が大正大学にいたときはそうではなかった、むしろ受講生はそう多くなかったと記憶していますが、必修化に際して抵抗はなかったですか。

林田 「仏教や浄土宗の勉強をすればそれで立派なお坊さんなんだ」という思いがずっとあったのは確かですけど、それにプラスアルファで学びを深めるということは、そもそも江戸時代の僧侶養成に遡ります。江戸時代の僧侶養成機関である檀林では、3年で一段階で9段階の学びを進める「九部宗学」というシステムがありました。このなか、8部までは浄土宗・仏教の教学が中心なのですが、最後の9部目は「無部」と言って、何を学んでもいいというものです。最後の3年間で、例えば絵が好きな方は絵を、天文学が好きな人は天文学を、それぞれ勉強するんですね。そういうお坊さんが日本全国に散らばっていくことによって、各地方で寺子屋などができあがり、広く多くの人々の教育に携わり、高度な日本文化が育っていったのでしょうか。

そういう伝統を浄土宗では受け継いでおりますので、鷲見先生のような先生方が、宗教者のリテラシーを涵養する授業を組織づけてくださったのでしょうか。そうした浄土宗の形が、天台宗や真言宗にも、「こういう授業をやりましょうよ」「分かった」ということで、カリキュラムの見直しを図りまして、全宗門の学生さんが、実践僧侶論を必修で勉強するようになったということです。先ほど見ていただいたように、臨床宗教師の紹介や宗教法人の税務など、全14コマのなか、実に色々な講義を展開しています。

弓山 学生からのウケはどうですか？ 例えば、東工大でいうとリベラルアーツにすごく力を入れていて、社会的にも「博士課程まで教養科目があるなんて、すごいことをやっていますね」と言われますが、学勢調査という2年に一度の学生自身による世論調査をすると、かなりの学生は「やらされている」と思っているのです。「自分は数学がやりたくて入ってきたのに、なんでディスカッションの授業や、宗教学の授業をとらなければいけないんですか」とね。ですので、なかなか理解されないこともあるのかなと。

林田 この実践僧侶論という授業に関してはお坊さんのための授業なので、「宗教法人法的に言うと、卒業したらすぐに責任役員になるかもしれないだよ」「今、少子高齢化が進んで、墓じまいもどんどん進んでいること、お父さんとかから聞いているだろう」などといった調子で声をかけます。彼らはみんな大前提としてそうしたことを知っていますので、けっして他人事ではなく、いま先生がおっしゃったような「数学やりたいのにどうして哲学なんだ」というような意見は、ほとんどないですね。

岡田 むしろ、直接につながっていますよね。

社会貢献と子弟教育

弓山 天理大学の宗教学でもこういう社会参加の授業はあるんです？

岡田 天理大学の人間学部には、宗教学科と人間関係学科があり、人間関係学科には臨床心理専攻と社会福祉専攻と生涯教育専攻があります。現在、学部・学科の改組が進められていますが、基本的な枠組みは変わらない予定です。これらの専攻で学ぶ学生の多くが、天理教の教会の子弟なんです。だから、宗教学科のなかに実践科目を作るよりは、宗教学科の学生が学部共通の資格科目を取ったり、人間関係学科で学ぶ学生が伝道課程を履修したりするケースが多いです。

弓山 前から気になっていたのは、スピリチュアルケア師や臨床宗教師の養成プログラムに神職の方が大変少ないことで、つい最近も神道宗教学会の機関誌に「神道はなぜターミナルケアに携わってこなかったの



大正大学構内にある「鴨台観音さざえ堂」

か」という論文が掲載されて、死とか医療に関わりづらいという議論がなされておりました⁸⁾。

先ほど小平さんは「地域」ということが重要だとおっしゃられて、確かに、まさに地域の核としてお宮さんがあるのは十分に存じているつもりでいるんですけれども、しかしながら、スピリチュアルケアとか臨床宗教というムーブメントに皇學館大学も國學院大學もなかなか乗り切れていない感じがするのは、何か理由があるんですかね？

小平 なぜでしょうか。資格自体よく知られていないということもあるかもしれません。ただ神社は福祉に関わっていないのではなく、藤本頼生さん⁹⁾や、いま弓山さんがおっしゃった、ターミナルケアについて研究されている金田伊代さんのように、神道や神社と福祉の関係についての研究もなされています。

弓山 そうですね。ハンセン病の施設を回っているのですが、必ずお社があって、そうした悉皆調査まで行われています。あるいは皇室も大変力を入れて支援の手を差し伸べられているので、神道と病いやケアとは原理的に無関係とか関わりづらいとかということはないとは思いますが。

岡田 私の住んでいる地域の事例でいえば、最近近くの神社にご家族で移住して来られた宮司の方は、地域社会で色々なことを積極的にやっておられますよ。だから、そういう感じはあるんじゃないですか。

林田 経済的なことは関係ないでしょうか？ お坊さんの場合、副住職の立場などで臨床宗教師の活動を行い、病院に行ったりする余裕が少し多いのかなとお話を聞きながら思いました。

弓山 スピリチュアルケア師の養成講座や資格授与式に出たり、また臨床宗教師の講習会の開催をお手伝いしたり、現場を拝見するのですが、

パッと見て分かるのは、お坊さんとシスターです。臨床宗教師は特に僧侶が多い。

小平 実際に臨床宗教師とスピリチュアルケア師になったという方のお話を聞いたことがこれまでありませんでした。神職にもいらっしゃるのかもしれませんが。

弓山 私のゼミ生で、國學院大學神道文化学部出身で、今は上智大学でグリーンケアを学んでいる学生がいますが、神職は本当に、非常に珍しいと言っています。関連資料に所属教団の名前があって、「神道」と書かれていて、訊いてみたら、その方は天理教の人でした。

小平 残念ながら神職同士でこうした資格取得の話題になったことがありませんでした。関わり方が少し違うのかもしれませんが。臨床ですから現場に出てお話を聞くというということですね。

弓山 病院で傾聴するということですね。

小平 教誨師とか保護司とか、特に地域の中で福祉的な役職についての神職は多いと思います。

弓山 教誨師は多いですね。民生委員とかですよ、神職の場合は。

岡田 なかなか、こうした事業単位ですべての宗教がまとまるというのは難しいですよ。天理教の教誨師や保護司の活動の歴史は長いですし、あれに関しては浄土真宗と天理教がかなりの割合を占めています。

弓山 それと里親ですよ。そういう社会活動と、いわゆる子弟教育との結びつきというのはどうでしょうかね？

岡田 里親の活動などを支援する、教内のプログラムや組織なども充実しています。福祉関係の基礎的な知識を身につけるために、「ひのきしんスクール」という制度が設けられていて、社会活動に必要とされる、さまざまなニーズに応えた実践的な講座が開講されています。この講座を受講することで、ホームヘルパーの資格を取れたり、傾聴やカウンセリングの基礎を学べたりします。こういう基礎的な知識を教会長さんや信者の方々が学び、各地で実践するシステムをもう何十年も前からやっているんですね。だからなかなか、あえて子弟教育に結びつける、というふうにはならない。

小平 今のお話からは少しズレるかもしれませんが、社会貢献と子弟教育ということで話題にしたいのが、公立の中学校が地域で行う職場体験学習です。この受け入れ先となる神社は実は少なくありません。文科省は職場体験学習を「生きる力の育成」とうたっており、公立学校の90%がこの中学校の職場体験学習を実施しているそうです。

弓山 職場体験としてお宮さんに来て、一日神職みたいことをするわけですか？

小平 はい。あくまでも地域の職場ということでの受け入れですが、私たち神職や巫女が日々おこなっていることを体験してもらいます。こういう職場の体験学習でも、神社や神職というのはこういうものだということが少し伝えることができるのかなと思います。

岡田 いい傾向ですね。そういうのが広がっていくと、自然に。

小平 お寺さんではこうした体験学習への関わりはどうでしょう？

林田 そうですね。私が住職をしている慶岸寺では、そこまでの受け入れはありませんが、例えば夏になると捕らえた生き物を自然に戻す「放^{ほう}

生会^{じょうえ}」という法会があって、地元の生麦小学校の生徒さんたちが来て参加してくれます。そして、私が命の大切さをお話するという行事が続いています。とても大切な行事だと受けとめています。

小平 私の奉仕する神社では、中学生の職場体験学習で神社に来たことが一つのきっかけで、一般の家庭から國學院大學で神職資格を取得して神職になった職員がおります(笑)。多くの神社に、小学生が総合学習の時間などで地域や神社の歴史を勉強しにやってきました。こうした機会は子弟教育とは異なりますが、地域の子供達の教育をわずかでも宗教者が担うことにつながっていると思っています。

林田 お坊さん、神主さん、神父さん・牧師さんの全体を100%だととして、例えば保護司とか民生委員とか教誨師とかを担っておられる方が何パーセントで、専業・兼業でこのお仕事をなさっていて、といった統計的な数字を宗教学の先生たちが出していないと、神主さんの数が多いとか少ないとかは言えないのかなと思いました。

これからの子弟教育に必要なもの

弓山 最後に、豊かな子弟教育とは何なのか、現状のプログラムを更新したり、洗練させたりして、よりよい子弟教育にするためにはどんなものがあるか、というアイデアをいただけますと、この座談会を読んだ他宗派の人々が「あ、なるほど」と喜んでいただけることになると思うんですけれども、いかがでしょうか？

岡田 一気にハードルを上げてきましたね(一同笑)。

弓山 他宗派の人はすごく「他所はどうしているのかな」と気にすると思うんですよ。きっと、皇學館の人は「國學院はどうしているのかな」とか、真言宗智山派の人は「林田さんは何を言っているんだろう」と。

岡田 すごく個人的な意見になってしまいますが、よろしいでしょうか。やはり宗教学を勉強したからというのものもあるんですけど、ウィリアム・ジェームズ(1842~1910)が言うように、「宗教的経験」が人生を大きく変えることがある、という意識を持つことが重要だと考えています。「士、三日会わざれば、刮目して相待すべし」という言葉もありますが、人は何かをきっかけにして大きく変わります。とくに若い世代の人はそうです。たとえば、野球を一所懸命にやってその指導者に影響を受けて、大きく人生が変わる人もいるでしょう。さまざまなきっかけがあるなかで、やはり私としては、宗教的・信仰的な体験のもつ意味は大きいと考えていますし、信仰活動を通して得た経験が、彼らの人生を支える力になると信じています。とはいえ、指導者として学生を教導くというような姿勢ではなくて、とくに私の場合は、教会本部を中心とした天理市の宗教的な空間のなかで、友人や周囲の人たちとともに祈りを捧げる時間を過ごしながら、自分自身が感じた経験を大切にしていきたい、と思ってこれまでやってきました。そういう意味では、まったく強制なんてありえないですね。この場所とともに暮らしているあいだに、色々なことを自分で考えてみよう、と。そして、その自分自身の見つけた何かが、きっと彼らの人生を支える大きな糧になる、という姿勢でやってきました。

私が指導することは、「せっかく天理で学んでいるのだから、大学に来る途中に神殿で参拝したらいいんじゃないの」とか、「祈りの時間を増やすと、きっと何か変わるよ」といった声をかける程度です。教会本部では、毎朝日の出の時刻に「朝づとめ」がつとめられます。夏場は、午前5:00くらいの期間が続きます。やる気のある学生には「もし4年間、毎日朝づとめの参拝を続けられたら、きっとあなたの人生変わるよ、嘘だと思ったらやってごらん。やってみたら、本当だと分かるから」と言うことはありますね。とはいえ、それは「教導く」というような上からの指導ではありません。ともに同じ空間や時間を共有して、そのなかで感じるものを大切にしていきたい、という感じですね。そういう意味では、恵まれた立地なのかもしれません。

弓山 ありがとうございます。林田さん、どうでしょう。

林田 先ほど、学生たちが、お父さんやお母さんの後ろ姿とか、お檀家さんに可愛がってもらったりとか、そういうプラスの部分が必ずあって僧侶の道に入ってきてくれるという話をしましたが、それこそ、お坊さんとしてのやりがいや生きがいにつながっていくと思っています。大正大学のカリキュラムツリーでは、1年生2年生で仏教学や浄土学の基本を勉強して、3年生になってそれらを人に伝える「伝道学」という授業があります。浄土宗の場合、「五段法」というお話の仕方を組み立てるよう指導します。「讚題・法説・譬喩・因縁・合釈」という形をとるのですが、例えば法然上人の「ただ一向に念仏すべし」というお言葉をいただいて（讚題）、その意味を伝え（法説）、例えるならばこういうことですよと伝えます（譬喩）。そして、因縁話に続くのですが、ここがお説教のもっとも大切なところなんです。例えば、「今まで何か宗教的・信仰的に感じたこととかはないの？」などと尋ねます。すると、例えば「友達が交通事故で亡くなった」とか、あるいは「自分のおじいちゃんが高校生時に亡くなって、“頼むぞ”みたいなことを言ってくれた」とか、色々なことが少しだけ出てくる。そういう因縁話をきっかけにして信仰の大切さを感じ取ってもらい、それを自分の口から人に伝えるということが、逆に自分自身の信仰を育てていくことになっていくんですね。それこそ、この店の餃子が美味しいから、この餃子を他の人に食べてもらいたい、というのと同じように、浄土宗であれば浄土宗の信仰の素晴らしさを人に伝える部分が大切であり、信仰を育てていくんですね。もちろん、高度な宗教体験・人生経験などありません。ちっぽけな体験しかないけれども、そのわずかな宗教体験をしていたことを見つけながら、一所懸命、はじめての法話を組み立てていくんですね。例えば「おじいちゃんが亡くなってすごく悲しかった。でも、こんなにみんなが悲しんでくれて、おじいちゃんって偉かったんだなあ、おじいちゃんが日頃こういう生活をしてたからお檀家の方がみんな泣いてくださったんだなあ、自分もお坊さんになるにあたってこういうお坊さんになっ

ていきたいです」という話をお檀家さんが聴いたら、「うちの若住職もがんばっているなあ、頼もしいなあ」と受けとめていただけるわけです。その上で、最後に「それでは、そんな尊いお念仏をご一緒にお称えいたしましょう」という合釈に持っていくのです。

そういう意味で、彼らがお坊さんとかお寺とか宗教とかというものに対して、自分自身が体験したなかで感じた良い話、素晴らしい話を、ちっぽけなものかもしれないけれど、それを見つけて育て、少しずつ大きくしていくということが、立派なお坊さんになっていくための礎になっていくんだろうと思います。そして、それを一緒に見つけて育てていくのが私たち教員の仕事であるんだろうなあ、と思っています。そうした伝道学などの授業を経て、浄土宗であれば、3年生の12月に伝宗伝戒道場という厳しい行があって、浄土宗僧侶の仲間入りが果たされます。行を終えた後、みんな目に涙を浮かべ、伝巻をいただきながら大本山増上寺の大殿を颯爽と出てくる姿は、毎年私ももらい泣きをしてしまいます。宗教者には、大なり小なりそういった宗教体験が必要なんだろうなと思っています。

弓山 ありがとうございます。小平さん、いかがでしょうか。

小平 子弟教育の一つの事例ということで、現在担当している授業についてお話しさせていただこうと思います。神道に関する様々な勉強をしてきて、卒業を控えた4年生の後期に履修する授業で、自分が「神職として何を伝えたいのか」という神職の自画像を描いてもらおうとしています。グループ学習を経て、最後は一人一人教化活動の企画をたててプレゼンしてもらい、教員も学生も一緒になってどうしたら実現できるか皆でコメントを出し合って考えるという授業です。

「何を伝えたいか」は、結局自分がどんな神職として生きていくのかということとつながっています。お参りにやってきた神社の神職が、良い顔をしていなければ、参拝者の方々への説得力が全くないですよ。皆さんをお迎えして気持ちよく帰っていただくためには、まずは自分も

幸せを感じながら、しっかり生きていかなければいけないということが前提になると思います。神職というのは神様と人々との「仲執り持ち」ということですから、神様のことについて、詳しくなければいけないのですが、神様の方だけを向いていてもダメで、今を生きる人たちがどんなことを求めているのか、神社にどんなことを求めているのかということが分からないといけなわけです。両方に心をよせつつ、自分でしっかり考えていかなければいけないんだよということを、教員というより、むしろ神職として少し先を歩く仲間という思いで学生さんたちに伝えています。

弓山 分かりました。どうもありがとうございます。

先生方のお話を聴いて、やはり体験を自分の言葉で語るというのは当たり前前といえば当たり前なんですが、それが上手いこといくと、自信につながり、それがさらなる説得力のある言葉になっていって、よりいっそうの成功体験につながっていく。こうした言葉と体験のスパイラルを作っていくことが、より豊かな子弟教育に結びついていくのかなと思わせていただきました。そしてそばにいるけど外側の宗教研究者は、もっとという国際宗教研究所は、この言葉と体験の循環のお手伝いをするのが使命の一つなのかもしれません。多くのことを学ばせていただきました。どうもありがとうございます。

注

- 1) 子弟教育との関係では、浄土宗総合研究所による『教化研究』第12号（2001年）の特集「僧侶（宗教的指導者）養成の総合的研究」に、鷲見定信「宗教的人格養成のために」、林田康順「法然上人に学ぶ宗教的指導者像」などが掲載されている。
- 2) 弓山達也責任編集・財団法人国際宗教研究所編『現代における宗教者の育成』（大正大学出版会、2006年）。今回取り上げられる天理教・神社神道・浄土宗の宗教者養成についても関連論文が載っている。

- 3) 吉水氏による近年の活動については、本誌前号の座談会「地域ケアでつながるお寺と「支縁」団体」も参照されたい。
- 4) 澤井真「信条教育とその意義—天理教の宗教教育の成立と展開—」(『天理大学おやさと研究所年報』第29号、2023年)。
- 5) 釈徹宗「宗教・社会・家族のダイナミズム」(横道誠編著『みんなの宗教2世問題』晶文社、2023年)の議論。
- 6) 2023年2月の第6回「宗教文化士の集い」で、櫻井義秀氏が「宗教リテラシーの低下がカルト問題を拡大する——統一教会問題から考えるべきこと」と題する講演を行い、後藤絵美氏がコメンテーターを務めた。
- 7) 2006年公布・施行の新教育基本法では第15条となり、「宗教に関する一般的な教養」の尊重が追加された。
- 8) 金田伊代「神道はなぜターミナルケアに携わってこなかったのか」(『神道宗教』第266号、2022年)。
- 9) 藤本頼生『神道と社会事業の近代史』(弘文堂、2009年)。

特集 試される宗教リテラシー

神学的実践と宗教リテラシーの間を 感受する試み

— 輪講「諸宗教における自然と人間」を通して —

原 敬子¹

宗教リテラシーとは誰を対象とした営為なのか。宗教リテラシーが宗教を得体の知れないものと不安に感じる人びとへ知的理解を促すためだけに存在するのではなく、既存の宗教に所属している人びとの実践でもあることを論じていく。

¹ はらけいこ：上智大学神学部教授

はじめに

「わたしはカトリックのシスター、宗教者です」と自らを名乗って行う「キリスト教人間学」という授業を15年ほど担当している。最初の授業でこのように自己紹介すると学生たちは必ずわたしを奇異な目で見ると。この授業はいわゆるキリスト教系大学の必須科目で、登録者の多くは初年度の学生たちである。自己紹介にいく前の学期初めの注意事項までは下を向いていた人たちが、「宗教者です」と言うと、ふと顔をあげる。その眼差しを浴び、「ああ、今年も始まったな」と襟を正す。15年間、毎年、「宗教者と名乗る」存在を初めて目にする学生たちの表情を受入れ、1クール14回の出会いを通し、「わたしという奇妙な存在」を紹介して、彼らが宗教と交わる姿を見つめて来たのだと感慨深く思う。

人前で「宗教者」であると名乗り、「宗教としてのキリスト教」を語る準備に15年、語り始めて15年、全体としては30年の月日を、このような働きに費やした今、これらすべての行為はいったい何だったのかと思い返すと正直なところ複雑な気持ちになる。何も創作していない。出来上がったものを自分の手に取ることもできない。何かの名誉が付与されたのでもない。はからずもキリスト教系の大学に雇用され、大学の精神的基軸であるキリスト教をユニバーシティ・アイデンティティとして学生に伝えるというミッションを押し、わたしとしては忠実に果たしているつもりであるが、そうでなければ一介のキリスト教信者、それ以上でもそれ以下でもない。しかし、この複雑な気持ちのもっと奥に入って内省してみると、昨今話題の「宗教リテラシー」という語に、どこか響き合うものがあることに気がついた。宗教リテラシー、日本のメディアにおいては、2022年の旧統一教会を巡る事件から突如として耳目を浴びるようになった概念である。

わたし自身、第一義的にはキリスト教信者であり、主体的にわたしの信仰するキリスト教を語っている¹⁾。もちろん授業は公共の場であり、学生を既存の宗教に勧誘すべきではない。しかし、いくら中立な立場でキリスト教を伝えようとしても、わたし自身が宗教者である限り、宗教

／非宗教の深い淵を越えて、あちら側に行くことはできないのである。学生は非宗教者の立場を最後まで保持し、わたしは宗教者の立場を保持する。そこで気づいたのが、公共圏における宗教を検討しようとする宗教リテラシーの存在であった。この両者の深い淵をかろうじて渡らせようとする細く、脆い、小さな橋、それがまさしく宗教リテラシーなのではないか。そして、それは、わたしが15年かけて学生たちと出会い、議論を交換し合って、やっと掴みかけてきたもの、人を涵養していくエネルギーのようなもの、養分のようなもの、あるいは、包み込むやわらかな光のようなもの、それが、宗教リテラシーなのではないか——。こんなふうに考えるようになった。

宗教リテラシーは宗教学においてかなり多くの研究がすでにある²⁾。わたしは一介の宗教者でしかなく、宗教学は門外漢であり、あくまでも神学者という立場から宗教リテラシーを考察しようと思う。それがわたしの研究態度の限界であり、そのような立場から社会に貢献したいと心から願うものである。

したがって、本稿において、筆者は「わたし」という主語を用い、まず、わたし自身が公共圏とキリスト教の関係をどのように理解しようとしているか(1)を述べ、次に、公共圏に存在する諸宗教に、この「わたし」が[・]出[・]会[・]う[・]こ[・]と[・]で[・]成[・]立[・]す[・]よ[・]う[・]な[・]授[・]業[・]の[・]事[・]例[・](2)と、そこに招かれた学生たちが何を感じたのか(3)を紹介し、最終的に、宗教／非宗教の淵は、実は、[・]宗[・]教[・]者[・]の[・]宗[・]教[・]性[・]／[・]非[・]宗[・]教[・]者[・]の[・]宗[・]教[・]性[・]という、多様で豊かな複数の宗教性の感受の場であり、宗教者にとっては神学的実践、非宗教者には宗教リテラシーを実践することである(4)と論じていきたい。

1. シノダリティ——公共圏と信仰

公共圏の理解に関して、ここでは、ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』を参考にしたい。ハーバーマスによれば、公共性の社会的構造には従来、基本的構図が存在していたが、現代、この構造は消滅し、市民的公共性が崩壊したとされる。

市民的公共性は、公権力の領域としての国家（以前の宮廷、王）とは完全に区別され、支配側には存在できない私人の領域、私的（民間）領域、小家族単位の親密な生活圏に存在する。ハーバーマスの指摘は、公共性の社会的構造は、ここでいう私人（私的）領域から公共へと向かう私的な関心という土台が基本となっており、この基本が衰弱した場合には公共性そのものが成り立ち得ないというところにある。

公共的論議の自己理解の特色は、小家族の親密な生活圏において公衆に関心をもつ主体性から由来する私的経験にみちびかれていることにある。この小家族の親密圏は、私的存在の——みち足りた自由な内面性という近代的意味における私的存在の——歴史的水源地である³⁾。

この主体性が「文芸的公共性」（近代におけるカフェやサロン）としての自由な討議空間を経て政治的公共性に参与するという市民的公共性がかつて存在していた。しかし、19世紀以降の「新重商主義」の政治、国家の干渉政策の加速化に際し、「社会の国有化が進むとともに、国家の社会化が貫徹するという弁証法こそが、市民的公共性の土台を（国家と社会の分離を）次第に取りくずし」⁴⁾、市場経済とメディアの興隆により、文芸的公共性は「文化を論議する公衆から文化を消費する公衆にいたる途上で」⁵⁾ その固有性を喪失した。私人の領域の生活圏において歴史的水源地である公共性はかつての王権時代とは別な意味でもはや存在しないという理解である。

宗教学の興隆、そして貢献は、こういった19世紀以降の——宗教に代表されるような——私人の内面性と公共性の融合した水脈、その破壊に対して唯一異議を唱え、踏ん張って来たその証なのであろう。「わたし」のような宗教者と自らを名乗る者たちは、実に、多くの宗教学者の弛みなき営為の途上で、その存在意義を認めてもらい、生かされてきたといえる。

そこで、公共圏に宗教的意義を接続させる多くの試みの中でも「他者

論」「異人」という概念を用い、アプローチする二つの論考をみていきたい。

一つは、磯前順一の「公共圏なき公共宗教論」⁶⁾である。磯前は、「宗教の他者論的転回」として、次のように宗教と公共性の問題を説明する。磯前は「結局のところ、『宗教』とは、その指し示すところのものをどのような名前で呼ぼうとも、謎めいた他者と主体との交渉の過程であり、その共約性のもとに共約不能な複数の主体が一つの公共空間を作る術にほかならない」⁷⁾と述べ、脆弱な主体は、放っておけば容易に均質化の方向へと向かおうとする傾きがあるが、これに対して、宗教こそが他者となり、他者へと開かれる鍵を握る、このような「余白を挿入する行為」こそが、宗教の役割であると述べている。つまり、決定的な他者論として、宗教を理解しようというのである。

もう一つは、中川明の『妖怪の棲む教会』における「異人」論である。中川は、自身がカトリック教会の司祭として長年、宣教論を唱えており、教会における異人性についての論考を発表している。「私」を取り巻く「日常生活の現実」には、自分の「意識」が及び、さらには「我々」という親密な他者による共同体の存在がある。しかし、「我々」とは呼べない「彼ら」が、自分たちの日常に侵入してくる場合がある。その時、「我々と違う」と感じ、それを「異人」と名づける。

中川は、神と出会うためには「頑固な現実」と出会う必要があり、この「頑固な現実」こそが「異人」であるという。

「私たち」の一員である「私」は「彼ら」の全員と出会うわけではありません。「私たち」が接するのは、「彼ら」の中のごく一部です。そういう意味で、「私たち」にとり異人とは、「彼ら」全員ではなく、「私たち」と出会う「彼ら」の内的一部分なのです。異人ですから、「私たち」とは違うという印象を与えるし、不愉快な感情をもたらすでしょう。しかし、同時に、「私たち」と出会っているのですから、「私たち」全員と「彼ら」とを結びつける紐帯ともなり得るのです。「キョウカイ（境界）の上に教会を建てる」なら、境界領域に住

む「異人」が必要です⁸⁾。

中川は、この「異人」こそ、司祭の役割であると述べ、宗教者の独自の存在意義を主張している。異人は、境界領域に住む。ここでの「キョウカイ」は音としての「教会」と「境界」をかけている。

ここで中川は、公共圏なきところに宗教の意義を持ち込み、人間の内面性を引き受け／引き出すような新たな公共性を生み出すために、宗教者が一役を担う可能性を探っているのだと思う。宗教者側からすれば宣教の可能性、一方で、非宗教者の一般市民からすれば、逆に、大きなお世話ということになる。しかし、ハーバーマスのいうところの「歴史的水源地の回復の契機」にもなる可能性を秘めている。

ハーバーマスのいう公共圏の崩壊を何とか打開するために宗教学や教会司牧からの接近を試みるには、余白の挿入や、時に立ち現れる境界という閾、空間におけるコミュニケーション、討議の場の確保というものが前提となる。この世と宗教（キリスト教的文脈であれば「教会」）が二項対立的な位相にあり、その両者は混じり合えないと断念するのではなく、第三の閾を措定しなければならない。ハーバーマスは「自由に漂っているさまざまな価値、主題、論稿、論拠が入りこめるものであり続ける場合に、さまざまな団体によって組織される意見形成が責任ある決定につながれば、それは協力し合って真理を探究するという目標を達成できる」としている⁹⁾。第三の閾においては、討議の可能性が開かれるのである。

現在、カトリック教会において全世界的に展開されている「シノドス Synodos」¹⁰⁾という動きは、第二バチカン公会議終了後より、50年以上、繰り返してきた教会刷新の一つの試みである。シノドスにおいて採用される方法論は、そこに参与する人びととともに、討議の場と討議項目を創生しようとするものであり、この原動力は、まさに公共圏の崩壊に立ち向かう宗教からの挑戦の一例であるといえよう。

「シノドス」という語を説明するのは大変難しい。おそらく、「カトリック教会」という言葉を説明する場合にも、百人いれば百通りの説明

がなされるように、司祭や神学者がシノドスという語を説明しようとするれば千差万別な説明がなされるはずである。カトリック教会内に所属していても、よく理解できていない言葉が山ほどある。よく理解できないながらも、その語を用いて何を試みようとしているか探りながら共通の信仰を生きようとしている。

今回の「シノドス、世界代表司教会議」は、「シノドスのシノドス」とも呼ばれ、「シノドス」という集い方自体についての探究に主に時間が費やされている。「ともに、道を歩む」というテーマを深める会議であり、あらゆる事柄について「討議」あるいは「霊における対話」というメソッドにおいて進行される。討議するテーマでさえも討議によって決められる。2021年、地方教会での討議結果が収集され、各国で要約され、それがバチカンにおいて収集され、さらに討議されるというプロセスを経て、3年目を迎えた2023年10月現在、各国からの代表者による会議が開催されている。

2022年10月に発表された「大陸ステージのための作業文書」¹¹⁾において、「誰も排除されないという根源的な包摂への願い」¹²⁾が述べられた。第一期における地方教会の取り組みをふまえた上で、「回心と改革の旅」¹³⁾を、さらに推進していくという決意が強固なものとされた。シノドスのメッセージは単純で、開かれており、各々が自分の場を見つけ、ともに歩み、ともに座ることを学ぶと語られる時、「誰もがこの旅に参加するよう召され、誰一人として排除されることはありません」¹⁴⁾と、ともに歩むのは誰なのか、誰も排除しないのだと繰り返し強調されている。

今回のシノドスでは、終始一貫して「誰も排除しない」と言い続けた結果、現代の宣教の葛藤、あるいは古^{いにしへ}から教会が抱えてきた「内へ／外へ」という根源的な葛藤の観取に至っている。ひと昔前、教会のすべきことは何かと言った時、「司牧か／宣教か」「刈り入れか／種まきか」の両論で頻繁に議論されたことがあった。今でも「内に向かう（司牧）／外に向かう（宣教）」と単純に考える人は少なからずいる。しかし、この「内へ／外へ」という問題は、あたかもそれが異なる行為かのような錯覚に陥ることから葛藤するのであって、「共通の家 (common home)」

におけるケア¹⁵⁾という俯瞰した視点から理解すれば乗り越えられるのである。

カトリック性は、普遍教会と地方教会の間の**相互の内面性 (mutual interiority)**の関係において実現され、その中において、また、そこから「唯一単一のカトリック教会が存在する」(教会憲章、23項)のです¹⁶⁾。

「カトリック性は、普遍教会と地方教会の間の相互の内面性の関係」に実現する。カトリックとは、そもそも普遍性を意味している。したがって、カトリック性は普遍性と考えるが良い。しかし、次に、普遍教会とは何かという問いであるが、この普遍教会という概念を理解するためには、おそらく信仰を享受することが必要である。そうでなければ理解できない概念であろう。普遍教会という確固とした建物の教会が君臨しているのではない。まして、パチカン市国に存在するあの聖ペトロ大聖堂を指しているのでもない。そうではなくて、イエス・キリストによって見出された信仰の礎、その周辺に居合わせた初期の弟子たちによって創設された原初の教会から現在に至るまでの歴史を継承し、そして、今、この地球上に散在する信仰者の集合体、つまり、時間と空間の総体を包含する教会という概念のことを普遍教会という。地方教会はその名のとおり、全世界に今、現在存在する具体的な教会のことであり、そこに集う信者のことである。

この「普遍教会と地方教会の間の相互の内面性の関係」が織りなされる場はどこであろうか？ それはとりも直さず、信者として、信仰者として今、存在している「わたし」においてであり、ともに信仰共同体を創っている「わたしたち」においてである。したがって、わたし自身／わたしたち自身は公共圏に開かれた交わりの存在であることを意識し、その地点において、「霊における対話」(神学的実践)を行う。

中川のいう「異人」である「わたし」は、わたしたち／彼らの境界線上に身を置く「わたし」であり、「内へ(わたしたち)」「外へ(彼ら)」の対

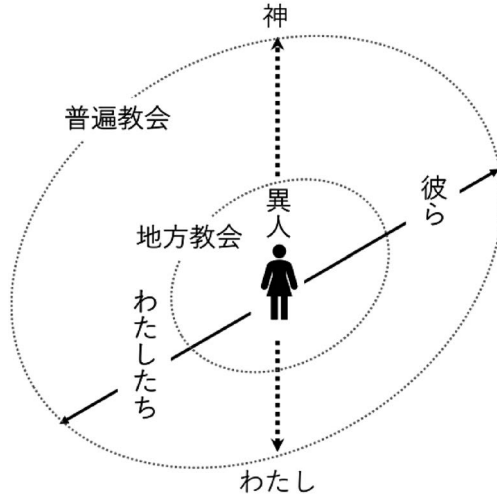


図1

話（横軸）の相互的内面化を行うとともに、宗教者として、自分自身の身を置く具体的な場（地方教会）と、神を志向する超越性のベクトル（縦軸）が形成する普遍教会との境界に立ち、祈りのうちに相互に内面化の作業を行う（図1、著者作成）。この一連のプロセス全体のことを「霊における対話」と言っているのであろう。

もし、普遍教会の在りようが人類の志向する公共圏（もしくは、公共善）にかけ離れていたとしたら、宗教の存在意義が疑わしくなる。したがって、相互の内面性の作業を行うということは、すなわち、異人としての「わたし」に識別の態度が求められるということだ。

2021年から開始されたシノドスは、2023年、2年を経過し、次のフェーズへ移行する上で「霊における対話」の作業に必要な詳細なワークシートを作成した。現代の地方教会における課題は何か、どのようなファシリテーションが求められているか、いかにしてカトリック教会が継続していけるのか。これらの課題についてどのような探究の仕方をすればよいか。こういった方法論の研究が続けられている。このワークシートは、ともに道を歩む（シン・ホドス）ための羅針盤的な役割を担

うような神学的ナビゲーションであり、それを実行する人間がいなければ用をなさない。

2. 輪講「諸宗教における自然と人間」

わたしはキリスト教系大学の中でも、カトリック系大学の神学部に所属し、学部以外の全学生に向け開講されている全学共通科目の中の基盤教育群¹⁷⁾、キリスト教人間学領域の初年度学生必修の科目と、二年次に開講されるキリスト教人間学の展開領域として「祈りの人間学」という授業を担当している。この科目群がいわゆるキリスト教系大学におけるユニバーシティ・アイデンティティの授業ということになるが、それとは別に、全学共通科目としてすでに開講されていた「諸宗教における自然と人間」という輪講科目を2020年より前任者から受け継いでいる。輪講科目で、諸宗教、それぞれの専門家が入れ替わり立ち替わり講義をする趣向である。コーディネーターを受け持つわたし自身にとっては、諸宗教の専門家と対話のできる絶好の機会である。

輪講「諸宗教における自然と人間」の授業概要と目標、授業計画は以下のとおりである。

(a) 授業計画

・授業の概要

本講義は、環境教育の一環として、宗教・倫理・哲学の学問分野をふまえ、「自然-生命-人間」のかかわりについて、輪講形式で多角的に学ぶものである。人類の歴史に深く密にかかわる宗教思想（ユダヤ-キリスト教、イスラーム、インド宗教、中国思想、仏教、神道）を学ぶことがベースとなるが、特に、それぞれの宗教の根源にある「人間の自省」という点にアプローチしたいと考えている。諸宗教の根底に流れる霊性の経験に近づくことによって、人間と人間を取り巻く世界との関係性を今も生きるわれわれが、いかにしてその関係の再統合に向かうことができるのかを探究していきたい。

・到達目標

教皇フランシスコの回勅『ラウダト・シ』には、「人間性の刷新なしに、自然とのかかわりを刷新することは不可能です。適切な人間論なしのエコロジーなどありません」(118)と記されている。現代社会における環境・エコロジーに関する諸問題への解決のためにあらゆる面から取り組む必要があり、実践されているが、この授業ではその解決の一つとして「人間性の刷新」という根源的な問いを基軸に置き取り組んでいく。

この授業が到達したいと考える目標は、諸宗教がこれまで取り組んできた「人間性の刷新」をいかにしてわれわれが「自己の刷新」として受容できるかという点にある。「人間論としてのエコロジー」というテーマに深く切り込んでいくことが授業の到達目標であり、受講者にはこの理解が求められる。

・授業計画

- ①コース概観およびオリエンテーション／原敬子(神学科)
- ②ユダヤーキリスト教における自然・生命・人間(1)／久保文彦(基盤教育センター)
- ③ユダヤーキリスト教における自然・生命・人間(2)／久保文彦(基盤教育センター)
- ④イスラームにおける自然・生命・人間／久志本裕子(総合グローバル学科)
- ⑤インド宗教における自然・生命・人間(1)／置田清和(国際教養学科)
- ⑥インド宗教における自然・生命・人間(2)／置田清和(国際教養学科)
- ⑦東洋思想における自然・生命・人間(1)／中田英之(泉州統合クリニック)
- ⑧東洋思想における自然・生命・人間(2)／中田英之(泉州統合クリニック)
- ⑨アクティブ・ラーニング／中田英之(泉州統合クリニック)
- ⑩仏教における自然・生命・人間(1)／寺尾寿芳(実践宗教研究科)
- ⑪仏教における自然・生命・人間(2)／寺尾寿芳(実践宗教研究科)

- ⑫神道における自然・生命・人間(1)／菅浩二(國學院大學神道文化学部)
- ⑬神道における自然・生命・人間(2)／菅浩二(國學院大學神道文化学部)
- ⑭環境と靈性／原敬子(神学科)

すべて100分間一コマの授業のうち、講師におよそ60分～70分の講義をお願いし、残りの30分間を学生からくる質疑への応答時間とした。コーディネーターであるわたし自身、毎回、この授業に参加し、ある時は学生を差し置いて質問が溢れ、担当講師に対して語りかける場面が多かったこともあり、学生からの問いかけをもっと引き出すべきであったと反省するところも多い。いずれにせよ、担当された講師はすべて当該宗教の専門家であり、さらに、専門知識だけではなく、宗教実践者、つまり信仰者であるということも、わたしだけではなく学生にとっても大変刺激的だったのではないかと思う。

(b) 宗教リテラシー

諸宗教を学ぶという時、その方法論としては、各宗教の専門家(場合によっては実践者)が次々に登壇し、個々の宗教について、その教義、靈性、組織(制度)形態等を説明するというかたちで行われ、学習者は相対的に様々な宗教への理解を深めていこうとするのが通常であるし、本授業も基本的にはその線に従っている。しかし、単に、各宗教の特徴の間にある差異を判別し、知識として理解しただけでは宗教リテラシーを身につけたとは言えないであろう。

宗教リテラシーの定義については2006年にアメリカ宗教学会(AAR)によって採用された次のものが参考になる。

宗教リテラシーとは、宗教と社会／政治／文化的生活との基本的な接点を、複数のレンズを通して識別し分析する能力を意味する。具体的には、宗教リテラシーのある人は、1) 特定の社会的、歴史的、

文化的文脈から生まれ、それによって形成され続けている世界のいくつかの宗教的伝統の歴史、中心的テキスト（該当する場合）、信仰、実践、現代的表現についての基本的な理解、そして、2) 政治的、社会的、文化的表現の宗教的側面を、時代や場所を超えて識別し探求する能力を有する（私訳）¹⁸⁾。

宗教リテラシーが求めている能力について以上の考えに基づくならば、図1で考察したところの相互的内面化は、図2のように理解することができるのではないだろうか。まず、宗教と非宗教の境界線を引くのは人間の意識である。したがって、社会／政治／文化的生活が非宗教的であるとするならば、人間の意識の中に、宗教と非宗教の境界が存在することになる。そして、その接点を識別し分析する能力を備えた人間に成長するためには、人間自らが洞察の作業を行わなければならないだろう。したがって、他者へと開かれる余白を挿入する閾、空間はまさしく自分自身ということになり、否応なく「異人」の位置に宗教リテラシーを学ぶ人は立たされることになるのである。

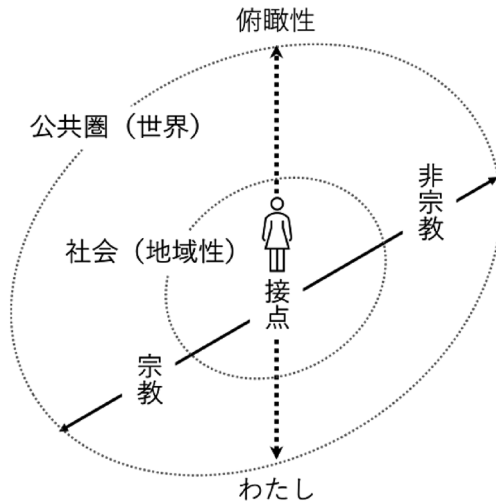



図2

本授業の第一回は、コーディネーターとして授業の概要を話す、近年の宗教事情や、宗教法人法、宗教の一般的知識を述べたあと、「所有と存在の2つの認識」というエクササイズを行なっている。スライドでは以下の2枚となる（筆者作成）。

4.所有と存在の2つの認識

わたしは、
からだを持っている（所有）
からだそのものだ（存在）



エクササイズ：所有と存在のレッスン

今、これまでになく「私は体を持っている」ことを意識する。

どこかよそにいるのではない。体は時間に刻印を押されている。50歳の私が25歳の頃の私と同じ努力を求めても無理だ。体は私の歴史の目に見える痕跡なのだ。

「私は体を持っている」（所有）

次に、今、私は「私は体そのものだ」と感じてみる。この体は私の外部にあり、私が所有している物体などではない。私は私の体を所有できない。しかし、私は単にこの体そのものだということに十分だろうか。健康診断で数値化されるような物理的に、科学的に、生物学的に分析され、記述され得るこの体が私なのだろうか？

「私はこの体そのものだ」（存在）

体は私を、空間と時間の中に位置付けてくれる。いま、ここに、現実に対して私を開かせてくれる。私はここにいる。この場所にいる。

私の体という一つのリアリティに「所有」と「存在」という二つの認識の側面がある。

各宗教の成立や特徴、テキストや歴史に関して通時的に学び、それを理解することは必ずしも困難なことではないだろう。自分は非宗教者だという立ち位置に留まり、顕微鏡を覗くように宗教の専門家や実践者が語る

内容を見ることはできる。しかし、そのような次元で本当に宗教を理解したと言えるのだろうか。宗教を理解するためには、自らの体を観察できるだけでなく（所有の次元）、自らの体そのものとして了解する（存在の次元）ように、宗教の次元に足を踏み込んでいかなければならないのである。

ある意味で、このようなことは今まで一般的には回避されてきたのではないだろうか。洗脳の危険や、勧誘という言葉でタブー視されてきた面が大きい。公立学校で宗教が取り扱われなかったこともあまりにも中立性を重んじた面が強かったのではないだろうか。しかし、宗教の本来的な豊かさ、伝統における知恵を享受し、その働きを認め、世の中に還元しようと思うなら、相互的内面化の作業を軽視することはできない。

3. 学生のレポートからの分析

コーディネーターとして「宗教リテラシー」について、わたし自身、心底研究ができていた状態ではなかったこともあり、授業開始当初は「近年その必要性が唱えられている『宗教リテラシー』の観点からもこの授業を捉えてほしい」とのみ学生に伝えたに留まった。しかし、各回の学生と講師の質疑応答、毎回のリアクションペーパー、そして、最終レポート等を見ると、わたしの想像以上に、学生たちは宗教と社会／政治／文化的な生活との接点を感受しようと試みていたことがわかった。

ここでは、学生の最終レポート（72名提出）から、彼らがどのような意味を本授業に見出したかを図2で検討した位相に照らしながら抽出してみたい。最終レポートの課題は次のとおりである。

メインテーマとして「諸宗教における自然と人間」を置き、各自、これに「サブテーマ」を付け、3000字～4000字で自由レポートを作成する。参考文献は、各授業で講師が挙げたものでも、自分で探したものでも良い。この授業を通じて、あなたが考察し、深めたいテーマを掘り下げてください。

以上、自由な課題を提示した。

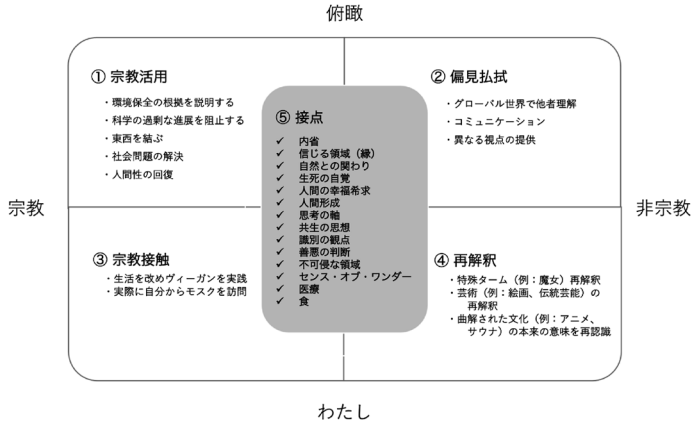


図3

提出されたレポートは、各自の興味があつた授業の宗教について深掘りをするというスタイルが多く、その選択に関しても、キリスト教、イスラーム、ヒンズー教、東洋思想、仏教、神道と偏りなく選ばれていた。筆者の分析は各宗教の特色に左右されずに、彼らのレポート内で本授業の意義、効用等に言及された箇所を抽出しカテゴリーに区分するよう心がけた。

その結果、図2の位相に照らし、図3のように5つの項目に集約した：

- ①宗教を社会のために積極的に活用する意義を見出す (①宗教活用)
- ②諸宗教の授業のような試みで偏見を払拭する (②偏見払拭)
- ③自ら当該宗教に接触、実践を行う (③宗教接触)
- ④社会／政治／文化的生活の再解釈を行う (④再解釈)
- ⑤宗教リテラシー：宗教と社会／政治／文化的生活の基本的接点を見出す (⑤接点)

以下、各項目で記されたいくつかの例をあげておく (文章内の「」書きはレポートからの引用)。

- ①宗教を社会のために積極的に活用する意義 (①宗教活用)

宗教側の人間だと思っているわたし自身にとって、学生の側から宗教

の社会での活用を提案されるのは驚きであった。彼らのレポートの中には衰退傾向にあるキリスト教の宣教に携わる人びとに励ましを与えるような記述がみられる。「宗教を踏まえた自然観を実践に移すことができる状況の構築が必要であり、その普及のためにはより広範な分野との協同が必要」、「科学から見た宗教や宗教から見た科学という視点を持つことで、両者のより良い関係性を構築していくことが可能であり、それが非常に重要な鍵になる」など、宗教者がもっと社会の中で人びとと出会い、対話するように促している。また、「神がない現代の日本では、何かに救いを求めるという受動的な姿勢ではなく、自分が救われるためには何ができるかと能動的に考え行動することが必要」。そのような社会の中で、「キリスト教の精神が日本人にとって馴染みやすいものであるという認識」に至れるような工夫をすべきであるという意見もあった。また、「都市部の自然環境を改善するヒントとして、鎮守の森は認識されるべきである」とし、積極的な活用方法まで提示されていた。

②諸宗教の授業は偏見を払拭する（②偏見払拭）

レポートの中には、以前は宗教を偏見の目で見ていたがそれが払拭されたとの記述もあった。「講義を受ける前は、自分自身が無宗教であったために、『宗教はなんだかよくわからないけど、怖いもの』という偏見が存在していた」、「宗教と聞くと、言い方は悪いがその宗教の思想を押し付ける一面がないわけではないという認識が多少なりとも存在した」というのは、本授業でなくても、キリスト教人間学の授業で何度も聞いたことのあるフレーズである。日本では、1995年のオウム真理教事件以降、宗教という語自体へのタブー視がみられるが、あれから四半世紀経った今もその残骸は消えていない。あの事件を知らない世代である現在の学生さえも、宗教への偏見を持ったままだ。しかし、受講によって「今までの他宗教に対する偏見を改めただけでなく、異なる宗教の人たちがどのように生き、どのように世界と向き合っているのかを理解し」、また、「宗教に対して正しい知識がなく、偏見を持っていると良い関係を築くことは不可能である」という認識を示した学生がいた。

③自ら当該宗教に接触、実践を行う（③宗教接触）

本授業では都内にある宗教施設を訪問することを推奨することにはなかった。もちろん、各授業の講師が都内にはこのような施設があるということを紹介する場面はいくつかあった。しかし、あえて見学会や、イベントを主催することもしなかった。この一例は昨年のことではないが、以前、東洋思想の中田英之氏が修験道の講義を行い、興味のある人は七日間の修行も紹介できるとアナウンスをされたことがあった。その時、一人の学生は実際に中田氏の準備講座を受け、山の中に入るために必要な体力向上に身を投じ、無事、修験道の修行を行うことができた。ちょうど、コロナ禍であったため時間の余裕もあり、本人にとってはとても良い経験になったとのことだった。昨年の授業の中でもやはり実際に、ヒンズー教の置田清和氏の授業に影響され、ヴィーガニズムを試みた学生がいた。「食肉の残酷な面と改めて向き合い今まで以上に菜食に対し肯定的な認識を持つことができている。急に菜食に変えるのは難しいと感じるので、牛乳の代わりに豆乳を飲むなど簡単な部分から挑戦している」。また、自ら代々木のイスラム教のモスク、東京ジャーミイを訪れたという人もいた。

④社会／政治／文化的生活の再解釈を行う（④再解釈）

学生たちを取り巻く社会／政治／文化的生活の中に宗教的象徴や宗教にルーツを遡ることのできる表象などが存在していることに気づいたという記述もいくつか見られた。「グリム童話では自然への恐怖と女性への根本的な恐怖の結びつきがある」、「生贄文化やキリスト教圏で行われていた魔女狩り」にも宗教的な背景があるということを経験から調べた学生がいた。また、別の学生では、趣味でサウナに行くことが多いが、それもフィンランドの宗教と文化的生活との関係から来ていると調べてきた人もいた。諸宗教を学ぶという素養を身につけていれば、目の前の歴史的建造物に対しても見方が変わってくることに気づいた学生は次のように述べている。「建築物に代表される文化物として表象されるものの根本には、その文化の属する宗教の宗教観や信仰の対象への通念が色

濃く表されている。そのため他文化の表層的な受け取りや利用には常に自分の当たり前との齟齬を孕んでいると考えて良い。その一方で、他宗教の文化に触れ、自文化との比較を行うことによって改めて自分の帰属する文化を客観的に見直し、その真理について想いを馳せる体験も必要なものであると考える」。

⑤宗教リテラシー：宗教と社会／政治／文化的生活の基本的接点を見出す（⑤接点）

最後に本題の宗教リテラシーだが、図2の位相中では、宗教と非宗教の境界線に立ち、自ら「識別し分析する能力」の獲得ということになる。この内容についての言及はいくつか見られ、図3の中心に記したように、「自省」「信じる領域（縁）」「自然との関わり」「生死の自覚」「人間の幸福追求」「人間形成」「思考の軸」「共生の思想」「識別の観点」「善悪の判断」「不可侵な領域」「センス・オブ・ワンダー」「医療」「食」と多岐に渡っている。

「科学と宗教はどちらも人々の行動の軸になるものの一つ」、「人々は自らの存在理由を確かめたいと思うもの」と、宗教、非宗教を相対化し、第三の軸である人間とは何かという思索に向かう学生の記述があり、また、この立ち位置が「人間観を磨くことを可能にする」ことを認めた記述もあった。また、「宗教が現代社会で暮らす私たち人類にプラスの影響を及ぼしてくれる存在であることが理解できる。そして、私はこの講義を受講していなければ、触れることがなかったと考えられる価値観に多く触れることができた」と驚きを述べている人もいる。このような境地に至るためには「社会構造や自己のアイデンティティの領域まで関わってくるようなセンシティブなトピック」、「宗教という重たい話題を、それも一つの宗教に偏らず万遍なく触れる」ように、諸宗教に対する真摯な態度が必要であり、授業を開講する側にも自分自身への識別が求められる。

本授業を通して、「『人間の管理し得ない領域』への畏敬の念を思い出すべき」、「宗教と私たち人間や自然を今一度逆側の『悪』の視点から考

える必要]、「自分の帰属する文化を客観的に見直し、その真理について想いを馳せる体験も必要」と、彼らの記述の中に基本的な接点の識別に対する萌芽的記述を見出し、今後の授業構成、宗教リテラシーについてのさらなる考察の可能性を感じている。学生のレポート分析によって彼らが感受している内実に触れ、あらためて本授業の今後の方向性について研究を進めねばならない。

4. 宗教性を感受すること——神学的実践

何を信じ、何を疑うべきか——そのようなことは誰も教えてくれないこの世の中で、学生たちは「諸宗教における自然と人間」の授業を通して、この世に「神を信じて生きる人間」が、少なくとも存在しているのだという事実にも驚いていたようだった。しかも、さまざまな宗教に関与し、自ら実践している複数の人が狂信的に世から逸脱した生活を営んでいるわけではなく、教員であり、医師であり、自分と同じ側に立つ人間であるということを講師の口から聴かされることで、学生たちも新しい経験をしたようであった。講師の側も自らの信仰経験を伝えるために自己中心的な態度ではなく、他者との対話が可能な言語を用い、語っていた。

講師の講義が終われば、コーディネーターのわたしと他の講師とが対話を始める。熱い議論の口火が切られる。ほとんど毎回、わたし自身が、他の宗教における「神と自然と人間の関係性」について生で話が聴けるということに熱くなってしまったのである。宗教者と宗教者の出会いにおいて、宗教性についての対話が始まる。わたしばかりが話してしまうことにならぬよう、できる限り冷静になって、学生からの質疑応答の時間に移るように心がけた。毎回、数人の質問者をあらかじめ選んでおき、必ず対話の時間を設け、双方向的コミュニケーションを実現させた。この対話的な空気感を醸し出すことで、教室にいる全員が講義された宗教に対峙し、同時に、自分自身に向き合う経験の内省が求められていることを実感できたように思う。

ドロテー・ゼレは、組織神学の解説において、神学の有効性は「人間の諸経験の考察」にあると述べている。「神学の対象となり得るのは、神と人間の関係性だけ」であり、神学とは、人間が「『神』という名で呼んだことについて、語らずにはいられないようにさせてしまった諸経験」¹⁹⁾の考察である。西洋の歴史において行われてきた神学、人間を矮小化し神を権力者へとおとしめるような神学、神を思考の対象とし、人間経験を度外視できるような分析的な神学、そのような神学に対する怒りの行動として、ゼレは、聖書にみられるような「聞きながら答える」といったヘブライ的思考に重点を置きながら「神と人間の関係性」を、神学の根本動機として据えるのである。人間経験なしの神の考察はなく、神なしの人間経験の考察もないとする立場である。

自らの宗教を講じる者は、自身の宗教の神学的素養を身につけるための学問を修めたかどうかにかかわらず、ある種、識別能力、いわば、逆のベクトルから見れば、宗教リテラシーが必要なのではないだろうか。わたしはその営為のことを「神学的実践」と呼びたい。現在に至るまで「実践神学」という神学の一領域は存在している。それは宣教論や司牧的カウンセリング、牧会論といったいわば教会内外での活動、つまり実践 (praxis) のためにどのような神学が求められるかという提題で培われてきた学問領域である。しかし、ここでいう「神学的実践」とは、必ずしもそのような教会活動を促進する目的のためのものではない。宗教リテラシーに近い。宗教リテラシーが、宗教と社会の接点を分析、識別する実践であるように、神学的実践は信仰者が社会と宗教の接点を分析、識別する実践を指し、また識別の能力を養うような知的、精神的実践 (エクササイズ) なのである。

信仰を基底とした宗教的諸経験を他者に伝えたい者は、自己中心的な主張に陥ることなく、また、相手を折伏することなく、他者との平等で対話的な関係性を常に構築するために、リテラシーという実践を必要とする。ゼレは、神学の遂行のために「信仰の経験を分かち合う人びとの間の合意が、繰り返し作り出されなければならない」(傍点、引用者)²⁰⁾と述べているが、このことはまさに、宗教を語る側(ここでは信仰の諸

経験をした者)に対して、非宗教の相手(同じ諸経験をしてはいない)との接点を、複数のレンズを通して分析し、識別する努力と能力が求められているということなのであろう。

大学の講義ということもあって各講師はあらゆる資料を駆使し、当日、教室でのパワーポイントも使用しながら、学生たちに紹介する宗教がどのような歴史と教義から成り、また、人間が経験できる実践としてどのように表現されるかを語っていた。結果的に、これらの提示はすべて、社会と宗教の接点について学生たちが複数のレンズによって分析し、識別することができるようになるための材料であったと思う。これらの材料を吸収し、咀嚼しながら、接点の場に存在する学生たちにとってもっとも内面的に必要な作業は、提示された知識を単なる知識として脳裡に留めることではなく、彼らの情緒、感受性、さらに言えば皮膚感覚にも近い受容体の働きによって、内省するということだったのではないだろうか。今後さらに、本授業を宗教リテラシーの授業として展開させていくために、いくつか研究に必要な点を最後に述べていきたい。

「わたし」自身は、あくまでも神学を生業とする研究者として今後も宗教リテラシーについて探究を進めたいと考えている。その場合、神学と宗教との密接かつ批判的な関係性について把握する必要がある。上記と同じくゼレの論考を引用したいが、彼女は保守的な神学者と、進歩的な神学者の両者に向け、宗教を軽視してきた神学者への批判として次のように述べている。

神学者たちは、宗教の問いに耳を傾けることなしに、神学的な答えを与えた。宗教に対するこれらの問い、つまり何か他なるものへの憧れ、別の生き方への願いはほとんど表明されたことがなく、あるいは考えぬかれたことがまったくなかった。それは、人々を夢の中に沈め、彼らの現実から目を逸らすことのできる漠然とした感情である。(中略)そもそもこの宗教的要求の内容は何であろうか。人間は何にあこがれているのか。それは全体であろうとする願い、

切り刻まれてばらばらになっていない生への要求である。宗教的な言葉に属する「救い」という古い言葉は、まさしくこの全体であること、切り刻まれてばらばらになっていないこと、壊れていないことを表現している²¹⁾。

少々引用が長くなってしまったが、神学者としてのゼレが、宗教からかけ離れてしまった神学を宗教と和解させようと試みていることがこの文章から窺える。この和解のために、中心に位置づけられているのが「感情」である。人間の感情、それは、全体であることへの願いである。切り刻まれてばらばらになっていない生を希求する根源的な動力のような働きであり、ゼレはそのことを宗教的要求（宗教性）と述べ、神学においてそのことが語られない、忘れ去られていることを憂いているのである。ゼレは、人間のこの願い、宗教性は、放棄することのできないものだとしている。したがって、宗教／非宗教の淵は、図4のように、【宗教における宗教性】／【非宗教における宗教性】の感受の場となり、

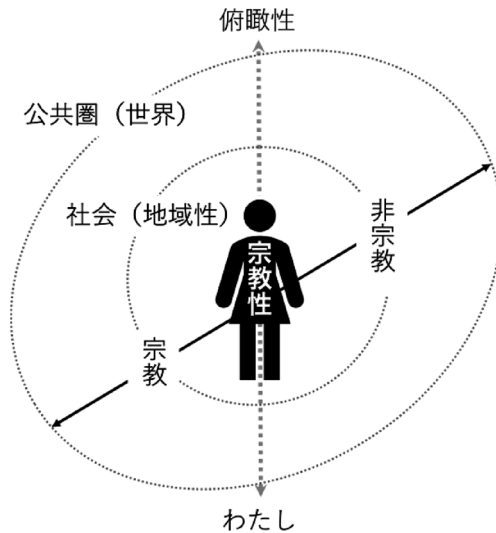


図4

わたしのような宗教者にとっては宗教性の回復を神学的実践とし、非宗教者にとっては宗教リテラシーの実践として、同じ地平で生きられることとなる。

おわりに

2023年10月現在、ローマのバチカンにおいて第16回世界代表司教会議シノドスがまさに行われており、シノドスの教会へと変革するためにカトリック教会の史上初の会議が位階制の垣根を超えて、ラウンド・テーブルでの霊における会話という手法による会議が繰り広げられている。毎朝のプレゼンテーションは即時インターネットによって配信され、分かち合いの内容は守秘義務が敷かれているものの、どのようなテーマで分かち合いがなされているかを知ることが可能となっている。メディアは同性婚の問題や妻帯司祭の今後、女性助祭の可能性等、変革内容への興味関心に集中するが、参加者は淡々と霊における会話(The conversation in the Spirit)によって傾聴を続けているようである。

霊における会話と言われている手法は、自分自身の内面に動いている感情を意識し、沈黙の時間を取り、聖霊の導きに促され、他者との会話に開かれるような語りを行うことにある。また、自分自身がそのように会話に開かれているように、他者にも語りの場を与え、他者の語りをよく聴く、その繰り返しである。このシノダル・メソッドと言われ始めた方法、すなわち、霊的共同識別は、今に始まったものではなく古くから教会の霊性の歴史的水脈に流れており、特に、修道院文化の中で重んじられてきた。

宗教リテラシーの今後の展開にとって、霊における会話の手法は非常に重要な役割を果たすことになると思う。より探究を深めていくべきであり、それが求められていくはずである。イヴリン・アンダーヒルはその著書の中で、神秘主義の実践(Practical Mysticism)は、特権的な人びとの独占物ではなく、普通の人たちの日常生活の中で実践できるものであり、また、それが現代の人びとにとってとても重要な習慣であると

述べている。アンダーヒルは、「神秘主義とは『《^{リアリティ}実在^{アート}》との一致の技』であり、神秘家とは『その技を多かれ少なかれ獲得している、あるいは獲得できると信じ、目指す人』²²⁾であると定義する。その人間を取り囲む社会、環境との関係性を深め、一致への技術を身につける。社会にコミットメントを促し、新たな公共圏の創出にもつながる。

霊における会話の手法は、西洋における神秘主義の伝統のみならず、東洋の瞑想の中にも開花している。アントニー・デ・メロはイエズス会司祭で、祈りの指導者、霊的指導者として活躍し、多くの書籍を残している。彼は祈りの方法として呼吸を中心に知覚を意識するよう、祈りの参加者に指導する。『東洋の瞑想とキリスト者の祈り』²³⁾の中で紹介されている最初のエクササイズは、ただ10分間の沈黙を守ることである。心と知性の全体に沈黙が行き渡るよう努めることを勧める。そして、静かに目を開き、10分間に自らに起こったことを内省し、グループで分かち合う。霊における対話である。非常に単純なエクササイズではあるが、一人一人の内面に起こっている出来事は一人一人異なるものであり、それを一人一人が意識し、表現し、他者に伝え、また、他者からの話を聴く。同じように過ごす10分間という時の中で自分自身が経験していることは自分には分かからない。自らの内面に働いている感情、感受性を用いなければ経験を振り返ることはできない。「キリスト者の祈り」と題されているがエクササイズの中にはキリスト教信仰を前提としなくても経験できるようなエクササイズも多くある。このような実践も、キリスト者からすれば、内省を促進する神学的実践となり、そして、非キリスト者だという主張する人に対しても、自分自身の感受性に気づくエクササイズとして宗教リテラシーの実践項目に積極的に導入することができるのではないだろうか。

以上、自分自身の授業に対して、初めて、宗教リテラシーの観点から考察を行った。上記のような神秘主義の実践、祈りのエクササイズに関しては、学生から受容される面と、また、拒否反応を引き起こす面もあるのではないかと思われる。今後、リテラシーの項目をさらに調査し、授業の刷新につなげていきたい。

注

- 1) 同じキリスト教徒だと言ったとしてもどのような信仰かという話になると、それぞれ異なった話になる。「同じ宗教の信仰をもっている人々のあいだでも、その『信仰』はさまざまに表現されます」。石川明人『宗教を「信じる」とはどういうことか』ちくまプリマー新書 415、筑摩書房、2022年、p.110。
- 2) Cf. *Religious Literacy in Policy and Practice*, Edited by Adam Dinham and Matthew Francis, Policy Press, 2015.
- 3) ユルゲン・ハーバーマス『〔第二版〕公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』（1990年）細谷貞雄、山田正行訳、未来社、1994年、p.47。
- 4) 同上、p.198。
- 5) 同上、p.231。
- 6) 磯前順一『公共宗教論から謎めいた他者論へ』春秋社、2022年、p.63。
- 7) 同上、p.74。
- 8) 中川明『妖怪の棲む教会——ナイスを越え教会の明日を求めて』夢窓庵、2002年、p.131。
- 9) ハーバーマス、前掲書、1990年新版への序言、p.XXXV。
- 10) シノドスとはまさにシン・ホドス (*sun-+hodós*) 「ともに、道を(歩む)」という語源から派生した造語である。第二バチカン公会議の直後、1965年、教皇パウロ六世は、公会議後の歩みを全教会のシノドスの歩みと位置付け、教皇が提起した問題を協議し意見する機関、会議体として設置した。シノドスと呼ばれる世界代表司教会議には「通常総会」と緊急時の「臨時総会」、また地域別の「特別総会」があり、最近では2008年「聖書」、2012年「宣教」、2015年「家庭」、2018年「若者」をテーマとして通常総会が行われてきた。2015年、教皇フランシスコは現代の教会を「シノドスの教会 (Synodal Church)」と定義し、2021年～2024年にかけて行われている第16回通常総会シノドス、テーマは「ともに歩む教会——交わり、参加、そして宣教」を準備した。つまり、これまではシノドスという語を会議の機関として理解していたのに対し、だんだんとシノドスという語は教会のあり方、教会を特徴づける性質というふうに見えるようになってきた。第一期「教区ステージ」全世界各地の教会において信徒が討議し、意見書を各国ごとに取りまとめる。第二期「大陸ステージ」第一期で上がってきたまとめを大陸別会合にて討議する。2023年10月現在、第三期「司教総会」各国代表の信徒（女性を含む）も加わり総勢約400名で、討議すべき内容について考察する。各ステージにて採用されている方法が「霊における会話」。必ず小グループでのセッション（祈りと分かち合い）が行われ、全体会で共有する方法がとられている。

- 11) シノドス事務局「あなたの天幕に場所を広く取りなさい」(イザヤ 54・2)「大陸ステージのための作業文書」[暫定第2版] バチカン市 2022年10月24日。 https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2022/11/Document-for-the-Continental-Stage-of-the-Synod2022_rev2.pdf
- 12) 同上、11項1)、p.5。
- 13) 同上、99～103項、p.29-30。
- 14) 同上、103項、p.30。
- 15) 『世界代表司教会議 第16回通常総会「討議要綱」—第1会期(2023年10月)』 https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2023/08/synodos_202310.pdf、2023年6月20日。「共通の家」common home は common good (共通善) とともに、討議要綱において何度か語られている。2015年に教皇フランシスコより発布された回勅『ラウダト・シ—ともに暮らす家を大切に』における「common home」、地球を家とみる思想の延長線上にあると考えられる。ここで、教皇は温暖化等の地球環境破壊の現状に対して、地球を一つの共通の家とし、いかにして環境保全に取り組めるかを述べている。
- 16) 同上、12項、p.8-9。
- 17) 上智大学が始めた基盤教育構想は「自ら学び続ける学修者となるための学び」の実現を目指し、数年の準備期間を経て、2022年から本格的に実施されている。基盤教育群の中に七つの領域：キリスト教人間学、身体知、思考と表現、データサイエンス、社会課題と展望、視座、実践・経験があり、学生は各領域の授業を必須科目として取得せねばならない。詳しくは、<https://piloti.sophia.ac.jp/jpn/clel/> 閲覧日 2024年1月11日。
- 18) Diane L. Moore, “Diminishing religious literacy: methodological assumptions and analytical frameworks for promoting the public understanding of religion”, in *Religious Literacy in Policy and Practice*, Edited by Adam Dinham and Matthew Francis, Policy Press, 2015, p. 29.
- 19) D・ゼレ『神を考える—現代神学入門』(1990年)三鼓秋子訳、新教出版社、1996年、p.11。
- 20) 同上、p.14。
- 21) D・ゼレ『内面への旅—宗教的経験について』(1975年)堀光男訳、新教出版社、1983年、pp. 194-195。
- 22) イヴリン・アンダーヒル『実践する神秘主義—普通の人たちに贈る小さな本』(1915年)金子麻里訳、新教出版社、2015年、p.19。
- 23) アントニー・デ・メロ『東洋の瞑想とキリスト者の祈り』(1978年)裏辻洋二訳、女子パウロ会、1980年、p.15。

宗教2世から見た宗教リテラシーの問題

横道 誠¹

本論文は「宗教2世」の救済という現実的課題の解決を目標とし、(A) 医療職・心理職、(B) 学校・教育関係者、(C) 著名人・知識人・研究者のそれぞれにとっての「宗教リテラシー」がどのようなべきか考察し、具体的に提言する。

¹ よこみちまこと：京都府立大学文学部准教授

はじめに

2022年7月8日、安倍晋三元首相銃撃事件が発生した。容疑者として確保された山上徹也は、母親のとある宗教への入信が生育歴の背景として存在したこと、その宗教に安倍が協力姿勢を取ってきたことに恨みを抱いて犯行に至ったことを供述した。この結果、問題の宗教に該当する旧・統一教会（現在は改称して「家庭連合」。以下、たんに「統一教会」と表記する）と政治の癒着問題および宗教2世問題がにわかに政治的・社会的スキャンダルとして世相を騒がせるようになった。

それから同年年末に至るまで、統一教会2世の顔役として注目を集めた小川さゆりや、事件以前から粘りづよく統一教会と自由民主党の癒着の問題を追及してきた鈴木エイトの活躍もあって、「宗教2世」は2022年後半の日本人にとって喫緊の問題と見なされるようになり、年末にはこの言葉が「ユーキャン 新語・流行語大賞」のベストテンに入賞した。

宗教2世問題が注目を集めたのは、なによりも政治的争点になったからだが、2022年12月に至って、成立まで「被害者救済法案」と呼ばれていた「法人等による寄付の不当な勧誘の防止等に関する法律案」が国会で可決され、こども家庭庁から各都道府県知事・各市町村長に宛てた「宗教の信仰等に関係する児童虐待等への対応に関するQ&A」が通達され、報道は一挙に沈静化した。政府・与党としてはこの問題が政治的争点のまま翌年（2023年）を迎えないことをめざして、迅速に動いたと思われる。

だが「被害者救済法案」は、その正式名称が伝えたとおり、おもに統一教会を標的とした高額献金によるトラブル防止を目的としたものにほかならず、宗教2世の根本的救済を図るものではなかった。「Q&A」は評価できる点も多いが、どのくらいの効力を発揮できるか未知数の部分が多い。にもかかわらず、2023年に入って宗教2世に関する報道は激減してしまった。報道が加熱していた半年ほどの期間、宗教2世問題の当事者として新聞、テレビ、雑誌、ラジオ、インターネットメディアなどにのべ70回ほど（転載等も含む）出演した筆者も、事件から1周年

になる頃には、この問題に関してコメントを求められることはほとんどなくなった。一部のマスコミ関係者からは、「毎年この時期（7月）には、取材で忙殺されるようになりますよ」と予言されていたものの、すでに1周年の時点でそのような取材はほとんど皆無という結果に終わった。

このような状況を受けて、今後の宗教2世問題を憂えつつ、筆者は本論文を発表する。

1. 前提の整理

1.1. 宗教2世とは誰か

「宗教2世」という語は、みずからの判断で入信した「宗教1世」の対義語にほかならない。したがって実際には、信者になった1世から数えて3世、4世、5世なども「宗教2世」の範疇に含まれる。この点は多くの人から反論されることがないと思われるが、しかし宗教2世の正確な定義と人口規模が問題になると、定説と言えるものはない。

事件以前から宗教2世問題の学術的考察に取りくんできた塚田穂高は、「宗教2世」とは「特定の信仰・信念をもつ親・家族とその宗教的集団への帰属のもとで、その教えの影響を受けて育った子ども世代」のことだと要約する¹⁾。塚田は、日本には1割程度の「自覚的信仰者」がいるという先行研究を踏まえつつ、かつ第2世代以降の信者は第1世代より多くなっていると考えられることから、ざっと考えて宗教2世は600万人以上、誤差を考えても数百万人にのぼると推計する²⁾。

ところが、荻上チキが率いる社会調査支援機構チキラボが2022年にオンラインで実施した宗教2世問題に関するアンケート調査では、回答者が創価学会2世428名、エホバの証人2世168名、統一教会47名、その他335名という内訳を示している³⁾。各宗教団体の信者規模が異なるため、それぞれの教団でどのくらいの割合の人が関心を抱いてアンケートに答えたかはわからないにせよ、少なくとも創価学会、エホバの証人、統一教会という3つの教団の2世たちが多くの声をあげようとしたことはまちがいない。

このアンケートに答えた人が1,131名というのは、塚田が想定した「数百万人」から考えれば、いかにも少ない数ではないだろうか。これはどのように考えれば良いだろうか。第一には、宗教の熱心な信者たちは、しばしばインターネットと相性が悪いということがあるかもしれない。じぶんたちの信仰を相対化する危険が大きいオンライン空間をさまざまな宗教が遠ざけようとしている。第二には、塚田が想定したのは「第2世代以降の信者」だが、じぶんたちが「宗教被害」を受けたと認識し、声をあげたいと思っている者になると、その数はグッと小さくなるということが言えるかもしれない。第三には、「宗教被害」を受けつつも、宗教2世問題をじぶんの問題とは認識できていない層があるだろうことは見逃せない。越高陽介は「お寺の子が住職や住職の妻になる以外の将来を展望すると、「お仏飯で育ったのだから仏様に恩返ししなさい。ばちが当たるよ」ということを言われ、住職になる以外考えてはいけなように思いこまされる。この「お仏飯で育ったんだから」という殺し文句は、多くの寺院に生まれた子どもを僧侶の道に進ませている」と指摘し、伝統宗教にも宗教2世問題が存在することに注目を促している⁴⁾。「宗教2世」問題が新宗教に属することとして、みずからの宗教2世問題に気づくに至らない伝統宗教の2世たちは、かなりの数にのぼると想像される。

「宗教2世」に似た言葉に、「カルト2世」があり、包括範囲が重なりつつも異なっている。「宗教2世」には非宗教的団体（たとえば自己啓発セミナー、スピリチュアル系、陰謀論団体）の2世や、マルチ商法にハマった親の子どもは含まれないが、「カルト2世」にはそれらの2世が含まれる。逆に伝統宗教の2世は「カルト2世」と呼ばれないが、上で述べたように、彼らもしばしば「2世問題」の当事者なのだ。本論文では「宗教2世」を扱うが、筆者はこの言葉を「伝統的宗教も含めた宗教一般のカルト的側面に苦しめられた2世」を指すものと定義したい。言いかえれば、「伝統宗教か新宗教かを問わず「宗教被害」と呼びうるものによって苦しんだ2世（以降の世代の）信者」を「宗教2世」と呼びたい。

本論文は実践的な救済活動を目的としている。塚田が示したように

「宗教 2 世」の範囲を「宗教被害」の有無を無視して規定すれば、たしかに学問的には妥当な措置と言えるだろうが、実践的救済活動の役には立ちづらくなるという問題がある。既存の宗教研究がしばしば陥ってきた宗教が絡んだ社会問題に対する日和見主義を踏襲することは避けたい。

1.2. 本論文の「宗教リテラシー」

本論文は「宗教リテラシー」を問題にする。「宗教 2 世」と同じく、「宗教リテラシー」も広く認められた語義を獲得できていない。

櫻井義秀は、宗教リテラシーに関する 2007 年の論文のなかで、「信教の自由に関わるリスクを公共性の問題と関わらせながら考察する講義を一般教育科目としてこの十年近く実施してきた」と語り、その理念を示している。すなわち、①グローバル化が進行する現代社会で、宗教的文化・信念にそって生きる人々を理解することは国際交流の上で必要だということ、②反グローバリズムの宗教運動（ファンダメンタリズム、宗教的過激主義、カルト運動等）が発生しているために、現代社会と宗教運動との関わりをマクロな視点から認識する必要があるということ、③カルト問題に関して、特定教団と地域社会の対立（アーレフ信者の居住問題など）、特定教団の信者と家族の葛藤（脱会カウンセリングをめぐる軋轢など）が発生しており、立場や利害関係に応じて複数の「正しさ」があるという社会の複雑さと多面性を認識する必要があることだ⁵⁾。櫻井の立場では、これらの問題に関する読解力を高めることが、「宗教リテラシー」を涵養することを意味する。

山中弘と藤原聖子が 2013 年に提唱した「宗教リテラシー」はずっと素朴な見立てを持つ。この言葉は「社会生活のさまざまな場面で遭遇する事態に対し、適切に対処するための判断材料となる宗教知識、ならびにその運用能力である」と定義され、「異なった宗教の人たちとの「つきあい」という具体的で実践的な個々の文脈の中で宗教知識をどう運用するのか」が問題だと位置づけられる⁶⁾。他方、島藺進は 2023 年に「いま、新しいかたちでの「宗教の学び」が求められていると私は思います。それは、特定の宗教の教えについて知識を深める、あるいは体得していく

というタイプの学びではなく、宗教とは何かについて知る、すなわち「宗教リテラシー」を身につけるというタイプの学びです」と述べて、「宗教リテラシー」を宗教の普遍的読解力として規定しようとする⁷⁾。

本論文で扱う「宗教リテラシー」の意味は、きわめて限定されている。それは「宗教被害」を受けた宗教2世の救済にとって益する読解力（リテラシー）のことだ。そのような宗教上の「リテラシー」を、さまざまな立場の人に獲得してほしいと本論文は求める。

2. 医療職・心理職のリテラシー

2.1. 宗教的トラウマ症候群とトラウマインフォームドケア

岸見一郎と古賀史健がアドラー心理学を翻案しながら紹介した『嫌われる勇氣』は国内外で500万部以上が売れたと言われる。展開される対話で「トラウマは、存在しない」と宣言され、過去が現在に影響を及ぼすことは否定しないにせよ、主体的な決定によっていくらでも新しい人生を切りひらくことができるという前向きなヴィジョンが示される⁸⁾。この「自己啓発」がビジネスパーソンたちの心を捉えた。トラウマを過小評価して恥じないこの種の疑似科学的書物が絶大な人気を果したことから、日本社会がトラウマの問題を過小評価しているさまが透けて見えるのではないだろうか。

一般的に、精神疾患を有する人のトラウマへの曝露率は68.5～97%であると報告されていて、きわめて高い⁹⁾。宗教2世として心を病んだ人は、トラウマによって苦しんでいる。その症状は、2010年代初頭にマレーネ・ワイネルが提唱した「宗教的トラウマ症候群」(Religious Trauma Syndrome, RTS)として説明できる。ワイネルによると、この症候群の症状には(1) 混乱、意思決定の困難、自分自身で考えることへの苦慮、人生の意味や方向性の欠落、自意識の未発達、(2) 「この世」にいるという不安、パニック発作、天罰を受けるのではないかという恐怖、抑鬱状態、希死念慮、怒り、苦々しい思い、裏切られた感覚、罪悪感、悲嘆や喪失感、感情表現の難しさ、(3) 睡眠障害、摂食障害、薬物

乱用、悪夢、完璧主義、性的なものに対する嫌悪感、否定的な身体イメージ、衝動を制御できないという問題、喜ぶのが難しいこと、いまここに存在することの困難さ、(4) 家族と社会的ネットワークの崩壊、孤独、社会との関わり方の問題、人間関係の悩ましさがある¹⁰⁾。

この「宗教的トラウマ症候群」を一般的な医学的言説に結びつければ、「宗教被害によって発症した複雑性 PTSD」と規定することができる。複雑性 PTSD とは何か。まず、心的外傷後ストレス障害 (PTSD) という精神疾患があり、これは恐怖や脅威にさらされることで発症し、再体験 (フラッシュバック)、記憶の回避、持続的な過警戒を特徴としている¹¹⁾。これに対して複雑性 PTSD (CPTSD) は、恐怖や脅威に晒される期間が長期的で反復的に渡ることによって発症し、症状としては、PTSD の症状をすべて満たすほかに、情動の調節障害、否定的自己概念、対人関係の困難が付属する¹²⁾。この「複雑性 PTSD」への対応が、宗教 2 世にとって回復の鍵になるわけだが、残念ながら根治療法などは開発途上にある。

ワイネルと同時期に、ジャネット・ヘムリックが「宗教的児童マルトリートメント」(Religious Child Maltreatment) という概念を提唱した。「マルトリートメント」は「不適切な処遇」を意味する。ヘムリックによると、それは「宗教的な文書や教義をともなった虐待的な肉体的懲罰を正当化すること」「子どもたちを危険な宗教的儀式に参加させること」「宗教的権威を利用して子どもたちを虐待し、彼らを沈黙させておくこと」「神の介入を信じることで、子どもたちに必要な医療を施さないこと」「怒れる神、罰する神、永遠の地獄堕ち、悪魔つきや悪霊つきといった宗教的観念で子どもたちを脅すこと」「子どもたちに有罪を宣告し、彼らにうしろめたく恥ずかしいと感じさせること」「宗教的権威の背景を精査することなく、その権威のために時間を割き、他方で子どもたちの安全を疎んじること」「子どもたちに宗教的観念を植えつけること」「宗教または宗教団体のイメージを守ろうとして、児童虐待について認識せず、報告しないこと」などによって構成される¹³⁾。挙げられた事例は多くの宗教 2 世が体験した出来事に属する。

「宗教的児童マルトリートメント」は、より一般的な医学的・心理学的

言説に結べば、「逆境的小児期体験」(Adverse Childhood Experience, ACE)に該当するだろう。この体験に該当する体験は「継続的に身体的な暴力を受けていた」「継続的に心理的な暴力を受けていた」「アルコール・薬物乱用者が家族にいた」「母親が暴力を受けていた」「慢性的鬱病・精神疾患・希死念慮のある人が家庭にいた」「両親の片方または両方がいなかった」「家族に服役中の人があった」「親に無視されていた」「親に生活上の世話をしてもらえなかった」「性的な暴力を受けていた」という10項目から成りたっていて、4項目以上該当すれば、逆境的小児期体験のない人に比べて、自殺リスクは12倍に跳ねあがるとされる¹⁴⁾。宗教2世は逆境的小児期体験の当事者にほかならず、自殺リスクにさらされている。

逆境的小児期体験の結果として、子どもたちの生理的反応システムが過剰または長期に活性化する影響を受け、身体に摩耗と損傷をもたらす「毒性ストレス」(toxic stress)を浴びることが指摘されている¹⁵⁾。この「毒性ストレス」によって、人間の脳が実際に変質するという研究も報告されている。頻繁に身体的虐待を受けた人は、そうでない人に比べて感情や思考をコントロールし、行動抑制力に関わる前頭葉の容積が小さいこと、児童期に性的虐待を受けた人は、そうでない人に比べて後頭葉にある記憶を呼びおこす視覚野のサイズが小さいことなどが報告されてきた¹⁶⁾。この小児期逆境体験によって、複雑性PTSD——最初の提唱者はジュディス・ハーマン——が発生するのだが、それはベッセル・ヴァン・デア・コークが唱えた、虐待やネグレクトを含む幼少期のトラウマがストレス障害をもたらすという精神疾患「発達性トラウマ障害」(developmental trauma disorder, DTD¹⁷⁾)に等しい。

結局のところ宗教的トラウマ症候群、複雑性PTSD、逆境的小児期体験、発達性トラウマ障害からの回復が宗教2世の精神的・心理的課題ということになるが、ではどのように回復できるのか。ジョン・ボウルビイは、子どもの健全な成長には母と子のあいだの愛着(アタッチメント)の形成が決定的に重要と説明し、この愛着こそが子どもにとって「心の安全基地」になるため、精神疾患にかかった場合には、安全基地

を「信頼できる仲間」とのあいだに確保することで、回復に向かうことができる」と論じた¹⁸⁾。これは「愛着理論」(アタッチメント理論)として広く支持されている。しかし宗教2世を含めて、逆境的小児期体験を経て、複雑性PTSDを罹患した子どもは、過酷な体験によって生き物に生まれつき備わっているレジリエンス(弾力的回復力)が破壊されてしまっている。それに手当をほどこし、本来のレジリエンスを復旧させるために、トラウマインフォームドケアと呼ばれる考え方がある。眼の前の相手には深刻なトラウマ(心的外傷)がありうると想定した上で対処するケア方針のことだ。

野坂祐子は、井戸の水が安全で毒性のものでないかを確かめる公衆衛生と同じように、子どもが生活する場所で与えられたトラウマを検査し、毒物を浄化するようなものとしてトラウマインフォームドケアが広まって欲しいと願っており¹⁹⁾、筆者は全面的に同意する。だが、そのケアをどこで得られるのか。

2.2. 自助グループから学べること

トラウマインフォームドケアの基本原則は、身体的・心理的安全性の確保、意思決定の透明性と信頼の構築、ピアサポートの提供、相談者とサービス提供者の対等な協働、レジリエンスやトラウマからの回復力を信じるエンパワメント、偏見・固定観念・歴史的トラウマに対する認識と対応の6つとされている²⁰⁾。

このうち自助グループが、直接的には「ピアサポートの提供」を、ただし工夫次第では6つのすべてを提供することができる。自助グループの参加者は、安心安全な場で、透明かつ信頼感のある語りを実現し、当事者同士による対等なコラボレーションによってエンパワメントを果たし、因習的・伝統的観念からの解放を促進することができるからだ。

自助グループでは、参加した当事者それぞれがじぶんりのペースで、じぶんりのカバー範囲で過酷なトラウマ体験を言語化することで、じぶん自身の主導権をトラウマ的記憶から取りもどしていく。その際、もっとも避けるべきことは、トラウマの増強(トラウマの再演、再

トラウマ化) だろう。じぶんの体験を聞いてもらい、また仲間の体験も聞いて、言語化を進めていくため、「当事者仲間」(ピア)の存在が決定的に重要になるものの、他方でこの「仲間」は不用意な発言によって、ほかの仲間のトラウマの増強を発生させかねない危険因子でもある。そこで自助グループは万全のグラウンドルールを設定し、安心安全な場を実現しなければならない。

自助グループは本来「アルコールリクス・アノニマス」(AA)などの依存症治療グループとして始まった。「アノニマス」系のグループは、みずからの「無力」を認め、心身を「神」あるいは「ハイヤーパワー」に委ねることで、信仰心によって嗜癖を脱して回復していくというモデルを取り、12段階の過程を歩むため、「12ステップ系」とも呼ばれる。ミーティングでは、当事者の語り(分かちあい)に対していっさいの応答(感想、意見、質問など)を振りむけない「言いっぱなし、聞きっぱなし」のスタイルを取っているが、これによって安心安全の場を担保できる。

しかし、「神」や「ハイヤーパワー」を前提にする回復モデルは、「宗教被害」に苦しんだ宗教2世にはおおむね不適切だ。筆者は現在(2023年9月)、合計10種類の自助グループを主催しているが、ほとんどの場合では当事者研究を、一部でオープンダイアログ的な対話実践を実施している。当事者研究とは、なんらかの問題の当事者がみずからの「苦勞」の仕組みを仲間と共同研究する取りくみだ。オープンダイアログとは、なんらかの当事者が問題を語り、それを聞いた家族、知人、仲間が当事者の前で意見交換するという精神療法だ。これらの対話をつうじて当事者は生きのびるための知恵を入手し、世界観を刷新する。当事者以外の参加者による不適切な発言を防ぐために、筆者は京都でやっている自助グループで、以下のルールを設定している。

自分自身で、共に
傾聴
守秘義務

入退室自由
自分にも他人にも優しく
他者を否定しない
説教しない
助言は提案として

それぞれの項目の具体的意図については、拙著『唯が行く！』を参照していただきたいが²¹⁾、いずれにしても医療職・心理職の支援者たちはこのような自助グループ活動を見学するなどして、効果的な当事者（患者、クライアント）支援を模索していただければと願う。

3. 学校・教育関係者のリテラシー

3.1. Q&A と統一教会、エホバの証人、創価学会

前述したこども家庭庁の「Q&A」²²⁾は、文書名が謳うとおり、「宗教の信仰等に関する児童虐待等」を標的とする。

原則はこう記される。「児童相談所や市町村においては、児童の権利条約第 14 条において、児童の思想、良心及び信教の自由について児童の権利を尊重すべきことが定められていることや、児童の場合には必ずしも自由意思の下で宗教等を信仰しているとは限らないこと等も踏まえ、宗教等の信仰に関する事案についても、児童虐待に該当する行為が疑われる場合には迅速に対応することが求められる」。「宗教虐待」という言葉は使われていないが、実質的にそれを問題化しているという点で評価できる。

問題となる「児童の権利条約」（日本は 1994 年に批准）の第 14 条第 1 項には、「締約国は、思想、良心及び宗教の自由についての児童の権利を尊重する」と明記してある²³⁾。以下、荻上チキ編『宗教 2 世』（前述）で特に焦点化されていた創価学会、エホバの証人、統一教会との関係を踏まえて、宗教 2 世の自助グループを主宰してきた者としてかんたんに解説を施したい。

「[～をしなければ/すれば地獄に落ちる]」、「滅ぼされる」などの言葉や恐怖をあおる映像・資料を用いて児童を脅すこと、恐怖の刷り込みを行うこと、児童を無視する・嫌がらせをする等拒否的な態度を継続的に示すことで、宗教活動等への参加を強制することや進路や就労先等に関する児童本人の自由な決定を阻害すること（保護者の同意が必要な書類への署名や緊急連絡先の記入の拒否等を含む。）は、いずれも心理的虐待又はネグレクトに該当する」。これらの体験に関して、創価学会、エホバの証人、統一教会いずれの2世も声をあげてきたことだ。宗教的教義によって子どもに恐怖や脅威を与え、導くことは「Q&A」で虐待だと規定された。

「児童に対し、その年齢や発達程度からみて、社会通念上一般的であると認められる交友を一律に制限し、児童の社会性を損なうような場合には、ネグレクトに該当する。また、交友や結婚を制限するための手段として、[略]脅迫や拒否的な態度を継続的に示すことや、児童の友人や教師など児童と交友関係を持つ者を「敵」、「サタン」その他これらに類する名を称すること等により、児童に対して強い恐怖心を与えることは心理的虐待に該当する」。これらの体験に関して、とくにエホバの証人と統一教会の2世が声をあげてきた。宗教的教義にもとづいて一般社会を悪と見なし、交友を制限することは「Q&A」で虐待だと規定された。

「社会通念に照らして児童の年齢相応だと認められる娯楽等について、宗教等を理由に一律に禁止することは心理的虐待に該当する。また、宗教団体等が認めたもののみ限定する行為についても、それが教育上の配慮等に基づく合理的な制限と認められるものでなければ、宗教の信仰等を理由とするものであっても、児童の自由意思を損ねる行為として心理的虐待に該当する」。これらの体験に関して、とくにエホバの証人と統一教会の2世が声をあげてきた。宗教的教義にもとづいて娯楽に悪の要素を見て、子どもたちがそれを楽しむのを制限することは「Q&A」で虐待だと規定された。

「理由の如何にかかわらず、児童を叩く、鞭で打つなど暴行を加えることは身体的虐待に該当する」。「理由の如何に関わらず、医療機関の受

診を合理的な理由無く認めない行為や、医師が必要と判断する医療行為（手術、投薬、輸血等）を受けさせないこと（輸血を拒否する旨の意思表示カード等を携帯することを強制することを含む。）はネグレクトに該当する」。「児童本人が進学を希望し、世帯の経済的状況等に鑑みて進学が可能である（奨学金等の支援を活用する場合も含む。）にもかかわらず、宗教上の教義等を理由とし、

- ・「～をしなければすれば地獄に落ちる」など児童を脅すこと
- ・「世界は破滅するので、学校に行くことは無駄である」など諦めさせようとする事
- ・児童を無視する、経済的な援助を拒む等拒否的な態度を継続的に示すこと

により進学を禁止するような行為は心理的虐待に該当する」。これらの体験に関して、とくにエホバの証人 2 世が声をあげてきた。宗教的教義にもとづいて、子どもを鞭で打つ、緊急時の輸血を禁止する、大学への進学を否定するなどの行為は「Q&A」で虐待だと規定された。

「Q&A」の通達に先立って成立した高額献金の規制法は統一教会を標的にしていた。この規制法と「Q&A」に関しては政府・与党側の対応がある程度まで評価して良い。しかし「Q&A」で気がかりな問題のひとつは、創価学会 2 世が声をあげてきた「望まぬ政党（＝公明党）やその候補者への投票を実質的に強制されてきた、少なくとも強く求められてきた」という問題が虐待の対象として規定されなかったという点にある。政府・与党側に公明党が入っていることから、「Q&A」でこの問題が無視されたと考えられる。加えて言えば、「Q&A」の全体の方向性は評価できるにせよ、通達内容の実効性を高めるためにも、法整備を進めることが課題として残されている。

3.2. 子どもたちにどう教えるか

それぞれの教育関係者は「宗教リテラシー」を発揮して、この通達を教育現場で活かす必要がある。だが、その困難の本質について、通達のうちに含まれているつぎの記述がすでに伝えている。「宗教等に関する

児童虐待を受けている可能性のある児童については、保護者から宗教等の教義に基づく考えや価値観の影響を強く受けている場合があるため、自らの置かれている状況を問題として認識し訴えることが難しい場合がある。置かれている状況を客観的にアセスメントし、児童虐待があると疑われる場合には、児童本人や保護者に対して、児童虐待の定義に基づいて説明、指導を行うことが必要である。ただし、宗教等の教義に基づく児童への親の行為や考えについて指導によっても改善することが困難である場合も想定され、また、指導等を行ったことを契機として、保護者による児童虐待行為がエスカレートすることや、宗教団体等から家庭に対する働きかけが強まること等も懸念されることから、児童の安全の確保を最優先とし、必要な場合には躊躇なく一時保護等の対応を取ることが必要である。また、これらの対応を検討するに当たっては、〔略〕専門機関等の助言も得つつ行うことが重要である〕。

さらなる難点を江川紹子が指摘している。「現実には、現場が悩むケースが多いのではないかな。なぜなら、「地獄」や「悪魔」を語って恐怖させ、活動を「強制」「強要」という、露骨で分かりやすいケースばかりではないからだ。／えてして「地獄の恐怖」は、信仰すれば救われるという「救済の甘美」や周囲の大人の称賛と一体で心にすり込まれる。物心つく前からそうやって育てられてきた子供には、いちいち「脅し」の言葉を浴びせなくても、大人が柔らかく「こうした方がいいかもしれませんね」と言うだけで、十分に意思や行動を縛る圧力として機能する。／特に心理的虐待は、一般的な「虐待」イメージにとらわれると、判断が難しいだろう。今後は、できるだけ多くの「2世」に聞き取りをして、「2世」を苦しめたり、その心を縛る「脅し」の実情をよく調査し、それを現場が共有できるようにしてほしい²⁴⁾。

小学校・中学校の教育現場でまず取りくむべきは、子どもが「SOS」を出せるようにすることだろう。困った状況に置かれた子どもたちは、多くの場合、じぶんの困り具合を的確に発信することができない。おとなであっても、拒絶されたり非難されたりすることを恐れて、苦境に置かれたときにSOSを出せない人は多い。そうして行きつく先は、子ど

もでもおとなでも精神疾患、引きこもり、反社会的行為、最悪の場合は自殺となる。

筆者はマスメディアに出演するたびに、小中学校で「宗教に困ってる子、いませんか」と呼びかけるたぐいの啓発用ポスターが掲示されるようになってほしいと主張してきた。法務省は 2006 年度から、全国の小中学校で「こどもの人権 SOS ミニレター」を配布し、いじめ、体罰、家庭内暴力などに関する児童・生徒の悩みを収集・対応してきたが、2023 年度には収集する問題として「親の宗教のことで悩んでいる」が追加された。きわめて肯定的に評価すべきことで、書きこまれた内容に教員たちが敏感に対応してくれることを望む。

高校生や大学生の授業では、「宗教リテラシー」に関する教育を、討論または意見交換という形でクラスのなかで実施してはどうか。筆者はこれまで、新宗教にせよ伝統宗教にせよ、現代日本人の一般の価値観から乖離した教義や歴史的解釈を含んでいるのだから、未成年には危険な面があり、その点で一八歳未満には不適切ではないか、という「宗教 R18 + 論」を問題提起してきた²⁵⁾。これは本気の主張というより思考実験のテーマとしての提案だが、識者であってもしばしば賛成してくれる。

子どもたちに「宗教 R18 + 論」を討論または意見交換をさせるとして、必ずしも成否の決着をつけるものではなくても良い。場合によっては、「ネガティブ・ケイパビリティ」の考え方を指導案に含めて良いだろう。ネガティブ・ケイパビリティとは、ジョン・キーツが述べた概念で、不確実なものに出くわしたときに、かんたんに答えを出そうとするのではなく、むしろそのような問いに対する明確な答えに懐疑的であることに耐えていく力のことだ²⁶⁾。もちろん、この考え方を盾にして、なんでも問題を「宙吊り」にして逃避するのは筋違いだが、問題をよく吟味しつつ、安易に「神」「正義」「真理」などに救いを見いだす態度も、それを安易に否定する態度も両方を相対化できるようになるならば、総合的思考力を涵養するという点で教育的利益が大きい。

4. 著名人・知識人・研究者のリテラシー

4.1. 人権と信教の自由

ハンナ・アーレントは、1949年のエッセイ「唯一の人権のみが存在する」で、人権を「自由と正義という市民権よりもはるかに根源的なもの」と規定し、その「窃盗」に警戒を促している。人権の窃盗とは、アーレントによると、「その人の意見が単独で重みを持ち、その人の行動が実効性を発揮するような世界での居場所を奪うことによって遂行される」²⁷⁾。宗教2世とは、教団や親によってこの「人権の窃盗」の被害を受けた人々だ。

「人権」という言葉は手垢にまみれすぎて、人々の注目を引きにくくなっている。筆者がある識者と対談した際、宗教2世問題の解決のために、宗教よりも人権が優先されることが改めて確認されなければならない、と主張したところ、相手は公然と笑って「人権？」と皮肉っぽく口にした。識者はフェミニスト系の論者だったが、このような態度で女性の人権を守ることはできるのだろうか、ということが不安になった。

人権とは、人間の人間による人間のための権利だ。敷衍すれば、人間が所有する、人間が実現する、人間を目的とした人類にとっての至上の権利だ。人権が、地球上の各時代の諸民族をとおして、普遍的に支持されてきた権利ではないことは認める。むしろ、多くの時代と地域で人権は存在しなかった。人権は数百年前からヨーロッパで局所的に形成され、その後、欧米の世界侵略によって地球各地に波及した問題含みの権利だ。それでも、筆者は人権とは人類最高の発明品だと主張したい。

宗教では、多くの場合、神や仏や大宇宙の意志の「権威」が「人権」よりも優先される。日本国憲法で保障された「信教の自由」を掲げることは、いまもむかしも問題ある宗教団体の常套手段だ。たしかに日本国憲法の第20条第1項には、「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない」とある²⁸⁾。しかし、これは親や教団が信教の自由を盾にして、じぶんたちの信仰心を子どもに押しつけて良いということ在意

味しない。同第2項には「何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない」とあること、つまり「信じない自由」が保障されていることは、無視されてはならない。

加えて、同第11条第1項に記された「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与えられる」とある。子どもは「現在国民」の一員であるとともに、「将来の国民」でもあるから、基本的人権が与えられている。加えて「児童の権利条約」には、すでに引用したとおり、「宗教の自由」について「児童の権利を尊重する」とあった。子どもたちに宗教の自由を与えないのは、憲法違反かつ条約違反だ。

このような明白な正義があり、その正義が侵されているにもかかわらず、多くの著名人、知識人、研究者は宗教2世問題を黙って見過ごし、弱者の救済に乗りださない。いまこそじぶんたちの不名誉を恥じ、宗教2世問題に関して積極的に発言すべきだ。

4.2. 弱者のための反カルト法

2001年、フランスでは「人権と基本的自由を侵害するセクト的動きの予防と抑制を強化するための法律」が制定された。これが日本で「セクト規制法」「反カルト法」などと呼ばれて、統一教会と宗教2世に関する報道でたびたび話題になった²⁹⁾。

金塚オーバン彩乃によると、この「セクト規制法」の第20条に「無知あるいは脆弱な状況を不正に濫用する罪」が含まれ、子どもの強制的入信が禁止されている。2007年、フランスで民法典などの改正がおこなわれ、行政や司法は子どもの「虐待」自体だけでなく、虐待を含めた「リスク」にも介入できるようになり、予防的な関与が可能になった。さらに付言すれば、従来からフランス法では、個人が団体のためにおこなった犯罪の場合、日本の法とは異なって、個人だけではなく法人も処罰することができる³⁰⁾。

金塚は、フランスのセクト対策が万能ではないとしても、広く被害者

救済をめざしていると指摘し、次のように述べる。「法は何よりも弱い立場にある人を守るという理念が共有されることで、対処療法的ではない、より広い取り組みが可能となる。子供や宗教二世と呼ばれる人々が置かれている状況を考えるとき、このような法の役割を問い直すことは何よりも必要である。それによってはじめて、包括的で一貫性のある対策を打ち出すことができるように思われる」³¹⁾。

このようなフランスの「セクト規制法」を日本でも実施する可能性が、日本でもっと議論されてしかるべきと考える。それが著名人・知識人・研究者らが社会問題に関して宗教リテラシーを発揮するということだ。

5. おわりに

長年にわたって宗教2世は苦しんできた。銃撃事件がこの状況を偶然に可視化できたものの、事件がなかったら、筆者たちの苦しみは社会から無視されて、無名のものとして消されつづけたはずだ。宗教2世のひとりとして、問題が可視化された事実を大切に活かしながら、活動を続けていきたい。先に述べたように、マスメディアはもはやほとんど宗教2世問題について報道せず、「被害者救済法案」の可決と「Q&A」の通達によって、社会問題として「終わった」かのような扱いを見せている。いまこそ医療職・心理職にとっての、学校・教育関係者にとっての、著名人・知識人・研究者にとっての「宗教リテラシー」を期待したい。

付記

本論文は「宗教2世問題に関する現在の論点——登壇者による自助グループ活動の報告を交えて」として、第39回日本社会病理学会大会（2023年9月6日）のテーマセッション「宗教現象の現在と社会病理——新宗教をめぐる問題を中心に」で発表した内容を改稿して成立した。

注

- 1) 塚田徳高「[宗教 2 世]問題の基礎知識」、塚田徳高／鈴木エイト／藤倉義郎『だから知ってほしい「宗教 2 世」問題』筑摩書房、2023 年、16 頁。
- 2) 塚田 (2023)、19-20 頁。
- 3) 荻上チキ編著『宗教 2 世』太田出版、2022 年、49 頁。
- 4) 越高陽介「仏飯を食べたらお坊さんにならなければいけないのか——お寺の 2 世問題」、塚田／鈴木／藤倉 (2023)、358-359 頁。
- 5) 櫻井義秀「[カルト]対策としての宗教リテラシー教育」(『現代宗教 2007 特集・宗教教育の地平』国際宗教研究所編、秋山書店、2007 年)、317-318 頁。
- 6) 山中弘／藤原聖子編『世界は宗教とこうしてつきあっている』弘文堂、2013 年、234 頁。
- 7) 島蘭進「今、求められる「宗教リテラシー」を身につける 島蘭進さんが語る、宗教と「救い」(1)」NHK 出版デジタルマガジン、2023 年 3 月 25 日 (<https://mag.nhk-book.co.jp/article/26415>)。ウェブサイト情報の閲覧日は 2023 年 10 月 13 日。以下、すべて同様。
- 8) 岸見一郎／古賀史健『嫌われる勇気——自己啓発の源流「アドラー」の教え』ダイヤモンド社、2013 年、28-32 頁。
- 9) 國分恭子／松本和紀「精神病におけるトラウマ——最近の研究の概観」(『トラウマティック・ストレス』15 (1) 号、2017 年)、39 頁。
- 10) 横道誠編『みんなの宗教 2 世問題』晶文社、2023 年 a、171-172 頁。
- 11) “6B40 Post traumatic stress disorder,” in: *ICD-11 for Mortality and Morbidity Statistics* (Version: 01/2023) (<https://icd.who.int/browse11/l-m/en#>, <http://id.who.int/icd/entity/2070699808>)
- 12) “6B41 Complex post traumatic stress disorder,” in: *ICD-11 for Mortality and Morbidity Statistics* (Version: 01/2023) (<https://icd.who.int/browse11/l-m/en#>, <http://id.who.int/icd/entity/585833559>)
- 13) 横道 (2023a)、173-174 頁。
- 14) 野坂祐子『トラウマインフォームドケア——“問題行動”を捉えなおす援助の視点』日本評論社、2019 年、78 頁。
- 15) 三谷はるか『ACE サバイバー——子ども期の逆境に苦しむ人々』筑摩書房、2023 年、46 頁。
- 16) 三谷 (2023)、56-57 頁。
- 17) Bessel van der Kolk, “Developmental Trauma Disorder: Toward a Rational Diagnosis for Children with Complex Trauma Histories,” in: *Psychiatric Annals*,

- 35 (5), 2005, pp. 401-408.
- 18) ボウルビィ『母と子のアタッチメント——心の安全基地』、二木武監訳、庄司順一ほか訳、医歯薬出版、1993年、14-15、178-179頁。
 - 19) 野坂 (2019)、75-76頁。
 - 20) 亀岡智美編『実践トラウマインフォームドケア——さまざまな領域での展開』日本評論社、2022年、24頁。
 - 21) 横道誠『唯が行く！——当事者研究とオープンダイアログ奮闘記』金剛出版、2022年、35頁。
 - 22) 以下、「Q&A」の引用は、いずれもオンラインに公開された通達文書 (https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/a176de99-390e-4065-a7fb-fe569ab2450c/e8642586/20230401_policies_jidougyakutai_14.pdf) からおこなう。文書にはページ番号が振られていないため、以下ではいちいち注をつけない。
 - 23) 「「児童の権利に関する条約」全文」、外務省 (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaikou/jido/zenbun.html>)
 - 24) Yahoo! JAPAN ニュース「江川紹子」、2022年12月26日 (<https://news.yahoo.co.jp/profile/commentator/egawashoko/comments>)
 - 25) 荻上編著 (2022) 271-272頁。横道 (2023a) 277-278頁。横道誠編著『信仰から解放されない子どもたち——宗教2世に信教の自由を』明石書店、2023年b、159-162頁。
 - 26) 帯木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ——答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版、2017年、3頁。
 - 27) Hannah Arendt, “Es gibt nur ein einziges Menschenrecht”, in *Die Wandlung*, 4. Jg., Herbstheft 1949, S. 759.
 - 28) 「日本国憲法」、衆議院 (https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_annai.nsf/html/statics/shiryo/dl-constitution.htm)。以下の憲法の引用もすべてここから。
 - 29) 日本やアメリカで一般に「カルト」と呼ばれているものは、ヨーロッパで「セクト」と呼ばれるものほとんど同じと理解して良い。
 - 30) 金塚オーバン彩乃「フランスのセクト対策とその理念」、塚田／鈴木／藤倉 (2023)、132、133-134、141-142頁。
 - 31) 金塚 (2023)、148頁。

特集 試される宗教リテラシー

対談 デジタル時代のメディアで 宗教をどう視せるか

渡邊直樹¹・西出勇志²

司会 平藤喜久子³

2023年8月2日実施（於 國學院大學）

「メディア」の単数形である「ミディアム」が中世には巫女や霊媒者を指す言葉だったことが象徴するように、メディアと宗教のあいだには切っても切り離せない関係がある。情報メディアだけでも、新聞や雑誌といった報道の分野、映画や小説・漫画といった文化の分野において、宗教は様々な形で取り扱われてきた。

今回の対談では、大正大学の『地域人』前編集長で、『宗教と現代がわかる本』をはじめ数々の雑誌・書籍を編集してきた渡邊直樹氏と、共同通信社編集委員・論説委員で、稀少な「宗教記者」の立場から取材を続けてきた西出勇志氏に、メディアにおける宗教への関わりとリテラシーについて、オウム真理教事件や東日本大震災といった転換期を振り返りながら、将来への展望を語っていただいた。



¹ わたなべなおき：大正大学客員教授、大正大学出版会編集長

² にしでたけし：共同通信社編集委員・論説委員

³ ひらふじきくこ：國學院大學神道文化学部教授

世代文化としての宗教

平藤 統一教会問題をきっかけとして、宗教リテラシーという言葉が注目されるようになりました。宗教についての知識を得て適切に運用する能力が必要だということで、最近の文脈では「カルトとそうじゃない宗教を見極める」とか「変な宗教に入らないために宗教リテラシーが必要だ」といったような文脈で使われることも多いかと思います。もちろん、宗教についての知識の運用というのはそれだけではなく、ビジネスや観光などの色々な分野で求められています。

今回の鼎談で注目したいのは、メディアという分野での宗教リテラシーです。私たちは様々なメディアを通して、宗教についての知識や情報を得ていますし、それによって宗教についてのイメージを作り上げています。メディアと宗教の関係は人類史的にすごく古く、聖書や寺社縁起のように、宗教の歴史はメディアの歴史だと言っていいと思います。とはいえ今回の鼎談は『現代宗教』なので、そこまで古くまでは遡らずにここ数十年を切り取って、新聞や雑誌といった報道の分野と、映画・小説やポップカルチャーといった文化の分野について議論しましょう¹⁾。

最初の分岐点として、1995年があります。1995年は阪神淡路大震災やオウム真理教の地下鉄サリン事件があり、社会が大きく変化するときでしたが、それだけではなく、Windows 95が発売されてインターネットが一般化する一つの契機になったという意味でも非常に重要な時代だと思います。もう一つがやはり東日本大震災で、日本社会を根本から揺るがし、エネルギーや社会保障・安全保障、生き方も含めて、これでいいのかということ突きつけました。それが宗教ともすごく関わりがあったということで、どう報じたか、文化メディアにどう関わったかという論点があります。まずは最初の1995年までのところについて、報道の観点から、西出さんにお話をいただければと思います。

西出 共同通信社の西出です。安倍さんの事件から一年、宗教リテラシーという言葉が多くの人々の口の端に上るようになりました。この宗教

リテラシーの向上にマスメディアが寄与する必要がありますが、マスメディア、特に世俗の新聞メディアは、宗教というものに対してあまり関心がなく、取材の蓄積もありません。近代的な新聞は事実に基づく合理主義を尊ぶところがあって、宗教のような、新聞にとって訳が分からないものはなるべく見ないようにする、隠してしまおうとする傾向があります。例えば、インタビューを行った相手が「私は実はこういう宗教を信じているからがんばれるんです」と言っても、そうした信仰の部分は切ってしまい、単にがんばっているという部分だけで物語化してしまうんですね。さらに言えば、メディアが見る宗教はものすごくステレオタイプで、今はさすがにほとんどなくなりましたが、「宗教に走る」というような、負のイメージを雑に強調する表現は、かつては普通に紙面化されていました。宗教・信仰を持つことに対して非常にマイナスのイメージがあります。

負のイメージは、1995年に起きたオウム真理教による地下鉄サリン事件で決定的になりました。メディア報道の効果も相まって宗教のマイナスイメージが増大しました。オウム事件後は「スピリチュアル」が隆盛になるのですが、オウムとの関係を含め、マスメディアはその点をあまり視野に入れていません。オウム事件を経験したマスメディアは、ますます宗教界全体に触れないようにする傾向が強くなったと感じています。

私がお話ししているのは新聞とかテレビの報道メディアが中心ですが、次に渡邊さんがお話しになる本や雑誌といった出版メディアでは、新聞やテレビの風潮に対して異議を唱えるようなものもあり、非常に貴重だったと思っています。

平藤 それでは渡邊さん、いかがでしょうか。

渡邊 大正大学の渡邊です。日本では1945年の敗戦後、公教育やメディア・政治・ビジネスなどの場で宗教に触れたり語ることは、一種のタブーとなってきたといえるでしょう。戦前の“国家神道”体制への大きな反省があり、伝統仏教教団など既存の宗教団体は、「戦争協力」の

過去を総括することから再スタートしました。

いっぽう現実の社会では、敗戦後の混沌とした世の中に「神々のラッシュアワー」といわれるように新たな宗教が次々と生まれ、高度経済成長期には労働力として田舎から都会に移住した人たちの絆をつなぐ新宗教の信者数が拡大し、代表例である創価学会は政治にも進出して公明党が誕生します。

1960年代後半の大学紛争など世界的な広がりを見せた若者の政治の季節が終息しようとする1970～80年代、ちょうど私が大学に入ったころなのですが、アメリカの西海岸のカウンターカルチャーやヒッピームーブメントの動きは日本の若者にも伝わってきました。私が宗教学に進んだのも、そのタイミングでした。とはいえ、多くの日本人は「自分は「無宗教」だ」と考え、宗教についてとくに考えたこともないし、公教育で宗教をとりあげることなどほほありませんでした。

私自身は、大学卒業後は編集者として複数の出版社で仕事をしてきました。最初に手がけた月刊『太陽』（平凡社）は、国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンの時期とも重なり、仏像や寺院・僧侶・茶道・俳句など、宗教に根差した日本文化を特集することが多いビジュアル教養誌でした。その後に編集長を務めた複数の雑誌は、振り返ってみると、読者層や内容は異なっていましたが、「宗教」に関わる連載や特集はどの雑誌でも企画し記事にしてきました。

その中で、記憶に残るのは、やはり1995年1月の阪神淡路大震災と、3月のオウム真理教による地下鉄サリン事件です。95年当時は、週刊『SPA!』（扶桑社、1988年～）の次に創刊した月刊誌『PANJA』^{パンジャ}（扶桑社、1994～96年）の編集長でしたが、『SPA!』編集長のときには、フォトジャーナリストの藤田庄市さんが、新宗教の儀礼、それも公開されることの少ない秘儀を取材して写真と文章で伝えるという連載を続け、『霊能の秘儀——人はいかに救われるのか』（扶桑社、1992年）という書籍にまとめました。当時の雑誌メディアが宗教を扱うスタンスは、①スキャンダル（金と女に関わる事件）か、②宗教教団の“提灯記事”が主流でしたが、「霊能の秘儀」は教団や信者の方たちとの微妙な距離感を保

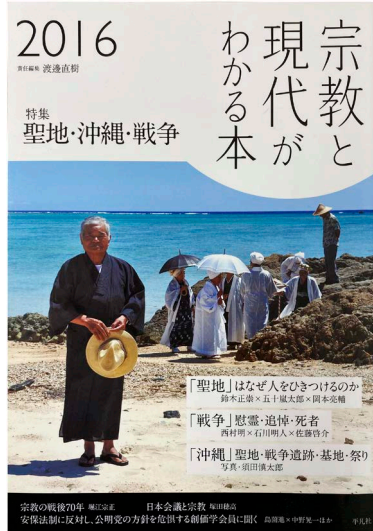
ちながら宗教の核心部分に迫ろうとした、週刊誌としては画期的な内容だったと思います。

西出 『SPA!』では中沢新一さんとオウム真理教の麻原彰晃教祖との対談²⁾に編集長として渡邊さんも立ち会われたんですね。

渡邊 はい、そうです。企画段階から中沢さんと相談しながら進め、私が直接交渉し、対談の場にも立ち合いました。対談は1989年の11月、翌日から麻原一行が海外に行くために滞在していた成田空港に近いホテルの一室で行いました。後になって、坂本弁護士一家は対談の時点ですでにオウム信者たちにより殺害されていたことが判明するのですが、対談に先立ち中沢さんが、「世間では坂本弁護士家族の失踪をめぐり騒がれています、あなたたちは関与していませんか？ もし関与していたら今日の対談は成立しません」と切り出したのに対し、麻原は「いや、そういうことはありません」と答えました。しかし、対談の後半になって「うちにも若い信者もたくさんいますからね」というようなことも言っていました。その発言部分も記事として掲載してあります³⁾。

オウム真理教の犯罪・事件は、宗教学の内部でも大きな問題・課題となりましたが、この記事企画・掲載した私にとっても、その後の宗教の報道・表現を考え直す大きな転機となりました。戦後の日本が宗教についてきちんと考えたり教育してこなかったことも、やはりこの事件を引き起こす遠因になったと考えました。

それから数年は、別のメディアを手がけながら藤田さんとも話をしたり、自分のできることを時間をかけて考えるなかで、宗教学関係の先生方を中心に様々な分野の学者、ジャーナリスト・宗教家・作家・写真家・マンガ家・アーティストなど多くの方々のご協力をいただき、2007年から2016年まで年に1冊『宗教と現代がわかる本』（平凡社）の責任編集者として計10冊を刊行することができました。一年間に起きた広義の「宗教」に関わるニュースや事件などの背景を一般読者向けに解説する、アカデミズムとジャーナリズムを繋ぐような内容で、宗教に



『宗教と現代がわかる本』の最終号となった2016年号。

関して様々な立場の人が多方面からアプローチしてオープンに論じ合う場を提供したいという意図で発刊したものです⁴⁾。

2023年に大きな問題となった統一教会や宗教と政治の問題に関して、その後のテレビや新聞などのメディアにご登場され発言されてきた島藺進先生・櫻井義秀先生はじめ、塚田穂高さんなど、『宗教と現代がわかる本』でも同様のテーマでご執筆あるいは座談会などで発言していただきました⁵⁾。しかし、それ以降も統一教会と自民党との関係はさらに深くなっていたことが判明すると、『宗教と現代がわかる本』の企画意図とは別に、その社会的影響の非力さに忸怩たる思いがあります。2016年以降も、『宗教と現代がわかる本』が存続していたら今年は何をテーマにしようかと毎年のように考えてはいたのですが。

西出 当時、「オウム世代」という言葉が生まれました。私はこの言葉に該当する世代です。61年生まれで、上祐史浩氏（62年生まれ）など元オウム幹部と年齢が近く、宗教学者では弓山達也さん（63年生まれ）と

いった方が同世代です。あのときにもものすごくしんどかった。心が痛い感じでした。学生時代から高橋巖先生の『神秘学講義』（角川選書、1980年）を読んだり、シャーリー・マクレーンの『アウト・オン・ア・リム』（地湧社、1986年）の世界に関心を持ったりしていて、特に松岡正剛さんが編集長を務めていた『遊』（工作舎、1971～82年）を愛読していました。当時の『遊』は、吉福伸逸さんをはじめとする、C+F研究所の人たち、トランスパーソナル心理学系の人々が多く執筆していました。オウム信者の来歴が報道されると、私に関心を持った行き先の一つがオウムだったと言えるなと思い取材していて、すごく痛みを感じていました。当時、私の原稿を見ていたデスクは今70歳代半ばの世代で、彼女は「あなたの痛みは私の“連赤”と一緒に」と言ったんです。学生運動を経てきた自分たちにとって、連合赤軍事件がものすごくつらくて痛いことだった、こんなことにたどり着くと思わなかったっていうことですよ。

サブカルチャーからのまなざし、 サブカルチャーへのまなざし

平藤 メディアと宗教では、やはり1970年代に五島勉さんの『ノストラダムスの大予言』（祥伝社、1973年）があって、あれは当時のメディアミックスで展開したものでした。『幻魔大戦』（1967年連載開始）も。

渡邊 平井和正さんはたしかGLAの信者でしたね。学生時代に、新宗教を参与観察する柳川啓一先生のゼミで、私と四方田犬彦氏はGLAを選んで、何度か集会にも行きました。後に「幸福の科学」を創設する故・大川隆法もGLAの影響を受けていましたね。

平藤 『幻魔大戦』では前世の観念が重要ですけども、1980年代には『ぼくの地球を守って』（白泉社、1986～94年）という漫画の影響で、自分の前世で出会った人を『ムー』（学研、1979年～）の文通コーナーで探したり、小中学生が前世を見るために薬を飲んで中毒症状を起こして

大問題になったりってということなんかもあったりして。

1995年から井上順孝先生を中心に、國學院大學日本文化研究所と「宗教と社会」学会が一緒に行った「学生宗教意識調査」⁽⁶⁾では、3割～過半数ぐらいが前世を信じていて、割合が高いんですね。けれど、その「前世」という言葉の用例を新聞で調べてみると、戦前はほとんど出てこないですよ。もちろん仏教用語としてはあるけれども、明らかに1970年代～80年代の文化メディアが前世のイメージをポジティブに演出してきた影響が宗教意識に現れているんだろうなと思います。今は『君の名は。』（新海誠監督、2016年）の「前前前世」から君を探したという歌があって、そんなそんな早く往生してくださいと思うんですけど（笑）、来世というのが注目され、ポップに信じられるようになっていきます。異世界転生とかは学生も大好物です。

私は大学の卒業式が地下鉄サリン事件の日で、研究を始めるのはポストオウムなのですが、オウムなんかもやはり前世とか『ムー』とかそういう出版メディアの文脈のなかで育ってきたというところもあると思います。出版メディアにとって、そういったサブカル的な言説に対しての反省点というか、そのあたりはいかがでしょうか。

渡邊 私はポスト団塊の世代ですが、『SPA!』はサブカルに注目した初の週刊誌でした。具体的には、宮崎勤による連続少女誘拐殺人事件（1989年逮捕）のときに他の週刊誌との違いを鮮明にしました。それまでの団塊の世代がつくってきた「おじさん週刊誌」は事件に対して、新聞で言うところと社会部的なとらえ方をしていました。私が意識したのは文化部的な視点です。自分が共感できないものや自分のなかにその要素がないものを「あかの他人が起こしたこと」として取り扱うことはしない、と決めたのです。宮崎勤のときは、まず中森明夫さんと大塚英志さんに対談してもらいました。ビデオがたくさん積まれた宮崎の部屋を見て、これは自分たちが理解不能な他人ではない、自分の中にも宮崎的な要素もありはしないか、というスタンスで記事にしました。もちろん犯人の宮崎を肯定するわけでは全くありません。その後も、連載記事を書いて

いた宅八郎氏（故人）と話して、「『おたく』が世紀末日本を動かす！」という大特集（1990年）を丸ごとまかせました。大部数の雑誌でオタクを初めて肯定的に扱ったのが『SPA!』でした。当時の『SPA!』はかなり尖っていて、「自分たちはマスメディアではないしミニコミでもない。ミディアムメディアだ」と宣言していました。マスメディアから真似されて上等、その逆の企画は提案するな、という心意気でしたから。我々は、まだ目に見えない水面下にある現象や、そこで活動している面白い人たちをいち早く取り上げることを目指していました。オタク文化もいち早く肯定的に扱っていました⁷⁾。余談ですが、4年後に創刊した『PANJA』では「おたくよさらば」という記事をつくりました。新聞・テレビ・電通などが持ちあげはじめていましたからね（笑）。

西出 事件や事故を担当する社会部だけではなく、新聞などのオールドメディアはどうしてもステレオタイプの切り方をしてしまうところがあって、例えば「ロリ系アニメの愛好者は犯罪に走りがちだ」というような偏見があると思うんですね。そこをもうちょっと引いて大きく見ると、実はそれほど単純な話ではないわけです。少し引いて異質な視点を出すメディアが必要で、それはリテラシーの向上につながっていくだろうと私は思います。私もサブカルチャーは嫌いではないので、「サブカル＝犯罪予備軍」みたいな捉え方をされてしまうと、ちょっと違うなという感じが当時からありました。

渡邊 私のつくる雑誌観は報道というよりも文学的な表現に近いのかもしれない。あるいは参与観察的というか。人間を見るときに自分の内部も照らしつつ見ていく。宗教的なものを見るときも信者さんを見るときも、諸手を挙げて賛成ということはないけれど、自分も共感できるころはどこなのかというふうに見ます。とはいえ、今回の統一教会と政治の問題に関しては従来の社会部的な追及をもっと徹底してやらなければいけない。政治家に近すぎる政治部ではなく、社会部や雑誌の頑張り時なんだけど。SNSでは無責任に誰でも何でも言えるけれど、結局そ

れも事件の本質にいたらないで、うやむやのままに続くことに結果として力を貸すことになっています。

メディアの役割としての編集

平藤 1995年にはWindows 95も出て、インターネットが一般化していきました。かつては前世がどうかノストラダムスの大予言がどうか色々あっても、本屋さんに行けば批判も含めて色々なものが非常に可視化された形で並んでいたの、相対化できたと思うんですよね。けれども、それがインターネットになってそのなかで完結しがちになると、メディアの大きな力とか性格が結構捨象されてしまうような。

渡邊 私もWindows 95の頃からインターネットに興味をもち、詳しい人たちに教えてもらうのが一番だと思い、短期間でしたが『週刊アス



渡邊直樹（わたなべ・なおき）

大正大学客員教授、大正大学出版会編集長。1951年生まれ。東京大学文学部（宗教学専攻）卒業後、平凡社で『太陽』を編集。その後、『SPA!』『婦人公論』『をちこち』（国際交流基金）等の編集長を歴任。2004年～2016年まで大正大学文学部・表現学部教授。『宗教と現代がわかる本』を10年間責任編集。2015年『地域人』創刊、2023年5月まで編集長を務める。

キー』を創刊しました。当時から西和彦さん（アスキー社長）は、「インターネットを使えば現場に行って取材することはない」と言っていました。インターネットは急速に普及し、いまや新聞・出版といった文字中心のメディア企業も、デジタルを導入してIT企業やキャリアと組むなどしないと、従来のビジネスモデルでは企業経営が成り立たなくなってきました。社会全体がすぐに成果や結論を出すことを求めている。その影響はメディアや教育の世界においても大きくなり、問題も見えてきています。

平藤 そうですよ。

地下鉄サリン事件のことを授業で伝えるときに、当時の新聞の一面をデジタル化したものを見せるんです。新聞のいいところは、何が大事なのか、何が起きているのか、事件の衝撃性が写真の使いかたとかでパッと分かるじゃないですか。「社会にとってこれはすごいことなんだよ」「みんなで考えなきゃいけないんだよ」というのを、新聞は紙面の力でバーンと出してた。それが1995年以降、インターネットがメディアの主戦場になっていくなかで失われていったということも大きいんじゃないかなと思うんです。今はヤフーニュースにダーツと並んでいる見出しで、ニュースの軽重が分からない。人によってはTwitter（現X）でバズったニュースが大きなニュースになったりとかして。

西出 おっしゃるとおりです。ただ、まだ新聞はかなりの部数が発行されていますので（一同笑）。

我々は毎日毎日、何が重要ニュースかを巡って会議をやるわけです。共同通信の場合、政治や経済・国際・科学・文化など色々なジャンルを取材した中から、担当のデスクやニュース報道の責任者が重要なニュースを話し合って選び、「これは一面に相当する大きなニュース」というのを配信先の新聞社に知らせます。「何が重要ニュースか」についてはすごく大切に考えている人間が多いので、場合によっては会議で喧嘩になることもあります。例えば「この人が死んだら一面のニュースだよね」

とか「この事態が起きたら号外だよな」みたいなことは常に話し合っているわけです。

報道を仕事にする私たちが、見出しや記事の大小でニュースの価値付けしていたわけですが、今のインターネット社会でニュースは並列的でフラットになっていくわけですよ。そうすると、重要ニュースはページビューなどで決まることになります。しかも何がバズるのかわからない。共同通信もサイトでバラエティーに富んだニュースを出していますが、「えっ?」というようなものが上位に浮上すると、これまでに日々磨き続けてきたはずのニュースセンスの在り方を考えなおさなければいけなくなってきました。フラットに並べられてしまうことによって、「このニュースは絶対に重要」と思っても見向きもされないことが多々ある。ネット読者の関心事と、報道機関が考える社会的なニュースの重要度のバランスをこれからどう折り合いを付けていくか、難しいと思います。

渡邊 出版では書籍の目次をつくる時に起承転結を意識してきました。ビジュアル雑誌の特集たとえば40ページを構成するとき、私はいまでも自分で全ページのラフレイアウト（絵コンテ）を手描きで描いて、ページ全体の流れや写真の山場などを考えないと気がすまないのです。しかし今はまさにフラットの時代。どこからでも読めて短時間に読みきるように文字は少なくという流れです。タイパを考えて必要な情報入手するにはフラットなつくりが向いています。でも、それならば紙である必要はなくデジタルにこそふさわしいものです。リクルートがかつて発行したフリーペーパー『R25』（2004年7月創刊）は、地下鉄の一駅で見開きの記事をひとつ読めることを売り物にしていました。リクルートの情報誌はいち早く紙からウェブに変わりました。教育情報産業は時代の流れを先取りして切り替えが早い。

報道業界における宗教の扱い

平藤 今回の鼎談は宗教とメディアに関わるリテラシーの話ですけども、新聞社や雑誌というのは、宗教専門の人がいたりトレーニングしたりということはあるんですか？

西出 一般紙の場合、宗教担当ってほぼいないんですよ。「ほぼ」というのは、会社の担務としては存在せず、自らの関心で取材をする記者が僅かながら存在するという意味です。関西には京都宗教記者会（1948年～）がありますが、全国紙やNHKの場合、大阪や東京の本社へ行く前の通過地点としての、京都らしさが堪能できる、ちょっと変わった一記者クラブという位置付けでしょう。専門紙と一般紙、テレビ局が加盟していて、お祭りや人事・事件に対応しています。私を含め、ここを通過して宗教取材を継続している一般紙の記者はいるにはいますが、本当にごくわずかです。東京本社には、宗教全般を見ている記者はいなくなつたに等しい。

歴史を振り返れば、読売新聞が100年前、1925（大正14）年に「宗教欄」を先駆けて作りました。読売新聞は、仏教信仰が篤かった正力松太郎さんが社主であり、何人も宗教記者を出しています。仏教学者、増永靈鳳の子息である増永俊一さんは著作『宗教の回廊—記者だから出会えた巨人たち』（春秋社、1992年）も残されていますね。ただ、今は宗教欄はありません。朝日新聞も1979年に読者の声を反映して「こころ」欄を作って初代は外村民彦さんが担当されていましたが、その後に編集長になった菅原伸郎さん⁸⁾の退職を機に、東京本社発行の「こころ」のページは20年ほど前になくなってしまいました。毎日新聞は、菊池寛賞を受賞した「宗教を現代に問う」（1975～76年）の連載など、東京の佐藤健さんや大阪の横山真佳さんといった名物宗教記者がいましたが、どこの社もほぼいなくなったという感じですね⁹⁾。ただ、先ほどもお話しした通り、関西には多少とも宗教を紙面で扱おうという空気があり、今でも熱心な記者が少しはいます。

平藤 1995年のオウム真理教事件のときには、宗教についての知識がそんなにない人たちが事件についての報道を取り扱っていたということでしょうか。

西出 当時は、宗教に関心のある記者が学芸部や文化部といったセクションにまだそこそこいました。でも、事件報道の主流は別のセクションであり、宗教の取り扱いについては全国紙を見ても首をかしげるような報道も散見されました。ただ、現在の統一教会報道に関して言うと、知識が欠けていてひどい記事だなど思うものはあまりないですね。インターネットの発達で、専門知を持つ研究者へのアクセスを含め、かなり学習できる環境になったからだという気がします。

平藤 櫻井義秀先生みたいな専門家にすぐに訊いてしまうみたいな。

西出 櫻井先生は、取材攻勢で本当に大変だったようですよ。



西出勇志 (にしで・たけし)

共同通信編集委員兼論説委員。1961年生まれ。85年に共同通信に入社、90年代前半の京都支局時代から宗教取材を始め、2011年の東日本大震災後に「こころ」のページを立ち上げ現在も継続中で、宗教取材は30年以上になる。長崎支局長、東京メトロポリタンテレビ (TOKYO MX) 報道部長なども務めた。

渡邊 いま、メディアの中で宗教に関して内容もしっかりしていて、かつ普通の人にもわかりやすい良質の番組を制作しているのはダントツでNHKでしょう。統一教会と政治の問題に際して「クローズアップ現代」に櫻井先生や塚田さんが登場して解説をされたり、「こころの時代」でも島蘭進・釈徹宗・小原克博・若松英輔といった多くの宗教学関係の先生方による座談会シリーズが再放送も含めて放送されました。ほかに、広い意味での宗教に関わる良質かつ面白いドキュメンタリー番組が増えています。

「こころの時代」も従来だと「宗教家の先生のありがたい法話を聞く」というイメージだったのが、最近ではたとえば、「走る哲学者」ともいわれる元陸上スポーツ選手の為末大さんが蓑輪顕量先生と対談したり（為末大『熟達論』にはその対談から学んだことも反映されている）、無罪判決を30件以上確定させた元裁判官の木谷明さんの人生を詳しく紹介したり、番組の枠が広くなり、より多くの人の関心にこたえる丁寧な番組づくりがされています。その底流には広い意味での宗教と関わるものが流れています。

人気番組『ドキュメント72時間』の中の「島根・黄泉平良坂 あの世との境界で」は、そこを訪れる人々の話から、多くの日本人が考える死生観・宗教観がとてもよく伝わってきました。宗教学の教材としてもいい内容でした。

西出 2011年の東日本大震災で報道が本当に変わりました。東北の被災地が神仏の信仰が篤い土地だったことが大きい。地元の寺院に被災者が集まってきて本堂が避難所になっていたり、僧侶や神職、新宗教の人たちが支援に各地から入ったりして、ごく自然な形で地元の方々と触れあっている。それを中央から乗り込んでいったメディアが見て、「宗教の再発見」みたいなものがあったと私は考えています。これまでメディアが遠ざけていた宗教が、現地で受け入れられて活動していることに気づいた。そこから信仰をプラスに捉える方向で、さまざまな報道が出てくるんですね。オウム事件のときに地に堕ちた宗教イメージが、2011

年の東日本大震災でずいぶん変わる。臨床宗教師のような、一教団ではなく超宗派で動く宗教者であれば、マスメディアとしては取り上げやすい。宗教イメージは良くなったと思います。臨床宗教師は、特に関西でよくニュースになっていました。宗教に関しては、専門のページで報じるのではなく、社会面とか家庭面とかで、僧侶や神職が行っている色々な活動が普通に取り上げられるようになってきたというのが、2011年以降の大きな流れだと思います。

葬儀と宗教者のありかた

平藤 それでいうと島田裕巳さんの『葬式は、要らない』（幻冬舎新書）が出たのが2010年で、宗教色のない葬儀が目ざされたり、特に都市部はそういう傾向があったと思うんですけども、2011年の震災のときのニュース報道ですごく印象的だったのが、葬儀ができない悲しみ、つまり、グリーンケアとして宗教的な儀式が必要なんだということだったり、震災を取り上げた映画の中でも僧侶が遺体安置所でお経をあげている場面があったりした。葬式はいらない、つまり宗教色のある葬式はいらないという、宗教へのネガティブなイメージが共感を得る一方で、震災を機に、そうではない面にメディアも注目して報道したと思いますし、映画もそういうものを取り上げていく。おっしゃるように、出す側も意識してきたということは大きいかもしれない。

渡邊 宗教者の人たちが本来のありかたに目覚めたと言ったら失礼かもしれませんが、被災地に行って現場に直面したときに、自分の宗派を宣伝するのではなくて、宗派を超えて被災者の苦しみに直に向き合い、それに応えようと活動されていましたね。報道する立場の人間にもそれが伝わったのでしょうか。東日本大震災は、その後の対応しだいでは、日本が大転換する機会にもなったはずなのですが……。

西出 石井研士先生は団体性の拒否について指摘されています¹⁰⁾。それ

はまさにそのとおりだと思いますね。教団ではなく、例えば僧侶や神職といった若手を中心とした宗教者たちが、宗派を超えたボランタリーなつながりのなかで、自分たちが宗教者として何をやっていくべきかすごく考えた。今、その活動の流れが色々なところで開いて、成果が出ていますよね。ただ、そこで教団が出てこないということは、それはそれで大きい問題ではあると思いますね。

平藤 映画の話で言うと、例えば伊丹十三さんの『お葬式』（1984年）のなかの僧侶像というの、かなり仏教批判があるじゃないですか。それで『おくりびと』（滝田洋二郎監督）が2008年ですけれども、あれも納棺師の仕事で、宗教ではないですよ。青木新門さんの原作（『納棺夫日記』桂書房、1993年）にも、お坊さんは死者と向き合わないでお金を数えているみたいな表現があったりして、『おくりびと』のなかで、葬儀の中の景色というのはすごく後景化している。一方、震災の後に作



司会・平藤喜久子（ひらふじ・きくこ）

國學院大學神道文化学部教授、日本文化研究所所長。学習院大学大学院人文科学研究科修了。博士（日本語日本文学）。専門は神話学、宗教学。神話の読まれ方、神の描かれ方などを地域や時代に注目して研究している。最近では宗教と写真にも関心を持っている。最近の著書に『〈聖なるもの〉を撮る』（港千尋と共編、山川出版社）、『「神話」の歩き方』（集英社）、『神話でたどる日本の神々』（ちくまプリマー新書）、『世界の神様解剖図鑑』（エクスマレッジ）などがある。

られた『遺体明日への十日間』（君塚良一監督、2013年）という西田敏行さんが主人公の映画では、一人でやってきてお経をあげるお坊さんが出てきた。今の西出さんのお話を聞くと、やはり教団宗教への不信とかそういうものはあって、でもお坊さん個人の振る舞いによって変わってくるということなんですよ。

西出 私、ウェブで漫画をよく読みますけど、葬送業界を取り上げた漫画って結構多い。ただ、総じて、葬送の漫画にお坊さんは重要な役割として出てこないですね。『病室で念仏を唱えないでください』（こやす珠世著、小学館、2012～20年）とか『お慕い申し上げます』（朔ユキ蔵著、集英社、2011～14年）とか、僧侶や神職を取り上げたものはかなりありますが、葬送の漫画になると、葬送業者がいかに遺族と向き合うかが主題です。つまり、グリーフケアを担う主体は葬送業者なんですよ。

平藤 そうですね。私が最近読んだ漫画（はがあおい『葬儀屋さんになったわけ』イースト・プレス、2022年）でも、葬祭会社に就職をした子が遺族とどう向き合うかがテーマになっていたりとか。

西出 ほぼ宗教者不在ですよ。宗教者と葬送業者が協働している様子を描いた漫画はあまり見たことがありません。

渡邊 2011年の東日本大震災のあと、葬儀や宗教者のありかたが見直されましたが、2019年末からの「コロナ禍」でも、葬儀のありかたなどが大きく変わりました。大勢が集まる法要ができなくなり家族葬や直葬が増え、Zoomを使っただけの法事も行われるようになりました。メディア側の取材方法も、対面での取材インタビューが避けられてオンラインでの取材が増え、コロナ禍以前とは大きく変わりました。

平藤 櫻井先生と一緒に山形の過疎地でお寺のインタビュー調査なんかもしたんですけど、もう本当にそういうことを言っていられない急激

な過疎化というのがあって、お寺さんだけが残ってそれで残ったと言えるのか、という話なんかはよく聞きます。神社なんかもそうですけれども、地方に行けば行くほど複数の神社を兼ねるのが普通になっていて、そういう場所が大事なんだということが再認識される一方で、止まらない部分もあったりしますからね。

アートで宗教を伝える

渡邊 被災地の復興にも貢献し、被災地の人たちの希望ともなり、地域に人々を呼び込むうえでも力となるアートが各地で制作・展示されるようになっていきます。そのなかに、一種の宗教的感覚をもたらす作品が増えていきます。たとえば、大正大学も被災直後から支援活動を続けている宮城県の南三陸では、2023年に「南三陸311メモリアル」という施設ができました。そこで展示されている現代アートのクリスチャン・ボルタンスキーの「MEMORIAL」は、日本では初のボルタンスキーの常設展示でもあります。ボルタンスキーは、人間の生と死、個人の記憶と忘却などをテーマとした作品をつくりつづけてきただけに、震災の記憶を次世代に伝えるための施設にふさわしい作品です。暗い展示室の中に積まれたたくさんの金属製の四角い缶はぼんやりとしか見えない。その部屋の空気のなかにいると、日常では感じられない感覚や何者かが漂っているのを私は感じました。受け止め方は人それぞれでしょうが、視覚が主役ではなくなることで、それ以外の感覚が働き出すのでしょうかね。

もう一つは、2023年6月26日に福島県いわき市の四倉海岸で、「満天の桜が咲く日」という花火を打ち上げるプロジェクトを、世界的なアーティストの蔡國強さんが地元の人との協力を得て実現しました。その前年、私はいわき市を拠点に活動する小松理慶さんから、蔡さんの活動を長年支えてきた志賀忠重さんを紹介してもらい、蔡さんのプランを志賀さんたちが実現した「いわき回廊美術館」を訪れました。「いわき万本桜プロジェクト」は、東日本大震災と原発事故の教訓を後世に伝えようと、桜の木をひとり1本、全部で9万9千本植え続けていくというプロ



いわき万本桜プロジェクトの完成図。「再生の塔」などの施設も描き込まれている。

プロジェクトで、今のペースで行くと300年後に完成するという、ガウディのサグラダファミリアを上回る遠大な計画です。未来の子供達に世界の桜の山を里山で残すということなんですね。今年の「満天の桜が咲く日」では、4万発の花火が、幅400m、高さ120mの天空に30分に渡って打ち上げられました。この模様はYouTubeで見ることができます。この花火自体も素晴らしいのですが、このはらかな先の未来に万本桜プロジェクトが完成して、いわきの地に桜の花が咲くんだという希望の光とエネルギーとなるものになったと思います。各地で地域おこしのための野外のアート展覧会が開催されていますが、もっともその土地の歴史と人々の人生に深く根ざしているのが、いわきのプロジェクトだと感じました。

平藤 そういうアートというの、一つのメディアとして宗教を伝えたり残したりするものですね。

西出 石巻には「いのり大佛」を造るプロジェクトが進行しています。24時間入れる空間に大仏があって、そこではお膝に触れてすがって泣くことができます。東日本大震災で亡くなった方のご遺族、さらに苦しみ

を抱えるあらゆる人に向けて建立するため、現在は勧進が行われています。こういうメディアがあるのはいいことですよ。

平藤 結構色々な神社とかお寺が、新たに伝える手段としてプロジェクションマッピングをやったりアーティストの人に来てもらって作品を作ったりしていくというのは、かつての寺社縁起じゃないですけど、絵解きをやってきれいな絵を見せるとか有名な彫刻家に作ってもらうとか、そういうようなことと変わらない、一つの文化メディアを使った布教だと思います。先ほどの、組織としての宗教への不信感というのが根強く残っている部分はあるけれども、それぞれのお寺で努力しないと、まずは色々な形で人に来てもらわなければということでもあるのかなと感じますね。

渡邊 最新のデジタル技術を駆使して「自然が自然のままにアートになる」世界をつくりあげるチームラボ (teamLab) も注目すべき活動をおこなっています。アートと宗教が混然一体となっていた古代人が感じたであろう自然に対する畏れとか、人を超えた力を想起させるようなものを体感させてくれます。佐賀県武雄市の御船山楽園で行われる「かみさまがすまう森」は、御船山の山麓の森のなかに巨木や磐座や修験道の修行の場であった場所に彼らのプロジェクションによって人の動きに伴ってインタラクティブに映像も変化していく、人がそこに関わることによって自然も変化する。修行や儀式による心身の変容には長い時間が必要なわけですが、ここでは、さほど長い時間を必要としなくても、人と自然との関わりの原初の体験に近いのではと思えるような感覚を体感することができます。

先ほど名前が出た藤田庄市さんとは、伊勢神宮の第62回式年遷宮の取材を10年間続けて、『伊勢神宮』（新潮社）という写真集にまとまりました。式年遷宮のクライマックスといえる、ご神体を旧殿から新殿に移す「遷御の儀」のときの経験ですが、われわれ報道陣は多くの参列者とともに昼からずっと待たされるんです。日が落ちて暗くなり、空気が涼

しくなってくると、裏の森から風が流れてきて、「キョンッ」という鹿の鳴き声がある。照明がいっせいに消されて、視覚以外の感覚が研ぎ澄まされていく。そこにかすかな提灯の灯りとともに「ザッ、ザッ、ザッ」と玉砂利を踏む足音が遠くから近づいてきて、正殿の中に入っていく。そこでの儀式は肉眼では何も見えません。時折扉を開ける音、かがり火の煙と匂いなど、森の音、空気の変化を感じながら、行列が出てくるのを待つ。鶏鳴三声が唱えられ、ようやくご神体を中心にした列が新殿に向かって、参列者や報道陣の前を進んでいく。暗闇ですから肉眼ではなにかがぼんやりと動いて流れていくとしか見えない。ここぞとばかり、写真もムービーもその模様を、とくにご神体をなんとか撮ろうとするわけです。ご神体は白い絹垣に囲まれています。フラッシュはもちろん赤外線写真も禁止されています。とはいえ高感度フィルムだから、映像自体はそれなりに写っているんです。でも、あどきにその場にいた人たちが放送された映像を見ても、どこか違うと思うでしょう。「見えないもの」をどのように伝えるのか？ 神宮ではそれを「浄闇のなか神気にふれる」と表現してきました。写真や映像では伝わりにくいものをどう伝えるのか？ メディアを通じて宗教を伝えるときの大きな課題がそこだと思えます。「伝える」ことには「報道」と「表現」があります。ニュース報道とともに、宗教の本質にふれることを伝えるには、文学・美術を含むアートによる表現も大事なのではないのでしょうか。情報やデータで埋めつくすのではない、余白から感じることです。

伊勢神宮の取材には、新聞・雑誌・テレビはじめ、著名なカメラマンなど50名近く取材にきていました。しかし藤田さんが宗教を伝えるフォトジャーナリストとして群を抜いているのは、明らかでした。様々な宗教の現場にたちあい、その背景を学び、写真と文章とで表現することができる人はなかなかいません。デジカメの進化で、最近では後からいくらかでも写真を加工するカメラマンがいます。藤田さんはもちろんそういうことはしない。望むべくは藤田さんに続く若い人の登場です。

写真と文章(写真のキャプション)の組み合わせで理解が深まるということでは、写真家の土田ヒロミさんの「ヒロシマ・コレクション」も

多くの人に見てもらいたいですね。原爆の被災地を定期的に定点観測したもので、最初は被爆した107名にインタビューした「ヒロシマ1945～1979」。2回目が「ヒロシマ・モニュメント」という原爆遺跡の風景。3回目は、平和資料館にある被爆者の遺品など。写真一枚ごとにつけられたキャプションとともに写真を見ると、人・風景・ものを「自分事」として感じられてくるんです。これは現在も進行中です。一瞬をきりとる写真を、時間をおいて定点観測することで、時間を表現することに成功しています。

西出 私も藤田さんの『伊勢神宮』の写真がすごく好きです。あとは山ですね、修験。『現代山岳信仰曼荼羅』（天夢人、2020年）はすごい。どういう場なのか、どういう意味があるのかを深く理解して撮影されているので、こちらにも響く。送り手はやはりそこが非常に重要だと思うんですよ¹¹⁾。

ステレオタイプと取材の難しさ

平藤 そろそろ、これからのメディアに求められる宗教リテラシーという感じでお話をしていただければと思います。

西出 今日もっとも私が言いたかったことは、実はこの一年間ぐらいずっと言い続けているのですが、本当に宗教リテラシーが必要なのはマスメディアだ、ということです。メディアには偏見が無自覚にあって、それを修正していくために、リテラシー向上というのは絶対的に必要です。我々の世界は、文章表現で「紋切り型はやめましょう」と強調していて、記事のスタイルブックには問題例も挙げられているのですが、宗教に関してはもう染み付いた紋切り型があって、なかなか修正されない。既存のオールドメディアのなかのステレオタイプを打破していかなければいけない。ジェンダー方面でよくアンコンシャスバイアスという言葉が使われますけど、これが宗教を扱う新聞の態度にも抜きがたくあ

りますね。

宗教リテラシーについて言えば、オウム事件後でやはり大きいのは、1998年にラク（宗教情報リサーチセンター）ができたことの役割と意味だと思います。当初は「官」を主体とする意見もあったけれど、最終的に「民」の運営になった。これまで継続しているのは素晴らしいし、蓄積が進めば、今後さらに価値が増すのではないのでしょうか。ジャーナリズムとアカデミズムの架橋・共働は重要だと思うし、もっとこれを広げていくことが必要なのではないかなと考えています。

渡邊 いま政治でも芸能界でも経済でも、共通して問題にすべきことのひとつは「番記者」的な報道です。ジャニーズ問題でも、私の知る範囲でもいくつかの出版社に「ジャニーズ番」といえる編集者・記者がいました。経済界ではトヨタの「トヨタタイムズ」が典型ですが、メディアの中にも企業べったりの広報記事が目につきます。そして最も問題なのが政治の番記者です。テレビでは、政治ジャーナリストと称する実質は政権・自民党広報者が連日「解説」しています。本来、言葉を大切な情報伝達手段とする彼らの大きな問題は、取材先が都合よく用いる言葉を無批判（あるいは意図的）に使い、拡散していることです。「アベノミクス」などは代表的な例です。先端技術用語についても、開発のスピードが速くて追いついていけないのですが、メディア関係者は、やはり言葉に安易に飛びつかないことが大事でしょう。大切な日本語自体が、政治家によってどれほど汚されていることでしょうか。それも「日本の伝統を大切に」と語る、「自称保守」の人々によって。メディアの人間にとっても、同じことが言えます。

西出 ちょっと話はズレますけど、せっかく持ってきたので。これは2019年1月に統一教会が出したプレスリリースです（机上に示す）。合同結婚式の取材案内ですね。興味深いのはリリースの中に4コマ漫画が付いている点です。会社の上司と部下の会話を主とした漫画ですね。最初のコマで部下から「係長！ 合同結婚式って知ってます？」と問いかけ

があり、次のコマで上司が「90年代に、淳子ちゃんが参加したやつだな」と返答すると、3コマ目で部下が「それが今も毎年やってるようです。ちょっと様変わりして」と言うのと、上司は最後のコマで目を輝かせて「よし、情報を集めてくれ！ワシもついに、独身卒業じゃ!!」と宣言し、部下が「係長、独身でしたね…」と応じるのがオチとなっています。

これはちょうど銃撃の一年半ぐらい前ですね。リリースには「2015年8月26日、文科省の認証によって実現した、教団名称変更を契機として、一般社会との関係性をより円滑なものにしていくために、これまで、教団組織のオープン化や積極的な情報開示に努めてまいりました」とあります。世界平和統一家庭連合に名称も変えてオープンになったから取材しないかという案内ですね。

こういうリリースが来たことに驚きはしましたがけれど、これを見て安直に「あ、そうなんだ、変わったんだ。じゃあ教団の誘いに乗って行くか」という話にはならないだろうと。取材をするのならば、過去の実態を踏まえての取材が当然求められるわけですね。ここではやはり基本的な知識・これまでの歴史を知ることが重要になってくる。発信された情報をマスメディアはどう判断してどう取り扱うか。そしてどういうものを発信していくか。それがとても重要だと思います。

平藤 それは本当に研究者も同じですね。あのひかりの輪に調査に入ると、「こんな人が来ました」というふうにひかりの輪のホームページに載っていく。こちらは「取材できた」「調査できた」という成果として受け止めたいけれど、向こうにしてみれば大学の研究者の調査を受け入れた成果にもなるというお話で。そこは本当にメディアの問題でもあるし、研究者も共有しているところなので、情報交換・共有がすごく重要な部分じゃないですか。

西出 オウムから分かれていった三団体（Aleph・ひかりの輪・「山田らの集団」）で、社会常識に照らせば、ひかりの輪が一番真っ当に見えるということですよ。ただ、平藤さんがおっしゃったように、「こんな

に権威のある研究者が来られた」というような情報の押し出し方をするんですよね、ひかりの輪って。それを見ると、私なんかは、取材と報道の在り方はかなり慎重であるべきだろう、とってしまうんですよね。彼ら自身が発するその情報をどう見るかとかどう読むかということによって、今後の対応を考えることになってくると思うんです。

平藤 取材って痛し痒しじゃないですか。取材しないと分からないところもあるあたり。

西出 難しいですよね。難しさはイエスの方舟事件（1979～80年）とオウム事件に端的に表れています。この二つの事件は、報道の観点からすれば、表裏ですね。『サンデー毎日』だけはイエスの方舟に犯罪性はなく、オウムは問題があると報道したわけですけど¹²⁾、あの段階でよくきちんと判断できたなと思います。イエスの方舟については、女性たちが家出して集団で変なおじさんの元で暮らしている性的スキャンダルみたいな形で捉えて報道した。しかし、そうではなかった。後知恵だと言われるかもしれないけれど、報道に際しては、やはり、きちんと取材することが最低条件だろうとは思いますが。当該団体だけではなく、周辺の情報収集も大事ですよね。

平藤 そうですね。本当に研究と取材とあまり変わらないところがあって、口コミみたいなことが大事になる。

アナログの復権とデジタルへの展開

平藤 渡邊さん、今後のメディアと宗教の関係について、望ましいありかたや今後の予測はいかがですか？

渡邊 今、Chat-GPTに代表されるAIの活用が全世界的に未来を切り開くイノベーションの鍵だといわれていますが、AIの開発に先だって

人間がAI化していたのだと思っています。すでにある答えに短時間でたどりつく、すでにある情報を整理してまとめる能力、これが日本の学校で勉強ができる秀才や官僚が長けている能力でした。そのための勉強をしてきた。しかし、それはAIに遥かに凌駕されてしまう。大事なものはAIをよき友として付き合う術を学び、AIには不可能で人間にしかできないことを大切にしていくことなのでしょうね。

気になることは、リアルの世界とメタバースのようなバーチャルな世界の共存が当たりまえの世界に生まれ育つ子供たちの思考や感覚がどのようなものになるのかです。SNS内の世界からバーチャル宗教やその神様・教祖が誕生することも十分に予想できます。それがバーチャルとリアルの世界との境界を超えて縦横に行き来する。バーチャルマネーの世界になる可能性も高い。マンガ・アニメ・小説・映像の世界ではすでに描かれているかもしれません。SNSで宗教紛争を煽ることは現実になっています。巨大IT企業の中で着々と準備しているかもしれません。悪事を企てて儲けをたくらむ人たちは、いつの世でも新しい技術に目ざとい。世のため人のため善意で社会貢献を考えていても、それが結果として大きな破局に至ることもあります。うーん。陰謀史観に陥らぬよう、このへんでやめておきます(笑)。

平藤 アナログということ言うと、今レコードを買う人がまた増えてきているし、学生とかでもフィルムカメラを持つようになったという人が出てきたりとかしています。AIとかが出てきてすごくデジタルで行って、それでなくなってしまうのではないかと思われていたものがまた復活してきたりというふうになると、新聞とかもアナログメディアとして復活したりするんですかね。

西出 ちょっとだけデジタルの話をししますね。新聞の一覧性について、すごくありがたい言及をいただきましたが、こんな時代になったので、マスメディアはデジタル展開せざるを得ない状況にあります。そのなかでデジタル化の良いところを考えると、我々の世界ってすごく字数制限

が厳しくて、テン・マル一個取って何とか詰めて一行に収めようみたいななかでやっています。しかも字がどんどん大きくなっていて、私が入社したときはだいたい一行15字ぐらいだったのが今は11字ですね。だから新聞メディアの情報が減っているのは間違いありません。

そう考えると、ウェブメディアは多くの情報を入れられるわけです。だから、新聞とデジタルで連動できる、色々な情報を盛り込むことができることで、リテラシーを向上させる力になる。長い文章を書くためには、正確な情報を積み上げて構成していく書き手の力量が必要で、分かりやすいビジュアルも用意してリーダビリティを出していかなきゃいけない。アカデミズムとの連携とか共働がすごく重要になってくるのではないかと思います。

渡邊 アカデミズムとジャーナリズムとの交流はもっと進むといいですね。それと、理系のジャーナリストが待望されています。『宗教と現代がわかる本』で目指したのですが、宗教に関してアカデミズムとジャーナリズム、それにアーティストなども含めた連携、勉強会といった交流の場があるといいですね。編集者やテレビの番組プロデューサー・ディレクター、映画監督や脚本家・マンガ家、ゲーム制作者などが交流し、宗教について自由に話せる場があるといい。それを広げて、海外で仕事をする機会の多いビジネスマンが、日本の宗教や伝統文化を知り、外国人にも説明でき、現実社会を動かしている人へのアプローチも考えていけるといいですね。

テクノロジーの進歩のスピードに社会の対応が追いつかないときだからこそ、理系の科学者・技術者と倫理や宗教・哲学を学ぶ専門家との共同研究が大切になってくるでしょう。価値判断の基準が見えず、結果の勝ち負け、金持ちか貧乏ということではいいのか、人間にとっての価値の基準をどこに置くのか？ 宗教は大いに貢献できるはずなのですが。

西出 本当にそうだと思います。専門家が発信するサイトやSNSは色々ありますけれど、マスメディアにはマスメディアなりのノウハウや

組織力がありますから、協働していれば面白いと思います。それが宗教リテラシーの向上につながるんじゃないかなと思いますね。

平藤 本日はありがとうございました。

注

- 1) 関連する号として、『現代宗教2008』の特集「メディアが生み出す神々」、および『宗教と現代がわかる本2010』の特集「宗教と映像メディア 映画・テレビ・アニメ・ネットと宗教の関係」も参照されたい。
- 2) 麻原彰晃・中沢新一「オウム真理教教祖が全てを告白「狂気」がなければ宗教じゃない」(『SPA!』1989年12月6日号)。関連する論考として、平野直子「オウム真理教と雑誌報道」(井上順孝責任編集・宗教情報リサーチセンター編『情報時代のオウム真理教』春秋社、2011年)、平野直子・塚田穂高「メディア報道への宗教情報リテラシー—「専門家」が語ったことを手がかりに—」(井上順孝責任編集・宗教情報リサーチセンター編『オウム真理教』を検証する——そのウチとソトの境界線』春秋社、2015年)がある。
- 3) 実際の誌面では、対談冒頭で中沢が示すのは「変な時期」という表現のみで(15頁)、具体的に「例の弁護士さん一家失踪という不可解な事件」について「ほんとうのところをお聞かせ願えませんか」「その点だけハッキリしていないと、どうも腰のすわりが悪い」と問いかけるのは中盤になってからである。麻原の否定に対し中沢が「管理不行き届きだったりして(笑い)」とけしかけると、麻原は「とにかく、内弟子だけで400名ぐらいいますので、信徒さんを合わせると、全部で5,000名から6,000名の方がいらっしやいますから、それはわからないですよ」と言葉を濁しつつも再び「私にはありえないと思います」と否定し、中沢は「わかりました。もうこの問題には立ち入りません」と追及を終えた(17~18頁)。
- 4) 『宗教と現代がわかる本』の特集テーマは次の通り。2007「慰霊と追悼 宗教教育 皇位継承 生命倫理」、2008「宗教と医療のあいだ」、2009「天皇と宮中祭祀」、2010「宗教と映像メディア」、2011「信仰と人間の生き方」、2012「大震災後の日本人の生き方」、2013「宗教者ニューウェーブ」、2014「いつか死ぬ、それまで生きる」、2015「マンガと宗教」、2016「聖地・沖繩・戦争」。
- 5) 櫻井義秀「カルト問題と格差社会との関連」(『宗教と現代が分かる本2007』)、中西尋

- 子「韓国に渡った統一教会日本人女性信者の実態」(同2011)、塚田穂高「日本会議と宗教」(同2016)、島菌進×中野晃一×天野達志×氏家法雄×栗津賢太「緊急座談会 安全保障法制に反対し、公明党の方針を危惧する創価学会員に聞く」(同2016)など。
- 6) これまでの報告書は、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の公式サイト(<https://www2.kokugakuin.ac.jp/oardijcc/publications/index.html>)で閲覧可能。
 - 7) 当時の『SPA!』におけるオタク論と宗教の関わりを取り上げた論考として、茂木謙之介「1980-90年代『SPA!』にみる〈オタク論〉と〈宗教〉言説—「宗教とサブカルチャー」論再考のために—」(『文明研究』第36号、2018年)がある。
 - 8) 「こころ」欄での連載をまとめた著作として、菅原伸郎『宗教をどう教えるか』(朝日選書、1999年)がある。
 - 9) このあたりの業界事情は、西出勇志「宗教記者」(『国際宗教研究所ニュースレター』第73号、2012年)で詳しく述べられている。
 - 10) 石井研士「日本人はどれくらい宗教団体を信頼しているのか—宗教団体に関する世論調査から—」(『東洋学術研究』第49巻第2号、2010年)など。
 - 11) このテーマについては、港千尋・平藤喜久子編『〈聖なるもの〉を撮る——宗教学者と写真家による共創と対話』(山川出版社、2023年)も刊行された。
 - 12) 前掲平野直子「オウム真理教と雑誌報道」に詳しい。

特集 試される宗教リテラシー

ホラーと宗教リテラシー

—鈴木光司『リング』にみる憑依と供養—

斎藤 喬¹

1991年に出版された鈴木光司の小説『リング』は、「不幸の手紙」形式の「呪いのビデオ」にウィルス感染の恐怖を織り交ぜた都市伝説ホラーである。この恐怖の前提にある怨念の憑依と遺骨の供養の問題を、本稿では宗教リテラシーの観点から検証する。

¹ さいとうたかし：南山宗教文化研究所特任研究員

1. 『エクソシスト』の「嘔吐袋」

本稿は、現代的なホラー作品の前提にある宗教文化的背景について検証し、これらの作品による恐怖体験が、受け手の宗教リテラシーにどのような役割を果たすかを考察することを目的としている。ここではとりあえず、宗教リテラシーを、当該社会の宗教文化に適應する形で宗教情報を受信し発信できる能力としておく¹⁾。

ジャンル・ホラーを標榜する小説や映画は、その制作意図からして読者や観客を怖がらせようとするだろう。そして、理想的な受け手であれば、その作品に目一杯恐怖するはずだ。こうした恐怖体験に宗教文化的な知識や経験が必要になるとしたら、ホラー作品に怖がること自体をある種の宗教実践として観察することができる。これは、受け手が自分の信仰にどこまで自覚的であるかは別にして、作品の恐怖によって事前の信仰を強化する、あるいは恐怖体験によって信仰生活を改めるという側面に焦点を当てることでもある。

しかしながら、そんなものは怖くもなんともないという人もいるに違いない。ホラー作品の表現は、受け手として想定される万人に恐怖をもたらそうとすることから、怖くもなんともない人々にとって、作品が含意する宗教文化の経験は、宗教に関する情報を入手して知識を獲得する契機に見立てることができるだろう。

以上の問題関心から、ここでは具体的に鈴木光司の『リング』を取り上げ、憑依と供養を主題としてこの小説が読者に引き起こそうとする恐怖の分析を試みる。作品にとって理想的な恐怖体験となる読書行為が含意する宗教文化的な知識や経験を検証することで、この作品による宗教リテラシーへの寄与について、その一端を明らかにできればと思う。詳しくは後述するが、この「憑依」と「供養」は、『リング』の物語においてホラーの鍵概念として導入される用語である。

池上良正は、近世から近代の民衆的な宗教文化の中核に、死者との個別取引に頼る〈祟り—祀り／穢れ—祓い〉システムと仏教的な理念を活用した〈供養／調伏〉システムがあったことを指摘する。その上で、このシステム

を定型的に取り込んだ「崇り物語の商品化」の代表的な怪談物として、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』、三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』と『怪談牡丹燈籠』を挙げている²⁾。本稿では先行研究を踏まえて、1991年に出版された『リング』を、1970年代以降のオカルトブームや1980年代以降の占い・おまじないブームの社会的文脈に対応した「崇り物語の商品化」と捉えるが、その際〈供養／調伏〉システムの機能不全が一つの問題となるだろう。というのも、“リング”シリーズにおいては、仏教僧が崇りを根本的に解決することもなければ、貞子の怨念が明確に慰撫されることもないからである。

また、一柳廣孝は、つのだじろうのマンガ『恐怖新聞』と『うしろの百太郎』が連載を開始した1973年を、それ以降に日本で発生したオカルトブームの端緒として文化的文脈と認識論的枠組みの分析を行っている³⁾。一柳によれば、『うしろの百太郎』においては、心靈学の基本概念を説明する登場人物の配置や、雑誌に寄せられた心靈体験がマンガ内で紹介されるなどの仕掛けによって、作品自体が心靈学の知見を身に付けるための教育的役割を果たしていたという。オカルトブームを牽引した作品のメディアとしてのあり方を、受け手との交通という観点から動態的に捉えたこの論考は、宗教リテラシーから『リング』を考察する上でも非常に示唆に富むものである。

本論に入る前に、ホラー作品と宗教リテラシーの関係について本稿の視座を提示しておこう。そこでまずは、オカルトホラーの最高峰と名高いウィリアム・フリードキン監督の映画『エクソシスト』(1973年)に触れておきたい。原作はウィリアム・ピーター・ブラッティの同名小説(1971年)だが、映画の公開は社会的なセンセーションを巻き起こした。有名ホラー映画の背景にある実際の事件を収集したリー・メラーは、『エクソシスト』の衝撃はそのグロテスクな描写もさることながら、最も問題となったのは「神聖への冒瀆」であると指摘する。

アメリカ全土の映画館にとって、ウィリアム・フリードキン監督の『エクソシスト』は前代未聞の映画だった。なにしろ、吐き気をもよおす観客が続出したのだ。そのため、チケットと一緒に「嘔吐袋」を渡す、あ

るいは客が卒倒した場合に備え、この映画を上映することをあらかじめ救急車に通知しておく劇場もあった。ひどく下品な言葉や、ねじ曲げられた体、吐き出される体液、(ときに赤裸々な)未成年者の性的描写などが、観客のそうした反応を引き出す大きな要因となったが、その一方で、急速に文化が変化する時代背景のなか、『エクソシスト』は観客の目の前に、これまでに見たこともない神聖への冒瀆を突きつけた⁴⁾。

当該社会における宗教文化的背景を観察する上で重要なのは、この作品が表現する「神聖への冒瀆」が観客の嘔吐を誘引しかねないという上映にまつわる挿話^{エピソード}である⁵⁾。当然のことながら、どのような映画の解釈も一様でないため、「神聖への冒瀆」と言っておけばこの作品の宗教文化的背景が理解できるわけでない。しかしながら、『エクソシスト』に関して言えば、公開自体がセンセーションとなったという社会的事実を「神聖への冒瀆」という断定によって受け入れ可能なものとする文脈こそが、宗教リテラシーを考える契機となるのである⁶⁾。

「神聖への冒瀆」に関連して、文芸評論家の笹川吉晴は、映画の原作となったブラッティの小説は、その後にスティーヴン・キングが一般化することになる〈モダンホラー〉の方法論から見ても記念碑的作品であると指摘していて興味深い。

本格的なモダンホラー時代への突破口となったにもかかわらず『エクソシスト』は、実は大方のモダンホラーとは反対方向のベクトルで出来上がっている。〈モダンホラー〉と呼ばれる作品群が〈神〉に捨てられた——あるいは自ら〈神〉を捨て去った現代人の“絶望”を描く物語であるなら、『エクソシスト』はその絶望の中でなおかつ〈神〉を追い求める“信仰”の物語である⁷⁾。

『エクソシスト』は、精神病理学者でもあるカラス神父が、母親の死によって失いかけていた信仰を、先達であるメリン神父と執り行う悪魔祓い^{エクソシズム}の儀礼の過程で取り戻すという筋書きにおいて、不信仰のまま終わる他の

多くの〈モダンホラー〉作品とは一線を画すと、笹川は指摘する。ただ、小説の『エクソシスト』が「“信仰”の物語」であるすれば、「〈神〉を捨て去った現代人」は絶望の中でこの作品に何を求めているのだろうか⁸⁾。

映画版に比べて、原作は神学的であると言われることもあるが、小説の『エクソシスト』は〈モダンホラー〉であるがゆえに、より高度な宗教リテラシーが必要になるかもしれない。なぜなら、作品によって想定される読者は、たとえ〈神〉を追い求める信仰をすでに失っていたとしても、読書行為によってそれが取り戻される過程を理解できるほどに宗教的な教養を身に付けていることになるからだ。

このように、たとえばアメリカの映画館に『エクソシスト』を見に行くと、「嘔吐袋」を渡された場合取るべき社会的振る舞いを考えるためには、たとえば「神聖への冒瀆」といった、作品に含意されているとされる宗教情報の理解が欠かせない。それに対して、映画館で見せつけられた「神聖への冒瀆」によって実際に嘔吐したり卒倒したりする人にとって、宗教的な教養はあまり問題にならないだろう。こうした拒否的な身体反応は、『エクソシスト』のホラーが観客に期待する信仰生活を、事後的にだが体現することになるからだ。

それでは、以下においては鈴木光司の小説『リング』を対象に、宗教リテラシーの問題について考察してみよう。

2. 感染ホラーと幽霊ホラー

『リング』は原作となった小説から派生し、映画やテレビドラマ、漫画やゲームにもなり、今や貞子はツイートする公式アカウントまで持っている。言うまでもなく、書籍や映像だけに留まらないホラー・コンテンツとなった“リング”の世界は、増殖を続ける貞子の圧倒的なデジタルとともに、誰もが知る娯楽メディアとなっている。全作品を取り扱うことは不可能であるため、ここでは特にオリジナル・リングとでも言うべき初版本に焦点を当てて、それ以外の作品への言及は最小限に留めて検証を進めていく。これには、小説の“リング”シリーズは前作の設

定を覆す種明かしを軸に展開するため、他の作品に踏み込み過ぎると『リング』の内容自体を問題化しにくくなるという事情もある。

執筆時点の2023年9月において、鈴木光司による小説の“リング”シリーズは『リング』（1991年）、『らせん』（1995年）、『ループ』（1998年）、『バースデイ』（1999年）、『エス』（2012年）、『タイド』（2013年）の計六冊を数える。しかしながら、2000年当時においては、『リング』『らせん』『ループ』三部作に番外編の『バースデイ』を加えて一度完結したことになっていたため、そこまでの主な関連作品を年代順に列挙すると以下のようになる。

1991年	6月22日	小説『リング』初版発売（角川書店）
1993年	4月22日	小説『リング』文庫版発売（角川ホラー文庫）
1995年	8月3日	小説『らせん』初版発売（角川書店）
	8月11日	テレビドラマ『リング～事故か！変死か！4つの命を奪う少女の怨念～』放送（フジテレビ）
	9月27日	小説『リング』改訂版発売（角川書店）
1997年	11月28日	小説『らせん』文庫版発売（角川ホラー文庫）
1998年	1月23日	小説『ループ』初版発売（角川書店）
	1月31日	映画『リング／らせん』公開（東宝）
	9月10日	ムック『冒険者ガイド ループ界』発売（角川書店）
	12月18日	小説『the Ring～もっと怖い4つの話～』発売（角川書店）
1999年	1月7日～	テレビドラマ『リング～最終章～』放送（フジテレビ）
	3月25日	
	1月14日	ムック『リング2 恐怖増幅マガジン』発売（角川書店）
	1月22日	映画脚本『リング リング2 映画脚本集』発売（角川ホラー文庫）
	1月23日	映画『リング2』公開（東宝）
	1月30日	小説『バースデイ』初版発売（角川書店）
	7月1日～	テレビドラマ『らせん』放送（フジテレビ）
	9月23日	
2000年	12月8日	小説『バースデイ』文庫版発売（角川ホラー）
	1月19日	ムック『リングθ 恐怖増幅マガジン The 貞子』発売（角川書店）
	1月20日	映画脚本『映画版脚本 リングθ ～バースデイ～』発売（角川ホラー文庫）
	1月22日	映画『リングθ バースデイ』公開（東宝）
	9月8日	小説『ループ』文庫版発売（角川ホラー文庫）

こうして見ると、1999年は『リング～最終章～』、『らせん』と一年間で2シーズン分のテレビドラマが放送され、映画『リング2』も公開されて映画脚本やムックも発売されている。さらに小説『バースデイ』も、単行本と文庫版が同年に出版されており、社会現象としての“リング”ブームにおける一つのピークを迎えているように見える。

小説の“リング”シリーズではウィルス感染が重要なモチーフになっていることから、どのような時系列でどのようなメディアによって公表されたかが、“リング”増殖の経緯を知る上で有益な情報となる。というのも、『リング』と『らせん』には読者を作品内の感染に巻き込む仕掛けが施されているからなのだが、ひとまず小説の“リング”シリーズに共通する恐怖の仕掛けを「感染ホラー」と呼んでおくことにしよう。

1991年に初版本が刊行された『リング』は、「不幸の手紙」形式の都市伝説をモチーフにしたホラー小説としてすでに古典の域に達している⁹⁾。「呪いのビデオ」というオカルト的な怪異現象を鍵概念に科学的なウィルス感染との類比によって一般に浸透させた点で、今日から見るときわめて画期的なホラー作品として文学史にその名を刻むこととなった。だが、この作品の知名度を上げたのは、1993年の角川ホラー文庫とその後の映像化であると言われている。

よく知られているように、1995年にはテレビドラマ版の『リング』（瀧川治水監督、飯田譲司／祖師谷大蔵脚本）が放映され、さらに1998年に映画版の『リング』（中田秀夫監督、高橋洋脚本）が公開されたが、特に後者は貞子の映像表現によって誰もが知るところだろう。原作では、都市伝説のように伝播する「呪い」と科学的現実として認識される「ウィルス」が複合的に絡み合う。登場人物たちはウィルスの発生原因を究明するのだが、これは呪いの原因となった死者を捜索する筋書きと重なり合っている。

それにしてもホラー映画史に「Jホラー」の楔を打ち込んだ映画『リング』の恐怖は、小説版とは全く異なるものである。ブラウン管テレビに映し出された井戸から山村貞子が這い出てくるあの名場面は、観客を否応なく呪いの当事者にする恐怖の演出だとしても、原作の小説とは同質

のものではない。というのも、映画では貞子の呪いによってビデオを見た者が原因不明の死を遂げるのではなく、貞子自身が「呪いのビデオ」から出てきて見た者を取り殺していくからだ。これについては、映画の“リング”シリーズの世界観を統括した脚本家の高橋洋の記述が参考になるだろう。

迫り来る幽霊の恐怖に私はずっと取り憑かれていた。だがここがしばしば誤解される点なのだが、幽霊が怖いのは襲いかかって来るからではない。それでは生身の動物、殺人鬼や猛獣の怖さと変わらない。下手をすれば迫り来る幽霊の姿はひどく人間臭いものになりかねない危うさをはらんでいる。多くの人々はここが恐怖映画の鬼門であることを理解していない。

幽霊が怖いのはそれがこの世のモノではないから、その一点につきる。生身の人間が演じるほかない幽霊からどうやって“人間らしさ”を剥ぎ取るか。これが恐怖映画における幽霊表現の最大の課題なのである¹⁰⁾。

映画『リング』の幽霊表現が、国内外を問わずその後のホラー映画に多大な影響を与えたことは想像に難くないが、何よりも注目すべき点は、脚本家の高橋自身がこの作品を幽霊表現に特化した恐怖映画として制作したと表明しているところにある。つまり、映画版は歴とした「幽霊ホラー」なのである。そして、本稿の主題でもあるが、小説『リング』は幽霊表現に特化した恐怖小説ではない。しかしながら、1998年に劇場公開された『リング』は、紛うことなき幽霊映画として、結果的に「Jホラー」の技法を世界中に知らしめた作品となった。もちろん、この点については、映像メディアか活字メディアかという媒体に依存している部分もあるだろうが、とりあえず映画の「幽霊ホラー」と小説の「感染ホラー」という趣向の違いを確認しておくことにする。

3. 呪い=感染のリアリティ

ここでは初発のホラーについて検証することを目的としている。すると、そこでもっとも重要になるのは、登場人物が死亡するのは「呪いのビデオ」を視聴したことによる「感染」の結果だという物語上の事実である。

感染すると一週間後の同時刻に無症状のまま即死するという未知のウィルスは、死者の呪いを原因として発生しており、決まったやり方で呪いを解かないと感染した誰もが全く同様に死に至る。このようにして、『リング』は科学的蓋然性に基づいたウィルス論の体裁を取るため、読者にとって「呪いの解き方=感染の治療法」を探るといった謎解きの要素は、この作品のホラードラマとしてよりもむしろミステリ小説としての醍醐味になっている¹¹⁾。

第一章で、新聞記者の浅川和行は、箱根に出かけた四人の若い男女が一週間後の同時刻に急性心不全で死亡したことに疑問を抱く。しかもそのうちの一人が自分の姪であったために関心を強め、独自に調査を進めていく。初版本には文庫本以降削除されてしまった物語内部の年代が明記されているのだが、浅川はこの事件の2年前となる1988年に、宗教団体の教祖影山照高の半生を異様なほどの熱意で取材していた¹²⁾。しかしながら、当時の出版界は「空前のオカルトブーム」に飲み込まれていて、連日未曾有の数の幽霊譚や心霊写真が投稿されて大混乱に陥っていた¹³⁾。それ以来、編集室がオカルト的な内容全般に強い拒否感を持っているため、浅川は今回の記事が神秘性を煽るものにならないように配慮しなければならない¹⁴⁾。

ウィルス、ウィルスと、浅川は階段を上りながら二度つぶやいた。そして、やはりまず第一に科学的な説明を試みるのが先決ではないかと思ひ直す。ここで、急激な心臓発作を生じさせるウィルスの存在を仮定したとしよう。超自然の力を仮定するより、いづらか現実的であり、他人に話して笑われる心配も少ないように思われる。

現在まだ地球上で発見されてないにしても、隕石の内部に閉じ込められてごく最近宇宙から飛来したとも限らない。あるいは、細菌兵器として開発されたものが漏れた可能性もないとはいえない¹⁵⁾。

話題になった恐怖映画はひと通り見ているという浅川の述懐からは、有名な感染ホラー映画である『アンドロメダ…』(1971)や『クレイジーズ』(1973)を想起していることが読み取れそうである。だがここでは、彼が「超自然的な力」を根拠としたオカルト的な説明よりウィルスの存在を根拠とした「科学的な説明」の方が世間一般に対してより説得力を持つと考えていることの方が、『リング』のホラーを検証する上で注目し得る。

また、物語の後半において、浅川の友人で、「呪いのビデオ」を視聴して一緒に調査することになった哲学者の高山竜司が、ウィルスを「悪魔」にたとえて説明する場面がある¹⁶⁾。高山が天然痘ウィルスの根絶に対して疑義を呈すこの言葉を受けて、浅川は日本の信仰や迷信として「疱瘡神」や「疫神」を連想している。具体名が挙げられているペスト、エイズ、天然痘、さらにこの場面では出てこないが物語で重要な役割を果たす結核は、それぞれ流行年代や感染経路は異なるが、人間同士の感染であれば飛沫や体液などを媒介にした何らかの接触が発症の原因となる。そのため、ウィルス感染と言った場合、どこで何とどのように接触して感染したのかを確認する必要があるだろう。私たち読者が『リング』を感染ホラーとして恐怖する際には、その感染をどのように体験するかが問題となる。

第二章において、浅川は問題のビデオを視聴し呪いに感染する。上下二段組で五頁に及ぶ映像の描写は、細部にわたってそれ自体がミステリ小説として解くべき「謎」になっており、物語の筋書きにおいて蛇足となる部分は一切ない。『リング』は小説であり読者はビデオの映像を実際に見ることはできないが、この映像の描写は読書行為に基づく恐怖体験を統御する要石となる¹⁷⁾。ここで呪いが実際に起動しなければ、「呪いのビデオ」を媒介にした都市伝説風の挿話は、読者にとってリアルな

ホラーになり得ないからだ。

浅川は、このビデオを見て文字通り「呪われる」ことになるのだが、この場面は「呪い＝ウィルス」と接触した瞬間として見逃すことはできない。

産まれたばかりの赤ん坊の顔が、画面いっぱいに広がった。どこからともなく産声が聞こえる。やはり、テレビのスピーカーからではない。顔の下、すぐ近くからだ。生の声に非常に近い。画面に、赤ん坊を抱く手が見えた。左手を頭の下に入れ、右手を背中に回し、大切そうに抱えている。きれいな手であった。画面に見入っている浅川は、いつのまにか映像の中の人物と同じ手の形をつくっていた。何かへんだぞという気持ち……、産声は顎のすぐ下から聞こえる。浅川は驚いて自分の手をひっこめた。感触があったからだ。ぬるっとした羊水、あるいは血、そして小さな肉の重み……。浅川は放り出すようにして両手を広げ、手の平を顔に近づけた。匂いが残っている。薄い血の匂い……。母胎から流れ出したものか……。それとも……。濡れた肌ざわりもあった。しかし、実際に手が濡れているわけではない¹⁸⁾。

引用文で浅川は、映像体験によって確かに子どもを受け取っている。もちろんこれは貞子の呪いの隠喩でもありウィルス感染の隠喩でもあるが、このままだと一週間後の同時刻に急性心不全で死ぬしかない。このような力強い「呪いのビデオ」の描写だけでなく、初版本の『リング』には、読者を感染ホラーに巻き込むメタな仕掛けが施されている。本の惹句には「期限は1週間 あなたは生き残れるか。」とあり、背帯には「小説の爆弾」とあるが¹⁹⁾、本のカバーは赤いマニキュアを塗った手が「FUJITEX T-120」のビデオテープを差し出す構図になっている。1991年6月20日に発行されたオリジナル・リングは、このようにして「呪いのビデオ」に見立てられ、出版によって読者に呪いをかけることを企図している²⁰⁾。

さらに、第二作『らせん』で、貞子の呪いは変異した上で「リングウィルス」と名づけられ、第一作で浅川の書いた『リング』のレポートを読むことによって感染することが判明する。そのため、『らせん』の読者は、浅川のレポートと類比的な関係にある小説『リング』の経験によって、「リングウィルス」感染の可能性が示唆される。この点について、第五作『エス』で、ビデオテープの装丁になっている初版本のみが「リングウィルス」の感染源となり、文庫版は眼球がデザインされた扉絵にワクチンの効果があるため読んでも感染しないことが新たに判明する²¹⁾。『バースデイ』を除く“リング”シリーズにおいては、自己言及的にオリジナル・リングの要約が繰り返されながら、こうして新たな意味が付け加わっていく。

4. 不可能な「オマジナイ」

『リング』におけるミステリは、浅川の姪を含む四人の男女が箱根に出かけた一週間後の同時刻に死亡した事件を追跡するところから始まる。「呪いのビデオ」のラストシーンでは、「この映像を見た者は、一週間後のこの時間に死ぬ運命にある。死にたくなければ、今から言うことを実行せよ。すなわち……」という字幕が流れるが、そこで映像が途切れてしまい「死の運命から逃れる方法」がわからなくなっている。ビデオを視聴し浅川のブレンとなった高山は、呪いから助かる方法に「オマジナイ」と名前を付けて調査を進めていく²²⁾。この「オマジナイ」の内実が明らかになるのは、映像の分析が終わり貞子の素性が明らかになった物語の終盤に差し掛かってからとなる。

四人が泊まったログキャabinは、結核療養所の跡地に建てられている。1960年代に、父親の見舞いに療養所を訪れていた貞子は、天然痘に罹患していたそこの医師に強姦されてから井戸に突き落とされ、そのまま生き埋めになって死んだ。貞子が落ちた井戸の位置は、四人が泊まった部屋の真下に当たる。『リング』の最終局面において、浅川と高山は貞子の遺骨を探し出すために、彼女が生き埋めになった井戸の中に

潜り込む。浅川にとってこの日がちょうど「呪いのビデオ」の視聴から一週間に当たり、「オマジナイ」が間違っていれば死ぬしかない。遺骨を掘り起こす作業が難航して浅川が諦めかけたまさにそのときに、高山は「オマジナイ」の種明かしとして憑依と供養について語り出す。

三浦博士の理論をもう少し詳しく教えてやろうか。現世に怨念が強烈に残るには三つの条件が必要なんだ。閉ざされた空間、水、そして死に至るまでの時間。この三つだ。つまり水のある閉ざされた空間でゆっくり時間をかけて死に至った場合、死者の怨念がその場に憑依してしまうことが多いってわけさ²³⁾。

だから……、三浦博士が言うにはよ、呪いをとく方法なんて簡単なんだ。ようするに、解放してやればいい。遺骨を、狭い井戸の底から拾い上げ、供養を済ませた後に故郷の地に埋葬してやればいい。広く明るい世界に引きずり出してやるんだ²⁴⁾。

高山のこのせりふは、超常現象の科学的証明に尽力した理論物理学者である三浦哲三の言葉からの引用として出てくる。『リング』の筋書きで、浅川と高山は日本全土の超能力者をリストアップした三浦哲三記念館の資料の中から、山村貞子の情報を探し出したという経緯がある²⁵⁾。このように権威づけられているにもかかわらず、三浦の理論の受け売りとなった高山のせりふが、浅川によって「あやふやだ」と評価されている点は看過できない。高山自身も「オマジナイ」の真相について確信がないまま、「彼女の遺骨をここから拾い出すことによってビデオに込められた呪いそのものが消失する可能性だって高い」と言い切ったために、三浦哲三を「インチキ学者」だと思っている浅川はさらに反感を抱くことになる。

「呪いのビデオ」を見た者が一週間後の同時刻に必ず死ぬことは、物語内部の事実である。それを前提に、高山の言う「憑依」は、井戸に生き埋めにされた貞子が、死を待ちながら現世に残した強烈な怨念を、い

わゆる「念写」のように映像化してブラウン管に浮かばせた現象を説明する概念として導入されている²⁶⁾。

また、三浦の理論を信用していないとは言え、先ほどの高山の言葉は、浅川が貞子の「供養」を試みるための動機づけとなる。

浅川は山村貞子の遺骨を差木地の親戚の元に届け、彼らの手で供養してもらおうつもりであった。〔中略〕身元不明ならば、無縁仏として供養してもらう手もあるが、山村貞子とわかっているからには差木地で引き取ってもらおうほかない²⁷⁾。

遺骨を運ぶことへの浅川の不安は、「身寄りの者によって供養されなければ、オマジナイの実行は完全に終了しないような気がした」というものである。その後、『リング』の筋書きにおいて、貞子の遺骨は山村家の親戚に問題なく引き取ってもらったとだけ語られる。浅川の「供養」によって物語が解決に向かわなかった経緯について、鈴木光司は映画『リング』のパンフレット所収のインタビューで、次のような裏話を披露している。

『リング』は最初、別のところで終わってたから。ハッキリ終わったと思える場面があるでしょう、例の遺骨の……。だけど何か納得できない。だったらヨシ、某重要登場人物を殺そう！ と後先考えずに殺しちゃった。そこからが大変ですよ。自分が前書いた部分をパラパラめくって、考えに考えて……。そしたらオオッ、これで終わることができるっていう今のラストが見つかったわけ²⁸⁾。

引用文で殺されたという「某重要登場人物」とは、言うまでもなく高山竜司のことであり、「ハッキリ終わったと思える場面」というのは、浅川が発掘した遺骨を抱きかかえる第三章「突風」のラストのことであろう²⁹⁾。二人の考える「供養」によって貞子の呪いが解けるのであれば、『リング』の物語はここで終結を迎えるはずだった。しかしながら、こ

の後に第四章「波紋」が続き、そこで高山は貞子の呪い=ウィルスの感染で死を迎える。高山のダイニング・メッセージは浅川にインスピレーションを与えて、実は遺骨の「供養」ではなくウィルスの「増殖」こそが「オマジナイ」の真相であることを悟るのである。

宗教リテラシーの観点から見ると、小説の『リング』は宗教文化としての死者供養の儀礼行為に関する知識や経験を読者に要求していない。「追悼」や「慰霊」ではなく「供養」を一般用語として使っていて、浅川が実際に死者のためにしたことと言えば、伊豆大島にいる山村家の親戚に井戸から掘り返した貞子の遺骨を届けただけである³⁰⁾。

『リング』を貞子の呪いによる祟り物語だと仮定した場合、この物語には、近世・近代の怪談物のように仏教僧の介入もなければ、仏教思想による解決を示唆する兆候も全く見られない³¹⁾。その筋書きにおいて、宗教者が怨霊の調伏を図る回路が存在しないため、死者は決して救済されないことになる³²⁾。

5. 感染ホラーの宗教性

ハリウッド版の *The Ring* が公開された翌年の2003年に、小説『リング』の英訳が出版されている。憑依と供養について語った高山のせりふは、そこで次のように翻訳されている。

Shall I tell you a little more about Professor Miura's theory? There are three conditions that have to be met in order for a malevolent will to remain in the world after death. An enclosed space, water, and a slow death. One, two, three. In other words, if someone dies slowly, in an enclosed space, with water present, then usually that person's angry spirit will haunt the place³³⁾.

So, according to Professor Miura, it's easy to exorcise such a curse. We just free her. We take her bones out of this nasty old

well, have a nice memorial service, and lay her to rest in the soil of her native place. We bring her up into the wide, bright world³⁴⁾.

『リング』の鍵概念について、「憑依する」は haunt、「供養」は memorial service、「怨念」は malevolent will、「呪い」は curse でそれを「解く」は exorcise、さらに引用文には出ていないが「オマジナイ」は charm という訳語が当てられている。読解に当たって、供養については原作においても宗教文化的な知識や経験があまり必要とされていないとして、憑依についてはどうだろうか。

先に引用した高山のせりふでは、「死者の怨念がその場に憑依してしまう」と表現されていた。この「憑依」の用法は、たとえば『エクソシスト』のリーガンのように悪魔が人格を「乗っ取る possess」現象ではなく、死に行く貞子の怨念が場所あるいは人に「取り付く haunt」現象を指示している³⁵⁾。見てきたように、貞子の呪い＝ウィルスは井戸に憑依し、ビデオに憑依し、視聴者に憑依して発症し、最終的にはその者を急性心不全で死に至らしめる。

もしも読書行為による恐怖体験が可能であるとすれば、『リング』における憑依の概念は、「呪いのビデオ」が視聴者を取り殺すという物語の事実に基づいてすでに把握されていなければならない。確証を得られない三浦哲三の理論がどのようなものであれ、物語内部において憑依は現象し、登場人物は次々と死んでいるからだ。貞子の怨念はビデオに取り付き、見た者は誰であれ一週間後に死亡する。

これまで見てきたように、『リング』の恐怖体験は、ウィルス感染の事実には呪いの恐怖を織り込んだ上で、それを「不幸の手紙」形式で構造化することで成立している。そのため、この「憑依」の事実を信じる態度が前提になれば、作品にとって理想的な読者のホラーは意味をなさない。つまり、憑依現象への信仰こそが感染ホラーの必要条件になるのだが、「憑依」を認めるということは、結果的に読書行為によって読者自身が感染する可能性を容認することになるだろう。これはまさに、

「不幸の手紙」がその読者を呪いのキャリアにすることで増殖していく構図と重なる。

ここで『リング』の恐怖体験の具体例を、一つだけ挙げておこう。作家として馳星周のペンネームで知られる坂東齡人は、文庫版『リング』の解説で「足元にぽっかりと穴が開いたような底なしの恐怖」を味わったという自分自身の読書体験を、次のように語っている。

実際の話、『リング』を読み終わったのは梅雨のまっ盛りの午後十時過ぎだったのだが、——そのときのことは、いまだによく覚えている——ぼくは、一人で部屋にいることに耐えられなくて、新宿までタクシーを飛ばして仲間がたむろする飲み屋へ駆けつけた。一人であることがなんだか無性に恐く、一人でトイレへ行くのが怖くてしかたのなかった子供の時のように、他人のぬくもりを求めてしまったのだ。そう、理性ではなく本能を直撃するような恐さが、『リング』にはあったのだ。こんなこと、恥ずかしながら、初めての体験だった³⁶⁾。

坂東は、ネタバレにならないように細心の注意を払いながら、『リング』の恐怖は「新しいモンスター」のせいであると断定する。彼によれば、これはサスペンスのクライマックスとなった第三章の先に出てくる「まったく新しい種類のモンスター（怪物だって、ピラニア人間や恐怖の蛇男のようなものではないから安心して下さい）」であり、その恐怖は「前世紀末にはブラム・ストーカーが世界に問うたホラー小説『ドラキュラ』と同じようなインパクトを持っている」という。

言うまでもなく、このモンスターは、感染と増殖を目的に天然痘ウイルスと融合して疫病の発生源となるビデオテープを作り出した、あの「貞子」のことだろう。小説の最後の場面で、妻と娘までもが「呪いのビデオ」を視聴している浅川は、二人の命を救うために疫病を蔓延させて人類を滅ぼす決意をする。坂東が『リング』のどこで具体的に恐怖したかはわからないが、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』を想起してい

ることから、やはり「感染」と「増殖」のモチーフや、小説の『リング』に特有の読者を呪い＝ウィルスのキャリアにする仕掛けなどが、恐怖体験に一役買ったに違いない。

大道晴香は、1980年代の「こっくりさん」について、当時の専門書は宗教的な専門家の介在しない降霊遊戯の気軽さを売りにしながら、制御できない神霊の恐怖を含意する護符を付録にしていたと指摘する³⁷⁾。主に少女たちだったという当時の読者は、自分の知識と経験を総動員しながらこれらの護符に対して適切な理解と運用をしていたことだろう。というのも、下手に対処しようものなら制御できない神霊に取り付かれてしまうからだが、恐怖を煽ることで読者に「神霊」について教育することでの意図は明白である。

冒頭で紹介したように、映画『エクソシスト』の「嘔吐袋」は、一部の観客が引き起こす可能性のある身体反応への配慮のみが目的で、「神聖への冒瀆」に対して保護する宗教的な役割は担っていない。それに対して、降霊遊戯の専門書が付録にする護符ならば、見かけ上の安心感を与えるのに効果があったのかもしれない。しかし、専門家による宗教儀礼とは一線を画した素人のための降霊遊戯であるからには、この場合の受け手に救済の根拠となるような信仰があったかどうかは判然としない。そこがもしも「あやふやだ」とすると、この護符は、「こっくりさん」の恐怖を払拭するためには限定的な効果しか持たないだろう。

また、高橋綾子と藤井修平は、新型コロナウイルス禍におけるアマビエの流行を具体的な対象に、妖怪の社会的機能の調査を行っている。それによるとアマビエは現代の妖怪が担うような娯楽機能だけでなく、「疫病の退散を祈願する信仰的な機能や、感染症終息の願いを周囲に伝播し共有する機能を備えている可能性が示された」という³⁸⁾。アマビエ信仰に参加する宗教実践が「不安の緩和」につながるかどうかは今後の課題ということだが、こうした振る舞いを宗教リテラシーの観点から疫病退散の信仰活動として捉えると、本稿の問題関心とも接続する。

パンデミックという社会的事実によって、妖怪アマビエの効験が顕在化したのだとすれば、このようにアマビエが機能する社会のあり方こそ

が、宗教的な教養を身に付けるために教育的な役割を果たすことだろう。それにしても、科学的蓋然性に基づく感染の可能性を乗り越えて、アマビエが救済を祈願する信仰の拠り所になるのかどうか。これもまた、宗教実践として救済の根拠が「あやふやだ」とすれば、感染ホラーの物語はまさにこうしたあやふやさから恐怖を生成しようとするのだ。

鈴木光司の『リング』は、初版の出版時点から単行本自体が「呪い＝ウイルス」の感染源であり、恐怖した読者がキャリアとなってさらに「増殖」させるように現実の行動を促している。発売から文庫化を経てその恐怖はじわじわと口コミで広まったというが、読者を呪いの当事者にする「不幸の手紙」の枠組みも、人に語らずにはいられない要因の一つである。『リング』の呪いは、オカルト的な都市伝説を科学的なウイルス論の枠組みで語ることで、普遍性を獲得しようとする。ここに、宗教文化的な道具立てによって恐怖の払拭や不安の緩和に役立ちそうなものは何もないが、それを顕示することこそが、逆説的に感染ホラーの宗教性と言えるものになっている。

本稿では、宗教リテラシーの観点から、なぜ『リング』は怖いのかを問題にしてきた。感染ホラーの原点となったオリジナル・リングにおいて、貞子の怨念は憑依のリアリティと供養の不可能性によって、呪い＝ウイルスのキャリアとなった読者に救済の無根拠を突きつける。『リング』が仮に〈モダンホラー〉作品だとすれば、こうして根無し草となった信仰生活に狙いを定めて、救済なき恐怖を現在化するはずだ。恐怖体験の結果として、読者の認知する「憑依」と「供養」の宗教的意味が更新される時、『リング』の教育的意図は果たされたことになるだろう。

付記

本研究はJSPS 科研費 JP20K12817 の助成を受けたものである。

注

- 1) 宗教リテラシーの定義については以下の記述を参考にしている。藤原は「社会生活のさまざまな場面で遭遇する事態に対し、適切に対処するための判断材料となる宗教知識、ならびにその運用能力」(藤原聖子「はじめに」『世界は宗教とこうしてつきあっている』山中弘・藤原聖子編、弘文堂、2013年、ii頁)と定義し、プロセロは「宗教的な諸伝統の基礎的な建築用ブロック—主要な用語、象徴、原理、実践、格言、文字、^{ナラティブ}隠喩、物語—を、日常生活の中で理解し、使いこなす能力」(スティーヴン・プロセロ『宗教リテラシー——アメリカを理解する上で知っておきたい宗教的教養』張内一史訳、麗澤大学出版会、2014年、30頁)と定義している。また、メディア・ミックスを駆使して展開するホラー作品を対象にすることから、菅谷によるメディア・リテラシーの定義「メディアが形作る「現実」を批判的(クリティカル)に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力」(菅谷明子『メディア・リテラシー』岩波新書、2000年、v頁)も参考にしている。
- 2) 池上良正『増補 死者の救済史——供養と憑依の宗教学』ちくま学芸文庫、2019年、121-123頁。
- 3) 一柳廣孝「心霊を教育する——つのだじろう「うしろの百太郎」の闘争」『怪異の表象空間——メディア・オカルト・サブカルチャー』国書刊行会、2020年、165-170頁。
- 4) リー・メラ『ビハインド・ザ・ホラー——ホラー映画になった恐怖と真実のストーリー』五十嵐加奈子訳、青土社、2021年、91頁。
- 5) 上映当時における『エクソシスト』の反響については、関係者らのインタビューを含む以下の書籍からもうかがい知ることができる。クライヴ・バーカー、スティーヴン・ジョーンズ編『クライヴ・バーカーのホラー大全』日暮雅通訳、東洋書林、2001年、32-39頁。
- 6) 1970年代のオカルトブームによって日本特有に文脈化された嘔吐と失神の“エクソシスト・ショック”については、谷口基の分析が参考になる。谷口基「エクソシスト・ショック——三十年目の真実」『オカルトの帝国——1970年代の日本を読む』一柳廣孝編、青弓社、2006年。
- 7) 笹川吉晴「解説」『エクソシスト』創元推理文庫、1999年、551-552頁。
- 8) 現代社会におけるホラー作品の宗教性について、筆者はジュリア・クリステヴァの所論を踏まえて論じたことがある。斎藤喬「クリステヴァにおける唾棄すべきものの宗教性」『文化』第74巻第3・4号、2011年。
- 9) 文芸評論家の東は、〈不幸の手紙〉の背後には「特定できぬ他者たちの悪意の無限連鎖」があることを指摘した上で、このシステムを丸ごと取り込んで作品化したことで『リ

- ング』は読者に強烈な本能的恐怖を喚起すると指摘する。東雅夫「すべての怪談は不幸の手紙から始まる！」『伝染る「怖い話」』別冊宝島編集部編、宝島社文庫、1999年、356-357頁。
- 10) 高橋洋「地獄は実在する」『映画脚本集 リング リング2』角川ホラー文庫、1993年、292-293頁。
 - 11) 奈良崎の以下の論考は、瀬名秀明の『パラサイト・イヴ』(1995)と鈴木光司の『リング』、『らせん』を念頭に置いて、1990年代の日本のホラー小説シーンにおける「ウィルス・遺伝子系小説」の時代背景を概括して参考になる。奈良崎英穂「心霊からウィルスへ——鈴木光司『リング』『らせん』『ループ』を読む」『ホラー・ジャパネスクの現在』一柳廣孝・吉田司雄編、青弓社、2005年。
 - 12) 『リング』では名前だけの登場で影山照高の詳細は語られないが、1995年11月から『小説現代臨時増刊メフィスト』で連載が始まった『神々のプロムナード』においては、彼が教祖となって宗教団体「天地光輪会」を組織する経緯がミステリーの核を構成している。作者の鈴木光司は、この小説の「あとがき」で、オウム真理教の事件があったため当初予定していたストーリーを捨てたと書いていることもあり、『リング』と影山照高の関係性は判然としない。鈴木光司『神々のプロムナード』講談社、2003年。
 - 13) 鈴木光司、『リング』角川書店、1991年、15-16頁。
 - 14) 吉田の以下の論考は、小説『リング』が参照している1910年代における福来友吉の超能力と超常現象の研究、作品の時代設定と連動する1970年代のオカルトブーム、さらに「呪いのビデオ」と同じ発想で制作された1988年の『邪願霊』(石井てるよし監督、小中千昭脚本)との比較などを含んでおり、非常に参考になる。吉田司雄「回帰する恐怖——『リング』あるいは心霊映像の増殖」『心霊写真は語る』一柳廣孝編、青弓社、2004年。
 - 15) 鈴木光司『リング』角川書店、1991年、28頁。
 - 16) 「悪魔はなあ、いつも異なった姿でこの世に現れるんだ。一四世紀後半にヨーロッパ全土を襲ったペストを知ってるかい。全人口の約半数近くが死んだ。信じられるか？ 半分、日本の人口が六千万に減ると同じだ。もちろん、当時の芸術家はペストを悪魔になぞらえた。今だってそうだろう、エイズのことを現代の悪魔とかって呼ばないかい。だがなあ、悪魔は決して人間を死滅に追いやることはない。なぜか……、人間がいなければ、奴らも存在できないからだ……。ウィルスはなあ、ウィルスも宿主である細胞が減ってしまったら、もはや生きられないんだ。ところが、人間は天然痘ウィルスを死滅に追いやった……。本当かね、そんなことができるのかねえ」(同上、159頁)。
 - 17) この点について、作家の篠田節子は次のように評している。「実際のところ、ただな

らぬ作品だった。それは謎のテープの画面描写で決定的になる。普通ならそうした部分については、主人公の内面描写でごまかす。失敗したら全体のストーリー展開の必然性が失われるからだ。しかし鈴木光司はそれをやっつけてのける。生々しく不気味で、どこかしら感動的な画面が、読み手の脳裏に鮮やかに立ち上がる。」篠田節子「解説」『仄暗い水の底から』角川ホラー文庫、1996年、269頁。

- 18) 鈴木、前掲書、57頁。
- 19) 小説本文に「爆弾と知らず開いた小包のように、何の準備もなくビデオを見てしまった浅川」とあるため、読者をこれと同じ状況に陥れる意図があるのだろう。同上、64頁。
- 20) 映画『リング2』ではシナリオが公募され、佳作として入賞した四作が『the Ring～もっと怖い4つの話～』（リング研究会選、1998年、角川書店）として出版された。これは、初版本『リング』よりもさらに手の込んだ形で、本のサイズ、カバーのデザインがそのままビデオテープになっている。
- 21) 鈴木光司『エス』角川書店、2012年、274頁。
- 22) 先に言及したように、浅川の神秘性への態度には社会的文脈として1988年のオカルトブームへの反省があるというのだが、高山が発する「オマジナイ」という語彙の使用についても1980年代以降の占い・おまじないブームを考慮すべきだろう。当時の宗教文化的背景については、橋迫の記述が参考になる。橋迫瑞穂『占いをまとう少女たち 雑誌「マイバースデイ」とスピリチュアリティ』青弓社、2019年。
- 23) 鈴木、前掲書、184頁。
- 24) 同上、184頁。
- 25) 吉田によれば、小説の『リング』において、超心理学者福来友吉と女性被験者との関係は、貞子の父母である井熊平八郎と山村志津子との関係に置き換えられ、福来の思想や研究方法は三浦哲三に投影されているという。吉田は、作中に出てくる三浦の思想が福来の「観念生物論」の引き写しであることを、著者の鈴木光司が参照したとされる中沢信午の『超心理学者福来友吉』（大陸書房、1986年）の記述と照合しながら論証している。吉田、前掲書、175-176頁。
- 26) この現象は浅川によって「念像」と呼ばれる。鈴木、前掲書、131頁。
- 27) 同上、193頁。
- 28) 『リング』『らせん』制作委員会「鈴木光司インタビュー」『リング』『らせん』（パンフレット）東宝、1998年、5頁。
- 29) 「竜司の声を聞いても、助かったという実感は湧かなかった。浅川はまるで別の空間を浮遊し、夢見心地で山村貞子のしゃれこうべを胸に抱いてうずくまっていた。」鈴木、前掲書、187-188頁。

- 30) 第六作『タイド』において、大島差木地にある山村家の菩提寺は「龍丹寺」であると判明する。鈴木光司『タイド』角川書店、2013年、112頁。
- 31) この点については、以下の拙稿を参照されたい。斎藤喬「『怪談牡丹燈籠』を読む——お露の恋着と良石の悪霊祓い」『〈江戸怪談を読む〉牡丹灯籠』白澤社、2018年。斎藤喬「『真景累ヶ淵』と『怪談』における恐怖の語り——Jホラーは怪談噺の夢を見るか?」『ユリイカ』第54巻第11号、2022年。
- 32) 映画『リング2』では、仏教僧ではなく超心理学を信奉する医師による科学的実験の試みとして、貞子の怨念の慰撫が試みられ失敗している。また、第六作『タイド』では、第四章全体が主人公による大峯山での奥駈修行の描写に当てられており、貞子の怨念の慰撫が試みられている。『エス』と『タイド』は『リング』と『らせん』の後日譚であり、『タイド』はもはや科学的蓋然性に基づいたウィルス論の体裁を取っているようには見えない。そこには菩提寺龍丹寺への言及や大峯山奥駈修行の描写などから、これまで以上に貞子の供養に焦点化していると言える部分もあるが、怨霊の調伏には至らないようだ。最終的には作中で貞子を神に祀るしかないと思われるが、『エス』以降の新シリーズを感染ホラーとしてどのように捉えるかについては別稿を期したい。
- 33) Koji Suzuki, *ring*, tr. by Robert B. Rohmer and Glynne Walley, London: HarperCollins Publishers, 2003, p. 244.
- 34) *Ibid.*, p. 245.
- 35) こうした憑依現象の二側面に関して、筆者は明治期の精神医学者荒木蒼太郎の所論を踏まえて論じたことがある。斎藤喬「明治期日本における精神医学と猥憑き」『アカデミア 人文・自然科学編』第21号、2021年。
- 36) 坂東齡人「解説」『リング』角川ホラー文庫、1993年、328頁。
- 37) 大道晴香「一九八〇年代の「こっくりさん」——降霊の恐怖を払拭する「キュービッドさん」の戦略」『怪異と遊ぶ』一柳廣孝・大道晴香編、青弓社、2022年。
- 38) 高橋綾子、藤井修平「新型コロナウイルス禍のアマビエにみる妖怪の社会的機能」『心理学研究』第93巻第1号、2022年、63頁。

特集 試される宗教リテラシー

クルアーンの翻訳にまつわるリテラシー

—「正確さ」と「客観性」から考える—

後藤絵美¹

イスラームの啓典クルアーンの翻訳を参照したり、引用したりする際に、何を知っておくべきか。本稿では、人間の営為としての翻訳がもつ、「正確さ」や「客観性」にまつわる限界と、解釈の「幅」や「可能性」の広がりについて論じる。

¹ ごとうえみ：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教

1. 翻訳の困難と課題

イスラームの啓典クルアーンには複数の日本語訳があるという話をすると、しばしば問われるのが、「どの翻訳が一番正確か」という点である。中には、信徒以外の学者の翻訳の方が、価値中立で、客観的で、信頼に足るのではないかと尋ねる人もいる。本稿では、こうした問いをきっかけに、クルアーンの翻訳を参照したり、引用したりする際に、何を知っておくべきか、あるいは、考える必要があるのかを論じてみたい。

クルアーンはムスリム（イスラーム教徒）にとって、神の言葉そのものを記録した書物である。それは、7世紀のアラビア半島で「最後の預言者」に選ばれたムハンマドを通して人々に伝えられ、後に書き留められたものとされる。クルアーンの言語はアラビア語で、そのことは同書の中でも言及されている¹⁾。

ムスリムの間で、クルアーンを別の言語に翻訳したものは、クルアーンそのものではなく、その解釈書だと考えられてきた。翻訳（他言語での解釈）は、イスラームがアラビア語話者以外のあいだで知られるようになるにつれて必要になった。すでに預言者ムハンマドの時代に、一部の章句が、ペルシア語や、シリア語、シンド語などに翻訳されていたと言われる。ムスリム王朝が栄えるにつれて、クルアーン全体のペルシア語やトルコ語への翻訳も盛んになった。また、植民地主義の広がりや西洋（キリスト教）の思想や文化の流入が急速に進んだ19世紀には、中央アジアや南アジア、東南アジア、中国、アフリカなど、アラビア語以外の言語圏に暮らす信徒たちの信仰が揺らがないよう、各地のムスリムがそれぞれの言語による翻訳書を著し、刊行し始めた。

信徒以外の手による翻訳も行われてきた。ヨーロッパ諸語への最初の翻訳は、1143年、イングランドのキリスト教徒によるラテン語訳だったと言われる。その後、1547年に最初のイタリア語訳が登場し、ドイツ語訳（1616年、イタリア語訳より翻訳）、オランダ語訳（1641年、ドイツ語訳より翻訳）、フランス語訳（1647年、アラビア語より翻訳）、英語訳（1648年、フランス語訳より翻訳）が続いた。19世紀になると、

キリスト教宣教師や東洋学者らによるクルアーンの翻訳が次々と出された。中にはイスラームへの偏見に満ちたものもあったが、真摯な学術的取り組みとしてなされたものも少なくなかった。

日本語では、非信徒の歴史家、坂本健一による『コーラン経』（「世界聖典全集」所収、1920年）が最初の翻訳として知られている。続いて刊行されたのが、最初期の日本人ムスリムの一人である有賀阿馬士（文八郎）と、聖書の翻訳を行ったことで知られる文学者の高橋五郎の共訳『聖香蘭経』（1938年）であった。以来、信徒や信徒以外の人々の手によって、十種類以上のクルアーンの日本語訳が刊行されてきた（表）。その大半は、翻訳者の学術的・宗教的関心に基づき、ムスリムの人々が大切にする「啓典」の内容を、人口の大多数を占めるムスリム以外の人々を含む、日本語の読者に伝えようとするものであった。

冒頭の問いに戻ろう。日本語の翻訳のうち、どれがより「正確」なのか。信徒以外の学者の手による翻訳の方が「客観的」なのか。あらかじめ筆者の考えを示すと、クルアーンのある翻訳が他の翻訳よりも正確であるとか、客観的であるという判断は、そもそも不可能である。翻訳とは、原文をできるだけ忠実に別の言語に移し替えようとする試みであるが、その作業には多くの困難が伴う。その点で、フランス思想研究者の桑田禮彰が翻訳について述べていることは、クルアーンの場合にもあてはまるであろう。

翻訳者は、あくまでも原典に忠実に、原著者が意図したこと、表現しようとしたことを探求し、その背景・環境を調べ尽くして、正確な翻訳を行なわなければならない。しかし実際には翻訳者は、理解・表現の困難や複数の解釈可能性の問題に遭遇する。その場合には翻訳者は、しかるべき専門家の協力を仰ぎ、最終的な出版に際しては自らの限界を自覚した上で、自分の翻訳を一つの解釈として謙虚に提示し、「諸兄のご教示・ご批判を仰ぐ」ことになる²⁾。

クルアーンを翻訳する者は、いかに原著者（アッラー）の言葉とされ

表 クルアーンの日本語訳(全訳のみ、2019年刊行分まで)

	訳者名 書名	出版年	訳出の際、主に参照したもの
1	坂本健一 『コーラン経』	1920年 (大正9年)	原典および英語訳(セール(1734)、ロッドウエル(1861)、パーマー(1880))
2	高橋五郎・有賀阿馬土 『聖香蘭経』	1938年 (昭和13年)	英語訳(おそらくロッドウエル(1861)のもの)
3	大川周明 『古蘭』	1950年 (昭和25年)	原典および漢語、英語、仏語、独語の諸訳
4	井筒俊彦 『コーラン』	1957-58年 (昭和32-33年) ／改訂1964年 (昭和39年)	原典、バイダーウィーの注釈書
5	藤本勝次・伴康哉・池田修 『コーラン』	1970年 (昭和45年)	原典、英語訳(ユスフ・アリ)
6	三田了一 『日亜対訳注解 聖クラーン』／ 日本ムスリム協会 『日亜対訳注解 聖クルアーン』	1972年 (昭和47年) ／改訂1982年 (昭和57年)	原典、アブドゥル・ラシッド・アルシャッドによる講義、19世紀インドの英語訳(アブドゥル・マージド、ユスフ・アリ)
7	モハマッド・オウエース・小林淳 『聖クルアーン』	1988年 (昭和63年)	不明
8	中田考監修、中田香織・ 下村佳州紀訳『訳解クルアーン』／ 『日亜対訳クルアーン』	2011年 (平成23年) ／2014年 (平成26年)	原典、ジャラーライン(マハッリーとスューティー)の注釈書、古典および現代の注釈書
9	澤田達一 『聖クルアーン』	2013年 (平成25年)	原典、アラビア語の注釈書(現代シリア派)、三田訳
10	水谷周監訳著 杉本恭一郎訳補完 『クルアーン やさしい和訳』	2019年 (平成31年)	原典、ラーズィーの注釈書、バダウィーとアブデル・ハリームによるクルアーン用語辞書
11	サイド佐藤 『聖クルアーン』	2019年 (平成31年)	原典、ムヤッサルの注釈書、古典および現代の注釈書

るものの背景や周辺について調べようと、それを理解したり、他言語で表現したりする際には困難にぶつかり、複数の解釈可能性の問題に直面する。結局、その過程には、人間の主観的な選択や判断が入らざるを得ず、自らの翻訳を「一つの解釈」として提示するほかない。

本稿では、こうした状況について、日本で長らくクルアーンの翻訳の

「定本」とも言うべき位置を占めてきた二つの翻訳書を事例に見ていきたい。一つは井筒俊彦訳『コーラン』である。1957年から58年にかけて岩波文庫から刊行され、1964年に改訂された同書は、日本で最初のアラビア語からの完訳として知られ、非ムスリムの学者による学術的翻訳書としても名高い。もう一つは三田了一訳『日亜対訳注解 聖クラーン』／日本ムスリム協会訳『日亜対訳注解 聖クルアーン』である。こちらは、日本で最初の信徒によるアラビア語からの完訳として知られている。1972年に三田が刊行した初版は、1982年に日本ムスリム協会によって改訂され、その後、版や刷を重ねている。

本稿の構成は以下の通りである。続く第2節では、二つの翻訳書が、どのような意図の上に、いかなる過程を経て生み出されたのか、第3節では、その結果、いかなる日本語の訳文があらわれたのか、現存する翻訳の「幅」を、それぞれ見ていく。第4節では、近年、世界の各地で、これまで以上に多様なクルアーンの読み方が示されてきたことを指摘し、いまだ日本語の翻訳にはあらわれていない読み方のいくつかを紹介する。

以上の作業を通して、クルアーンの翻訳を参照したり、引用したりする際に必要なリテラシーのいくつかの側面に光をあてていきたい。

2. 翻訳が生まれるまで

本節では、井筒訳と三田／日本ムスリム協会訳という二つの日本語訳がどのような意図の上に、どのような過程を経てなされたのかを見ていく。

井筒訳『コーラン』

井筒俊彦(1914-93年)は言語学者、哲学者であり、戦後日本を代表するイスラームの研究者の一人である。井筒がクルアーンの翻訳に着手したのは、1940年代末、岩波文庫の編集者の依頼を受けてのことであった。1957年から58年にかけて上中下の三巻本で刊行された翻訳の初版

解説で、井筒は、クルアーンが「西アジアから東南アジアにかけて数億の信者を擁する」イスラームの根元であること、今も昔も「信徒の狂熱的尊信を一つに集め、その生活の諸相を規定し、彼らの思想・感情の生きた源泉をなして」きたことを指摘し、日本においても、この啓典を「一寸読んでみたいと言う人が各方面で非常に多くなって来た」と記している³⁾。

その上で、同じ唯一神に由来するとされる旧約聖書や新約聖書と比べて、クルアーンは日本人にとって理解が難しく、無味乾燥で退屈なものにもなりかねないとも述べている。クルアーンを面白く読むためには、一定の技術——つまり、いくつかの予備知識を用意しておくこと——が必要だからである。たとえば、『コーラン』は何時、何処で、そして特にどんな歴史的状況の下に生れたものか。その頃の沙漠のアラビア人はどんな世界像を抱いて生きていたか。『コーラン』の生みの親であるムハンマド(中略)とは一体どんな男であったのか。『コーラン』というこの書物はどんな径路で出来上ったのか。どんな点がユダヤ教、キリスト教の聖典と根本的に違っているのか、等々⁴⁾である。その一方で、ともかく、じかに啓示の言葉を読んでみることも、理解への道筋の一つであるとも付け加えている。そして、この翻訳は、「少くとも一歩一歩読んで行く、その箇所が一体何を言っているのか表面的になりとも分かるように、割注を随所に入れながら、言葉の意味や、全体の脈略が辿れるようにしたと述べている⁵⁾。

上巻の「はしがき」には、翻訳に際して、19世紀ヨーロッパの東洋学者グスタフ・フリーゲル(1812-1900年)によるクルアーンの校訂本を底本とし、語句の解釈には、バイダーウィー(生年不詳-1286年)の注釈書をもって基調としたという説明がある。井筒によれば、1841年に出版されたフリーゲル版は「最初の学術的テキスト」であり、フリーゲルは「当時ヨーロッパきっての碩学として令名のあった」人物である。またバイダーウィーは西暦13世紀のクルアーン学者であり、その注釈書は「回教の正統派では最上のも^{スニユー}物として非常に尊重されて来た」という。ただし、この注釈書も、19世紀以降のアラビア文献学の

知識に照らし合わせると「無数の欠陥を蔵しており、すべての点についてこれに盲従することは到底不可能」として、後者の成果も活用したと述べている。そして全体として「いかなる場合にも、あまり大胆すぎるような仮説は採用せず、できるだけアラビア語を良識的に、平易に、解釈するよう努力したつもりである」と記している⁶⁾。

井筒訳の特徴はそれが「口語訳」だったということである。クルアーンは神がムハンマドを通して人々に伝えた言葉の記録だとされるが、井筒は口語訳を用いることで、ムハンマドが発話した瞬間を、できるかぎり生々しく再現してみたかったと言う⁷⁾。信徒にとってクルアーンは「聖なるが上にも聖なる啓典」であるが、大半が「異教徒」である日本人にとって、それは「ユニークな人間記録」、あるいは歴史文献として高い価値を持ちうると井筒は述べている⁸⁾。彼が参照したバイダーウィーの注釈書は、アラビア語学の分野で著名なザマフシャーリー（1075-1144年）の注釈書を要約・修正したものとして知られている⁹⁾。井筒がバイダーウィーの注釈書とともにヨーロッパの文献学の成果を活用することを選んだのは、それが言語学的アプローチによる解釈をするものだったからだと考えられる。アラビア語の文法、語彙、修辞表現を詳細に検証することで、啓示当時のクルアーンの「本来の」意味を再現しようとしたバイダーウィーや文献学者らの試みは、井筒の目的と合致していたのである¹⁰⁾。

井筒が1964年にかけて全面的な改訳を行ったのは、初版の口語訳の文体がクルアーンにそぐわないという思いがあったことに加えて、「アラブ諸国、特にエジプトのカイロで斯界の権威とされる多くの碩学と論議して」新しい知識を得たからであるという¹¹⁾。学者らが一字一句の解釈に真剣に取り組む様子、そしてそこに多様な解釈があらわれる様子を目のあたりにしたのであろうか、井筒は「改訳『コーラン』後記」の中で次のように記している。

『コーラン』の一字一句が^{アッラー}神自らの言葉であるからには、その
 唯一の正しい意味を解釈し、それを通じて神の意の奈辺にあるかを

探り出すことは、信徒たるものの神聖な義務とされたのである。学者は一字一句の解釈に自己の生死を賭した。(中略)しかし皮肉なことに、ひたすら唯一なる正しい解釈を求めるのゆえに、実に多くの解釈が考え出される結果となった。かくて伝統的に記録された異なる解釈の仕方は膨大な数にのぼる。(中略)大抵の語句については幾つかの違った解釈——しかも屢々あい矛盾する解釈——が提出されている。同一の語句が五通り六通りに解されることはざらであり、そのいずれに依るかによって訳もまた全然違ったものになる。このような場合、いずれを正しいとするかは大変むずかしい問題である。すなわち、そこに訳者の個人的主観的評価が入ることを避けることはできない¹²⁾。

表現の難しさに加えて解釈の複数性、そして主観的な取捨選択の存在を十分に認識しつつ、井筒は、改訳の際にも「最も良識的で受け入れやすい解釈を採用するという原則」の上に作業を進めたという¹³⁾。それでも、自らの訳文について、「絶対的确实性の保証はあり得ない。一応筋の通った解釈を一応首尾一貫した形で提供したにすぎない¹⁴⁾」と述べていたのであった。

三田訳『聖クラーン』／日本ムスリム協会訳『聖クルアーン』

三田了一(1892-1983)は、20代半ばで渡航した中国での滞在中にイスラームとの接触の機会をもち、同地の信徒らの生活や人間性、宗教に対する忠誠心に深く感銘を受けたという。後に彼は南満州鉄道社員として中国各地を訪れ、回教研究にいそしんだ。三田が北京のモスクで仏教からイスラームに改宗したのは1941年、49歳の時である。戦後、日本に戻った彼は、1952年に設立されたばかりの日本ムスリム協会に入会し、1950年代から1960年代にかけては、タブリーギー・ジャマーアートと協力して、日本でムスリム布教活動に従事した。1960年、68歳で日本ムスリム協会の第二代会長に就任したが、その2年後に辞任し、クルアーンの翻訳に専念するため、パキスタンやサウジアラビアに渡り、

現地の学者たちの指導を受けた。三田が10年以上かけて完成させたのが、『日亜対訳注解 聖クラーン』（1972年、以下『聖クラーン』）であった¹⁵⁾。

翻訳のきっかけや意図について『聖クラーン』には言及がないが、アラビア語のクルアーン原文と日本語の翻訳を左右に並べて併記する対訳の形をとり、かつ、前者には母音符号に加えて、朗読のための記号が詳しく付されたものを使用していることから、日本語を母語とする信徒の日々の活用が意識されていたものと思われる。この形式であれば、信徒はアラビア語を声に出して朗読しながら、日本語の意味を理解しうるからである。一方、巻頭に置かれた解説には、「クラーンを初めて読む方へ」という項目があり、信徒の中でも初学者や、信徒以外の読者も想定されていたことがうかがえる。ここには、たとえば次のような言葉がある。

クラーンが啓示される当時の緊迫した事情や、民族慣習などからくる疑問に感じた点は、それぞれ重大な問題ではあるが、もし納得しかねる点があったさいはしばらくそれをおき、ひとまず全巻を通読して、クラーンの基本的教えや精神のあるところを理解せられたい。先入主や表面上の現われや一部の語句に捕われると、誤解に陥るおそれがある。(中略)しょせん人間のとらわれた読み方では、神のことばを理解することはむずかしい¹⁶⁾。

地域的・時代的な文脈に馴染みのない日本語読者が少しでも背景を知った上で読めるようにと、三田訳では、各章の冒頭に、章全体の内容に関する説明が付され、またいくつかの語句や文章に訳注が振られている。訳文や注記を作成するにあたり、三田が主に依拠したのは、パキスタンの学者アブドゥル・ラシッド・アルシャッドの講義と、内外の既刊の翻訳書であった。前者の講義はサウジアラビアのメッカで、1963年12月から2年以上にわたり、三田による翻訳作成のために行われたものだという。また、翻訳書としては、19世紀のインド大陸の二つの英亜対訳書——マウラナ・アブドゥル・マージドとユスフ・アリのものが

主に用いられた。加えて、三田は「メッカの諸権威者」や世界各地のムスリムやイスラーム研究者と、疑問点について協議したり、彼らに翻訳書の校閲を依頼したりした¹⁷⁾。

『聖クラーン』の刊行後、そのアラビア語の印刷部分に不備が見つかったことをきっかけに、日本ムスリム協会のメンバーによる改訂版の作成が始まった。協会の中でもエジプトやサウジアラビアに留学経験のある者が、三田訳をもとに、あらためて内容の確認や訳文の訂正を行い、浮上した疑問点については、国内外の専門家らの意見を仰いだ。多くの人の目や手が入り、推敲と校正を重ねて、『日亜対訳注解 聖クルアーン』（1982年）が刊行され、1996年にはさらなる修正が施された改訂版が出版された。

三田／日本ムスリム協会訳は、先行する井筒訳と内容やニュアンスの面で異なる部分が少なくない。それは、井筒訳が7世紀当時の啓示の瞬間を日本語で再現しようと試みたのに対して、三田／日本ムスリム協会訳は、神の啓示であるクルアーンを、現代に暮らす人々の生活に結び付けようとするものだったからである。初版の『聖クラーン』の発行に携わった日訳クラーン刊行会による「まえがき」には、次のような言葉がある。

クラーンは、永遠にゆるがない真理、神のことが納められた、イスラームの唯一の聖典である。それは、一見解や一民族に偏することなく、全人類に共通し万世にもとることのない直き道が、日常生活上の万般の事項にわたり、一神の信仰を基底に具体的かつ懇切に生き生きと説かれ、六億数千万人の信徒によって信奉されている¹⁸⁾。

クルアーンは7世紀のアラビア半島において下された啓示であるが、その真理はいつの時代にも、そしてあらゆる人々の日々にかかわるものであるという。しかし、それを（もともとの）アラビア語以外の言語に置き換えることについては、三田や日本ムスリム協会による序文や解説の中で、その限界が繰り返し強調されている。クルアーンとは「独特の書で、普通の読み物とは全く異り（中略）永遠にゆるぎのないアルラー

のことばを、人間の語で表現することはもともと不可能」なのである¹⁹⁾。それでもより多くの人々が、クルアーンを読み、考え、神意を会得し、それを日常生活の上に生かしていくことを求めて、日本語による翻訳の努力が重ねられてきたのであった。

3. 翻訳の「幅」

ここまで、二つの翻訳の意図や方針を概観したが、次に、それらによって、いかなる訳文が生み出されてきたのかを見ていくことにしたい。ここでは、井筒訳(1964年改訳版)²⁰⁾と日本ムスリム協会訳(1996年改訳版)²¹⁾を参照し、二つの違いが大きく表れる第四章「女性章 *Sūrat al-Nisā'*」(井筒訳では「女章」、日本ムスリム協会訳では「婦人章」)を取り上げる。

「女性章」には、家庭や社会における男女の関係性を扱う節が多く含まれる。井筒訳では、章題のすぐ後にバスマラ(各章の冒頭に置かれる一文)²²⁾が置かれ、その後、第一節から順に訳文が並ぶが、日本ムスリム協会訳では、章の冒頭に「章の説明」として次のような言葉がある。

本章は婦人に関する啓示が多いので、婦人章と名付けられる。啓示の年代は3章に続き、その大部分はオホドの戦役後、74名に及ぶ戦死者によって生じた寡婦(かふ)の結婚、離婚、遺産相続ならびに孤児の保護など、主としてこれら当面の問題に関する啓示である。戦後の收拾のために下った啓示が、後年に至るまでムスリムの日常を律するものとなった。(後略)²³⁾

「オホドの戦役」(ウフドの戦い)とは、625年に起きたとされるもので、メディナのムハンマド軍がメッカのクライシュ族と戦い、前者が大きな痛手を負ったことで知られている。その中で多くの男性が命を落とし、それによって寡婦や孤児が生まれた。一夫多妻婚に関する章句として知られる4章3節は、そうした時期に下されたものだと日本ムスリム

協会訳は説明する。一方、井筒訳にはそうした文脈への言及がない²⁴⁾。同節は二つの訳書において、それぞれ、以下のように翻訳されている。

[井筒訳]

もし汝ら（自分だけでは）孤児に公正にしてやれそうもないと思ったら、誰か気に入った女をめとるがよい、二人なり、三人なり、四人なり。だがもし（妻が多くては）公平にできないようならば一人だけにしておくか、さもなくばお前たちの右手が所有しているもの（女奴隷を指す）だけで我慢しておけ。その方が片手落ちになる心配が少なくてすむ²⁵⁾。

[日本ムスリム協会訳]

あなたがたがもし孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う2人、3人または4人の女を娶れ¹⁾。だが公平にしてやれそうにもないならば、只1人だけ（娶るか）、またはあなたがたの右手が所有する者（奴隷の女）で我慢しておきなさい。このことは不公正を避けるため、もっとも公正である²⁶⁾。

日本ムスリム協会訳には、「2人、3人、または4人の女を娶れ」の後に訳注1として、三田による次のような解説が付されている。「オホドの戦役において、7百人のムスリム軍の中から74名の戦死者を出し、多くの孤児と寡婦〈かふ〉の救済は、当時の社会では至難の問題であった。一般にイスラームの多妻につき、本節に述べられる前段と後段の条件が無視されているのは遺憾である。イスラームの精神は、この文面からも明らかかなように一夫一婦であり、またムスリム社会の現実もそうである²⁷⁾。」

一部の言葉が括弧の中に補足された形の井筒訳と比べると、日本ムスリム協会訳は情報量が多い。第一に、多くの男性が戦死し、その結果、孤児と寡婦の救済が社会問題となったという文脈が示され、第二に「前段と後段の条件」、すなわち、「孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば」と「だが公平にしてやれそうにもないならば、只1人だけ」

という二つの条件の上に、4人までの妻帯が許されていることが指摘されている。そうして、イスラームの初期史に詳しくない日本の読者に向けて、三田は啓示の文脈を提示した上で、第三に、イスラームの精神においては、もともと一夫一婦であり、現代のムスリム社会の現実もそうであると付け加えたのである。

もう一つ、翻訳の違いが顕著な例として、男女の役割や関係性について説く4章34節（井筒訳では38節）²⁸⁾を挙げておこう。

[井筒訳]

アッラーはもともと男と（女）との間には優劣をおつけになったのだし、また（生活に必要な）金は男が出すのだから、この点で男の方が女の上に立つべきもの。だから貞淑な女は（男にたいして）ひたすら従順に、またアッラーが大切に守って下さる（夫婦間の）秘めごとを他人に知られぬようそっと守ることが肝要（この一文には色々な解釈の可能性がある）。反抗的になりそうな心配のある女はよく諭し、（それでも駄目なら）寢床に追いやって（こらしめ、それも効がない場合は）打擲を加えるもよい。だが、それで言うことをきくようなら、それ以上のことをしようとしてはならぬ。アッラーはいと高く、いとも偉大におわします²⁹⁾。

[日本ムスリム協会訳]

男は女の擁護者（家長）である。それはアッラーが、一方を他よりも強くなされ、かれらが自分の財産から（扶養するため）、経費を出すためである。それで貞節な女は従順に、アッラーの守護の下に（夫の）不在中を守る。あなたがたが、不忠実、不行跡の心配のある女たちには諭し、それでもだめならこれを臥所に置き去りにし、それでも効きめがなければこれを打て。それで言うことを聞くようならばかの女に対して（それ以上の）ことをしてはならない¹¹⁾。本当にアッラーは極めて高く偉大であられる³⁰⁾。

二つの訳文は、男女関係や夫婦関係のあり方という点で違いがある。井筒訳では、男女の優劣が神授のものとされ、女性は生活を支える夫の下で「ひたすら従順に」あるべきだとある。他方、日本ムスリム協会訳は、男女間には「強さ」と「経費を出すか出さないか」という二つの違いがあるという。井筒訳が男性の圧倒的優位を強調し、日本ムスリム協会訳がより平等意識の強い訳を示したのは、前者が13世紀のバイダーウィーの注釈書を基調として訳出を行った一方で、後者が19世紀の英語の訳本や20世紀のパキスタンの学者の講義をもとにしたという、典拠の時代性の違いに影響されたためだと考えられる。中世期のクルアーン注釈書には、男性優位の考え方が埋め込まれていた一方、近代以降、男女間には優劣ではなく、役割の違いがあるという解釈が広がっていったからである³¹⁾。

日本ムスリム協会訳の「(それ以上の) ことをしてはならない」には訳者注11として、次のような言葉が添えられている。「われわれは、つねにアッラーのみ前であることを、意識して生活しなければならない。アッラーはわれわれの上に高くおられ、監視しておられるのである。アッラーにおいては、その悩みや口論は、本当に取るに足りないものであろう。それで他人に対する感情やうるさい小言や皮肉は、事が過ぎたら過まちとして許し忘れるべきである³²⁾。」ここからも、クルアーンの言葉を現代の人々の日常に結びつけようとする訳者らの姿勢がうかがえる。

4. 翻訳の「可能性」

以上、井筒訳『コーラン』と三田訳『聖クラーン』／日本ムスリム協会訳『聖クルアーン』について、その翻訳の意図や過程、その結果としての訳文の「幅」を見てきた。そこで明らかになったのは、次の三点である。第一に、クルアーンの翻訳には本文内容の理解や表現上の困難、複数の解釈可能性があるということ、第二に、翻訳者は、翻訳の過程で、先人による成果を参照したり、専門家らの協力を得たりしていること、そして、第三に、翻訳者らは自らの翻訳に（正確さという点で）限界が

あると自覚していることである。これらを理解した上で、『コーラン』や『聖クルアーン』と題する書物を参照したり、引用したりすることは、クルアーンをめぐるリテラシーの基本と言えるであろう。

本稿では、紙幅の都合もあり、二つの翻訳書だけを検討してきたが、同様のことは、他のクルアーンの日本語訳についても指摘しうる。いずれも、訳者をはじめ多くの人々の主観的な判断や取捨選択の積み重ねの結果、生まれたものである。では最後に、この「主観」という側面について、もう少し考えてみたい。

近年、世界各地のムスリムの間で、かつてないほど多様なクルアーンの読み方が提示されている³³⁾。米国のイラン系研究者ラーレ・バフティヤールによる『崇高なるクルアーン (*The Sublime Quran*)』³⁴⁾もその一つである。同書の中では、前出の4章34節が以下のように英訳されている。

Men are supporters of wives because God gave some of them an advantage over others and because they spent of their wealth. So the females, ones in accord with morality are the females, ones who are morally obligated and the females, ones who guard the unseen of what God kept safe. And those females whose resistance you fear, then admonish them (f)³⁵⁾ and abandon them (f) in their sleeping places and go away *from* them (f). Then if they (f) obeyed you, then look not for any way against them (f). Truly, God had been Lofty, Great.

(強調は原文による)

引用者による試訳

男性たちは妻たちの支援者である。神が一方に他方よりも有利な点を与えたからであり、彼らが財産を費やすからである。よって道徳的に正しい女性とは、課せられたことに従う者たちであり、神が大切にしてきたものを守る者たちである。あなた方が抵抗をおそれる女性に対しては、諭し、寝床に放置し、そのもとを立ち去りなさい。もし彼女たちがあなた方に従えば、それ以上のことをしないよ

うに。本当に、神は高く、偉大であられた³⁶⁾。

バプティヤールによる翻訳は、たとえば、「supporters／支援者」、「advantage／有利」や「go away from them／そのもとを立ち去りなさい」という表現において、井筒訳や日本ムスリム協会訳と異なっている。とくに最後の「そのもとを立ち去りなさい」と訳出された部分は、井筒訳では「打擲を加えるもよい」、日本ムスリム協会訳では「これを打て」と翻訳されている。これはバプティヤールが、これまで一般に「(妻を)打つ」と解されてきたアラビア語の一文を、アッラーがそのようなことを言うとは考えられないという訳者なりの理解や感覚を大切にしつつ、熟慮を重ねて導き出した表現である³⁷⁾。

バプティヤール訳は、「女性による初めての批判的英訳³⁸⁾」を謳うものであったが、同様に、女性の視点や経験が、クルアーンの解釈において採り入れられてこなかったことを指摘し、それを変えていこうと呼びかける声が、英語圏のみならず世界の各地で高まりつつある。これまでの解釈にたずさわった者のほとんどが、伝統的な宗教知識を保持する、特権をもった男性で占められており、かれらの「主観」に基づく理解が基調となってきたとすれば、これからは、女性や性的マイノリティを含む、より多様な層の人々の理解や視点も取り入れつつ、クルアーンを読んだり、解釈したりすることが重要だというのが、その主張である³⁹⁾。

クルアーンの章句の意味を、第一章から最終章まで順番に、別々に解釈していくのではなく、クルアーン全体に込められた意図を明らかにし、ある啓示と別の啓示の関係性に注目しながら、神の言葉を理解すべきだという議論もある。たとえば、前述の4章3節「あなたがたがもし孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う2人、3人、または4人の女を娶れ。だが公平にしてやれそうにもないならば、只1人だけ(娶るか)(後略)」については、同じ4章の129節に以下のような言葉がある。「あなたがたは妻たちに対して公平にしようとしても、到底出来ないであろう⁴⁰⁾。」これら二つの啓示を合わせ置きながら、神の意図がどこにあるのかを考えるべきだということである⁴¹⁾。

クルアーン全体を通して、神が男女間の平等や公正、愛情に満ちた夫婦関係を求めていると強調されることもある。その際、以下のような章句が根拠の一部となる⁴²⁾。なお、ここでは訳文の内容やニュアンスの違いを示すべく、三つの翻訳（井筒訳、日本ムスリム協会訳、バフティヤール訳）を併記することにした。

すると神は彼らにお答えになった、「汝らの中の働き者（信仰にもとづいて善をなす者の意）がなしとげたことをわしは決して無にしたりはしない。男も女も分けへだてはしない。もともと（男女）お互い同士じゃ。（井筒訳、3章193 [195] 節の一部）⁴³⁾

主はかれら（の祈り）を聞き入れられ、（仰せられた）。「本当にわれは、あなたがたの誰の働いた働きもむだにしないであろう。男でも女でも、あなたがたは互いに同士である。

（日本ムスリム協会訳、3章195節の一部）⁴⁴⁾

And their Lord responded to them: I waste not the actions of ones who work among you from male or female. Each one of you is from the other.

引用者による訳

彼らの主は答えた。「男でも女でも、あなたがたのうち、働く者の行動を無駄にはしない。あなた方一人一人は、互いに由来している。」（バフティヤール訳、3章195節の一部）⁴⁵⁾

れっきとした神兆の一つではないか、お前たちのために、お前たちの体の一部から妻を創り出し、安んじて馴染める相手となし、二

人の中には愛と情を置き給うたとは。考えぶかい人間なら、これこそ有難い神兆よとさとりてあろう。(井筒訳、30章20節[21節])⁴⁶⁾

またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印の一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう(取り計らわれ)、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。本当にその中には、考え深い者への印がある。

(日本ムスリム協会訳、30章21節)⁴⁷⁾

And among His signs *are* that He created for you spouses from among yourselves, that you rest in them. And He made affection and mercy among you. Truly, in that are certainly signs for a folk who reflect.

引用者による試訳

かれの徴の一つは、あなたがたのために、あなたがたの中から配偶者を創られたことである。またあなたがたの間に愛情と情けをもたらされたことである。本当に、よく考える者たちのための徴はその中にこそある。(バプティヤール訳、30章21節)⁴⁸⁾

いずれの訳文においても、神はよい働きをした者を性別にかかわらず評価すること、また神が配偶関係をつくり、配偶者間に互いへの愛と情の念を据えたことが、表現の違いこそあれ、示されている。

イスラームにおける男女間の平等や公正を信じるムスリムの中には、次のように主張する人々もいる。クルアーンに示された具体的な事柄では、しばしば男女間に差が設けられているが、それは、7世紀に啓示が下された当時のアラビア半島のムスリム社会では、そうした差のある状態が最善だったからである。しかし、神が意図したのは、そうした差を永遠のものとするのではなく、後の信徒たちが、それぞれの時代や社

会に応じて、最善で最適な状況や男女の関係性のあり方を考え、実践することであった、と。こうした人々にとって、クルアーンは逐語的に解釈すべきものではなく、一つ一つの章句に込められた意味の積み重ねにより、その精神を全体として理解すべきものなのである⁴⁹⁾。

以上、クルアーンの翻訳書を読む際に知っておくとよいと思われるいくつかの側面を見てきた。結論として言えるのは、ムスリムの手による翻訳であろうと、非ムスリムによるものでであろうと、それは数ある「解釈書」の一つの形に過ぎないということである。人間によるものである以上、「正確さ」にも「客観性」にも限界がある。他方、それが人間によるものだからこそ、そこに「幅」や「可能性」が生まれ、豊かな精神性の土壌となるとも言えるであろう。この点において、米国出身の黒人女性のイスラーム学者、アミーナ・ワドゥード（1952年-）による次の言葉は示唆的である。「クルアーン解釈とは、結局のところ、人間による神の探求である。クルアーンは神の言葉であり、神の顕現だという根本的理解がある一方で、神という存在は決してテキストの中に閉じ込められるものではない⁵⁰⁾。」クルアーンの翻訳書（すなわち解釈書）を前に、読者は、そこに見え隠れする過去から現在までの人々の知的営為に触れるだけでなく、今後の人々の、さらなる「神の探求」にも思いを馳せることができるのである。

引用文献

-
- 井筒俊彦『コーラン』（全三巻）岩波文庫、1957-58年。
 ——『コーラン』（全三巻）岩波文庫、1964年。
 大川玲子『イスラーム化する世界——グローバルゼーション時代の宗教』平凡社新書、2013年。
 ——『リベラルなイスラーム——自分らしくある宗教講義』慶應義塾大学出版会、2021年。
 川橋範子「ジェンダー論的転回が明らかにする日本宗教学の諸問題——ウルスラ・キングとモーニィ・ジョイを中心に」（『宗教研究』93巻2号、2019年）、31-55頁。
 川橋範子・田中雅一「ジェンダーで学ぶ宗教学とは？」（田中雅一・川橋範子編『ジェン

- ダーで学ぶ宗教学』世界思想社、2007年)、1-17頁。
- 桑田禮彰『議論と翻訳——明治維新时期における知的環境の構築』新評論、2019年。
- 後藤絵美「日本におけるクルアーン翻訳の展開」(松山洋平編『クルアーン入門』作品社、2018年a)、125-173頁。
- 「クルアーンとジェンダー——男女のありかたと役割を中心に」(『クルアーン入門』作品社、2018年b)、389-413頁。
- 「邦訳クルアーンとジェンダー——無意識の伝統主義」(『ジェンダー研究』21号、2019年)、157-169頁。
- 「現代の女性たちとイスラーム——クルアーンとの向き合い方」(『国際宗教研究所ニュースレター』95号、2021年)、11-12頁。
- 「男女間の「平等」をめぐる」(『東京外語会会報』154号、2022年)、26-27頁。
- 「ジェンダー平等を求めて——1920年代のレバノンにおける宗教改革運動」(長沢栄治監修、岡真理・後藤絵美編著『記憶と記録にみる女性たちと百年』(イスラーム・ジェンダー・スタディーズ5、明石書店、2023年a、48-60頁)。
- 「変容する宗教文化——啓典解釈と女性の装い」(長沢栄治・後藤絵美編『東大塾現代イスラーム講義』東京大学出版会、2023年b)、219-241頁。
- 小松加代子「宗教とフェミニズム・ジェンダー研究——普遍性へのジェンダー批判」(『湘南国際女子短期大学紀要』12号、2005年)、45-58頁。
- 鈴木絢司「『日本ムスリム協会』歴代会長列伝」(飯森嘉助編『イスラームと日本人』国書刊行会、2011年)、155-186頁。
- 中村廣治郎『イスラームと近代(叢書現代の宗教13)』(岩波書店、1997年)。
- 「コーランと翻訳」(若松英輔編『井筒俊彦さんまい』慶應義塾大学出版会、2019年)、138-143頁。
- 日本ムスリム協会『日亜対訳注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会、1982年。
- 『日亜対訳注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会、1996年。
- 松山洋平「クルアーンの構成」(松山洋平編『クルアーン入門』作品社、2018年)、99-122頁。
- 三田了一『日亜対訳注解 聖クララン』日訳クララン刊行会／世界イスラーム連盟、1972年。
- 森本武夫「聖コーラン日訳の歴史」(『アッサラーム』9号、イスラミックセンター・ジャパン、1977年)、50-57頁。
- 山折哲雄「井筒訳『コーラン』の文体」(若松英輔編『井筒俊彦さんまい』慶應義塾大学出版会、2019年)、144-146頁。
- Bakhtiar, Laleh, *The Sublime Quran: English Translation*, Chicago: Kazi Publications,

2007.

- Goto, Emi, “Inscribing ‘God’s Words’ in Japan: Connecting the Past to the Present through the Translations of the Qur’an,” in: *Knowledge and Power in Muslim Societies: Approaches in Intellectual History*, eds. by Kazuo Morimoto and Sajjad Rizvi, Berlin: Gerlach Press, 2023, pp. 391–414.
- Mir-Hosseini, Ziba, Mulki Al-Sharmani, Jana Rumminger and Sarah Marsso eds., *Justice and Beauty in Muslim Marriage: Towards Egalitarian Ethics and Laws*, London: Oneworld Academic, 2022.
- Pink, Johanna, *Muslim Qur’ānic Interpretation Today: Media, Genealogies and Interpretive Communities*, Sheffield / Bristol: Equinox, 2019.
- Robson, J., “al-Baydāwī,” in *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, ed. by H. A. R. Gibb et al., Leiden: Brill, 1960–2009, vol. 1: 1129.
- Wadud, Amina, *Qur’an and Woman: Rereading the Sacred Text from a Woman’s Perspective*, Oxford/ New York: Oxford University press, 1999.
- , *Inside Gender Jihad: Women’s Reform in Islam*, Oxford: Oneworld, 2006.

注

- 1) たとえばクルアーン 12 章 1、2 節。クルアーンの日本での翻訳に関しては、すでに何度か論じたことがある（後藤 2018a、2019、Goto 2023）。本稿にはこれらの論文と重なる部分がある。
- 2) 桑田 2019、244–245 頁。
- 3) 井筒 1957–58、上巻 305 頁。
- 4) 同上、306 頁。
- 5) 同上、307 頁。
- 6) 同上、3–4 頁。
- 7) 初版下巻の解説には次のようにある。「口語訳を試みた僕の第一の願いは、『コーラン』^{ヒューマン・ドキュメント}というこの聖典を、何よりもまず一個の生きた人間記録として広く一般の読書人に提供して見たいということであった。いかめしい鎧をつけた聖典に表口から近づくのではなく、マホメットという魁偉な人間のこの世に生きた記録として、いわば裏口から、彼の人間性の側面から、この聖典を把握して見たいと思った。」（井筒 1957–58、下巻 345 頁）。『コーラン』の文体については、山折 2019 も参照されたい。

- 8) 井筒 1957-58、下巻 345 頁。
- 9) Cf. Robson 1960-2009. 井筒自身、『コーラン』のはしがきで、バイダーウィーの注釈書が「ザマフシャリー系統の代表的な註釈」であると述べている（同上、上巻 4 頁）。
- 10) この点について、イスラーム研究者の中村廣治郎は以下のように述べている。「要するに、井筒の狙いは、イスラームの伝統とドグマを通して理解されたムハンマドではなく、心臓の鼓動が伝わってくるような人間ムハンマドのありのままの姿を再現すること、コーランはそのための記録であり、したがってそれに必要な解釈の方法と文体で訳出する、ということである。そこから必然的に、方法としては当時の人々がコーランのことばから理解した意味をとり出し伝える文献学的解釈、文体としては当時の言語体系の中でのコーランのスタイルの再現、つまり生々とした会話体の口語ということになったのである」（中村 2019、141 頁）。
- 11) 井筒 1964、上巻 5-6 頁。
- 12) 同上、下巻 396-397 頁。
- 13) 同上、397 頁。
- 14) 同上、398 頁。
- 15) 三田の略歴については、森本 1977、鈴木 2011 を参照した。
- 16) 三田 1972、IV 頁。
- 17) 同上、VI 頁。
- 18) 同上、II 頁。
- 19) 同上、III 頁。
- 20) 井筒 1964。
- 21) 日本ムスリム協会 1996。
- 22) 井筒訳では「慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において...」と、日本ムスリム協会訳では「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」とある。バスマラを含むクルアーンの構成については、松山 2018 を参照されたい。
- 23) 日本ムスリム協会 1996、92 頁。
- 24) ムハンマドに関わる歴史的な状況については、下巻の解説で示されている。ウフドの戦いに関しても下巻 388 頁に言及がある。
- 25) 井筒 1964、上巻 128-129 頁。
- 26) 日本ムスリム協会 1996、92-93 頁。
- 27) 同上、93 頁。
- 28) 井筒訳はフリューゲル版のアラビア語のクルアーンを底本としたため、現在一般に用いられているエジプト標準版と節番号が異なっている部分がある。
- 29) 井筒 1964、上巻 137 頁。

- 30) 日本ムスリム協会 1996、98 頁。
- 31) この点については、後藤 2018b、2019 を参照されたい。
- 32) 日本ムスリム協会 1996、98 頁。
- 33) これについてはたとえば、中村 1997、大川 2013、2021、Pink 2019、後藤 2023b 等を参照されたい。
- 34) Bakhtiar 2007.
- 35) アラビア語は三人称複数も男性形と女性形で形が異なる。ここでは **them** が女性形の三人称複数であることを示すための記号として (f) が置かれている。
- 36) Bakhtiar 2007, p. 76.
- 37) Ibid., pp. xiii–xlii.
- 38) Ibid., p. xix.
- 39) こうした動きの一端については、後藤 2023a で扱った。また、広く宗教学においても、男性の解釈（や翻訳）を当然視し、女性やその他多様な「差異の経験」をもつ人々を周縁化してきたことへの批判的考察が続いている。これについては、小松 2005、川橋・田中 2007、川橋 2019 を参照されたい。
- 40) 日本ムスリム協会 1996、114 頁。
- 41) 中村 1997、89–92 頁。
- 42) 同上、90 頁および Mir-Hosseini et al. eds. 2022, p. 25 など。
- 43) 井筒 1964、上巻 126 頁。
- 44) 日本ムスリム協会 1996、90 頁。最後の「同士」の部分には、三田による次のような訳注が付されている。「イスラームは、両性の対等の地位を認めるばかりでなくそれを強調し続ける。たとえば性の別があってもそれは自然の上の別で、精神上のことについては一切それを勘考しない。それで人為的な諸区別、たとえば階級、貧富、人種、生まれの差異などに対しては一層顧慮しないのは当然である。」(同上)
- 45) Bakhtiar 2007, p. 69.
- 46) 井筒 1964、中巻 325 頁。
- 47) 日本ムスリム協会 1996、493 頁。
- 48) Bakhtiar 2007, p. 386.
- 49) Wadud 1999, Mir-Hosseini et al. eds. 2022. この点についてはまた、後藤 2021、2022 でも指摘した。
- 50) Wadud 2006, p. 197.

講演録・インタビュー

宗教学に基づく宗教教育の必要性

講演 ティム・イェンセン¹

解題・聞き手・翻訳 藤原聖子²

2023年8月23日実施（於 東京大学本郷キャンパス）

2023年8月21～24日に、国際哲学人文学会議（CIPSH）の総会とカンファレンスが、慶應義塾大学三田キャンパス・東京大学本郷キャンパスにおいて開催された。人文学領域のさまざまな国際学会から代表者が集ったこのカンファレンスのテーマは「グローバル・デジタル時代の人文学」であった。初日の基調講演者の一人として、CIPSH 副事務局長でもある国際宗教学宗教史学会（IAHR）のティム・イェンセン会長が来日し、講演を行った。イェンセン氏は、グローバル化が進むこの四半世紀間、「宗教学に基づく宗教教育」を時代に即した教育のあり方として提示し、その推進のために奔走してきた。この基調講演も、分野も出身国も異なる多様な研究者に対して、「宗教学に基づく宗教教育」は世界どこにおいても必須の教育であると説くものだった。焦点は、「宗教学に基づく宗教教育」は、近年流行している「宗教リテラシー教育」とどのように異なるのかだった。

「宗教学に基づく宗教教育」も「宗教リテラシー教育」も、日本の宗教教育の三分法¹⁾に照らせば、宗教知識教育に重なる。だが、どちらも単に知識を伝達するだけの教育ではない。ではどのような点で知識伝達以上の教育なのか。そして「宗教リテラシー教育」の「知識伝達以上」の部分にはなぜ問題があるのか。講演はこれらの論点を中心に展開した。

講演後にイェンセン氏にインタビューを行い、同じテーマについてより具体的に伺った。イェンセン氏の出身国であるデンマークやヨーロッパの宗教教育事情が話の前提になっているため、それについてはインタビューアが注で補足説明を施した。

¹ Tim Jensen : 南デンマーク大学教授・ハノーファー大学名誉教授、国際宗教学宗教史学会（IAHR）会長、国際哲学人文学会議（CIPSH）副事務局長（2023年10月から同副会長）

² ふじわらさとこ : 東京大学教授、国際宗教学宗教史学会事務局長、2023年9月から日本宗教学会会長

講演 (抄訳)

お招きいただきありがとうございます。本日私が皆さまにお伝えしたいのは、「宗教学に基づく宗教教育」²⁾は、世界のどこでも、その国が国教制であろうと政教分離制であろうと、公教育³⁾において必要であるということなのです。



「宗教教育」はヨーロッパにおいても自明なものではない

「宗教学に基づく宗教教育」とは、「宗教から学ぶ教育」⁴⁾ではなく「宗教学から学ぶ教育」です。私が言う「宗教学」とは学術的・科学的な宗教学研究⁵⁾のことです。このようなものの言い方は挑発的に聞こえるかもしれませんが。というのも、ヨーロッパにも、私の意見に同意しない人たちは大勢いるのです。人間には宗教学ではなく宗教が必要なのだと言う人たちはです。ですから、そのような社会において、宗教学に基づく宗教教育を推進する私の立場は、規範的であり政治的であるとも言えます。宗教学そのものは客観的であり非規範的であるべきですが、それを実社会に広めようという行為は、一つの立場の選択を促すわけですから。

つまり、私は社会のあり方について、何でもよいとする相対主義者ではなく、開かれた民主的な社会を理想の社会と考えています。その選択は規範的です。そしてそのような社会には宗教学に基づく宗教教育が必要だという私の主張は、一つの価値の選択になりますから、やはり規範

的です。一般的に言って、民主的な社会の市民は、物ごとに対して批判的・分析的な思考を向けることが求められます。そのような思考は宗教という対象にも向けられるべきです。そこで必要とされるのが、宗教学に基づく宗教教育です。

私自身、大学教員になる前に高校の宗教科の教師を務めたこともあり、さらに宗教に関する知識を要する企業や公務員のためにコンサルタントも務めるなど、宗教学に基づく宗教教育を広く社会に広める努力をしてきました。

「宗教リテラシー教育」と「宗教学に基づく宗教教育」の違い

私が言う宗教学に基づく宗教教育は、近年しばしば耳にする「宗教リテラシー教育」⁶⁾に似ているところもありますが、重要な点で異なりま

背景 デンマークの宗教教育の歴史と現状

イェンセン氏が研究・教育に従事するデンマークでは、小学校から高校まで、宗教科が公立校においても存在する。国民の多くは現在は「無宗教」(宗教所属を問われれば「キリスト教」と答えるとしても、日常的には教会に行くことも聖書を読むこともない)だが、他の北欧諸国と同様に(準)国教制を維持しているため、私立・公立を問わず宗教教育が継続されている。しかしその内容は過去半世紀の間に変化した。当初は、国教であるルター派プロテスタントに基づく宗派教育が行われていた。担当する教員は神学者や牧師だった。1975年に最初の変化が起こり、非宗派教育的な宗教知識教育が導入された。その後、移民の増加やグローバル化とともに、キリスト教以外の多様な宗教について学ぶ内容が増加し、現在に至っている。公立高校の宗教科は大学の宗教学に準じた内容によってカリキュラムが組まれ、教員にも宗教学の学位を取得した者が多い。それに対して小学・中学校の宗教科は、公立であってもキリスト教中心になることもあり、これは神学出身の教員が多いことによる。

つまり、デンマークの宗教教育には現状として、知識教育に重点を置いた教育と宗派教育的な教育の二つが存在している。イェンセン氏の「宗教学に基づく宗教教育」という語は、後者の「キリスト教神学に基づく宗派教育的宗教教育」ではない、前者の教育を指すための表現である。

参照：ヨーン・ボルブ「デンマークの宗教教育における仏教とイスラームの表象」『宗教研究』89別冊，2016

す。宗教リテラシー教育の歴史についてまとめているB・マーカスとA・ラルフの論文⁷⁾を参照しますと、宗教リテラシーには次の四つの次元が存在するとされています。

第一に、諸宗教について語るときに用いられるキーワードに関する事実的知識。第二に、宗教学の理論に関する概念的知識。第三に、宗教学の方法論に関する知識。第四に、宗教教育が自己認識 (one's own sense of self自分は何ものかについての理解) に及ぼす影響についてのメタ認知的知識です。この第四の次元を公教育に含めることには私は懐疑的です。

比較のために、宗教学に基づく宗教教育を推進する私の理由を三点にまとめてみます。

1. もし科学に基づく知識一般が、文化的・社会的に価値をもつと考えられているのであれば、そしてもし人類、文化、社会、歴史に関する科学に基づく知識が同様に価値をもつと考えられているのであれば、宗教に関する科学に基づく知識も価値をもつとみなされるべきです。なぜなら、「宗教」と呼ばれるものは、重要な人間的・文化的・社会的・歴史的現象だからです。宗教は歴史においても現在においても文化や社会に多大な影響を及ぼしています。人間や歴史について知りたかったら、宗教についても知らなければなりません。

ただし、宗教を何か特別なものと受けとめてはいけません。確かに人権の中でも宗教(信教)の自由は、表現の自由やプライバシーに還元されない、それとして重要な権利であるとみなされてきました。しかし、宗教を他の文化・社会現象とは異なる、特別なものととらえてしまうと、他の文化・社会現象と同様に研究したり教育したりすることが不可能になります。宗教への向きあい方を特別ではない、ふつうなものにする必要があります。

2. 「宗教」と呼ばれるものは、信仰のある人なら皆それが何だか知っている、というようなものでありません。天が与えたものでもありません。信じる人にとっては、聖典はただの本ではなく、聖なる存在を指し示しています。しかし、公教育においては宗教を文化システムと

してとらえるべきです。

3. そのような文化システムとしての宗教は、問題なく、教育の題材へと「翻訳」することができます。

公教育での宗教教育の存在を正当化する理由は以上に尽きる、それ以上の正当化は避ける方がよいというのが私の意見です。宗教リテラシー教育派は、これらに満足せず、第四として、宗教を通しての自己探求を理由に加えようとしています。しかし、それは副次的効果に留めるべきです。そのような探求を行う生徒もいれば行わない生徒もいるでしょうが、それは生徒の自由であり、共通の教育の目的に入れるべきではありません。

「社会に役立つ宗教教育」論の問題

宗教教育の目的としてよく掲げられるものには、そのように生徒を宗教的・人間的に成長させることの他に、宗教対立や差別を防ぎ、平和な社会をもたらすというものがあります。こういった、「世界を救う」た



ティム・イェンセン (Tim Jensen)

1950年デンマーク生まれ。コペンハーゲン大学にて古代ギリシャ宗教史の分野で学位を取得し、コペンハーゲン大学、南デンマーク大学、ドイツ・ハノーファー大学等で教鞭をとり、現在は引退している。2016年にハノーファー大学から宗教学の名誉教授号を取得。宗教教育についても早くから積極的な発言を行い、国内外の関連する委員会で活動し、企業や自治体での社会人教育にも従事してきた。ヨーロッパ宗教学会 (EASR) の立ち上げに尽力し、事務局長を務めた他、2005年から国際宗教学宗教史学会 (IAHR) の事務局長、2015年から同会長として宗教学の国際的振興に貢献している。2020年から国際哲学人文学会議 (CIPSH) の副事務局長をあわせて務めている。

関連する論文として、“RS-based RE in Public Schools: A Must for a Secular State,” *NVMEN*, 55/2-3, 2008; “RS-based RE—Uphill, Uphill, Uphill!,” in Steffen Fühnding (ed.), *Method and Theory in the Study of Religion: Working Papers from Hannover*, Leiden: Brill, 2017.

めの宗教教育論にも私は懐疑的です。宗教系私立校とは異なり、公立校の宗教教育は生徒たちを宗教的に成長させる場でも宗教間対話のための場でもないのです。それらは科学外在的な目的です。公立校の宗教教育の目的はあくまで科学内在的なもの、つまり知識の習得や分析力の獲得です。公教育では、生徒が何教徒であろうと無宗教であろうと区別せずに、同じように宗教について教えることが適切です。生徒たちがそれまで宗教に対して持っていた思い込みとは違う見方があるのだ、自分の考え方や生き方とは違う考え方や生き方もあるのだと宗教学に基づいて教えることが、私の推進する宗教教育です。

かつて、20年前には私も宗教教育は、寛容、人権の理解や尊重などの科学外在的な目的に役立つと考えていました。当時ヨーロッパではそのような考えのもとに宗教教育の有用性を謳う試みが相次いでいました。その一例は、欧州安全保障協力機構(OSCE)の諮問委員会である「宗教・信仰の自由に関する専門家委員会(ODIHR Advisory Council of Experts on Freedom of Religion or Belief)」による「公立校での宗教・信仰についての教育の指針(Toledo Guiding Principles on Teaching about Religions and Beliefs in Public Schools)」⁸⁾(2007年に刊行)です。

しかし、その後の、宗教教育の効果を検証する研究においては、宗教教育が宗教的寛容を促進したことを示す客観的なデータは出ていないのです。宗教教育を10年受けようが、その結果としてよりよい市民に成長したというエビデンスは少なくともヨーロッパにおいては存在していません。宗教教育が義務教育として組み込まれているデンマークでも、宗教に関する公共の議論は、未だに宗教に対する偏見やステレオタイプで溢れています。しかし、だからといって、宗教学に基づく宗教教育は不要だということにはなりません。それは文化・社会の他の側面についての教育と同じように必要なものです。

大学の宗教学の授業も知識を重視すべき

私は先ほど、宗教は文化現象だと言いました。公教育では宗教を、文化を超えた超越的なものとして見るのではなく、人間的現象として見ようと

いう意味です。このように考える宗教学者たちの大学の授業でのトレンドは、さまざまな宗教現象の背後にどのような政治的かけひきがあるかを暴いてみせるものです。R・マッカチョンが率いるカナダのトロント学派がその代表です。ドイツのハノーファー大学のW・アルベルツもそうです。アルベルツも私と同様に宗教学に基づく宗教教育を推進してきましたが、実際にハノーファー大学で行っている授業は私とは異なり、「宗教と政治」「宗教と暴力」などのテーマ的なもので、もっぱら現代社会に焦点を合わせています。それに対して、私の宗教学の授業は、古代ギリシャの宗教史や比較宗教など、もっと古典的です。私は脱構築主義者ではなく、宗教現象をすべて政治に還元して説明することには反対なのです。宗教史に関する知識教育的な授業はあってよいはずですが、宗教を政治に還元することなく、同時に神学のように宗教の真理要求を受け入れることもなく、宗教を文化・社会現象として研究し教育することが必要だと思のです。

もちろん、そういった知識教育が、実社会の中では必ずしも中立的ではないということもわきまえています。私が1990年代にイスラモフォビアの問題について初めてデンマークの新聞に寄稿したときのことです。私はその記事の中でイスラームに対するステレオタイプを批判し、現実のイスラームの多様性に目を向けよと論じました。ところがその記事に対して苦情を送ってきた人たちはムスリムの人たちでした。彼らは「イスラームはイスラームだ」と、つまり多様に変化するものではないと主張したのです。それはナンセンスです。イスラームであれ何教であれ宗教は変化します。しかしそのような宗教学の見方は、それ自体としては客観的でも、メディアにのると政治的な発言になり、危険性を伴います。人々の価値に関わることだからです。

その一方で、社会には、学者は真実を語るものだという通念もあります。大学教育・中等教育を問わず、宗教教育において、宗教という概念に反省の目を向けたり、宗教について語ることの政治性について議論したりすることも確かに重要ですが、宗教に関するしっかりとした知識と分析のスキルを身につける教育をまず提供すべきであることを忘れてはいけません。

インタビュー



藤原 ご講演では、「宗教学に基づく宗教教育」を“scientific”と形容されていましたが、“science”の日本語の訳語である「科学」は、単独では自然科学を指すのがふつうです。先生がこの言葉で意味されていることをもう少しご説明くださいますか。

イエンセン 「科学」を定義するとなると一仕事ですが、もちろん、自然科学という意味で使ったわけではありません。宗教を自然的、人間的⁹⁾、社会的な現象として見ることにより、宗教を他の歴史的、社会的、人間的現象と同じように研究できるとするアプローチのことをそう呼びました。つまり、「経験科学」としての「科学」です。「宗教とは何か」に関する理解を自分の研究の出発点に置くならば、その点では演繹的ともいえますが、重要なのは経験的なエビデンスに裏付けられていること、観察可能で他者と共有可能である（公共性をもつ）ことです。研究プロセスの透明性を指すとも言えます。常に自己反省的であることですね。

藤原 そのような研究を土台にしているのが「宗教学に基づく宗教教育」なのですね。そうしますと、逆に「科学的」ではない宗教教育とは

どのようなものになりますか？

イエンセン たとえば「生きるとは」「死とは」といった、大きな問いに取り組む宗教教育が挙げられます。アメリカの大学にも宗教教育を、人生の大きな問いに取り組むことに結び付ける人たち、あるいは人類のウェルビーイング（幸福）への貢献に結び付ける人たちがいます。そこには解釈学の影響があるのではないかと思います。

つまり、個人の内面になにかある。そのあるものを外部に表現する。他人の表現を自分の中に取り込み追体験する。こういった理解の方法は解釈学と呼ばれています。宗教学はそれに対して外側から、すなわち社会的ファクターから宗教をとらえます。そのとらえた内容は言語、さらに研究で共有可能なものです。

藤原 大きな問いに取り組む宗教教育は、デンマークでは行われていないのですか？

イエンセン ありますよ。死とは何か、愛とは何かとか、近親者の死に際して悲嘆にどう向き合うかといった実存的問題に取り組ませる授業も一部に存在しています。そういった授業を行う教育者には、実存的問題については、教師は教えられない、生徒が自ら考えるのみであると言う人たちもいます。

そのような宗教教育もあってよいのですが、学校では、科学的な宗教学により発見された内容を学ぶ機会があることが望ましいと考えます。そのような教育が可能になるには、適切な教職課程で学んだ教員が必要です。デンマークでは公立校にも宗教科が存在するため、教員養成システムも整っています。

藤原 デンマークの中等教育レベルの宗教教育は、現在では、道徳教育的なものよりも宗教学に基づく知識教育的なものの方が中心なのですね。

イエンセン そもそもなぜデンマークではすべての学校に宗教科があるのかですが、それは国教制だったからです。デンマークの国教はルター派プロテスタントです。かつては、よきキリスト教徒がよきデンマーク市民になると思われていたので、学校でキリスト教教育が行われたのです。社会にはよい秩序とよい道徳が必要であるとされ、道徳と宗教は関係があると考えられていたので、宗教教育があたりまえのように組み込まれたのです。それはデンマークだけでなく北欧諸国に共通する特徴です。

ドイツの宗教教育への取り組みは州ごとに異なります。宗派教育のない州の一部には、価値教育を導入したケースがあります。それは生徒が価値や人生の意味をとらえるための教育です。そのように意味を作り出したり道徳を与えたりする教育は、世界の多くの地域の宗教教育において行われています。しかし、私の考えではそういった教育は家庭や教会・モスクでなされるものであり、公立校の授業で行うものではありません。

藤原 しかし、知識の伝達だけでは無味乾燥な授業になりませんか？

イエンセン 宗教学に基づく宗教教育にも、大きな問いはありますよ。しかし問いの種類が違うのです。2023年の教育にふさわしい、宗教学的な大きな問いは、たとえば、「なぜ宗教は存在するのか」「宗教はどのような点で人類の進化を促進したか、あるいはしなかったか」「宗教とは何か。どうしたらそれを定義できるか」「宗教（信教）の自由は特別に尊重されるべきものか、その他の自由と同じ程度でよいのか」などでしょうか。

現在の宗教学では、M・エリアーデの宗教学は、非科学的だ、疑似神学だと批判されています。私もエリアーデの方法論や神学的前提は問題だと思います。しかし、実は私も若い時はエリアーデのファンだったのです。エリアーデが書いたものは私をすっかり魅了しました。それは個人的・実存的なレベルでの影響と言えるでしょう。私の専門は古代ギリ

シャの宗教史ですが、そのような古代宗教史に興味を持ったのは、科学的な宗教学者が、ギリシャ宗教はおもしろいよと言ったからではありません。エリアーデの描写力に胸が躍ったのがきっかけになったのです。

藤原 描写力に惹かれたということだと、美的な魅力もあったということですか？

イエンセン そうです。私は学生の頃、ギリシャ宗教とギリシャの「名誉」という価値に特に関心を持つようになりました。西洋キリスト教のいわゆる「罪」の社会の観点から、ギリシャ社会の「名誉」をどう理解するかとか。あるいは草原で馬が草を食む風景とか。実存的なレベルよりもっと広い、文学的・詩的な次元での魅力も、生徒や学生には学ぶ刺激になります。科学的真理だけで人は興味をもつわけでは必ずしもないということです。

ですから、もちろん宗教教育の教師は、生徒に、実存在的関心をもってはいけないなどと説くわけではありません。生徒は実存在的レベルで刺激を受け、その結果信仰をもつかもされないし、信仰から離れるかもしれません。それは生徒それぞれに任せるべきで、教師がどうこうすることではありません。そういった刺激を与えることを、宗教教育の明示的な目的にするのはよくないというのが私の考えなのです。

それに、宗教の美的・詩的な側面にばかり注目し、宗教の暴力的な側面を見ないというのも教育では問題です。講演で触れた、ヨーロッパの「公立校での宗教・信仰についての教育の指針」や「教育における宗教。対話か対立か Religion in Education. Dialogue or Conflict (REDCo)」プロジェクト¹⁰などには、そのような困った傾向があります。宗教は人間的な現象だから、悪や暴力や戦争を生み出すこともあります。実存在的な問いを宗教教育の中心にすると、そういった宗教の暴力的側面が射程外になり、宗教の全体像が見えなくなっていくのです。私が宗教を人間的な現象としてとらえているのは、宗教を「しょせんは人間が作り上げたものだ」などと貶めるためではありません。宗教の明るい面も暗

い面も、ありのままをとらえたい、その意味で宗教に真剣に向き合いたいという気持ちによるのです。

藤原 ご講演で、宗教リテラシー教育を批判していらっしゃいましたが、「宗教リテラシー」が何を指すかは論者によって異なるのではないですか？

イエンセン 「宗教リテラシー」は、S・プロセロやD・ムーア等、アメリカの宗教学者が流行らせている最近の言葉で、デンマークでは使われないんです。小学校の宗教科教員を養成する研究者が、最近、宗教教育が国際的にも重視されていることを政治家に対してアピールし、働きかけようとして使ったくらいです。

ムーア¹¹⁾は私の考え方に近いですが、それ以外の宗教リテラシー教育論者には私は賛同していません。寛容を推進するとか、人権を推進するとか、マイノリティ差別に対処するとか、移民との摩擦を解消するとか、そういった科学外在的な目的を第一に掲げるからです。「宗教教育は、こういった社会的課題の解決に貢献するから必要なのだ」と宗教リテラシー教育論者たちは主張します。

しかし私はそのような主張を信じません。「宗教教育が平和な社会を築く」という説は、嘘だとまでは言いませんが、神話に近いです。そのような教育効果を示すエビデンスはないと指摘する研究も出ています¹²⁾。

もちろん私は、寛容や相互理解に否定的なわけではありません。しかし、長年宗教教育が行われているデンマークにおいても、ジャーナリストや政治家たちが宗教についていかに無知なままかには驚かされます。彼らがみな宗教教育を受けたとは思えないほどです。図書館には宗教学の本もたくさん入っているというのに、デンマークの公的論争は、完全にキリスト教中心主義だと言ってよいでしょう。宗教リテラシー教育論者は、寛容だの人権だのを掲げるよりも、宗教教育も、他の教科と同じように、科学的に行えるのだということを強調してほしいものです。

藤原 「他の一般教科と同じように」というのはご講演でも強調されていました。裏返すと、デンマークやヨーロッパでは、宗教教育は“ふつうの教育”として扱われていないのでしょうか？

イエンセン そうなのです。宗教教育は、二重の意味で特殊な教育として扱われているのです。一方では、信仰があり宗教を重視する人たちが、宗教は超越的なものだから、それについての教育は、文化や社会についての教育とは異なるものだと主張しています。他方では、科学派の人たちが、宗教は合理的なものではないから、宗教の研究や教育は、十分に科学的にはなりえないと主張しています。どちらの意見に対しても、「いや、宗教教育は、他教科と同じように、あたりまえに科学的に行えるのだ」と説明することが、公教育での宗教教育の存在をもっとも適切に正当化します。

それに加えて、宗教リテラシー教育論者たちは、文化遺産（ヘリテージ）的価値をも強調しすぎる傾向があります。たとえばプロセロは、「私たちはアメリカ人だ。アメリカにはキリスト教文化の伝統がある。だから教会に行かなくなったとしても、キリスト教に関する知識はみな持っているべきだ」と言います。これはナショナリズムとまでは言わなくても、それに近いものです。

デンマークにも、自国の現在のキリスト教のあり方が、宗教としてベストだという見方が蔓延しています。デンマーク人の多くはもはや毎週教会に通うことはなく、クリスマスなどのイベントのみを祝う、「文化的キリスト教徒」になっています。つまり、所属を尋ねれば「キリスト教」と答えたとしても、そのキリスト教はもはや（通常の意味での）宗教とは言い難いものになっています。しかし、逆説的にも、文化に過ぎないキリスト教だからこそ、言い換えれば、ドグマや熱心な信仰を失ったからこそ、デンマークのキリスト教は自由で安全であり、ゆえに最高の宗教なのだという考え方が、社会に広がっているのです。N・チョムスキーは、われわれは自国について語る時には特別に批判的（hypercritical）になるのがよいと述べましたが、その通りだと思います。

す。反対に、異文化について語るときには謙虚であるべきです。

藤原 まとめると、先生が宗教リテラシー教育を問題視されるのは、第一に、科学外的目的を掲げるから、第二に、教育効果があるというエビデンスがないため非現実的な教育だからということなのですね。

イエンセン そうです。先ほど、宗教学は外側から宗教を見ると言いましたが、補足すれば、ムスリムとして、ヒンドゥー教徒として暮らすのはどういうことなのかを、インサイダー（信者）の視点から見るとするのは重要です。科学的アプローチといっても、アウトサイダーの視点だけでは不十分です。

社会人教育を行っている、警察官でも医者でも、みなイスラームに対して偏見を持っているのがわかります。そこで、私は、いきなりスカーフや食の禁忌の話から始めるのではなく、最初に五柱¹³⁾を説明します。敬虔なムスリムにとって、五柱を守りながら生活するのはどのようなことなのかということから始めるのです。

そして、「イスラーム」という言葉を説明します。この言葉はヨーロッパでは「服従 submission」と訳されてきました。服従の対象がアッラーであっても、この言葉は信者を自由を奪われた奴隷か何かのように思わせます。命令に従わないものを地獄に送り込む専制君主のような神というイメージになります。そのイメージを転換するのです。アッラーは全てを知る父、人類に最善のものをもたらそうとしている神です。だからこそ、生きるためのガイドラインをシャリーア（イスラーム法）として人間に啓示した。ですから、ムスリムにとってシャリーアに従うことはあたりまえのことです。過激なイスラーム主義者だから従うではありません。イスラームの語は、服従ではなく「帰依 devotion」などと訳されるべきです。授業が終わった後、ムスリムの学生から、「ムスリム以外の人で、あなたのようにイスラームについて語る人を見たのは初めてです」と言われたことが何度もあります。こういったインサイダーの視点は必要です。重要なのは視点のバランスなのです。

藤原 日本では昨夏の安倍元首相銃撃事件以来、旧統一教会のことが改めて問題になっています。それを背景として、宗教リテラシー教育に新たな期待が寄せられています。そのような教育が、良い宗教と危険なカルトを見分ける眼を育てるというものです。そういった教育についてはどうお思いになりますか？

イエンセン そのような考え方は完全にまちがっています。そういった、宗教（信教）の自由を狭めるようなものはデンマークにはありません。もちろん見えない抑圧はありますが、法律レベルでは存在していません。宗教学に基づく宗教教育では、その意味でのリテラシーは、たとえ複数の教育目的のうちの一つだとしても、入れるべきではありません。

宗教は良いとか悪いとかいうものではないのです。繰り返しますが、宗教とは人間が行っているものです。ですから、同じ宗教が、一般社会の基準からすれば、良くもなれば悪くもなります。よく見られる、「好戦的なイスラーム主義者はイスラームを悪用している（本当のイスラームは平和的なものだ）」とか「カルトは宗教を悪用したものだ」といった言い方は、宗教学では意味をなしません。

確かに、1995年のオウム真理教事件のとき、「宗教学者は事前に警告することができたはずだ」という意見が、宗教学者の中にも見られました。しかし、私の考えでは、宗教学者の役目は「宗教団体によって行われた暴力や、宗教的に動機づけられた犯罪について、警告すること」ではありません。宗教学者の役割は、「それも宗教がもたらし得ることの一つだが、こういった別のこともまたもたらし得るのだ」と教育において示すことです。

2001年の同時多発テロ事件に際しては、宗教学者B・リンカン¹⁴⁾やH・キッペンベルク¹⁵⁾の論考が教育でも参考になりました。テロ実行犯が従ったとされる手引きは、シャリーアに基づいたものでした。それはテロが儀礼的（宗教的）殺害として行われたことを示していました。実行犯は犯行前に身を清めましたが、それはイスラームで供儀の前に行う

儀礼と同じでした。つまり、テロは殺人ではなく、供儀＝サクリファイスとして解釈されていたのです。ユダヤ・キリスト教・イスラームの伝統を踏まえるなら、そのような供儀を求める父とは何なのかという問いが生じるでしょう。こういった扱いの難しい事गरらについては、教師の役割は生徒に問いをなげかけることであり、答えを提供することではありません。生徒や学生が問いを、より考え抜かれた形で問うことができるようにするのが教育の役割です。

もちろん、さまざまな宗教について教える教育は、相対主義的な立場からのものですから、自分の宗教に対して絶対的な信仰を持つ人の信念を揺るがすことはあるでしょう。それによってその人が他の宗教に対して寛容になることも、教育の一つの結果としてはありうるものです。しかし、寛容な態度の育成を、宗教学に基づく宗教教育の目的として最初から掲げると、宗教のとりあげかたに偏りが生じやすくなります。全ての宗教について、それらの全ての側面、暴力や犯罪につながりうる側面も含めて教えることが、宗教学に基づく宗教教育においては重要です。

藤原 ヨーロッパには、フランスを除き、宗教教育が存在するからカルト問題が日本ほど大きくないのだという意見についてはどう思われますか？

イエンセン 1980年代前後には、少しではありましたが、デンマークの中等教育でカルトが取り上げられたこともありました。サイエントロジーや統一教会などです。サイエントロジーをふつうの宗教として扱い、カリキュラムに組み込むことは、教団を宗教として承認することになりかねないので、慎重を要します。しかしまた、サイエントロジーは危険なカルトだと説く教育が、被害を防ぐという現実的な効果をもたらすかという、それも疑問です。考えてみてください。学校では他教科で、宗教に関係しない犯罪やそれに対する刑罰についても取り上げています。その教育の結果として、犯罪率は低下しているのでしょうか？

われわれ教員の役目は、問いを投げかけ、物ごとをより複雑にすることです。イスラームの名誉殺人を例にとりましょう。ムスリムの父や兄が、異教徒と結婚した娘や妹を名誉殺人として殺害する。それは確かにひどいことです。しかし、デンマークのキリスト教徒や無宗教の男性にも、離婚後に元妻を殺害した人もいれば、DV問題を起こす人もいます。それらの事件については、誰もキリスト教が原因だ、無宗教が原因だと説明したりしません。つまり、宗教を何らかの事件の主要な原因であると決めつけてしまうことも、宗教に対する過大評価です。これも宗教リテラシー教育論者にありがちなのですが、困った問題です。

宗教学に基づく宗教教育では、学べば学ぶほど、ふつうの宗教と危険なカルトの区別は簡単ではないと気づくでしょう。決してその逆ではないのです。

藤原 なぜ「宗教教育は社会的課題の解決に役立つ」とアピールしてはいけないのかについて、先生のお考えはよくわかりました。ただ、デンマークにはすでに宗教教育が必修科目として制度化されているため、存在意義をことさらに訴えなくてもよいのかもしれませんが、日本などに、新たに宗教学に基づく宗教教育を導入しようとする場合はどうでしょうか。社会の役には立たない、あるいは効果は立証されていないが、宗教について学ぶことは必要だとするだけでは社会の理解は得にくいように思うのですが。

イエンセン そうかもしれません。しかし、現実を見ずに期待ばかりで導入しても上手くいかないでしょう。それに現実を知れば課題もわかります。効果がないのは教育方法の問題なのか、他の原因なのか。そこに国際的な共同研究の可能性が 있습니다。

注

- 1) 宗派教育・宗教知識教育・宗教的情操教育。
- 2) 英語では“study-of-religions-based religious education”。
- 3) 公教育は私教育に対置される概念であり、公立校の教育も私立校の教育も含まれる。
- 4) 「宗教から学ぶ教育 learning from religion」とは、宗教を知り、自分の人格の陶冶などに結びつける教育を指す。イギリスで生まれた分類だが、日本の宗教知識教育に該当する「宗教について学ぶ教育 learning about religion」に対置される概念。
- 5) 英語では“scientific study of religion”だが、日本語では“science”の語は単独では自然科学を指すため、「学術的・科学的」と訳した。この語の意味するところについては、後半のインタビューを参照。
- 6) 国教制の伝統のあるヨーロッパの国々では一般に、公立校においても宗教科が存在する。そのような国々では、注4のイギリスの例のように、宗教知識教育と価値教育（日本の用語でいえば宗教的情操教育や宗派教育）を分類する試みが以前から存在する。それに対して、政教分離制のために宗教科が存在しないアメリカにおいて、この15年ほどの間によく聞くようになった言葉が、宗教知識教育の一種である「宗教リテラシー教育」である。ボストン大学のステファン・プロセロの『宗教リテラシー』（初版2007年刊行）がその皮切りとなった。宗教についてほとんど教わらずに育つため、アメリカ人は今や、新約聖書の4つの福音書の名前すらまともに挙げられないほど宗教に関して無知であると警鐘を鳴らした書であり、バストセラーになった。Stephen Prothero, *Religious Literacy: What Every American Needs to Know—And Doesn't*, San Francisco: Harper One, 2007、ステイーヴン・プロセロ（堀内一史訳）『宗教リテラシー——アメリカを理解する上で知っておきたい宗教的教養』（麗澤大学出版会、2014年）。
- 7) Benjamin P. Marcus and Allison K. Ralph, “Origins and Developments of Religious Literacy Education,” *Religion and Education*, 48/1, 2021.
- 8) スペインのトレド市で行われた会議時の宣言に基づくため、“Toledo Guiding Principles”と呼ばれている。
- 9) ここで言う「自然的」とは、超越的な現象としてではなく、現実世界に起きている現象としてとらえるという意味。「人間的」とは、人間らしい、人間ならではの、という意味ではなく、（神ではなく）人間の行為からなる現象として見るという意味。
- 10) 2006～2009年に実施された、欧州委員会の研究基金による国際共同プロジェクト。エストニア、ロシア、ノルウェー、ドイツ、オランダ、フランス、イギリス、スペインの中学生を対象に、宗教は対話と対立のどちらを促進するかを調査した。

- 11) "What is Religious Literacy?" <https://rpl.hds.harvard.edu/what-we-do/our-approach/what-religious-literacy>
- 12) J. C. Conroy, D. Lundie, R. A. Davis, V. Baumfield, L.P. Barnes, T. Gallagher, K. Lowden, N. Bourque, and K. J. Wenell, *Does Religious Education Work? A Multidimensional Investigation*, London: Bloomsbury, 2013.
- 13) イスラームの生活の基本をなす、5つの実践。信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼。
- 14) Bruce Lincoln, *Holy Terrors: Thinking About Religion After September 11*, Chicago: The University of Chicago Press, 2003.
- 15) Hans G. Kippenberg, "Consider that This Is a Raid on a Path of God: The Spiritual Manual of the Attackers of 9/11," *NVMEN*, vol. 52, 2005.

(公財)国際宗教研究所

理事長	島藺 進	東京大学名誉教授、 大正大学客員教授
所長	山中 弘	筑波大学名誉教授
常務理事	井上 順孝	國學院大學名誉教授
	星野 英紀	大正大学名誉教授
	三木 英	相愛大学客員教授
	弓山 達也	東京工業大学教授

『現代宗教2024』編集委員(氏名・現職)

島藺 進	東京大学名誉教授、 大正大学客員教授(編集委員長)
岩田 文昭	大阪教育大学教授
木村悠之介	国際宗教研究所研究員
高瀬 航平	国際宗教研究所研究員
玉置 文弥	国際宗教研究所研究員
平藤喜久子	國學院大學教授
宮澤 安紀	国際宗教研究所研究員
弓山 達也	東京工業大学教授

現代宗教2024

2024年1月31日 発行

編集 (公財)国際宗教研究所
印刷/製本 (株)国際文献社

発行所 (公財)国際宗教研究所
〒165-0035 東京都中野区白鷺2-48-13